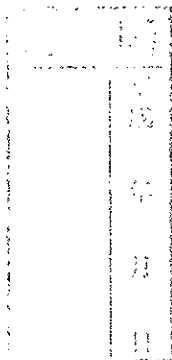


女の意識と発露からみた日本語の三類

野田尚史

文の構造と機能からみた日本語の主題

野 田 尚 史



博士（言語学）学位請求論文
筑波大学大学院 文芸・言語学研究科
1998年

99012445

目 次

| | |
|-------------------------|-----|
| はじめに | 1 |
| 第1章 主題研究の方法 | 3 |
| 第1節 従来の構造的な主題研究 | 4 |
| 第2節 本論文での構造的な主題研究 | 12 |
| 第3節 従来の機能的な主題研究 | 21 |
| 第4節 本論文での機能的な主題研究 | 28 |
| 第2章 顕題文の構造と機能 | 36 |
| 第1節 格成分主題文 | 37 |
| 第2節 格成分連体部主題文 | 50 |
| 第3節 述語連体部主題文 | 61 |
| 第4節 被修飾名詞主題文 | 72 |
| 第5節 従属節内成分主題文 | 81 |
| 第6節 述語主題文 | 90 |
| 第7節 破格主題文 | 100 |
| 第8節 主題の選択 | 108 |
| 第3章 無題文の構造と機能 | 117 |
| 第1節 無題文 | 118 |
| 第2節 顕題文と無題文の選択 | 129 |
| 第4章 陰題文の構造と機能 | 138 |
| 第1節 陰題文 | 139 |
| 第2節 顕題文と陰題文の選択 | 150 |

| | |
|-------------------------|-----|
| 第5章 複文の中の主題 | 161 |
| 第1節 従属節の中の主題 | 163 |
| 第2節 従属的な文の中の主題 | 172 |
| 第6章 文章・談話の中の主題 | 180 |
| 第1節 文章・談話の冒頭文の主題 | 181 |
| 第2節 文章・談話の非冒頭文の主題 | 187 |
| 第3節 話しことばの無助詞 | 194 |
| 第7章 対比を表す「は」 | 201 |
| 第1節 明示的対比を表す「は」 | 202 |
| 第2節 暗示的対比を表す「は」 | 211 |
| 第3節 対比を表せる成分 | 220 |
| 第8章 排他を表す「が」 | 231 |
| 第1節 排他を表す「が」 | 232 |
| 第2節 排他を表せる成分 | 240 |
| 第9章 主題の文法理論 | 246 |
| 第1節 文の階層構造からみた主題 | 247 |
| 第2節 文の生成からみた主題 | 258 |
| 第3節 機能からみた主題と非主題 | 266 |
| 結 論 | 274 |
| 例文採集資料 | 290 |
| 参照文献 | 295 |

はじめに

本論文は、「～は」で表される日本語の主題とそれに関連する問題を、文の構造と機能の両面からあきらかにしようとするものである。

日本語の主題については、三上章の『象ハ鼻ガ長イ』(1960)や、青木伶子の『現代語助詞「は」の構文論的研究』(1992)をはじめとして、多くの研究がさまざまな視点からおこなわれてきた。しかし、これまでの研究は、主題をもつ文の構造だけを扱うものや、「は」と「が」の使いわけを単文にかぎって説明しようとするものなど、部分的な研究が大半だった。

本論文は、日本語の主題に関する総合的な研究をめざして、主題をもつ文だけでなく、主題をもたない文も積極的に分析の対象にしたり、単文での主題の現れかただけでなく、従属節をもつ複文での主題の現れかたについても詳しく検討するなど、文の構造と機能の両面から多角的な研究をおこないたい。

本論文の主な特徴をあげると、次の1)から5)のようになる。

- 1) 主題の問題を、主題と非主題の対立という視点からとらえる
- 2) 構造的な面だけでなく、機能的な面からも主題の現れかたを検討する
- 3) 単文だけでなく、従属節をもつ複文の中での主題の現れかたも重視する
- 4) 文のレベルだけでなく、文章・談話のレベルでの主題の現れかたも扱う
- 5) 対比を表す「は」や、排他を表す「が」についても詳しく分析する

このうち、1)は、主題の「～は」について考察するだけではなく、主題を表す「～は」と主題でないことを表す「～が」などがどのように使い分けられているかを考察することである。「～は」という形の主題と、「は」がつかないために「～が」などの形をしている非主題は、そのどちらかにならなければならないという対立関係にあるので、主題のことを考えるときには、その裏にある非主題についても考える必要があるからである。

2)は、主題をもつ文と主題をもたない文の構造はどのように違うのかといった構造的

な面だけでなく、主題をもつ文と主題をもたない文が文章・談話の中ではたず機能はどう違うのかといった機能的な面の考察にも力を入れるということである。そのような機能的な分析をすることによって、文の主題が、人間の現実の言語活動の中でどのような役割をはたしているのかをあきらかにしていきたい。

3) は、単純な構造をした単文を対象にするだけでなく、従属節をもった複文も研究対象にするということである。従属節の中では、いろいろな文法現象が単文の中とは大きく違っていることが多い。主題の現れかたも、従属節の中では、単文の中とは根本的に違っている。そのため、従属節や、従属節のような働きをする「従属的な文」などの中での主題の現れかたについても詳しく考察したい。

4) は、主題の現れかたを、文のレベルより上の、文章・談話のレベルでも考えるということである。どのようなものが主題になるかといったことは、純粹に文の中だけの条件で決まるものではなく、話の現場の状況や、前の文脈などで決まることも多い。そのため、そのような文章・談話のレベルに属する観点も積極的にとりいれることにしたい。

5) は、「子供たちはカレーは作っているが、ごはんは炊いていない。」のような対比を表す「～は」や、「大阪より神戸のほうがいい店がある。」のような排他を表す「～が」についても詳しく分析することである。そうするのは、対比を表す「～は」は主題を表す「～は」と関連があり、排他を表す「～が」は非主題の主格を表す「～が」と関連があると考えるからである。そして、対比の「～は」や排他の「～が」を解明することは、日本語の主題と非主題の研究に奥行きをあたえることになるからである。

このような特徴をもった本論文は、次のような構成になっている。はじめに、「第1章 主題研究の方法」で、従来の研究を整理し、本論文での研究方針を示す。次に、「第2章 題文の構造と機能」、「第3章 無題文の構造と機能」、「第4章 陰題文の構造と機能」で、単文レベルについて、この3種類の文の構造とそれぞれの使いわけをあきらかにする。続いて、「第5章 複文の中の主題」で複文レベルについて、「第6章 文章・談話の中の主題」で、文章・談話のレベルについて、主題の現れかたをみる。そのあと、「第7章 対比を表す「は」と「第8章 排他を表す「が」」で、主題の「～は」、非主題の「～が」と関連がある対比の「～は」と排他の「～が」をとりあげる。最後に、「第9章 主題の文法理論」で、全体のまとめをかねて、構造的な面と機能的な面から主題の理論を考える。

本論文は、このような構成によって、日本語の主題とその周辺の問題を多角的、総合的に解明していきたい。

第 1 章

主 題 研 究 の 方 法

第1節 従来の構造的な主題研究

1. はじめに

「は」を中心とした日本語の主題については、これまで長い年月にわたって膨大な数の研究が行われてきた。そのため、研究の目的や方法もさまざまである。「は」の用法の分類を目的としたものもあれば、「は」と「が」の使いわけの解明を目的としたものもある。実際の使用例を大量に集めて分析する方法をとっているものもあれば、基本的な少数の文例に基づいて理論を組み立てようとするものもある。「は」をもつ文の構造に焦点をあてた研究もあれば、「は」がもつ意味に焦点をあてた研究もある。¹

第1章では、これまでにおこなわれた主題研究を整理し、問題点を指摘したうえで、本論文ではどのように主題研究をおこなうのか、その方針を示したい。その際、主題研究を、大きく、構造的なものと同機能的なものにわけて考えていくことにする。第1節と第2節では、構造的な主題研究をとりあげる。第1節で従来の構造的な主題研究を整理し、第2節で本論文の研究方法を示す。第3節と第4節では、機能的な主題研究をとりあげる。第3節で従来の機能的な主題研究を整理し、第4節で本論文の研究方法を示すことにする。

はじめに、この第1節では、従来の主題研究を、構造を中心にしたものと機能を中心にしたものの2つに大別する。そのあと、そのうちの、構造を中心にしたさまざまな主題研究について概観し、それぞれの問題点を指摘する。構造を中心にした主題研究というのは、たとえば、「象は鼻が長い。」という文はどんな構造をもっているのか、それは「魚は鯛がいい。」という文の構造と同じかといった問題を扱うものである。

¹ 主題の研究を概観したものに、尾上圭介(1979)がある。これは、1975年ごろまでの「は」についての研究を整理したものである。

2. 構造的な主題研究と機能的な主題研究

従来の日本語の主題研究は、いろいろな観点から分類することができる。ここでは、次の(ア)のような研究の観点の違いと、その次の(イ)のような研究対象の違いという2つの観点から、従来の主題研究を分類してみる。

(ア)主題をもつ文の構造を問題にするのか、主題がもつ機能を問題にするのか

(イ)主題を表す「は」だけを対象にするのか、非主題を表す「が」も対象にするのか
はじめに、(ア)の観点からみると、従来の研究は、次の(ウ)と(エ)の2つのタイプに分けられる。

(ウ)主題の「は」をもつ文の構造を解明しようとするもの

(エ)主題の「は」がもつ機能を解明しようとするもの

(ウ)のタイプの「構造的な主題研究」は、三上章(1960)や、生成文法に基づいた Muraki(1974)や柴谷方良(1978)などが典型的なものである。三上は、「無題化」という操作によって文の中のどのような成分が主題になっているかを明らかにした。また、生成文法では、どんな基底構造からどのような操作によって主題をもつ文を生成するのがよいかを議論している。

一方、(エ)のタイプの研究は機能を重視するもので、機能文法の久野暉(1973)や、文章論の永野賢(1986)、談話文法の Hinds(1987)などが典型的なものである。久野は、「新しいインフォーメーション」と「古いインフォーメーション」という概念によって「は」と「が」の違いを説明する。永野は、文章の中で「は」が使われる文と「が」が使われる文がどのように使い分けられているかを調査している。Hinds は、談話の中でどのようなものが主題になるかを明らかにしている。

次に、前にあげた(イ)の観点、つまり、研究対象の違いからみると、従来の研究は、次の(オ)と(カ)の2つのタイプに分けられる。

(オ)主題を表す「は」だけを扱い、非主題を表す「が」との対立を考えないもの

(カ)主題を表す「は」と非主題を表す「が」を扱い、その2つの対立を重視するもの

(オ)のタイプの研究は、「は」が使われている文を大量に集め、それを構造や機能の面から分類する研究が典型的なものである。代表的なものとしては、三上章(1960)、青木伶子(1992)、村田美穂子(1997)などがあげられる。

一方、(カ)のタイプの研究は、「は」が使われる文と「が」が使われる文を比べ、「は」

と「が」の使いわけの条件を求めようとする研究が典型的なものである。代表的なものとしては、松下大三郎(1930)、久野暁(1973)などがあげられる。

このように、従来の主題研究は、研究の観点の違いから(ウ)と(エ)にわけられ、研究対象の違いから(オ)と(カ)にわけられるが、この2つの分類にはかなり強い相関関係がある。それは、つぎのような関係である。

(ウ)のタイプの研究、つまり、構造を重視するタイプのものは、(オ)のタイプの研究、つまり、「は」が使われた文だけを扱い、「が」が使われた文を扱わないものが多い。反対に、(エ)のタイプの研究、つまり、機能を重視するタイプのものは、(カ)のタイプの研究、つまり、主題を表す「は」と非主題を表す「が」の対立を重視するものが多い。

ただし、例外もある。たとえば、Tateishi(1994)は構造中心の研究であるが、主題の「は」をもつ文だけでなく、主題の「は」をもたず「が」が使われる文の構造もあわせて解明しようとしている。反対に、尾上圭介(1981)は機能を重視する研究であるが、「は」の機能だけに焦点をあてている。

この節では、従来の主題研究のなかで、構造的な研究とみられるものを取りあげる。従来の構造的な主題研究を、構造のどのような点を問題にしているかによって、次の5つのタイプにわけ、それぞれの研究を概観し、問題点をさぐっていく。

- 1) 格と主題の研究
- 2) 主題からみた文の種類の研究
- 3) 主題になる成分の研究
- 4) 二重主語構文の研究
- 5) 従属節の中の主題の研究

3. 格と主題の研究

ここで「格と主題の研究」とよぶのは、「が」や「を」、「に」などの助詞で表される「格」と、「は」で表される「主題」を、まったく別のものとして区別する研究である。つまり、「が」は主格を表す格助詞であるが、「は」は主格を表す格助詞ではなく、主題を表す係助詞(あるいは、とりたて助詞)だとする研究である。

格助詞と係助詞の区別を明確に行ったのは、山田孝雄(1936:第十七章, 第二十章)である。山田は、「は」は陳述に勢力を及ぼす係助詞の一つであり、「は」にたいする結びは、文語では終止形、口語では連体形であるとして、句の組成に関係する「が」などの格助詞と区

別する。また、係助詞である「は」は、「すべての格に通じ」ているとして、係助詞は格助詞とは別のレベルのものであることを明確にした。すべての格に通じているというのは、「は」は、次の(1)のように「が」の主格に通じていることもあるが、その次の(2)のように「に」など主格でない格に通じていることもあるということである。

(1) 雪は白し。

(2) 人には劣らぬ。

その後、佐久間鼎(1940:一六,一七)は、「は」を「も」とともに「提題の助詞」とよび、三上章(1953:p.92)は、「何々は」を「提示語」とよび、提示語に含まれている「何々」を「主題」とよんで、係助詞のなかでも主題を表す「は」に焦点をあてていった。

「格と主題の研究」は、主題研究の基礎となるものであり、非常に重要である。しかし、「が」は主格を表す格助詞で、「は」は主題を表す係助詞だとしているかぎりには、「が」と「は」はたがいにまったく別の助詞であるというだけでおわってしまう。本論文では、格と主題がどういうレベルで違っていて、その2つがどう組み合わせるのかを明確にしている。また、主題については、「は」が「主題」を表すなら、「が」は「主題でないこと」、つまり「非主題」を表すというみかたをし、主題だけでなく非主題についても考えていく。

4. 主題からみた文の種類の研究

ここで「主題からみた文の種類の研究」とよぶのは、主題をもつかどうかという観点から文を分類する研究である。たとえば、主題をもつ文を「有題文」、主題をもたない文を「無題文」とし、それぞれの構造をあきらかにするような研究である。

主題をもつかどうかという観点から文の分類を最初におこなったのは、松下大三郎(1930:p.728)である。松下は、断句(「文」に相当するもの)を、次の(3)のように題目語をもつ「有題断句」と、その次の(4)のように題目語をもたない「無題断句」にわけた。

(3) 花は咲いた。

(4) 花が咲いた。

その後、三尾砂(1948:五)は、文を「現象文」、「判断文」、「未展開文」、「文節分」に分類した。三尾は、現象文を「場の文」として、次の(5)のような例をあげ、判断文を「場をふくむ文」として、その次の(6)のような例をあげている。

(5) 雨がふってる。

(6) それは梅だ。

また、未展開文を「場を指向する文」として、次の(7)のような例をあげ、文節文を「場と相補う文」として、その次の(8)のような例をあげている。

(7) あ！ 雨だ！

(8) 考えているのだ。

三尾のこの分類は、もともと「場」との関係で文を分類したものであるが、いつのまにか主題による文の分類にすりかわっていった。つまり、現象文というのは主題をもたない文のことで、判断文というのは主題をもつ文のことだという意識が広まっていった。

「主題からみた文の種類の研究」は、文の構造を考えるうえで重要なものであるが、「有題文」と「無題文」という分類と、「現象文」と「判断文」という分類を区別することが必要である。² 本論文では、現象文と判断文という分類は、主題とは直接関係しない、モダリティの観点からの文の分類だとする。そして、主題の観点からの分類、つまり、有題文と無題文という分類によって、それぞれの文の構造を分析する。

5. 主題になる成分の研究

ここで「主題になる成分の研究」とよぶのは、文の中のどのような成分が主題になるのかを考えるものである。たとえば、次の(9)は「父が」という主格が主題になった文、その次の(10)は「この本を」という対格が主題になった文、と分析するような研究である。

(9) 父はこの本を買ってくれた。

(10) この本は父が買ってくれた。

この種の研究でとくに問題になるのは、次の(11)や(12)のように、「～が」や「～を」などの格成分が主題になっているとは考えられない文の扱いである。

(11) 象は鼻が長い。

(12) 魚は鯛がいい。

格成分が主題になったとは考えられないこのような文について最初に問題を提起したのは、草野清民(1899)である。草野は、「象は体大なり。」のような文を日本語に特有の語法としてとりあげた。そして、このような文にたいして、「体」を主語とし、「象」を「再度の主」として「総主」と名づけるという分析を示した。³

² 現象文と無題文の間に対応関係がないことは、丹羽哲也(1988)で詳しく論じられている。

³ 「総主」に関するその後の論争の経過については、大久保忠利(1968:第一部三)に解説がある。

その後、三上章(1960)は、「無題化」という操作によって、さまざまなタイプの文の主題がもとはどんな成分であったかを分析した。三上は、主題になるのは、「～が」や「～を」のような連用成分だけでなく、「Xのx」の「Xの」や、「Xのx」の「のx」も主題になると考えた。たとえば、次の(13)は、その次の(14)の「かき料理の」が主題になったものとした。また、その次の(15)は、(16)の「の切符」が主題になったものとした。

(13) かき料理は、広島が本場です。

(14) 広島がかき料理の本場である koto

(15) 切符は、二等しか残っていません。

(16) 二等の切符しか残っていない koto

三上の分析は、主題をもったさまざまな文を分析するのに有効な手段であり、本論文でもこれをベースにして、どんな成分が主題になるのかを考えていきたい。ただし、三上が同じタイプとしている「象は鼻が長い。」のような文と「かき料理は広島が本場だ。」のような文を別のタイプとして分離する。また、「花が咲くのは7月ごろだ。」のような文を、述語を含む節が主題になったタイプとして重視するなど、修正を加える。

6. 二重主語構文の研究

ここで「二重主語構文の研究」とよぶのは、一文の中に主語が2つあるようにみえる文の研究である。このような文は、「複主格文」とか「ハガ構文」などといわれることもあるが、たとえば、次の(17)や(18)のような文である。

(17) 私は猫が好きだ。

(18) 富士山が雲がかかっているよ。

二重主語構文の研究は、前の5. でみた、主題になる成分の研究と密接な関係がある。そのため、二重主語構文に最初に着目した研究は、前の5. であげた草野清民(1899)ということになる。しかし、二重主語構文について本格的な研究がおこなわれるようになったのは、生成文法が盛んになってからで、1970年代以降である。

ただ、一口に二重主語構文の研究といっても、その研究の観点はさまざまである。ここでは、二重主語構文の研究を、次の(19)のように、大きく(a)から(c)の3つにわけてみる。

- (19)

| | | | |
|---|-----------|------------|------------------------|
| { | 格を中心にした研究 | —— | (a) 「～が～が……」 構文の主格の研究 |
| | { | 主題を中心にした研究 | (b) 「～は～が……」 構文の主題の研究 |
| | | | (c) 「～が～が……」 構文の非主題の研究 |

(a)の「～が～が……」構文の主格の研究というのは、「～が～が」の最初の「～が」が「～に」や「～の」でなく「～が」になる点に注目した研究である。この種の研究は、主題の研究ではなく、格、とくに主格の研究だといえる。Shibatani and Cotton(1976-1977), Masuoka(1979), 久野暉(1983:第5章), 杉本武(1986:2.), 三原健一(1990)などが代表的なものである。

(b)の「～は～が……」構文の主題の研究というのは、「～は～が」の「～は」がもともとどんな成分だったかに注目した研究であり、前の5.でとりあげた、主題になる成分の研究の一部ということになる。野田尚史(1982)や菊地康人(1988), 清水由美子(1992), 陳訪澤(1994)などが代表的なものである。

(c)の「～が～が……」構文の非主題の研究というのは、「～が～が」の最初の「～が」が「～は」でなく「～が」になる点に注目した研究である。この種の研究は、主題と非主題の対立を問題にしている点で、格の研究というより、主題の研究の一部であるといえる。純粋にこのような観点からおこなった研究はほとんどないが、天野みどり(1990)や菊地康人(1996)がこれにあたるといえる。

これまでは、二重主語構文の研究に、ここでわけたような(a)から(c)の3つの研究の観点があることはあまり意識されてこなかったように思われる。本論文では、この3つの観点を明確に区別し、それぞれにたいして次のような扱いをする。(a)のタイプの研究にみられる主格の観点は、主題とは直接の関係がないので、積極的には取り上げない。(b)のタイプの研究にみられる主題の観点は、どんな成分が主題になるかという問題のなかで扱い、「～は～が……」構文だけを特別視することはしない。(c)のタイプの研究にみられる非主題の観点は、排他的な意味をもつ「～が」の問題のなかで扱い、「～が～が……」構文だけを特別視することはしない。

7. 従属節の中の主題の研究

ここで「従属節の中の主題の研究」とよぶのは、「～たら」や「～けれども」のような従属節の中での主題の現れかたについての研究である。つまり、「～たら」節の中には独自の主題は現れないとか、「～けれども」節の中には独自の主題が現れるといったことをあきらかにする研究である。

従属節の中の主題に最初に注目した研究は、山田孝雄(1936:第二十章)だと考えられる。山田は、次の(20)と(21)のような例文について、「は」と「が」のかかりかたの違いを説

明する。

(20) 鳥が飛ぶ時には空気が動く。

(21) 鳥は飛ぶ時に羽根をこんな風にする。

山田は、(20)の「が」の勢力は「飛ぶ」までしかおよばないのにたいして、(21)の「は」は「飛ぶ」には直接関係しないで、「羽根をこんな風にする」という陳述と結びつくという。これは、「～時」という従属節の中には主格の「が」は現れるが、主題の「は」は現れないということである。

その後、南不二男(1974:第四章)は、従属句をA類、B類、C類の3種類にわけ、主題の「は」は、「～たら」や「～ので」のようなB類の従属句には現れないが、「～けれど」や「～から」のようなC類の従属句には現れることをあきらかにした。

本論文では、従属節の中での主題の現れかたは、主題の研究において非常に重要なものだと考える。従属節の主題については、従来の研究をベースにしながらも、「～ので」節と「～から」節には南が指摘するほど大きな差がないことなど、さらに詳しい分析をしたい。

8. 従来の構造的な主題研究のまとめ

従来の構造的な主題研究について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 構造的な主題研究と機能的な主題研究

主題の研究は、大きく、構造的なもの¹⁾と機能的なもの²⁾の2つにわけられる。

- 1) 構造的な主題研究 —— 主題の「は」だけを対象にした研究が多い
- 2) 機能的な主題研究 —— 主題の「は」と非主題の「が」の対立を扱うものが多い

2) 従来の構造的な主題研究のいろいろ

従来の構造的な主題研究は、大きく次の5つに整理できる。

- 1) 格と主題の研究 —— 「が」は主格を表す格助詞、「は」は主題を表す係助詞
- 2) 主題からみた文の種類の研究 —— 主題をもつ判断文と、もたない現象文がある
- 3) 主題になる成分の研究 —— 「～が」、「～を」、「～の」などが主題になる
- 4) 二重主語構文の研究 —— 「～は～が……」構文や「～が～が……」構文がある
- 5) 従属節の中の主題の研究 —— 「～たら」、「～とき」などの中に主題は現れない

第2節 本論文での構造的な主題研究

1. はじめに

前の第1節では、従来の構造的な主題研究を大きく5つに整理し、それぞれの問題点を指摘した。そこであきらかになったことは、従来の5つの研究のうち、二重主語構文の研究は主題になる成分の研究の一部と位置づけるのいいが、それ以外はどれも、これからの研究にとっても重要なものだというのであった。

ただ、どのタイプの研究にもまだ不十分なところがあり、さらに詳しく研究する必要がある。また、構造的な観点から主題研究をおこなうときの観点も、もっと整理する必要がある。

この節では、本論文で構造的な主題研究をどのような観点からどのように進めていくかを述べておきたい。次の5つの観点にわけて、順に述べることにする。

- 1) 主題と非主題
- 2) 主題からみた文の種類
- 3) 顕題文の構造
- 4) 無題文と陰題文の構造
- 5) 従属節の中の主題

2. 主題と非主題

「が」や「を」、「に」などが格を表す助詞であるのに対して、「は」は主題を表す助詞であることは、前の第1節の3. でみたように、これまでの研究であきらかになっていることである。

これを簡単に説明すると、次のようになる。「が」や「を」などの格を表す助詞は、そうした助詞の前にある名詞が、述語になっている動詞や形容詞が表す動作や状態にたいし

て、主体になっているのか、対象になっているのかといった関係を表すものである。たとえば、次の(1)では、助詞の「が」は、その前の名詞「子供たち」が「作る」という動作をおこなう主体であることを表し、助詞の「を」は、その前の名詞「カレー」が「作る」という動作の対象であることを表している。

(1) 子供たちがカレーを作っています。

それにたいして、主題を表す助詞「は」は、聞き手にとって関心がありそうな名詞の後について、その文がその名詞を題目としてその名詞について述べる文であることを知らせるものである。たとえば、次の(2)と(3)は、事実としてはまったく同じことを表しているが、「子どもたち」が主題になっている(2)は、聞き手が子供たちについて知りたがっているような状況で、話し手が「子供たちは何をしているのか」あるいは「子供たちは何を作っているのか」ということを知らせたいときに使われる文である。一方、「カレー」が主題になっている(3)は、聞き手がカレーについて知りたがっているような状況で、話し手が「カレーはどうしたのか」あるいは「カレーはだれが作っているのか」ということを知らせたいときに使われる文である。

(2) 子供たちはカレーを作っています。

(3) カレーは子供たちが作っています。

このように、「が」や「を」が述語の格を表し、「は」が文の主題を表すのだとすると、格を表す「が」や「を」と、主題を表す「は」はまったく違うものであり、たがいに対立関係にないものだということになる。しかし、本論文では、格と主題を違うレベルのものだとしたうえで、たがいの対立関係を重視する。その関係というのは、「～は」は、格という観点から考えると、なんらかの格をになっているのだということ、また、「～が」や「～を」は、主題という観点で考えれば、主題でないことを表しているということである。

これは、次のようなことである。たとえば、次の(4)の「八木は」は、この文の主題を表している。だが、同時に、この「八木は」は格としては動作の主体を表す主格になっている。「は」は積極的に主格を表す助詞ではないが、この文の中では「八木は」は「打つ」にたいして主格になっていると考える。

(4) 八木はホームランを打った。

一方、次の(5)の「八木が」は、「打つ」の主格を表している。だが、同時に、この「八木が」は、「八木」が文の主題ではないことを表していると考える。ここで「八木が」という形を使うということは、「八木は」という主題を表す形をあえて使わないということ

であり、その意味で、「八木が」の「が」は「八木」が文の主題でないことを表している
と考えるのである。

(5) 八木がホームランを打った。

このような対立は、基本的には、どの格助詞についてもみられるものである。その対立
のいくつかを表にすると、次の(6)のようになる。

(6)

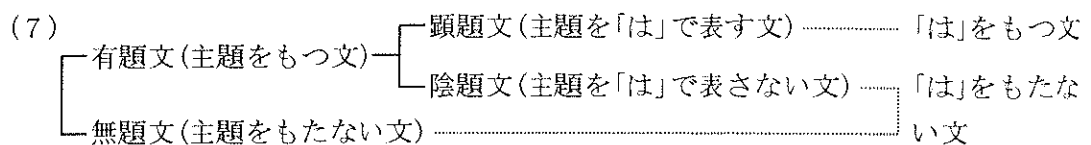
| | 「が」格 | 「を」格 | 「に」格 | 「で」格 |
|-----|------|------|------|------|
| 主 題 | ～は | ～は | ～には | ～では |
| 非主題 | ～が | ～を | ～に | ～で |

表の左右の対立は格の対立、表の上下の対立は主題・非主題の対立である。表からわか
るとおり、「～は」と「～が」の対立というのは、「が」格についての主題と非主題の対立
である。これは、「を」格についての主題「～は」と非主題「～を」の対立や、「に」格に
ついての主題「～には」と非主題「～に」の対立などと、基本的には同じものである。

本論文では、主題という観点から、「は」はその前の名詞がその文の主題であることを
表すのにたいして、「が」や「を」のような格を表す助詞は、その前の名詞がその文の主
題でないことを表すと考える。

3. 主題からみた文の種類

前の第1節の4.でみたように、主題の観点からみた文の分類として、現象文と判断文
という分類が広くおこなわれてきた。しかし、本論文では、現象文と判断文という分類は、
モダリティからみた文の分類だと考え、かわりに純粋に主題からみた次の(7)のような分
類を採用する。



主題の観点から、文を、大きく、主題をもっている有題文と、主題をもっていない無題
文にわけると、さらに、有題文は、主題を表す「は」をもっている顕題文と、主題を表す「は」
をもっていない陰題文にわけると、たとえば、次の(8)は、主題の「父」が「は」で表され
ている顕題文、その次の(9)は、主題の「主役」が「は」で表されていない陰題文、3つ
めの(10)は、主題をもたない無題文ということになる。

(8) 父はこの本を買ってくれた。

(9) 君が主役だ。

(10) 富士山が見えるよ。

この3種類の文を表面的にみると、顕題文だけが「～は」をもっているのにたいして、陰題文と無題文は「～は」をもたず、主格は「～が」で表されるという違いがある。

表面的には同じようにみえる陰題文と無題文を違う種類にするのは、次の2つの理由からである。1つは、このあと本論文で詳しくみていくが、陰題文と無題文では、文の構造がかなり違うことである。もう1つは、陰題文は、述語が主題になっていると考えられるため、無題文とは別にし、顕題文と同じ主題をもつ文としたほうがよいと考えるからである。たとえば、陰題文である前の(9)は、顕題文である次の(11)と意味がほとんどかわらないことからわかるように、「主役」が主題になっている文だとするほうがよい。⁴

(11) 主役は君だ。

この分類は、基本的に、三上章(1959:第二章六)の「有題 (顕題, 陰題, 略題) と無題」の区別をもとにしている。三上は、顕題、陰題と並べて、主題が省略された、次の(12)の答えの文のような「略題」をたてている。しかし、略題の文は、成分の省略という、別の問題のなかで扱うほうがよいと判断し、顕題、陰題と並べて分類することはしない。

(12) 問 偏理は、どうした？

——到着しました。

それでは、次の4.で顕題文、その次の5.で無題文と陰題文をとりあげ、それぞれの構造を本論文ではどのように考えるかを簡単に述べることにする。

4. 顕題文の構造

顕題文というのは、次の(13)のように、「～は」という形の主題をもっている文である。

(13) この本は父が買ってくれた。

この(13)では、主題になっている「この本は」は、格関係でいうと、「買ってくれた」という述語の動詞にたいして「この本を」という関係で結びついているものである。このように、主題は、格関係とは独立に、格関係にかぶさっているものである。

そこで、顕題文の構造を次のように考える。前の(13)を例にすると、主題がかぶさってこない格関係のレベルでは、次の(14)のような構造をもっていると考えられる。このレベルで

⁴ 三尾砂(1948:五)は、ここでいう陰題文を「転移文」という名でよび、判断文の一種としている。

は、主題になる名詞があれば、どれが主題になるかが指定されているものとする。ここで「この本」が主題に指定されると、その格成分「この本を」に「は」がつき、文頭におかれ、その次の(15)のようになると考える。ただし、「は」の前の「を」は消えるという規則があり、(16)のような文になると考える。

(14) 父が この本を 買ってくれた (こと)

主題

(15) この本をは 父が 買ってくれた。

(16) この本は 父が 買ってくれた。

ここであげた(13)の例では、「～を」という格成分が主題になっていたが、主題になるのは格成分だけではない。本論文では、どんな成分が主題になるかによって、顕題文を次の7種類に分類する。

- 1) 格成分主題文 ————— 「父はこの本を買ってくれた。」のような文
- 2) 格成分連体部主題文 —— 「象は鼻が長い。」のような文
- 3) 述語連体部主題文 —— 「かき料理は広島が本場だ。」のような文
- 4) 被修飾名詞主題文 —— 「辞書は新しいのがいい。」のような文
- 5) 従属節内成分主題文 —— 「この問題はとくのがむずかしい。」のような文
- 6) 述語主題文 ————— 「花が咲くのは7月ごろだ。」のような文
- 7) 破格主題文 ————— 「このにおいはガスが漏れてるよ。」のような文

1) の「格成分主題文」は、「～が」や「～を」、「～に」のような格成分が主題になっている文である。たとえば、「父はこの本を買ってくれた。」という文は、「父がこの本を買ってくれた(こと)」の「父(が)」が主題になってできた文である。格成分主題文は、7種類の顕題文のなかで、もっともよくみられるものである。

2) の「格成分連体部主題文」は、格成分の連体修飾部が主題になっている文である。たとえば、「象は鼻が長い。」という文は、「象の鼻が長い(こと)」の中の「(象の)鼻が」という格成分の連体修飾部である「象(の)」が主題になってできた文である。格成分連体部主題文は、格成分主題文について、よくみられるものである。

3) の「述語連体部主題文」は、述語名詞の連体修飾部が主題になっている文である。たとえば、「かき料理は広島が本場だ。」という文は、「広島がかき料理の本場(であること)」の中の「(かき料理の)本場」という述語名詞の連体修飾部である「かき料理(の)」が主題になってできた文である。

2) の格成分連体部主題文と 3) の述語連体部主題文は、連体修飾部が主題になっているという点では同じであり、三上章(1960:第一章7)もまったく区別していないが、このあと第2章で詳しくみるように、文の構造や機能がかなり違うので、本論文ではこの2つを違う種類として考察する。

4) の「被修飾名詞主題文」は、連体修飾部がついている名詞から、名詞だけが主題になったと考えられる文である。たとえば、「辞書は新しいのがいい。」という文は、「新しい辞書がいい(こと)」から、「新しい」に連体修飾されている被修飾名詞の「辞書」が主題になってできた文である。本論文では、生成文法で盛んに議論されてきた「魚は鯛がいい。」という文も、この被修飾名詞主題文の一種と考えるべきだという分析を示す。

5) の「従属節内成分主題文」は、従属節の中にある成分が主題になっている文である。たとえば、「この問題はとくのがむずかしい。」という文は、「この問題をとくの」という節の中にある「この問題(を)」という格成分が主題になってできた文である。従属節内の成分はふつう主題にならないが、いくつかの条件がそろうとこのタイプの文になれるのである。この従属節内成分主題文は、三上章(1960)では、ここでいう顕題文の類型としてたてていないが、本論文では顕題文の種類として独立させる。

6) の「述語主題文」は、述語を含む節が主題になっている文である。たとえば、「花が咲くのは7月ごろだ。」という文は、「7月ごろ花が咲く(こと)」の中の「花が咲く」という節が主題になってできた文である。この述語主題文も、三上章(1960)では、顕題文の類型としてたてていないが、本論文では顕題文の種類としてとりあげる。

最後の7)、「破格主題文」は、ここまでの6種類に入らない、やや特殊な主題をもった文である。本論文では、「このにおいはガスが漏れてるよ。」のような破格の文が、どうしてつくられるのかを検討する。

5. 無題文と陰題文の構造

無題文は主題をもたない文であり、陰題文は主題をもっていないが、主題を「は」で表さない文である。この2つは、主題をもたない無題文と主題をもつ有題文という大きな違いはあるが、どちらも表面的にみると、「～は」をもたないという共通点がある。

無題文は、基本的に、格関係を表すレベルの構造と同じ構造をもっている。たとえば、次の(17)は無題文であるが、この文の構造は、格関係を表すレベルの構造であるその次の(18)と基本的に同じである。

(17) 富士山が 見えるよ。

(18) 富士山が 見える (こと)

陰題文も、基本的に、格関係を表すレベルの構造と同じ構造をもっていると考えられる。たとえば、次の(19)は陰題文であるが、この文の構造は、格関係を表すレベルの構造であるその次の(20)と基本的に同じである。

(19) 君が 主役だ。

(20) 君が 主役 (であること)

無題文と陰題文は、格関係のレベルと同じ構造をもっているという点では、よく似ているといえる。しかし、述語や主格名詞、文章・談話の中での機能などは対照的である。無題文の述語は動詞であることが多いが、陰題文の述語は名詞であることが多い。無題文の主格名詞は、文章・談話の中にはじめて出てくるものであることが多いが、陰題文の主格名詞は、文章・談話の中にすでに出てきているものであることがかなり多い。また、無題文は、話題の設定や転換に使われるのがふつうであるが、陰題文は、話題の継続に使われるのがふつうである。

6. 従属節の中の主題

前の第1節の7. でみたように、「～たら」や「～とき」のような従属節の中には主題は現れないが、「～が」や「～けれども」のような従属節の中には主題が現れる。

本論文では、広い意味での従属節を、主格の「が」と主題の「は」の現れかたによって、次の(21)のように、大きく4種類にわけた。

(21)

| 従属節の種類 | 代 表 例 | 「が」 | 「は」 |
|--------|-----------------------------|-----|-----|
| 従属句 | ～ながら, ～まま | × | × |
| 強い従属節 | ～たら, ～ように, ～とき, ～の, ～から(焦点) | ○ | × |
| 弱い従属節 | ～から(焦点でない), ～けれども | ○ | ○ |
| 引用節 | ～と | ○ | ○ |

従属句では、主格の「が」も主題の「は」も現れない。強い従属節では、主格の「が」は現れるが、主題の「は」は現れない。弱い従属節と引用節では、主格の「が」も主題の「は」も現れる。

なお、次の(22)の2つめの文で「人件費が」が主題の「人件費は」にならないのは、その次の(23)の「～から」という従属節の中に主題が現れないのと基本的には同じ現象だと

とらえる。

(22) 利益が出ない。人件費が高いからだ。

(23) 人件費が高いから、利益が出ない。

これまでは、この(22)のような文の主題には関心がはらわれてこなかったが、本論文では、「従属的な文」として積極的にとりあげる。

7. 構造的な主題研究からみた本論文の構成

この節ではここまで、本論文で構造的な主題研究をどのような観点からどのように進めていくかを述べてきた。ここでは、ここまで簡単に述べてきたことを、これから本論文のどこで詳しく扱うのかを示しておきたい。

構造的な面を扱う章を中心に、本論文の構成を示すと、次のようになる。構造的な面を中心に扱う章や節をゴシックで示し、その右に簡単な説明をつけておく。

第2章 顕題文の構造と機能

第1節 格成分主題文

第2節 格成分連体部主題文

第3節 述語連体部主題文

第4節 被修飾名詞主題文

第5節 従属節内成分主題文

第6節 述語主題文

第7節 破格主題文

第8節 主題の選択

顕題文を7種類にわけて、
それぞれの構造を解明する

第3章 無題文の構造と機能

第1節 無題文

□ 無題文の構造を解明する

第2節 顕題文と無題文の選択

第4章 陰題文の構造と機能

第1節 陰題文

□ 陰題文の構造を解明する

第2節 顕題文と陰題文の選択

第5章 複文の中の主題

第1節 従属節の中の主題

□ 従属節などの中での主題
の現れかたを解明する

第2節 従属的な文の中の主題

第6章 文章・談話の中の主題

第7章 対比を表す「は」

第8章 排他を表す「が」

第9章 主題の文法理論

第1節 文の階層構造からみた主題

第2節 文の生成からみた主題

第3節 機能からみた主題と非主題

文の構造からみた主
題の理論を提案する

このように、第2章から第4章でそれぞれ、顕題文、無題文、陰題文の構造を解明し、第5章で従属節の中の主題を扱う。そして、最後の第9章で、構造的な面からみた主題の理論をまとめる。

8. 本論文での構造的な主題研究のまとめ

本論文での構造的な主題研究について、この節でみたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 本論文で構造的な主題研究をおこなうときの5つの観点

- 1) 主題と非主題 ——主題の「は」と非主題の「が」、「を」などとの対立を重視
- 2) 主題からみた文の種類 ——有題文(顕題文と陰題文がある)と無題文にわけ
- 3) 顕題文の構造 ——文の中のどんな成分が主題になっているかで7種類にわけ
- 4) 無題文と陰題文の構造 ——格関係のレベルの構造がそのまま現れたものとする
- 5) 従属節の中の主題 ——従属句、弱い従属節、強い従属節、引用節にわけて考察

2) 構造的な主題研究からみた本論文の構成

本論文では、次の章で、構造的な面からの主題の研究をおこなう。

第2章 顕題文の構造と機能

第3章 無題文の構造と機能

第4章 陰題文の構造と機能

第5章 複文の中の主題

第9章 主題の文法理論

第3節 従来の機能的な主題研究

1. はじめに

前の第1節と第2節では、構造的な面からの主題研究に限定して、従来の研究をふりかえるとともに、本論文での研究方法を示した。

第3節と第4節では、機能的な面からの主題研究をとり扱う。機能的な面からの主題研究というのは、たとえば、文の主題に選ばれるのはどのような名詞なのかとか、主題をもつ文は文章・談話の中でどのような機能をはたすのかといった問題を扱うものである。

この第3節では、機能を中心とした従来の主題研究を5つのタイプに分類したうえで、それぞれの研究を概観し、問題点を指摘する。

なお、それぞれの問題点をどう解決するのがよいかについては、次の「第4節 本論文での機能的な主題研究」で述べる。

2. 従来の機能的な主題研究の種類

前の第1節の2. でみたように、主題の研究には、大きくわけて、構造的なものと機能的なものがある。典型的なそれぞれのタイプの研究の特徴を簡単にまとめると、構造的な研究は次の(ア)のようになり、機能的な研究はその次の(イ)のようになる。

(ア)構造を重視し、「は」をもつ文のなりたちをあきらかにしようとするもの

(イ)機能を重視し、「は」と「が」の使いわけをあきらかにしようとするもの

このうち、(ア)の構造的な主題研究は、前の第1節でみたように、たがいによく似た方法で、たがいに大きく矛盾しない結論をえているものが多い。それぞれの研究の違いは、対象とする範囲の違いや、どういう現象を重視するかの違い、細かな解釈の違い、技術的な方法論の違いなどにすぎない。

それにたいして、(イ)の機能的な主題研究は、たがいにまったく違う視点から研究をお

こない、まったく違う結論をえているものが少なくない。そのうえ、ほかの研究との関係について言及されていないものも多く、それぞれの研究の位置づけがわかりにくい。

機能的な主題研究を進めるためには、まず従来の機能的な主題研究を分類、整理しておく必要がある。ここでは、従来の機能的な主題研究を、主題を表す「は」と主題でないことを表す「が」の選択についてのものを中心に、次のように、5つにわけることとする。

- 1) 新情報と旧情報に基づく主題研究
- 2) 現象文と判断文に基づく主題研究
- 3) 文と節に基づく主題研究
- 4) 措定と指定に基づく主題研究
- 5) 対比と排他についての研究

次の3. から7. では、この5種類の研究がそれぞれどんなものであるかをもう少し詳しくみていく。

3. 新情報と旧情報に基づく主題研究

ここで「新情報と旧情報に基づく主題研究」とよぶのは、主格名詞が、話の現場や文脈とどのような関係をもっているかによって「は」と「が」の使いわけを説明するものである。つまり、主格名詞がまだ知られていない新情報のときはその主格に「が」がつき、主格名詞がすでに知られている旧情報のときはその主格に「は」がつくという研究である。

このような提案を早い時期に行ったのは、松下大三郎(1930:p. 339-p. 343)である。松下は、次の(1)と(2)のような例文について、「既定不可変の概念」と「未定可変の概念」という用語を使って、「は」と「が」の使いわけを説明する。

- (1) 私は吉田と申します。社長に御取次を願います。
- (2) 私が先日履歴書を差上げました吉田でございます。

松下によると、(1)はなにも知らない受付の人に言う文で、目の前にいる「私」は既定の概念で、「吉田」は未定の概念である。このような既定の概念の「私」には「は」がつく。それにたいして、(2)は「吉田」という名前を知っている社長に言う文で、「吉田」が既定の概念で、「私」は未定の概念である。このような未定の概念の「私」には「が」がつくというのである。

その後、久野暲(1973:第25章)は、「新しいインフォーメーション」と「古いインフォーメーション」という用語を使って、この研究を精密にしている。とくに、「anaphoric(文

脈指示)」という概念と「古いインフォーメーション」という概念の違いをはっきりさせている点で高く評価される。久野によると、「anaphoric(文脈指示)」というのは、名詞句に独立して適用する概念で、その名詞句が指し示す事物が既に話題にのぼったか否かといったことに関する概念である。それにたいして、「古いインフォーメーション」というのは、名詞句が与えられた文の中で占める意味的機能に関する概念である。つまり、次の(3)の答えの文の「太郎」は「anaphoric」であるが、「古いインフォーメーション」ではなく、「新しいインフォーメーション」になるということである。

(3) 「太郎と花子と夏子のうちで、誰が一番背が高いか。」

「太郎が一番背が高い。」

そのほか、大野晋(1978:3)や北原保雄(1981:第七章)は、「既知」と「未知」という用語を使って、「は」と「が」の使いわけを説明しようとしている。ただ、これらの研究は、久野が明確にした、「anaphoric(文脈指示)」のような概念と「古いインフォーメーション」のような概念の違いを考慮していない。大野は、「既知」と「未知」という用語を、久野のいう「anaphoric(文脈指示)」かどうかというレベルで考えている。北原は、久野のいう「古いインフォーメーション」かどうかというレベルで考えているようである。

4. 現象文と判断文に基づく主題研究

ここで「現象文と判断文に基づく主題研究」とよぶのは、モダリティの面からの文の分類によって「は」と「が」の使いわけを説明するものである。つまり、現象文の主格に「が」がつき、判断文の主格に「は」がつくという研究である。

「現象文」と「判断文」という用語を使って、最初にこの種の研究をおこなったのは、三尾砂(1948:五)である。三尾は、次の(4)と(5)のような例文について、「は」と「が」の使いわけを説明する。

(4) 雨が降ってる。

(5) それは梅だ。

三尾によると、(4)は、現象をありのまま、判断の加工をほどこさないで、心にうつたままを、そのまま表現した「現象文」であり、「が」が使われる。それにたいして、(5)は、課題である「それ」にたいして、話し手の主観が判断をくだして、「梅」が解決として真であると主張する「判断文」であり、「は」が使われるというのである。

現象文と判断文という分類は、構造的な主題研究を扱った第1節の4.でもとりあげた

が、現象文と判断文が実際の文章・談話でどのように使い分けられるのかという研究は、機能的な性格が強い。そのような研究としては、たとえば、永野賢(1965)や野田尚史(1984)がある。永野は、新聞の政治面の記事の冒頭文には「判断文」が使われることが多く、社会面の記事の冒頭文には「現象文」が使われることが多いことをあきらかにした。また、野田は、新聞記事の冒頭文にみられる「有題文」と「無題文」の使い分けの条件を、述語の性質や主格名詞句の性質、語順、文の機能の面からさらに詳しく述べている。

5. 文と節に基づく主題研究

ここで「文と節に基づく主題研究」とよぶのは、主格がどこまでかかるかによって「は」と「が」の使い分けを説明するものである。つまり、文末までかかるときは「は」が使われ、節の中だけにしかかからないときは「が」が使われるという研究である。

このような使い分けを最初にあきらかにしたのは、山田孝雄(1936:第二十章)である。山田は、次の(6)と(7)のような例文について、「は」と「が」の違いを説明する。

(6) 鳥が飛ぶ時には空気が動く。

(7) 鳥は飛ぶ時に羽根をこんな風にする。

山田によると、(6)の「が」の勢力は「飛ぶ」までしかおよばないのにたいして、(7)の「は」は「飛ぶ」には直接関係しないで、「羽根をこんな風にする」という陳述と結びつくというのである。

従属節の中での主題の現れかたについては、構造的な主題研究を扱った第1節の7.でもとりあげたが、複文の中で主題の「は」と非主題の「が」がどのような条件によって使い分けられるのかという研究は、機能的な性格ももっている。

この種の研究としては、たとえば、三上章(1970:p.11-p.15)や野田尚史(1986)をあげることができる。三上は、節によって「が」のかかりかたに違いがあることを、「は」と比較しながら指摘した。それは、次の(8)では、「太郎が」は「ハンガーにかけた」までかかっていくが、その次の(9)では、「ハンガーにかけた」までかかっていかないという違いである。

(8) 太郎が上着を脱いで、ハンガーにかけた。

(9) 太郎が上着を脱ぐと、ハンガーにかけた。

野田は、三上の指摘をもとに、「は」と「が」のかかりかたによって、節を大きく3種類に分類し、複文での「は」と「が」の使い分けの条件を示した。

6. 措定と指定に基づく主題研究

ここで「措定と指定に基づく主題研究」とよぶのは、主格名詞と述語の意味的な関係によって「は」と「が」の使いわけを説明するものである。つまり、述語が主格名詞の性質を表す「措定」のときには「は」だけが使われ、主格名詞と述語名詞が同じものであることを表す「指定」のときは「は」か「が」が使われるという研究である。

「措定」と「指定」という用語を使って、最初にこの種の研究をしたのは、三上章(1953:第一章六)である。三上は、次の(10)のような「は」の文と、その次の(11)のような「は」の文の違いを指摘している。

(10) いなごは害虫です。

(11) 君の帽子はどれです？

三上によると、前の(10)のような文は、「いなご」について「害虫だ」と解説する措定の文なので、次の(12)のような「が」の文にかえることはできない。それにたいして、前の(11)のような文は、「君の帽子」と「どれ」の一致を認定する指定の文なので、その次の(13)のような「が」の文にかえることができるというのである。

(12) *害虫がいなごです。

(13) どれが君の帽子です？

その後、野田時寛(1985)は「内包文」と「外延文」という用語で、上林洋二(1988)は「措定」と「指定」という用語で、坂原茂(1990)は「記述文」と「同定文」という用語で、三上の研究をさらに精密にしている。

7. 対比と排他についての研究

ここで「対比と排他についての研究」とよぶのは、主格名詞が、その文の中にない同類の名詞との関係でどのような意味をもつかによって「は」と「が」の使いわけを説明するものである。つまり、同類の名詞にたいして対比的な意味をもつときは「は」が使われ、排他的な意味をもつときは「が」が使われるという研究である。

「対比」と「排他」という用語を使って、最初にこの種の研究をしたのは、三上章(1963:第三章一)である。その後、久野暉(1973:第2章)は、「対照」と「総記」という用語を使って、三上の研究をさらに精密にしている。久野は、次の(14)のような「は」や、その次の(15)のような「が」について説明している。

(14) 雨は降っていますが、雪は降っていません。

(15) 太郎が学生です。

久野によると、(14)は、「雨が降っています」と「雪が降っていません」の対照を表しているため、「は」が使われる。一方、(15)は、「(今話題になっている人物の中では)太郎だけが学生です」という総記の意味を表しているため、「が」が使われるというのである。

この「対比と排他についての研究」は、狭い意味では「主題と非主題の選択」についての研究とはいえないが、主題と非主題の選択に密接に関係しているため、ここにあげておく。

8. 従来の機能的な主題研究の問題点

ここまでの3.から7.で、主題を表す「は」と主題でないことを表す「が」の選択についての研究を中心に、機能を重視した従来の主題研究を5つに分類した。

これらの5つの研究はどれも、主題と非主題の選択の条件をあきらかにするのに不可欠なものである。しかし、次の(ウ)と(エ)のような問題点をもっている。

(ウ) 5つの研究のあいだの優先順位が明確でない

(エ) かならずしも客観的な条件になっていない

(ウ)は、次のようなことである。5つの研究はそれぞれ主題と非主題の選択の条件になっている。しかし、それぞれは、あくまで主題と非主題の選択の条件の一部にすぎない。どれか1つの条件で主題と非主題の選択のすべてをカバーできるわけではない。⁵ そうだとすると、5つの研究であきらかになった条件のたがいの関係を明確にし、この5つに優先順位をつけなければならないということになる。

優先順位というのは、次のようなことである。たとえば、次の(16)で[]に「が」が入ることは、「新情報と旧情報」の条件や「現象文と判断文」の条件より、「文と節」の条件が優先するという順位がなければ説明できない。

(16) 地球[]丸いことは、今では常識だ。

⁵ 1つの条件ですべてをカバーしようとする、強引に無理な説明をすることになる。たとえば、大野晋(1978:3)は、すべての「が」を「未知」で説明しようとする結果、従属節の中の「が」までを「未知」で説明するというような無理をしている。それにたいして、久野暁(1973:第25章)は、「新しいインフォメーション」で説明する「が」を、主文の主語に現れるものに限るというように、条件の適用範囲を明確にしている。

もし、ここで、「新情報と旧情報」の条件を使うと、「地球」が旧情報ということで、「は」が入るということになってしまう。「現象文と判断文」の条件でも、「地球[]丸い」は判断文ということで、「は」が入ることになってしまう。一方、「文と節」の条件ならば、「地球」が文末まではかからないということで、「が」が入ることを説明できる。したがって、(16)を説明するためには、「新情報と旧情報」の条件や「現象文と判断文」の条件より、「文と節」の条件が優先するという順位づけが必要なのである。

次に、問題点の2つめの(エ)は、5つの研究で提示された条件が、文の表面的な形などから判断できる客観的な規則になっていないということである。たとえば、次の(17)で[]に「が」が入ることを説明するとしよう。

(17) あっちよりこっちのほう[]いい。

「新情報と旧情報」の条件を使うとすると、「こっちのほう」が新情報だと判断しなければならないが、それを客観的に判断する根拠はかならずしも明確には規定されていない。この例では、たとえば、比較を表す形容詞文では特別な条件がないかぎり、「～のほう」は主題にならない、したがって[]には「が」が入るといような客観的な規則で説明する必要がある。

9. 従来の機能的な主題研究のまとめ

従来の機能的な主題研究について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 主題と非主題の選択についての5つの研究

主題と非主題の選択についての従来の研究は、次の5つに整理できる。

- 1) 新情報と旧情報に基づく主題研究 —— 新情報には「が」、旧情報には「は」
- 2) 現象文と判断文に基づく主題研究 —— 現象文には「が」、判断文には「は」
- 3) 文と節に基づく主題研究 —— 文末までかかるときは「は」、節の中は「が」
- 4) 措定と指定に基づく主題研究 —— 措定には「は」、指定には「は」か「が」
- 5) 対比と排他についての研究 —— 対比のときは「は」、排他のときは「が」

2) 主題と非主題の選択についての研究の問題点

主題と非主題の選択についての従来の研究には、次の2つの問題点がある。

- 1) 5つの研究のあいだの優先順位が明確でない
- 2) かならずしも客観的な条件になっていない

第4節 本論文での機能的な主題研究

1. はじめに

前の第3節では、主題と非主題の選択についての研究を中心に、従来の機能的な主題研究を5つに整理し、その問題点を指摘した。そこであきらかになったことは、従来の5つの研究はどれも、主題と非主題の選択の一部分を説明できるものではあっても、その全体を説明できるものではないということであった。

ということは、これからの機能的な主題研究は、これら5つの研究のどれか1つを詳しくしていくだけでは不十分であり、5つの研究をくみあわせ、それら5つのあいだに優先順位をあたえるような形で、主題と非主題の選択の条件をつくっていく必要があるということである。

この節では、そうした考えにもとづいて、主題と非主題が選択される段階を5つにわけ、そして、それぞれの段階で、たがいに違う5つの原理によって主題と非主題の使いわけが決まることをあきらかにする。

2. 主題と非主題の選択についての5つの原理

前の第3節でみたように、主題と非主題の選択についての従来の5つの研究は、どれも主題の「は」と非主題の「が」の使いわけを説明するために必要なものである。そして、基本的には、この5つだけで十分だと思われる。

しかし、従来の研究では、これら5つの研究は、それぞれ別々の例文を説明するために、別々の視点から、ばらばらに述べられていた。これでは、5つの研究の関係をあきらかにしたり、5つの研究を体系化したりすることはむずかしい。

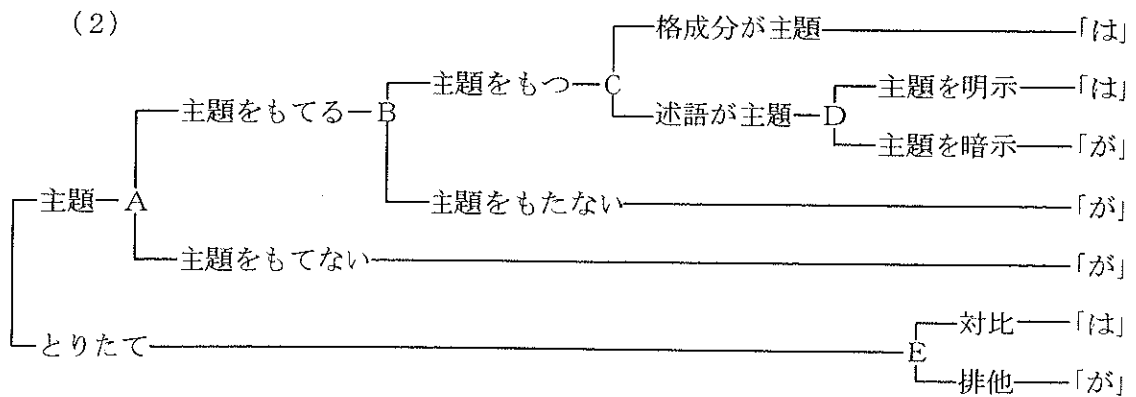
そこで、ここでは、従来の1)から5)の5つの研究を、「主題」という統一した視点からとらえなおすことにする。そうすると、次の(1)のように、A)からE)の5つの原

理として再編されることになる。

- | | | |
|------------------------|---|-------------------|
| (1) 1) 新情報と旧情報に基づく主題研究 | ↗ | A) 主題をもてるかどうかの原理 |
| 2) 現象文と判断文に基づく主題研究 | → | B) 主題をもつかどうかの原理 |
| 3) 文と節に基づく主題研究 | ↘ | C) 何を主題にするかの原理 |
| 4) 措定と指定に基づく主題研究 | → | D) 主題を明示するかどうかの原理 |
| 5) 対比と排他についての研究 | → | E) どうとりたてるかの原理 |

3. 主題と非主題の選択についての5つの原理の関係

この新しいA) からE) の5つの原理は、たがいに、次の(2)に示すような関係があり、この5つが体系をなしていると考えられる。つまり、この図(2)のAからEの5つの分岐点で、それぞれ、前の(1)のA) からE) の5つの原理が働くということである。



この図(2)からわかるように、5つの原理は大きく2つにわけられる。A) からD) と、E) の2つである。A) からD) は、文や節のレベルにたいして、主題をもつかどうか、何が主題になるかといったことを決める「主題」についての原理である。それにたいして、E) は、成分のレベルにたいして、どういうとりたてかたをするかを決定する「とりたて」についての原理である。

主題についての原理であるA) からD) は、図からわかるように、A) からD) の順序で序列をもっている。つまり、次のような序列である。

まず、Aの分岐点で、A) の原理によって「主題をもてない」のほうに進めば、「が」に決まる。もう一方の「主題をもてる」のほうに進めば、Bの分岐点に行く。Bの分岐点では、B) の原理によって「主題をもたない」のほうに進めば、「が」に決まる。もう一方の「主題をもつ」のほうに進めば、Cの分岐点に行く。Cの分岐点では、C) の原理に

よって「格成分が主題」のほうに進めば、「は」に決まる。もう一方の「述語が主題」のほうに進めば、D) の分岐点に行く。D) の分岐点では、D) の原理によって「主題を明示」のほうに進めば、「は」に決まり、もう一方の「主題を暗示」のほうに進めば、「が」に決まる。

それでは、次の4. から8. で、この新しい5つの原理がどんなものなのかを簡単にみていこう。

4. 主題をもてるかどうかの原理

A) の「主題をもてるかどうかの原理」というのは、3) の「文と節に基づく主題研究」をうけついだものである。この原理は、文や節を、その内部に主題をもてるかどうかで分類するものである。

具体的にいうと、「～たら」や「～とき」のような従属節はその内部に主題をもてないといったこと、反対に、単文や、複文の主文、「～けれど」のような従属節はその内部に主題をもてるといったことをいうものである。

この原理によって、たとえば、次の(3)の「～こと」という従属節の中にある主格「八木」には「が」がつくことが決まるのである。

(3) 八木がよくホームランを打つことは、みんな知っている。

一方、単文や、複文の主文などの主格に「は」がつくか「が」がつくかは、この原理だけでは決まらない。次のB) から先の原理が必要になる。

この原理についての詳しいことは、「第5章 複文の中の主題」で述べることにするが、とくに、従属節のような性質をもった文、たとえば、次の(4)の最初の文のような文で、従属節の中と同じように、非主題が選択されることを重要な論点としてとりあげる。

(4) 客への対応がいつも変わらない。それがこの店の特徴だ。

5. 主題をもつかどうかの原理

B) の「主題をもつかどうかの原理」というのは、2) の「現象文と判断文に基づく主題研究」をうけついだものである。この原理は、主題をもてる文について、主題をもつ文にするか、もたない文にするかを定めるものである。

具体的にいうと、たとえば、述語ができごとを表す自動詞で、主格が前の文脈や状況になく、その文が話題の転換に使われるものなら、主題をもたない文になりやすいといった

こと、反対に、述語が動作を表す他動詞で、主格が前の文脈や状況にあり、その文が話題の継続に使われるものなら、主題をもつ文になりやすいといったことをいうものである。

この原理によって、たとえば、次の(5)は主題をもたないことになり、「富士山」に「が」がつくことが決まるのである。

(5) 富士山が見えるよ。

一方、主題をもつことになった場合は、「は」がつくか「が」がつくかは、この原理だけでは決まらない。次のC)から先の原理が必要になる。

この原理についての詳しいことは、「第3章 無題文の構造と機能」の「第2節 題文と無題文の選択」で述べることにする。この原理は、文章・談話の種類によってもかわるので、文章・談話との関係を重視し、「第6章 文章・談話の中の主題」でも扱う。

6. 何を主題にするかの原理

C)の「何を主題にするかの原理」というのは、1)の「新情報と旧情報に基づく主題研究」をうけついだものである。この原理は、主題をもつ文について、文の中のどの成分を主題にするかを定めるものである。

具体的にいうと、たとえば、「私」や「これ」のように話の現場に存在するものを指す名詞は主題になりやすいといったこと、反対に、「だれ」や「何」のような疑問語は主題にならないといったことをいうものである。

この原理によって、たとえば、次の(6)では、主格成分の「私」が主題になり、「私」に「は」がつくことが決まるのである。

(6) そのあと、私はカラオケに行きました。

一方、述語が主題になった場合は、「は」がつくか「が」がつくかは、この原理だけでは決まらない。次のD)の原理が必要になる。

この原理についての詳しいことは、「第2章 題文の構造と機能」の「第8節 主題の選択」で述べることにする。この原理も、文章・談話の種類によってもかわるので、文章・談話との関係を重視し、「第6章 文章・談話の中の主題」でも扱う。

7. 主題を明示するかどうかの原理

D)の「主題を明示するかどうかの原理」というのは、5)の「措定と指定に基づく主題研究」をうけついだものである。この原理は、次の(7)のように述語が主題になってい

る文について、主題を明示するかどうかを決めるものである。

(7) 私が責任者 (であること)

主題

つまり、「は」によって主題を明示して、次の(8)のような文にするか、主題を明示しないで、その次の(9)のような文にするかを決めるものである。

(8) 責任者は私です。

(9) 私が責任者です。

この原理は、たとえば、話の現場や前の文脈にあるものを指す「私」や「これ」のような名詞が主格になっているときは、前の(9)のような、主題を明示しない文になりやすいといったことをいうものである。

この原理についての詳しいことは、「第4章 陰題文の構造と機能」の「第2節 顕題文と陰題文の選択」で述べることにする。なお、そこでは、これまで「措定」とよばれてきたものを「主格名詞が主題になったもの」と考え、「指定」とよばれてきたものを「述語名詞が主題になったもの」と考えることにするので、「措定」と「指定」という概念は使わないことになる。

8. どうとりたてるかの原理

E)の「どうとりたてるかの原理」というのは、4)の「対比と排他についての研究」をうけついだものである。この原理は、ある成分を、どんなときに対比の「は」でとりたて、どんなときに排他の「が」でとりたてるかを決めるものである。

これは、ある成分を、同類の「も」でとりたてたり、限定の「しか」でとりたてたりするのと同じレベルで扱うほうがいいものである。

この原理は、たとえば、「AはXけれど、BはY。」のような形をした対比を表す文では、次の(10)のように「は」が使われるといったことをいう。

(10) 私は魚は好きですが、肉はきらいです。

また、「～のほう」や「いちばん」を使った比較を表す文では、次の(11)のように「が」が使われるといったことをいうものである。

(11) 1月より2月のほうが寒い。

この原理についての詳しいことは、「第7章 対比を表す「は」と「第8章 排他を表す「が」」で述べることにする。この原理を考えると、とくに重視したいのは、対比の

「は」でとりたてたり排他的「が」でとりたてたりできるのは、文の中のどんな成分かということである。

9. 機能的な主題研究からみた本論文の構成

この節ではここまで、主題の「は」と非主題の「が」の選択を中心に、主題の機能に係する原理を5つに整理し、それぞれの原理について簡単に述べてきた。ここでは、ここまで簡単に述べてきたことを、これから本論文のどこで詳しく扱うのか、もう一度まとめて示しておきたい。

本論文の構成は、次のようになっている。機能的な面を中心に扱う章や節をゴシックで示し、その右に簡単な説明をつけておく。

第2章 顕題文の構造と機能

第1節 格成分主題文

第2節 格成分連体部主題文

第3節 述語連体部主題文

第4節 被修飾名詞主題文

第5節 従属節内成分主題文

第6節 述語主題文

第7節 破格主題文

第8節 主題の選択

☐ 何を主題にするかの原理

第3章 無題文の構造と機能

第1節 無題文

第2節 顕題文と無題文の選択

☐ 主題をもつかどうかの原理

第4章 陰題文の構造と機能

第1節 陰題文

第2節 顕題文と陰題文の選択

☐ 主題を明示するかどうかの原理

第5章 複文の中の主題

第1節 従属節の中の主題

第2節 従属的な文の中の主題

☐ 主題をもてるかどうかの原理

| | | |
|-------------------|---|--|
| 第6章 文章・談話の中の主題 | } | 主題をもつかどうかの原理・ 何を主題にするかの原理 (文章・談話の中で) |
| 第1節 文章・談話の冒頭文の主題 | | |
| 第2節 文章・談話の非冒頭文の主題 | | |
| 第3節 話しことばの無助詞 | | |
| 第7章 対比を表す「は」 | } | どうとりたてるかの原理 (対比を表す「は」) |
| 第1節 明示的対比を表す「は」 | | |
| 第2節 暗示的対比を表す「は」 | | |
| 第3節 対比を表せる成分 | | |
| 第8章 排他を表す「が」 | } | どうとりたてるかの原理 (排他を表す「が」) |
| 第1節 排他を表す「が」 | | |
| 第2節 排他を表せる成分 | | |
| 第9章 主題の文法理論 | | |
| 第1節 文の階層構造からみた主題 | | |
| 第2節 文の生成からみた主題 | | |
| 第3節 機能からみた主題と非主題 | □ | 機能からみた主題の理論 |

このような構成で、主題と非主題の選択を中心にした5つの原理をさらに詳しく考察する。最後の第9章の第3節では、機能的な面からみた主題の理論をまとめる。

10. 本論文での機能的な主題研究のまとめ

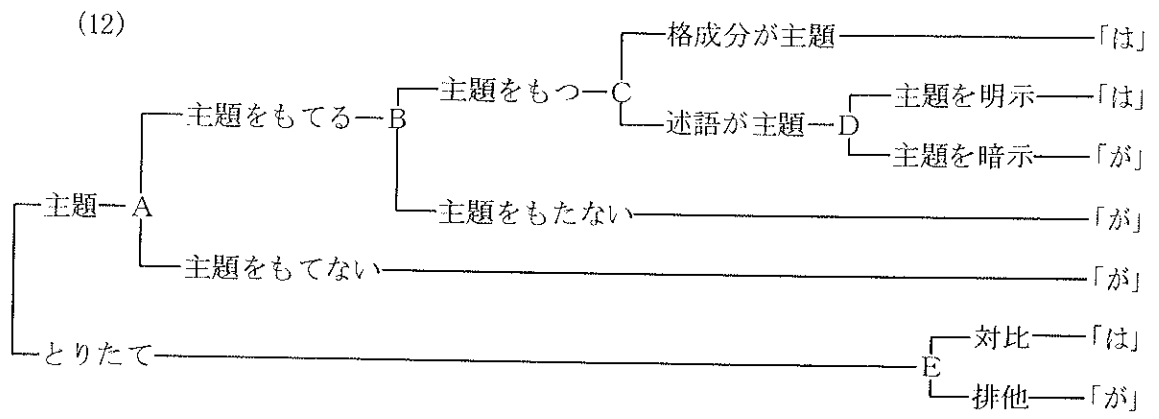
本論文での機能的な主題研究について、この節でみたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 主題と非主題の選択についての5つの原理

- A) 主題をもてるかどうかの原理 ← 3) 文と節に基づく主題研究
- B) 主題をもつかどうかの原理 ← 2) 現象文と判断文に基づく主題研究
- C) 何を主題にするかの原理 ← 1) 新情報と旧情報に基づく主題研究
- D) 主題を明示するかどうかの原理 ← 5) 措定と指定に基づく主題研究
- E) どうとりたてるかの原理 ← 4) 対比と排他についての研究

2) 主題と非主題の選択についての5つの原理の関係

- A) から E) の5つの原理は、それぞれ、(12)のAからEの分岐点で働く。



第 2 章

頭 題 文 の 構 造 と 機 能

第1節 格成分主題文

1. はじめに

前の第1章第2節の4.で述べたように、「～は」という主題をもつ顕題文は、文の中のどんな成分が主題になっているかによって7つに分類できる。この節では、その7つのうちで、もっともよく使われる格成分主題文を取りあげる。これは、「父はこの本を買ってくれた。」のように、格成分が主題になっている文である。

格成分というのは、動詞や形容詞などの述語にたいして、その動作を行う動作主や対象、相手、手段など、あるいは性質や感情の持ち主などを表すもので、「～が」、「～を」、「～に」、「～で」などの形をした成分である。

このような格成分のなかには、「～が」のように文の主題になりやすいものから、「～と」のようにほとんど文の主題にならないものまである。この節では、どんな格成分が文の主題になりやすく、どんな格成分が文の主題になりにくいかを中心に、格成分主題文をみていく。

2. 格成分主題文の構造

格成分主題文というのは、次の(1)や(2)のような文である。(1)は「父が」という「が」格の格成分が主題になった文であり、(2)は「この本を」という「を」格の格成分が主題になった文である。

(1) 父はこの本を買ってくれた。

(2) この本を父が買ってくれた。

日本語では、文の主題は、基本的に、次の2つの特徴をもっている。

(ア)「は」という主題を示す助詞がつく

(イ)ほかの格成分より前におかれる

(ア)についていうと、どの格成分も文の主題になれば、同じように「は」がつく。しかし、「～が」と「～を」の場合は、後ろに「は」がつくと、格助詞の「が」と「を」はかならず消える。「～に」、「～で」、「～へ」も、後ろに「は」がつくと、その「に」、「で」、「へ」が消えることがある。これをまとめると、次の(3)のようになる。

(3) 格成分に「は」がつくときの形

ここが + は → ここは
 ここを + は → ここは
 ここに + は → ここには (ここは)
 ここで + は → ここでは (ここは)
 ここへ + は → ここへは (ここは)
 ここと + は → こことは
 ここから + は → ここからは
 ここまで + は → ここまでは

ただし、このうち「～と」、「～から」、「～まで」は文の主題になることはほとんどなく、「は」がついたとしても対比的な意味が強い。

次に、(イ)についてだが、たとえば、前の(2)の「この本は父が買ってくれた。」は、基本語順では「父がこの本を買ってくれた(こと)」であるが、主題になった「この本は」は「父が」より前におかれるということである。

ただし、これは、文の主題はかならず文頭におかれるということではない。「それから」のような接続詞や、「ええ」のような感動詞、「たぶん」のような陳述副詞などが文頭にきて、「～は」という主題はそれより後ろにおかれることも多いからである。

ここまでは格成分主題文について、簡単に「格成分が主題になっている」といつてきた。しかし、主題は基本的に名詞だと考えられる。したがって、主題になっているのは、正確にいうと、「～が」という格成分から「が」を取りさった残りの部分、つまり単独の名詞や、修飾部のついた名詞である。

このことをふまえて、格成分主題文の構造を示すと、次のようになる。(4)で「この本」が主題に指定されると、その格成分「この本を」に「は」がつき、文頭におかれるのだが、「は」の前の「を」は消えて、(5)のような文になるのである。¹

¹ 理論的に厳密に考えた派生のしかたについては、第9章第2節で述べる。

- (4) 父がこの本を買ってくれた (こと)

主題

- (5) この本は父が買ってくれた。

3. 「が」格主題文

「が」格主題文というのは、次の(6)のように、主格の「～が」という格成分が主題になっている文である。この文では、「自動車メーカー」が主題になっている。

- (6) 自動車メーカーはモデルチェンジ期間の延長を真剣に検討し始めた。

(『朝日新聞』1992.3.13 朝刊 p.9 「点検景気急ブレーキ」)

動作やできごとの主体を表す「～が」は、格成分のなかで、もっとも文の主題になりやすいものである。そして、このような「～が」格の格成分は、ほとんどすべての文にでてくるので、主題をもつ文のなかでは、「～が」が主題になっているものが圧倒的に多くなる。

「～が」には、動作やできごとの主体を表すもののほかに、次の(7)の「料理が」のように、能力や感情などの対象を表すものがある。

- (7) フリアおばさんは料理が抜群にうまい。 (有本紀明『スペイン・聖と俗』p.33)

この種の「～が」は、動作やできごとの主体を表す「～が」とは違って、文の主題にはなりにくい。次の(8)のような文は、やや不自然である。

- (8) ?料理はフリアおばさんが抜群にうまい。

とくに、次の(9)の「うなぎは日本人が大好きだ。」のように、感情の持ち主だけでなく、感情の対象も人間や生物のときは、どちらが感情の持ち主でどちらが感情の対象かがわかりにくくなるため、なおさらである。

- (9) つい最近、食堂で見かけた全国淡水魚組合連合会のポスター (うなぎの蒲焼きが大写しになっている) の左隅に「うなぎは日本人が大好きだ。」とあるのを発見。一瞬、日本人を好んで食するオバケウナギを思い浮べたのは筆者だけではない。
あるまい。 (『言語生活』394 (1984.10) p.77 「目」)

4. 「を」格主題文

対格の「～を」が主題になっている文というのは、次の(10)や(11)のような文である。

- (10) 電子回路でピアノ音を合成する電子ピアノは七二年、ローランド (本社・大阪

市)が世界で最初に出した。

(『朝日新聞』1993. 2. 24 夕刊 p. 5 「ハイタッチテクノ」)

- (11) 収穫した種子は天日で十分乾燥させ、湿気や害虫が来ないように、密閉保管してください。
(『現代農業』1992. 11 p. 90)

「～を」が主題になっている文には、前の(10)のように文の中に「～が」が現れるものと、(11)のように「～が」が現れないものがある。

このうち、(10)のような「～が」が現れる文のほうは、「～が」が排他的な意味をもちやすい。とくに、次の(12)のように、ふつう文の主題になりやすいはずの「俺」のような名詞が主題にならないで、「俺が」で現れているような場合は、「ほかの人ではなく俺が」という排他的な意味が強くなる。

- (12) 永尾「へえ——そっかそっか、いいよ——判った、二次会の幹事は俺がする——ああ、じゃまた」

と、切る。(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p. 157)

一方、前の(11)のような「～が」が現れない文のほうは、「～が」で表されるはずの動作の主体が、聞き手にとってわかりきっているか、またはわからなくてもよいか、とにかく動作の主体についての情報がとくに必要ではないときに使われる。たとえば、(11)では、「乾燥させる」、「密閉保管する」という動作の主体が聞き手であることは、「～てください」という形からあきらかである。

また、次の(13)では、「試験する」という動作の主体が炊飯器メーカーの開発担当者であることが簡単に予想でき、それ以上、動作の主体を特定する必要もないのである。

- (13) 四年前に売り出して、現在では炊飯器の約四〇%のシェア(市場占有率)を獲得した製品は、その開発の過程で、月に百万円もの米を炊いて試験したという。

(『朝日新聞』1992. 12. 8 朝刊 p. 11)

そのほか、次の(14)のような、三上章(1960)などが「操作型または料理型」とよぶ文も、(12)と同じく、「～を」が主題になっている文で、動作の主体が現れないほうのタイプだと考えられる。

- (14) にんにく2カケは、まず包丁の腹でおしつぶし、叩くようにしてみじん切りに
します。(『あまから手帖』1985. 5 p. 42)

なお、「～を」には、動作の対象を表すもののほかに、次の(15)のような出発点を表す「～を」や、(16)のような通過点を表す「～を」がある。

(15) 貨物船が崖壁を離れた。

(16) このバスは本町を通ります。

この種の「～を」は、動作の対象を表す「～を」とは違って、文の主題にはなりにくい。次の(17)や(18)のような文は、不自然になりやすい。

(17) *崖壁は貨物船が離れた。

(18) ?本町はこのバスが通ります。

5. 「に」格主題文

「～に」には、「ここにある」のように場所を表すもの、「友だちに話す」のように相手を表すもの、「観光地になる」のように結果の状態を表すものなど、いろいろな種類がある。そして、「～に」の種類によって、主題になりやすいかどうかにも違いがある。

「～に」のなかで、もっとも文の主題になりやすいのは、「弟に特技がある(こと)」、「弟にタイ語がわかる(こと)」、「弟に休養が必要(なこと)」の「～に」のように、所有や可能や必要の主体を表すものである。

この種の「～に」は、次の(19)のように、ほぼかならず文の主題になる。

(19) このアパートに越してきた頃、私にはまだ妻がいた。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p. 520)

「～に」を主題にしないで、「～が」のほうを主題にした次の(20)のような文は、なりたたないことが多い。

(20) *このアパートに越してきた頃、妻はまだ私にいた。

このような「～に」は、柴谷方良(1978)などの生成文法で「与格主語」とよばれているものだが、こうした「～に」は、「主格主語」の「～が」と同じように、あるいはそれ以上に、文の主題になりやすい。

「～に」のなかで、次に文の主題になりやすいのは、場所を表す「～に」である。次の(21)は、場所の「～に」が主題になっている例である。

(21) 大人二人がすっぽり入るほど大きなその扇型の皮バッグには、競輪選手の商売道具一式が入っている。 (足立倫行『人、旅に暮らす』p. 14)

これらの「～に」とは反対に、文の主題にもっともなりにくいのは、結果の状態を表す「～に」である。「～が」を主題にしないで、結果の状態を表す「～に」のほうを主題にした次の(22)のような文は、ほとんど使われない。

(22) *駐車場には野菜を作っていた畑がなった。

また、「～が～に驚く」のような原因を表す「～に」, 「～が～に着く」のような到着点を表す「～に」, 「～が～に～を渡す」のような相手を表す「～に」も, 次の(23)がやや不自然なように, あまり文の主題にならない。

(23) ?神戸には5時ごろ選手たちが着きます。

6. 「で」格主題文, 「から」格主題文など

ここまでみてきた「～が」, 「～を」, 「～に」以外に, 格成分としては, 「～で」, 「～へ」, 「～と」, 「～から」, 「～まで」などがある。

このうち, 場所を表す「～で」, 「～から」, 「～まで」は, 次の(24)のように, 文の主題になる。

(24) だが, ヨーロッパでは最近, ペアの両方の内側にダイヤを埋め込んだ既成品の結婚指輪が, 一般にも売られるようになってきた。

(『朝日新聞』1992.8.11 朝刊 p.15 「新・くらしウオッチング」)

また, 時を表す「～から」, 「～まで」も, 次の(25)のように, 文の主題になる。

(25) 「三年前まではプロレスラーだったんだ」とちびは言った。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p.190)

ただし, この(25)のように, 時の成分が主題になっているときは, 主格の「～が」がないことが多い。次の(26)のように「～が」があると, その「～が」は排他的な意味になってしまう。そのため, 排他的な意味があってもおかしくない文脈でないと, 不自然になりやすい。

(26) ?三年前までは僕がプロレスラーだったんだ。

一方, 手段や材料を表す「～で」や, 「～へ」, 「～と」は, 次の(27)や(28)が不自然なように, 文の主題にはなりにくい。とくに, (27)の「船」のように, 名詞が不特定のもの場合は, 主題になりにくい。

(27) *船では, 暇がある学生が沖縄に行った。

(28) ?大島とはこのまえ僕がけんかしたよ。

7. 主題になりやすい格成分となりにくい格成分

ここまで, いろいろな格成分について, 文の主題になりやすいかどうかをみてきた。そ

のなかでとくに文の主題になりやすいのは、動作の主体を表す「～が」や、与格主語といわれる、所有や可能の主体を表す「～に」であった。反対に、文の主題になりにくいのは、能力や感情の対象を表す「～が」や、出発点や通過点を表す「～を」、結果や原因を表す「～に」、手段や材料を表す「～で」、それに「～へ」、「～と」であった。それでは、主題になりやすい格成分と主題になりにくい格成分では、何が違うのだろうか。

まず、はじめに考えられるのは、基本語順でのそれぞれの格成分の位置である。つまり、基本語順で前のほうにおかれる格成分は文の主題になりやすく、基本語順で後ろのほうにおかれる格成分は文の主題になりにくいという傾向である。²

これは、次のようなことである。たとえば、「行く」が述語になっている文の基本語順は、次の(29)のようになっていると考えられる。この場合、「～が」が主題になった「～は～へ行く」のほうが実際にもよく使われ、特殊な文脈も必要としないことが多い。それにたいして、「～へ」が主題になった「～へは～が行く」のほうはあまり使われず、特殊な文脈を必要とすることが多い。

(29) ～が ～へ 行く (こと)

では、主題になりやすいかどうか、どうして基本語順と関係しているのだろうか。基本語順は、文の構造の面からみると、それぞれの格成分と述語との結びつきの強さに基づいていると思われる。つまり、述語との結びつきが強いものほど述語の近く、つまり文の後ろのほうにおかれ、述語との結びつきが弱いものほど述語から遠く、つまり文の前のほうにおかれる。

たとえば、次の(30)では、「東京へ」のほうが「沢田が」より「行く (こと)」との結びつきが強いということである。³

(30) 沢田が / 東京へ行った (こと)

² 日本語の基本語順については、佐伯哲夫(1960)、国立国語研究所(1964)、矢澤真人(1992)などが詳しい。

ただし、基本語順の設定がむずかしい場合もある。たとえば、「～が」と場所を表す「～で」ではどちらを前にするかである。雑誌にでてくる文を調べた国立国語研究所(1964)では、「～で」が前のほうが優勢だという結果がでていますが、自然な文を作らせるアンケート調査をおこなった矢澤真人(1992)では、「～が」が前のほうが優勢だという結果がでています。ここでは、「～が」を意志的な動作の主体かどうかで2つに分けることにする。「～が」が意志的な動作を表すときは、次の(a)のように、場所の「～で」より前にくるのが基本であり、「～が」が意志的な動作の主体でないときは、その次の(b)のように、場所の「～で」より後にくるのが基本であると考えます。

(a) ～が (意志的な動作の主体) ～で 意志的な動作を表す動詞
(b) ～で ～が (意志的な動作の主体ではない) できごとを表す動詞

³ これは、「東京へ行く」を「上京する」という動詞一語で言えることからわかる。

そうすると、「沢田が」を主題にした文は、次の(31)のように、前の(30)と語順もかわらず、「行った」と「東京へ」の結びつきが強いままであり、無理なくつくることができる。

(31) 沢田は // 東京へ行った。

それにたいして、「東京へ」を主題にした文は、次の(32)のように、語順もかわり、「東京へ」と「行った」の結びつきがちきられる構造になってしまう。そのため、「東京へ」を主題にしなければならない特別な事情がなければ、「東京へ」を主題にはしにくいのである。

(32) 東京へは // 沢田が行った。

また、一方、基本語順を意味的または認知的な面からみれば、基本語順は、それぞれの格成分の中の名詞を特定の個体としてとらえやすいかどうかと関係があると思われる。つまり、動作の主体を表す「沢田が」のように基本語順で前のほうにくるものは、その中の名詞「沢田」を独立した特定の個体としてとらえやすいことが多い。それにたいし、手段を表す「船で」のように基本語順で後ろのほうにくるものは、「船で」全体が副詞的な成分に近づき、その中の名詞「船」を特定の個体としてとらえにくいことが多い。

文の主題は、ふつう、すでに文脈にでてきているなどして、特定しやすい名詞でなければならない。そのため、特定の個体としてとらえやすい、基本語順で前のほうの格成分のほうが、文の主題になりやすいのである。⁴

8. 格助詞残存型と格助詞消去型

「～が」、「～を」が文の主題になったときは、「～がは」、「～をは」にはならず、どちらもかならず「～は」になる。しかし、「～に」、「～で」、「～へ」が文の主題になったときは、「～には」、「～では」、「～へは」になるほか、「～は」になることもある。ここでは、どんなときに「日本には温泉が多い」のように、「は」の前に格助詞が残る格助詞残存型になり、どんなときに「日本は温泉が多い」のように、「は」の前に格助詞が残らない格助詞消去型になるのかをみていく。

まず気がつくことは、格助詞が残らない格助詞消去型になれるのは、「～に」や「～で」

⁴ 加賀信広(1994)は、文頭で対比の「～は」になれる要素となれない要素を区別するために、その要素が個体(individual)かどうかを問題にしている。

が広い意味で場所を表すときに限られるということである。そのほかの、到着点を表す「～に」や相手を表す「～に」などは、もともと主題になりにくいだが、なったとしても、次の(33)のように「～には」になり、「～は」にはならない。

(33) 永尾「関口には式場で伝える」

(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p. 159)

そこで、「～に」や「～で」が場所を表すときについてみると、次の(34)のように格助詞が残る格助詞残存型になりやすい場合と、その次の(35)のように格助詞が残らない格助詞消去型になりやすい場合がある。

(34) 大阪には漫才ブーム十年周期説がありますね=表。

(『朝日新聞』1992. 10. 24 夕刊 p. 3「甲論乙駁」)

(35) 農業は宗教に似たところがある、といった人がいる。

(『朝日新聞』1980. 7. 15 朝刊 p. 8「村からの報告」)

前の(34)で「大阪には」となるのは、この文が「大阪」がどういうところであるかという「大阪」の性質や特徴を述べているわけではないからである。それにたいして、(35)で「農業は」となるのは、この文が「農業」がどういうものであるかという「農業」の性質や特徴を述べているからである。

主題が「～は」で示される(35)のような文では、「～は」が「に」格のものであるという意識はうすくなっていると考えられる。つまり、次の(36)や(37)の「農業は」のような、性質のもちぬしを表す「が」格に近づいているのである。⁵

(36) 農業は宗教に似ている。

(37) 農業は、宗教に似たところがあるものだ。

ただし、このような差は微妙であり、「日本には温泉が多い。」と「日本は温泉が多い。」のように、格助詞残存型と格助詞消去型のどちらでも言えることも多い。

9. 客体主題文と客体受動化主題文

次の(38)で「この建物」を主題にするとき、2つの方法が考えられる。1つは、「この建物を」をそのまま主題にしてその次の(39)をつくるものである。

⁵ 青木伶子(1992:p. 155)は、(35)のような例について「主語主題としての理解も可能である」と述べている。

(38) 安藤氏がこの建物を設計した(こと)

(39) この建物は安藤氏が設計した。

もう1つは、(38)を次の(40)のような受動文にして「この建物を」を「この建物が」にかえ、その「この建物が」を主題にして、その次の(41)をつくるものである。

(40) この建物が安藤氏によって設計された(こと)

(41) この建物は安藤氏によって設計された。

ここでは、前の(39)のように、「～を」をそのまま主題にした文を「客体主題文」とよび、この(41)のように、受動化によって「～を」を「～が」にかえたうえで、それを主題にした文を「客体受動化主題文」とよぶことにする。⁶

客体主題文と客体受動化主題文の違いは、動作主が明示されている場合と動作主が明示されていない場合にわけて考える必要がある。

はじめに、動作主が明示されている場合をみてみよう。次の(42)は、動作主が「木村教授が」で明示されている客体主題文であり、その次の(43)は、動作主が「木村教授によって」で明示されている客体受動化主題文である。

(42) この化石は木村教授が発見した。

(43) この化石は木村教授によって発見された。

この(42)のような客体主題文と(43)のような客体受動化主題文を比べると、動作主が「～が」で表される客体主題文では、動作主が「ほかの人ではなく木村教授だ」という排他的な意味が感じられるが、動作主が「～によって」で表される客体受動化主題文では、そのような意味はとくに感じられない。

この違いは、動作主を排他的な意味が強い疑問語にすると、さらにはっきりする。客体主題文では、動作主を「だれが」にした次の(44)は自然だが、客体受動化主題文では、動作主を「だれによって」にしたその次の(45)はやや不自然になる。

(44) この化石はだれが発見したの。

(45) ?この化石はだれによって発見されたの。

ただし、同じ内容が客体主題文でも客体受動化主題文でも表せることは、実際には少ない。たとえば、次の(46)と(47)では、客体主題文の(46)は自然だが、客体受動化主題文の

⁶ 「客体主題文」は寺村秀夫(1982:p. 241)の用語である。寺村秀夫(1982:p. 240-p. 241)は、客体主題文と直接受動文の違いについてもふれている。

(47)は、不自然である。

(46) そのパンは私が食べた。

(47) *そのパンは私に食べられた。

次に、動作主が明示されていない場合をみてみよう。次の(48)は、動作主が明示されていない客体主題文であり、その次の(49)は、動作主が明示されていない客体受動化主題文である。

(48) この建物は5年ほど前に建てた。

(49) この建物は5年ほど前に建てられた。

(48)のような客体主題文では、動作主は特定のもの(たとえば、「私」)である。そして、その動作主は文脈などからわかるため省略されているのである。それにたいして、(49)のような客体受動化主題文では、動作主は不特定であったり、言う必要がないと考えられているものである。

このような違いがでてくるのは、次のような事情による。前の(48)では、動作主を表したいときは「～が」が使われるはずである。「～が」は述語にとって必須の成分である。そのため、わからないからとか言う必要がないからといって言わないですませるわけにはいかない。(48)のように動作主を表す「～が」を言わない場合は、言わなくても聞き手にわかるから言わないのだと解釈される。それにたいして、(49)では、動作主を表したいときは、「～によって」が使われるはずである。「～によって」は述語によって必須の成分ではない。そのため、動作主がわからないとか、言う必要がないときは言わないですませることができる。したがって、(49)のように動作主を表す「～によって」を言わない場合は、動作主が不特定だとか、言う必要がないと解釈されるのである。

10. 格成分主題文の周辺

この節の最後に、格成分主題文のなかでやや特殊なものについてふれておきたい。「姉はケーキに目がない。」のような、慣用句を含む文と、「p p mとは百万分の一の割合を表す単位である。」のような、格成分に単純に「は」がついたのではない文である。

1) 「姉はケーキに目がない」型

「目がない」のような慣用句では、「目が」と「ない」の結びつきが強いため、「目が」は独立した格成分ではなくなり、「目がない」全体がひとつの述語のようにになっている。そこで、「目がない」という述語が「姉が」と「ケーキに」という格成分をとると考える

ことにする。そうすると、「姉がケーキに目がない(こと)」の「姉が」が主題になって、「姉はケーキに目がない。」という文ができることになる。

次の(50)は、「気がする」という慣用句がとる「私が」という格成分が主題になっている例である。

(50) 私は彼女のその時の孤独感がよくわかるような気がした。

(野々山真輝帆『スペイン内戦』p.196)

なお、慣用句の内部にある「目が」などは、独立した格成分ではなくなっているため、次の(51)のようにそれを主題にすることはできない。

(51) *目は姉がケーキにない。

2) 「ppmとは百万分の一の割合を表す単位である」型

「ppmとは百万分の一の割合を表す単位である。」の「ppmとは」は、「ppmと」や「ppmとが」に主題の「は」がついたものではなく、「ppmというのが」に「は」がついたものだと考えられる。

逆にいうと、「~というのが」や「~というものが」、「~ということが」が主題になると、「~というのは」などになるほか、「~とは」になることもあるということである。「~とは」を使うと、「~というのは」などより硬い文体になる。⁷

同じように、次の(52)の「運転するには」も「運転するに」に主題の「は」がついたものではなく、「運転するのに」(または「運転するために」)に「は」がついたものである。逆にいうと、目的を表す「~のに」が主題になると、「~のには」のほか、「~には」にもなるのである。

(52) 正規に観光タクシーを運転するには, 神戸観光タクシー協議会などが認定するライセンスが必要で, 講習や実習で四十時間学んだ後, テストを受ける。

(『朝日新聞』1992.3.13 朝刊 p.24 「レポートひょうご」)

また、次の(53)の「最近では」や、「あしたにはできあがる。」の「あしたには」は、それぞれ「最近で」、「あしたに」に「は」がついたものとはいえない。これらは、「では」、「には」という融合した形とみなしなければならない。

(53) 最近では, 五月にスペースシャトルが通信衛星インテルサットの回収に成功した際, 鐘が二度打ち鳴らされた。 (『AERA』1992.7.7 p.65)

⁷ このような「~とは」については、青木伶子(1992:第二章第一節5)が詳しい。

「最近」や「あした」にそのまま「は」をつけた「最近は」や「あしたは」では、幅のある時間を表すことになる。そのため、「最近」や「あした」の中の一時点を表したいときは、このように「最近では」や「あしたには」を使うのである。

11. 格成分主題文のまとめ

格成分主題文について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 格成分主題文の構造

格成分主題文は、次の(54)のような格関係から、「父」の部分が主題になって、(55)のような文になったと考えられる。

(54) 父が この本を 買ってくれた (こと)

主題

(55) 父は この本を 買ってくれた。

2) どんな格成分が主題になりやすいか

基本語順で前のほうにあるものほど主題になりやすく、後ろのほうにあるものほど主題になりにくい傾向がある。

(56) ● に ◎ が ある (こと)

(57) ● が ◎ を ○ に 変える (こと)

| |

主題になりやすい ←————→ 主題になりにくい

第2節 格成分連体部主題文

1. はじめに

「～は」という主題をもつ顕題文のなかで、前の第1節でとりあげた格成分主題文の次によく使われるのは、「象は鼻が長い。」や「この車は値段が高い。」のような、格成分の連体修飾部が主題になっている文である。

この節でとりあげる「象は鼻が長い。」のような文は、「象は」の部分も主語のようであり、「鼻が」の部分も主語のようである不思議な文として、古くから関心をあつめてきた。

このタイプの文がそれほど特殊なものではなく、格成分の連体修飾部が主題になった文だと考えられるようになったのは、三上章(1960)からである。三上は、「象は鼻が長い。」という文は、「象の鼻が長い(こと)」という格関係の中の「象の」が主題になった文だという内容の提案をおこなった。「～の」も、「～が」や「～を」と同じように、文の主題になると考えたのである。

この節では、格成分の連体修飾部が主題になっている文をとりあげ、その構造や機能をさぐっていく。

2. 格成分連体部主題文の種類

格成分連体部主題文としては、次の(1)のような例があげられる。

- (1) わが国で栽培されるトマトは、ホルモン剤を利用することを前提に栽培管理技術ができています。 (『現代農業』1992. 11 p. 227)

(1)は、「わが国で栽培されるトマトの栽培管理技術が」の「わが国で栽培されるトマトの」が主題になった文である。⁸

⁸ ただし、文の主題になるのは基本的に名詞なので、正確にいうと、(1)で主題になっているのは、「わが国で栽培されるトマト」である。

格成分連体部主題文は、この(1)のように、「が」格成分の連体修飾部が主題になっているものが多い。しかし、次の(2)や(3)のように、「を」格成分や「に」格成分などの連体修飾部が主題になっているものもある。

- (2) ベッドでの喫煙写真が週刊誌に掲載されたアイドル女優高部知子の主演を予定していた東宝映画「積み木くずし」(穂積隆信原作, 斎藤光正監督)は、二十四日、高部が出演を辞退したことから製作を延期することになった。

(『毎日新聞』1983.6.25 朝刊 p.22)

- (3) 野菜は栽培に手間がかかる。 (『日本経済新聞』1987.8.2 朝刊 p.21)

(2)は、「積み木くずし」の製作を」という「を」格成分の連体修飾部「積み木くずし」の」が主題になったものである。(3)は、「野菜の栽培に」という「に」格成分の連体修飾部「野菜の」が主題になったものである。

さらに、次の(4)のような「～には～に……。」の形の文や、「～では～で……。」の形の文も、格成分連体部主題文の一種だと考えられる。

- (4) しかし、独仏両国には、国籍についての伝統的な考え方に、大きな違いもある。

(『朝日新聞』1993.6.21 夕刊 p.7 加藤周一「夕陽妄語」)

(4)は「独仏両国の国籍についての伝統的な考え方に大きな違いもある(こと)」の「独仏両国の」が主題になったものだと考えられる。

3. 格成分連体部主題文の構造

格成分連体部主題文の構造については、次の(5)をもとにする考えかたと、(6)をもとにする考えかたの2つがある。

- (5) 象の鼻が長い(こと)

主題

- (6) 象が鼻が長い(こと)

主題

前の(5)は、「象の」に「は」がつき、文頭におかれて、「象は鼻が長い。」になるという考えである。三上章(1960)に代表されるもので、「の」基底説」とよぶことにする。一方、(6)は、「象が」に「は」がつき、文頭におかれて、「象は鼻が長い。」になるという考えである。北原保雄(1981)に代表されるもので、「が」基底説」とよぶことにする。

この2つの考えには、それぞれ長所と短所がある。(5)の「の」基底説の長所は、事実

関係としての意味を正確にとらえられることである。たとえば、この(5)と、「象の鼻は長い。」の構造である次の(7)を比べると、「象は鼻が長い。」と「象の鼻は長い。」は、主題が違うだけで、事実関係は同じだということがすぐわかる。「が」基底説では、このようなことは説明できない。

(7) 象の鼻が長い (こと)

主題

一方、(6)の「が」基底説の長所は、次の(8)のような従属節の「～が～が……」などの形について、説明しやすいことである。

(8) さきに提案した大型間接税導入、マル優(少額貯蓄非課税制度)廃止問題に絞った与野党の政調・政審会長の公開討論が実現のメドが立っていない現状から、中曽根政治全般にわたるテーマでの党首間討論を改めて提唱した。

(『朝日新聞』1986.6.23 朝刊 p.1)

「が」基底説では、(8)の従属節の中の「～が～が……」という形は、もともになっている次の(9)の「～が～が……」がそのまま現れたものだと説明できる。しかし、(5)の「の」基底説では、この形は簡単には説明できない。

(9) 政調・政審会長の公開討論が実現のメドが立っていない (こと)

このような2つの考えの長所だけをいかすためには、次の(10)から(12)にいたる途中で、(11)の段階を通ると考えるのがいい。⁹

(10) 象の鼻が長い (こと)

主題

(11) 象が鼻が長い (こと)

主題

(12) 象は鼻が長い。

このとき(11)で「象の」が「象が」になるのは、「象の鼻が」の「が」のためである。「象の鼻が」という1つの連用成分が2つの連用成分にわかれて「象が」と「鼻が」になるのである。前にみた(3)や(4)のように、「～の～に」であれば、「～に」と「～に」にわかれる。そして、前のほうの「～に」が主題になると、(3)のような「～は～に……。」という形の文か、(4)のような「～には～に……。」という形の文になるのである。

⁹ 杉本武(1990:4.)は、述語連体部主題文なども含めて、この方法をとっている。

4. 格成分連体部主題文の機能

格成分連体部主題文の格関係のレベルの構造は、次の(13)のようなものである。これは、「象の鼻が」と「長い」という2つの成分からできている。

(13) 象の鼻が / 長い (こと)

この(13)のような構造から主題をもつ文をつくるとすると、「象の鼻」を主題にして、次の(14)のような文にするのがいちばん自然なはずである。こうすれば、大きく、「象の鼻は」と「長い」の部分にわかれるからである。

(14) 象の鼻は // 長い。

この(14)にたいして、「象は鼻が長い。」という文は、次の(15)のように、格関係のレベルの(13)とは大きく違った構造をもっている。これは、格関係の(13)とくらべると、「象」の部分が独立している。また、その結果として、「鼻が」の部分と「長い」の部分のつながりが強くなっている。

(15) 象は // 鼻が長い。

このように、格関係の構造を無理に大きくかえてまで格成分連体部主題文をつくるのは、「象の鼻」ではなく「象」についての叙述をしたいからであり、また「鼻が長い」という叙述をしたいからである。

たとえば、次の(16)の文章は「ある青年」について述べているものである。そのため、第2文でも「その四年生の青年」について「百合と小学校が同じだった」ことを述べたいので、「その四年生の青年」が主題になっている。

(16) 一年生の冬に、ある青年と大学の購買部で出会った。その四年生の青年は百合と小学校が同じだった。青年の方が百合の顔を見憶えてくれた。

(津島佑子『火の河のほとりで』p. 11)

この第2文を、次の(17)のように、「その四年生の青年の小学校」を主題にした文にすると、(16)にくらべて、つながりが悪い文章になってしまう。

(17) 一年生の冬に、ある青年と大学の購買部で出会った。その四年生の青年の小学校は百合と同じだった。青年の方が百合の顔を見憶えてくれた。

このようなことは、複文の従属節と主文のあいだでもよくみられる。たとえば、次の(18)と(19)を1つの文にすることを考えてみる。

(18) 古代中国や朝鮮でもこのような意匠の後輪の出土例がない (こと)

- (19) このような意匠の後輪が美術工芸史上、極めて貴重な国宝級の遺品である（こと）

この(18)と(19)を1つの文にすると、前の(18)を格成分連体部主題文にして、次の(20)のようにすれば、従属節の主題も主文の主題も同じ「このような意匠の後輪」になり、自然な文になる。

- (20) このような意匠の後輪は古代中国や朝鮮でも出土例がなく、美術工芸史上、極めて貴重な国宝級の遺品。 (『毎日新聞』1985.12.3 朝刊 p.1)

一般に、複文の中の従属節と主文の結びつきは、文と文の結びつきより強いので、複文の中では主題の統一がよくおこなわれる。そのため、格成分連体部主題文は、実際には、複文の中で使われることが多くなる。

5. 格成分連体部主題文の解釈

西山佑司(1989)は、格成分連体部主題文について、次の(21)と(22)の2つの解釈が可能であることを強調する。

- (21) 象はどこが長いか、というそれは（首ではなく、しっぽでもなく）鼻だ。

- (22) 象は、「鼻が長い」という属性を有している。

しかし、実際には、格成分連体部主題文は、特別な条件がないかぎり、(22)のような解釈になると考えられる。

(21)のような解釈ができるのは、比較を表すことがあきらかな文に限られる。つまり、「～のほうが……。」や「～がいちばん……。」のような形の文か、次の(23)のように述語が「大事」、「最高」などになっている文である。

- (23) 骨粗鬆症は予防が大事です。

(『朝日新聞』1990.8.5 朝刊 日曜版 p.7「みんなの健康」)

(23)は、「予防」と「早期発見」などを比べ、「骨粗鬆症で大事なものは、早期発見などではなく、予防だ」と言っていると解釈される。

6. 格成分連体部主題文の述語の性質

格成分連体部主題文の述語、つまり「象は鼻が長い。」の「長い」の部分は、典型的に

は、性質や状態を表すものである。¹⁰

したがって、述語は次の(24)の「短い」のような形容詞であるのが、もっとも典型的である。

- (24) 森末 そうですね。やっぱり、日本人は手が短いですからね、足も短いですから、あん馬いうのなんかやっぱり日本人は苦手なほうですね。

(桂枝雀(他)『桂枝雀おもしろ対談Ⅱ』p.193)

形容詞でなくても、次の(25)の「荒れている」のような性質や状態を表す動詞や、その次の(26)の「297m」のような数量や性質を表す名詞は、形容詞に準じて考えることができる。

- (25) 仙台の県営球場はグラウンドが荒れている。

(『朝日新聞』1981.6.10 朝刊 p.17「スポット」)

- (26) 大橋のシンボルともいえる主塔は高さが海面から297m。

(『朝日新聞』1992.2.28 夕刊 p.9)

しかし、述語は性質や状態を表すものに限られるわけではない。次の(27)のように、述語が1回だけの動作やできごとを表す動詞である例も、かなりみられるからである。¹¹

- (27) 敦賀市明神町、動力炉・核燃料開発事業団の新型転換炉原型炉原発「ふげん」(出力十六万五千キロワット)は二十三日午後五時四十一分、蒸気ドラムの水位上昇で原子炉が自動停止した。

(『朝日新聞』1980.7.24 朝刊 p.3)

また、「～の～が……」の「～の」だけでなく、「～の～を……」の「～の」が主題になった文まで含めると、述語が性質や状態を表さない例がさらに多くなる。たとえば、次の(28)は「普通車の車内設備を」の「普通車の」が主題になった例であるが、述語は1回かぎりの動作を表している。

- (28) 普通車は、腰掛を主体として車内設備を変更した。

(『鉄道ジャーナル』1992.4 p.99)

このように、格成分連体部主題文の述語は、たしかに性質や状態を表すもののことが多いが、かならず性質や状態を表すものだとはいえない。

格成分連体部主題文の述語が性質や状態を表すことが多いのは、次のような事情による

¹⁰ 三上章(1960:p.52)をはじめ、多くの研究で指摘されている。

¹¹ このような例を積極的にとりあげているものとしては、益岡隆志(1987:第1部第3章)がある。

と考えられる。たとえば、動作を表す次の(29)で「私」を主題にしたいとすると、その次の(30)のような、格成分連体部主題文より、その次の(31)のような、間接受動文が優先的に使われる。

(29) 久美ちゃんが私の背中をたたいた (こと)

(30) *私は久美ちゃんが背中をたたいた。

(31) 私は久美ちゃんに背中をたたかれた。

このように、述語が動作やできごとの場合は、間接受動文など別の構文が使われることが多いために、格成分連体部主題文は使われることが少なくなる。それにたいして、性質や状態を表す形容詞などの場合は、受動文などにはできないため、格成分連体部主題文が使われる。その結果、格成分連体部主題文の述語は性質や状態を表すことが多くなるのである。

7. 格成分連体部主題文の主格名詞の性質

格成分連体部主題文の「鼻」の部分の名詞は、「象」の部分の名詞と、「象の鼻」のように、「の」でつながる関係にある。「の」でつながる関係のなかでも、次の(32)のように、「天井」が「植物温室」の「部分」になっているものと、「やぎは性質がおとなしい。」のように、「性質」が「やぎ」の「側面」になっているものが、高橋太郎(1975)などで指摘され、広く知られている。

(32) 吉里吉里国立病院地下三階の〈植物温室〉は、天井が高かった。

(井上ひさし『吉里吉里人』p. 579)

しかし、実際には、「～が」の名詞が「～は」の名詞の「部分」や「側面」になっているとはいいいにくい場合も多い。たとえば次の(33)では、「税引き後利益」が「田辺製薬」の部分や側面とはいいいにくい。

(33) スモン負担が長らく重荷となっていた田辺製薬は四日発表した十月中間決算で税引き後利益が患者への和解金支払いを開始した五十四年四月期以来、三年ぶりに黒字転換した。

(『毎日新聞』1981.12.5 朝刊 p. 8)

また、次の(34)の「立証」やその次の(35)の「進出」のような動作名詞も、部分や側面とはいいいにくい。

(34) これまで保険の水増し請求は立証が難しく、摘発されるケースはごくまれ。

(『朝日新聞』1981.7.16 夕刊 p. 1)

(35) 経済発展の目ざましいスペイン, 外資導入で経済発展のきっかけをつかみつつあるアイルランドなどに比べてギリシャは, 外国企業の進出が遅れている。

(『朝日新聞』1992. 3. 2 朝刊 p. 9 「ブロック化する世界経済」)

(34)の「(検察の)水増し請求の立証」は「(検察が)水増し請求を立証する」ということであり、「水増し請求」が「立証」の対象になっている。(35)の「外国企業のギリシャへの進出」は「外国企業がギリシャに進出する」ということであり、「ギリシャ」が「進出」の到着点になっている。

このように、「鼻」の部分に使われる名詞はいろいろであるが、ほとんどは、かならず「～の」で修飾される種類の名詞である。たとえば、(32)で使われた「天井」はかならず「なにかの天井」であり、(34)で使われた「立証」はかならず「なにかの立証」なのである。¹²

このように、「鼻」の部分に「帰属性」の名詞が使われることが多いのは、格成分連体部主題文では「象」と「鼻」を結ぶ「の」が表面に現れないため、「帰属性」の名詞を使わないと、「鼻」が「象」に結びつくことが理解されにくいからである。

8. 格成分連体部主題文の主題名詞の性質

格成分連体部主題文の主題である「象」の部分にはいろいろな名詞が使われるが、使われない名詞もすこしある。その代表は、次の(36)の「とれたて(の)」や、「生(の)」¹³、「黄色(の)」¹⁴、「日本製(の)」のような、性質や状態を表す形容詞的な名詞である。このような名詞は、名詞としての性質が弱いため、その次の(37)のように、主題になれないのである。

(36) とれたてのイカが透明である (こと)

(37) *とれたてはイカが透明だ。

そのほかの名詞は、基本的に格成分連体部主題文の主題になる可能性をもっている。ただし、「鼻が長い」の部分が「象」の部分についての叙述になるのでなければ、格成分連

¹² この種の名詞は、寺村秀夫(1983a)が、「地図をたよりに、……」のような「付帯状況」表現の「たよりの」部分の名詞の制限を述べるときに「帰属性」の名詞とよんでいるものと同じである。また、西山佑司(1990)が、述語連体部主題文の「本場」の部分の制限を述べるときに「非飽和名詞句」とよんでいるものと同じである。また、天野みどり(1992)は、格成分連体部主題文の「鼻」の部分の制限を述べるときに、この種の名詞を「前向きの『連結』部分がついている名詞」とよんでいる。

体部主題文はなりたたない。¹³

たとえば、次の(38)は「外国の評価が高い」が「わが国の通産政策」についての叙述になるので、なりたつ。だが、その次の(39)は「わが国の通産政策の評価が高い」が「外国」についての叙述にならないので、なりたたない。

(38) わが国の通産政策は外国の評価が高い。

(『朝日新聞』1980.8.30 朝刊 p.4 「行政革命 補助金と政権党」)

(39) *外国はわが国の通産政策の評価が高い。

9. 格成分連体部主題文の周辺

この節の最後に、格成分連体部主題文のなかでも特殊なものや、格成分連体部主題文と関連がある文についてふれておく。

1) 「参加者はほとんどが女性だった」型

「参加者はほとんどが女性だった。」のように、「～が」の部分に割合を表す名詞が入っている文は、「参加者のほとんどが女性だった(こと)」の「参加者」が主題になったもので、格成分連体部主題文の一種だと考えられる。しかし、典型的な格成分連体部主題文とは違う点も多い。

たとえば、「参加者はほとんどが女性だった。」という文では、典型的な格成分連体部主題文と違って、「ほとんど」は「参加者」の部分や側面とはいいいにくいものであり、述語も形容詞ではない。また、次の(40)のように、次の第3節でとりあげる述語連体部主題文にかえてもなりたつたり、その次の(41)のように、「ほとんどが」を「ほとんど」という副詞的な成分にかえてもなりたつことがある点でも、特殊である。

(40) 参加者は女性がほとんどだった。

(41) 参加者はほとんど女性だった。

この型のものとしては、次の(42)のような例があげられる。

(42) 午前九時の開場と同時に、四つのゲートからなだれ込むように入場した観客は半数以上が子ども連れ(同協会)。 (『朝日新聞』1985.5.6 朝刊 p.23)

2) 「彼は頭がいい」型

¹³ これについては、菊地康人(1990)が「主題についての述部の<情報度>」という観点から詳しく考察している。

「彼は頭がいい。」のような文は、「彼の頭がいい（こと）」の「彼」が主題になった格成分連体部主題文と考えることもできる。しかし、「頭がいい」が慣用句として強く結合して一つの述語になっていると考えれば、「頭がいい」という述語がとる主格の「彼が」が主題になって「彼は」になった、一種の格成分主題文だと考えることもできる。

ただ、一口に慣用句といっても、慣用句としての結合の強さにはいろいろな段階がある。たとえば、「評判がいい」は、「新曲は評判がいい。」のような文のほか、「新曲の評判はいい。」のような文も不自然さがないので、結合の強さは弱いといえる。反対に、「気が強い」は、「あいつは気が強い。」のような文になるだけで、「*あいつの気は強い。」にはならないので、結合の強さは強いといえる。「影が薄い」は、次の(43)のように「～は影が薄い。」と使うのがふつうであるが、その次の(44)のように「～の影は薄い。」と使われることもあるので、「評判がいい」と「気が強い」の中間にあると考えられる。

- (43) ところが自由貿易主義のトリデともいうべきガットは、一昨年の東京ラウンド(多角的貿易交渉)妥結後、どうも影が薄い。

(『朝日新聞』1981.7.5 朝刊 p.5「社説」)

- (44) 最近の大相撲で、学生相撲出身者の影は薄い。

(『朝日新聞』1987.3.17 朝刊 p.19「東西トーザイ」)

このように、慣用句を含む文には、格成分連体部主題文に近いものから、格成分主題文に近いものまで、あるのである。

3) 「東京は神田の生まれだ」型

「東京は神田の生まれだ。」のような文は、格関係としては「東京の神田の生まれ(であること)」と考えるのがいちばん自然である。そうすると、この文は「東京の」という連体修飾部が主題になった格成分連体部主題文だと考えたくなるかもしれない。

しかし、この種の文は、格成分連体部主題文とは考えない。それは、青木伶子(1992:第二章第一節6)が指摘するように、「東京」が文の主題になっていないからである。この文は、格成分連体部主題文とは違って、「東京」について「神田の生まれだ」ということを述べていない。

この型の文の「～は」は、ふつう、名詞を修飾する節の中にあり、文末までかかっていない構造になっている。次の(45)でも「港区は」は、「高級スーパー」を修飾する「港区は広尾にある」という節の中にある。

- (45) こういう“おしゃれな映画”に似合う場所はどこかと見ていたら、グルメの高

橋幸宏がフランス料理の材料を買いに行くところは、港区は広尾にある高級スーパー、明治屋。 (川本三郎『雑踏の社会学』p.143)

このような「は」は、文の口調を整えるだけといってもいいような、かなり特殊なものであり、限られた文体の文章にしかでてこない。

10. 格成分連体部主題文のまとめ

格成分連体部主題文について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 格成分連体部主題文の構造

次の(46)のような格関係から、「象」の部分が主題になって、(47)のような文になったと考えられる。

(46) 象の 鼻が 長い (こと)

主題

(47) 象は 鼻が 長い。

—— 典型的には、形容詞など性質や状態を表すもの

—— 典型的には、部分や側面を表す名詞や、動作名詞

—— 名詞らしい名詞（「とれたて」, 「^{なま}生」などはだめ）

2) 格成分連体部主題文の機能

この構文は、次の(48)のような働きをする。

(48) 象は 鼻が 長い。

—— 典型的には、「象」の性質や属性を述べる

—— 前後の文の主題などにあわせて選ばれた主題

第3節 述語連体部主題文

1. はじめに

「かき料理は広島が本場だ。」のような文は、表面的には、前の第2節でみた格成分連体部主題文と同じく、「～は～が……。」という形をしている。

しかし、その構造は格成分連体部主題文とは違う。格成分連体部主題文は、「象の鼻が長い（こと）」という格関係をもっていたのにたいして、「かき料理は広島が本場だ。」のような文は、「広島がかき料理の本場（であること）」のような格関係をもっている。つまり、「象」は、主格名詞の「鼻」と「の」で結びつく関係にあったのにたいして、「かき料理」は、述語名詞の「本場」と「の」で結びつく関係にあるのである。

こうした述語連体部主題文は、格成分連体部主題文にくらべると、使われる頻度が低いこともあって、野田尚史(1982)や西山佑司(1990)、菊地康人(1997a)などをのぞいて、あまり研究されていない。

この節では、格成分連体部主題文とはいろいろな点で違う性質をもっている述語連体部主題文について、その構造や機能、格成分連体部主題文との違いなどをみていく。

2. 述語連体部主題文の構造

述語連体部主題文は、次の(1)のような格関係がもとになっていると考えることができる。

- (1) 広島がかき料理の本場（であること）

主 題

(1)で「かき料理」が主題に指定されると、「かき料理の」に「は」がつき、それが文頭におかれて、「かき料理は広島が本場だ。」になると考えられる。

それにたいして、(1)ではなく次の(2)がもとになっていると考えることもできるかも

しれない。

(2) かき料理の本場が広島 (であること)

主 題

しかし、この(2)から「かき料理は広島が本場だ。」を導き出すためには、「かき料理の」に「は」をつけて文頭におくだけでなく、「本場」と「広島」を入れかえるという不自然な操作もしなければならなくなる。したがって、「かき料理は広島が本場だ。」は、前の(1)がもとになっていると考えるのが適当である。

ところで、格成分連体部主題文の場合は、「象の鼻が長い(こと)」から「象は鼻が長い。」になる途中、「象が鼻が長い(こと)」という段階を通ると考えた。述語連体部主題文の場合も、次の(3)のような段階を通ると考えるほうがよいのだろうか。

(3) かき料理が広島が本場 (であること)

格成分連体部主題文の場合、「～が～が……(こと)」という途中の段階を通ると考えたのは、従属節の中で「象が鼻が長いことは……」のように、「～が～が……」の形になることがあるからだ。述語連体部主題文の場合、「?かき料理が広島が本場であることは……」のような「～が～が……」の形にはなりにくく、「広島がかき料理の本場であることは……」や「かき料理の本場が広島であることは……」という形になってしまう。つまり、「かき料理が広島が本場(であること)」という形は、非常に不安定な形なのである。

このようなことを考えると、述語連体部主題文の場合は、格成分連体部主題文とは違い、「かき料理が広島が本場(であること)」という途中の段階を通ると考える必要はとくにないということになる。

なお、述語連体部主題文では、格成分連体部主題文と違って、「～が」の部分が「～を」や「～に」になることはない。

3. 述語連体部主題文の機能

述語連体部主題文は、格関係のレベルでは、次の(4)のように、「広島が」と「かき料理の本場である」の2つの成分からできている。

(4) 広島が / かき料理の本場 (であること)

このような構造から主題をもった文をつくるとすると、「広島」を主題にして、次の(5)のような文にするか、「かき料理の本場」を主題にして、その次の(6)のような文にするのがいちばん自然なはずである。

(5) 広島は // かき料理の本場だ。

(6) かき料理の本場は // 広島だ。

これらの文では、格関係のレベルと同じように、「かき料理の」と「本場」は離れることなく結びついている。

これにたいして、「かき料理は広島が本場だ。」という文は、次の(7)のように、格関係のレベルの(4)とは違って、「かき料理」と「本場」が離れてしまう。

(7) かき料理は // 広島が本場だ。

格成分連体部主題文の場合は、「象(は)」と「鼻(が)」が隣接することが多かったが、述語連体部主題文では、「かき料理(は)」と「本場(だ)」は隣接することがない。その意味で、述語連体部主題文は、格成分連体部主題文よりも、さらに格関係の構造との隔たりが大きい文だといえる。

このように格関係の構造を大きくかえてまで、この構文をつくるのは、「かき料理」についての叙述をしたいからである。たとえば、次の(8)の文章は「大阪ブルーノート」について書かれた新聞記事の一部である。そのため、この最初の文も「大阪ブルーノート」を主題にした文にする必要があり、述語連体部主題文になっているのである。

(8) 大阪・キタのジャズクラブ「大阪ブルーノート」は、大物の外人ミュージシャンがほぼ毎週出演するのが売り物だ。関西には今まで無かったタイプの店。

(『朝日新聞』1992. 3. 15 朝刊 p. 26 「遊び場最前線」)

このようなことは、複文の中でもよくみられる。従属節の主題と主文の主題をそろえるために、次の(9)の「モンゴル相撲は投げ技が中心」のように、述語連体部主題文が使われることがよくある。

(9) モンゴル相撲は日本の相撲に似ているが、土俵がないため押し出し、寄り切りはなく、投げ技が中心。(『朝日新聞』1992. 5. 5 朝刊 p. 24 「スポーツいま」)

4. 述語連体部主題文の解釈

前の第2節の5. で、格成分連体部主題文について、西山佑司(1989)が次の(10)と(11)の2つの解釈をあたえていることを述べた。そして、実際には、この2つのうち、(11)の解釈がふつうであることを述べた。

(10) 象はどこが長いか、というそれは(首ではなく、しっぽでもなく)鼻だ。

(11) 象は、「鼻が長い」という属性を有している。

同じように考えれば、述語連体部主題文についても、次の(12)と(13)の2つの解釈を可能性として考えることができるだろう。

(12) かき料理はどこが本場か、というそれは（仙台ではなく、浜松でもなく）広島だ。

(13) かき料理は、「広島が本場だ」という属性を有している。

しかし、実際には、この2つの解釈のうち、(12)の解釈がふつうである。これは、格成分連体部主題文と対照的である。

(10)や(12)の解釈の場合は、「～が」の部分がいちばん主張したい部分であるため、次の(14)や(15)のような文とよく似た意味になる。

(14) ?象が長いのは鼻だ。

(15) かき料理の本場は広島だ。

格成分連体部主題文の場合は、(10)の解釈になりにくいので、(14)は不自然になるが、述語連体部主題文の場合は、(12)の解釈になるので、(15)がほぼ同じ意味の文としてなりたつ。

5. 「本場」の部分の種類

述語連体部主題文では、格成分連体部主題文とは違って、述語はかならず「本場だ」のような名詞述語になる。

しかし、どんな名詞でもこの構文の述語になれるわけではない。そこで、この構文の述語に使われる代表的・典型的な名詞をあげていくことにする。¹⁴

ここでは、そのような名詞を、大きく、次の6種類、つまり、1)「特徴」類、2)「中心」類、3)「原因」類、4)「目的」類、5)「基盤」類、6)「限度」類にわけ、順に例文とともに示す。

1) 「特徴」類

これは、「特徴」、「特色」をはじめ、「とりえ」、「欠点」や、「特技」、「自慢」といった、人やものの特徴を表す名詞の類である。

次の(16)は、述語名詞に「特徴」が使われた例である。

(16) 輸入攻勢もあるが、消しゴムはほかの商品と違い、国産品が圧倒的に強いのが

¹⁴ この構文の述語に使われる名詞の詳しいリストは、菊地康人(1997a)に示されている。

特徴だ。

(『朝日新聞』1988.4.8 朝刊 p.21「暮らし再考」)

2) 「中心」類

これは、「中心」、「主流」をはじめ、「代表」、「主役」や、「本場」、「主産地」、そして「標準」、「定説」といった名詞の類である。数量を表す「ほとんど」、「大半」や、時期を表す「最盛期」、「旬」なども同じ種類のものとする。これらはどれも、なんらかの意味で、ものごとの中心や代表を表す名詞である。

次の(17)は、述語名詞に「主体」が使われた例である。

(17) 経営は、冬の本土出荷インゲンが主体ね。 (『現代農業』1992.11 p.80)

3) 「原因」類

これは、「原因」、「きっかけ」をはじめ、「発端」、「動機」など、広い意味で原因を表す名詞の類である。

次の(18)は、述語名詞に「原因」が使われた例である。

(18) 雷の発生は、雲の中に電気が蓄えられることが原因である。

(高木隆司『かたちの不思議』p.142)

4) 「目的」類

これは、「目的」や「ねらい」、「目標」など、広い意味で目的を表す名詞の類である。

次の(19)は、述語名詞に「目的」が使われた例である。

(19) コイの実験は宇宙酔いの原因解明が目的。

(『毎日新聞』1992.9.18 夕刊 p.14)

5) 「基盤」類

これは、ものごとの成立にとって重要な側面を表す、「基盤」、「前提」、「条件」、「根拠」、「決め手」などの名詞の類である。

次の(20)は、述語名詞に「財産」が使われた例である。

(20) 商社は人が財産。 (『朝日新聞』1991.12.6 朝刊 p.11「'91経済事件簿」)

6) 「限度」類

これは、「限度」、「上限」をはじめ、「最初」、「最後」、「初日」、「潮どき」など、ものごとのおよぶ範囲の限界を表す名詞の類である。

次の(21)は、述語名詞として「採算ライン」が使われた例である。

(21) 給食業界によると、コメの仕入れ値は平均一畝当たり三百五十四百円が採算ラインだが、前年に比べて二割ほど上がった、という。

『朝日新聞』1992.12.12 夕刊 p.15)

6. 「本場」の部分の性質

前の5.では、述語連体部主題文の述語に使われる名詞をあげた。こうした名詞の特徴をひとことでいえば、主題になっている名詞（つまり「かき料理」の部分）にとって重要な側面を表すものということになる。

したがって、そのような性質をもたない名詞、たとえば「冷蔵庫」、「足」、「孫」、「一部」、「目的の一つ」などは、この構文の述語としては使われない。

例として、次の(22)を述語連体部主題文にかえた、その次の(23)をみよ。 (23)が言えないのは、述語名詞の「説明」が、「ボルボ」にとって重要な側面を表すものではないからである。

- (22) 速度に関係なく一定の回転数でタービンを回し続けるので効率的な燃焼が可能になり、運転中に回転数が上下する通常のエンジンに比べ、排ガスを低レベルに抑えることができる、というのがボルボの説明だ。

（『朝日新聞』1993.1.7 夕刊 p.3）

- (23) *ボルボは、速度に関係なく一定の回転数でタービンを回し続けるので効率的な燃焼が可能になり、運転中に回転数が上下する通常のエンジンに比べ、排ガスを低レベルに抑えることができる、というのが説明だ。

同じように、次の(24)を述語連体部主題文にかえた、その次の(25)も、ふつう述語名詞の「だし」が「鍋」にとって重要な側面とはみなされにくいので、なりたたない。

- (24) 鍋のだしは鶏がらスープ。 （『あまから手帖』1992.12 p.12）

- (25) *鍋は鶏がらスープがだし。

このような野田尚史(1982)の指摘にたいして、西山裕司(1990)は、「本場」の部分の名詞の制約として、「主題である名詞にとって重要な一側面を表すもの」という制約をしりぞけ、かわりに「非飽和名詞句」であるという制約をあげている。「非飽和名詞句」というのは、簡単にいうと、かならず「～の」のような修飾部分を必要とする名詞のことであり、寺村秀夫(1983)の「帰属性」の名詞に相当するものである。

たしかに、述語連体部主題文に使われる述語名詞は、「かき料理」の部分にとって重要な側面を表すものであることからして、非飽和名詞句であることが必要である。しかし、述語名詞が非飽和名詞句であればかならず述語連体部主題文型の文がなりたつかとい

うと、なりたない例はいくらでもある。

西山は、次の(26)は(27)と同じ程度に「いうまでもなく的確である」と述べているが、その芝居にとってその端役がよっぽど重要な意味をもつというような特殊な状況なら言えるかもしれないという程度の不自然な文であり、現実に使われた例も見つからない。¹⁵

(26) ?あの芝居は、こいつが端役だ。

(27) あの芝居は、こいつが主役だ。

さらに、(28)や(29)のような文も、述語名詞が非飽和名詞句になっているが、やはりなりたない。

(28) *あの芝居は、こいつが主役の息子だ。

(29) *あの芝居は、6人が登場人物だ。

このように、述語連体部主題文の述語名詞については、非飽和名詞句という制約だけでは不十分であり、「かき料理」の部分にとって重要なある側面を表すような名詞という制約が必要である。

このように、述語連体部主題文の「本場」の部分の名詞についての制約は、「象は鼻が長い。」のような格成分連体部主題文の「鼻」の部分の名詞についての制約より、さらにきびしい。

これは、次のような理由によるのだと思われる。格成分連体部主題文では、「象は」と「鼻が」が隣接していることが多く、「象の鼻」という関係を読みとることが比較的、楽である。それにたいして、述語連体部主題文の場合は、「かき料理は」と「本場だ」がかならず離れているため、「かき料理の本場」という関係が読みとりにくい。そのため、「本場」の部分で、「かき料理の」に結びつくことが簡単にわかるような名詞である必要があるのである。

ただし、述語連体部主題文の述語になれる名詞となれない名詞は、それほどはっきりわけられるわけではない。「特徴」や「中心」のようなこの構文の述語に使われる典型的な名詞が一方にあり、「冷蔵庫」や「一部」のようなこの構文の述語に使われない典型的な名詞がもう一方にあり、そのあいだに条件によっては使われることがある名詞がある。

¹⁵ 菊地康人(1997a)も、(26)のような文が不自然であることを指摘したうえで、このような文が成り立つ特殊な文脈を示している。

たとえば、「持論」という名詞は、この構文の述語として使われる典型的な名詞ではない。そのため、ふつうは次の(30)のように「～の持論」という形で使われる。しかし、「持論」を述語連体部主題文の述語に使うこともできないわけではなく、その次の(31)のような例も存在する。

(30) 「読書をしない人間は悪人だというのが私の持論である」といった人がいる。

(『朝日新聞』1980.10.27 朝刊 p.1「天声人語」)

(31) しかし、ガモウ博士は「高地に住んで、低地で訓練するのがより効果的」が持論。
論。

(『朝日新聞』1992.12.21 夕刊 p.3「スポーツワールド」)

7. 格成分連体部主題文との違い

次の(32)のような述語連体部主題文は、「～の」という連体修飾部が主題になっているという点では、その次の(33)のような格成分連体部主題文と同じである。

(32) 夏休みの小、中学生らでにぎわうプラネタリウムは、その名の通り、もともと
はこうした複雑な惑星の動きを再現するのが目的だった。

(『朝日新聞』1981.8.26 夕刊 p.7「星空ノート」)

(33) ペルシャ湾への掃海部隊の派遣は目的が明確で、期間も六カ月。

(『朝日新聞』1992.6.1 朝刊 p.1「PKO法案 日本の転換点」)

しかし、この2つの構文は、いろいろな点で性質が違う。前の(32)は、「プラネタリウムの目的」にあたるものが何であるかを、「こうした複雑な惑星の動きを再現するのが」の部分で表す。それにたいし、(33)は「掃海部隊の派遣の目的」がもっている性質がどのようであるかを、「明確(だ)」の部分で表すのである。¹⁶

このような違いのために、前の(32)を格成分連体部主題文にかえた次の(34)は、おかしな文になる。また、前の(33)を述語連体部主題文にかえた次の(35)も、おかしな文になる。

(34) *夏休みの小、中学生らでにぎわうプラネタリウムは、その名の通り、もともとは目的がこうした複雑な惑星の動きを再現することだった。

(35) *ペルシャ湾への掃海部隊の派遣は明確なのが目的で、期間も六カ月。

¹⁶ (32)の「プラネタリウムの目的」と「こうした複雑な惑星の動きを再現するのが」の関係は、三上章(1953)などが「指定」といい、野田時寛(1985)が「外延指定」というものにあたる。(33)の「掃海部隊の派遣の目的」と「明確(だ)」の関係は、三上章(1953)などが「措定」といい、野田時寛(1985)が「内包解説」というものにあたる。

このように、述語連体部主題文と格成分連体部主題文は、たがいに入れかえられないのがふつうである。例外的に入れかえられることがあるのは、ひとつは「専門」や「専攻」のような名詞が使われた次の(36), (37)のような場合である。

(36) 仙元さんは特許法が専攻で、講義、研究のために購入する専門書はどれも高額。
(『朝日新聞』1984. 11. 28 夕刊 p. 15)

(37) 大島さんは専門がスペイン文学で、法律は素人。
(『朝日新聞』1984. 11. 28 夕刊 p. 15)

もうひとつは「ほとんど」、「大半」、「大部分」のような割合を表す名詞が使われた次の(38), (39)のような場合である。

(38) 岩手県の南部セリ、近畿では京都のものが有名だが、最近は店頭に並ぶのはハウスものがほとんどのようだ。
(『毎日新聞』1992. 2. 28 朝刊 p. 11 「キッチン情報」)

(39) 縄文の土偶はほとんどが女性像である。(小山修三『縄文時代』p. 131)

8. 述語連体部主題文の周辺

この節の最後に、述語連体部主題文ではないが、述語連体部主題文と実質的に同じような働きをする文のうち、代表的なものについてふれておきたい。

1) 「参加者は女性が多かった」型

「参加者は女性が多かった。」のような文は、格成分主題文だが、これは、述語連体部主題文である「参加者は女性がほとんどだった。」のような文とよく似た働きをする。

たとえば、次の(40)は、その次の(41)の述語連体部主題文とよく似た意味になる。

(40) 従業員は約一千二百人で、大阪出身が多い。
(『朝日新聞』1992. 3. 3 朝刊 p. 10)

(41) 従業員は約一千二百人で、大阪出身が大半だ。

このほか、「～は～がうまい。」が「～は～が特技だ。」とほぼ同じ意味になったり、「～は～が重要だ。」が「～は～が基盤だ。」とほぼ同じ意味になったりする。

このように、「～は～が [形容詞]。」という形の格成分主題文は、「～は～が [名詞]。」という形の述語連体部主題文と、同じような働きをすることがあるのである。

なお、この2つをくらべると、「～は～が [形容詞]。」のほうが、文体として、より柔らかめで、より話しことば的な感じがする。

2) 「このトレーニングは筋力アップのためだ」型

「このトレーニングは筋力アップのためだ。」のような文は、「このトレーニングは筋力アップが目的だ。」のような述語連体部主題文とよく似た働きをすることがある。

たとえば、次の(42)は、その次の(43)の述語連体部主題文とよく似た意味になる。

(42) 猫が爪を研ぐのは、武器としての爪を常に尖らせておき、いつ出番が来てもいいようにしておくためだ。(加藤由子『雨の日のネコはとことん眠い』p. 72)

(43) 猫が爪を研ぐのは、武器としての爪を常に尖らせておき、いつ出番が来てもいいようにしておくのが目的だ。

このほか、原因を表す「～は～ためだ。」が「～は～が原因だ。」とほぼ同じ意味になったり、「～は～までだ。」が「～は～が限度だ。」とほぼ同じ意味になったりする。

このように、「～ためだ。」、「～までだ。」のような文末表現は、述語連体部主題文の「～が目的だ。」や「～が限度だ。」と同じような働きをすることがあるのである。

なお、この2つをくらべると、「～ためだ。」、「～までだ。」などのほうが、文体として、より柔らかめで、より話しことば的な感じがする。

3) 「このラーメンは和風のだしに特徴がある」型

「このラーメンは和風のだしに特徴がある。」のような文は、格成分連体部主題文だが、これは、述語連体部主題文である「このラーメンは和風のだしが特徴だ。」のような文とよく似た働きをする。

たとえば、次の(44)は、その次の(45)の述語連体部主題文とよく似た意味になる。

(44) 今日の大混乱は少数民族が本来の文化、伝統、アイデンティティーとは異なるものを押しつけられて来たことに原因がある。

(『朝日新聞』1992. 4. 28 朝刊 p. 1「天声人語」)

(45) 今日の大混乱は少数民族が本来の文化、伝統、アイデンティティーとは異なるものを押しつけられて来たことが原因である。

このほか、「～は～に特徴がある。」が「～は～が特徴だ。」とほぼ同じ意味になったり、「～は～に目的がある。」が「～は～が目的だ。」とほぼ同じ意味になったりする。

このように、「～は～に～がある。」という形の格成分連体部主題文は、「～は～が～だ。」という形の述語連体部主題文と同じような働きをすることがあるのである。

なお、「～は～が～だ。」も、もともと、文体として、硬めで書きことば的であるが、「～は～に～がある。」のほうが、さらに硬めで書きことば的な感じがする。

9. 述語連体部主題文のまとめ

述語連体部主題文について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 述語連体部主題文の構造

次の(46)のような格関係から、「かき料理」の部分が主題になって、(47)のような文になったと考えられる。

(46) 広島が かき料理の 本場 (であること)

主 題

(47) かき料理は 広島が 本場だ。

「特徴」、「中心」、「原因」、「目的」など、「かき料理」の部分にとって重要な側面を表す名詞
「かき料理の本場」の部分にあたるものが何かを表す名詞

2) 述語連体部主題文の機能

この構文は、次の(48)のような働きをする。

(48) かき料理は 広島が 本場だ。

「多い」、「ためだ」、「特徴がある」
などと似た働きをすることがある

いちばん主張したい部分

前後の文の主題などにあわせて選ばれた主題

第4節 被修飾名詞主題文

1. はじめに

「辞書は新しいのいい。」のような文は、表面的には、第2節の格成分連体部主題文や、第3節の述語連体部主題文と同じように、「～は～が……。」という形をしている。しかし、「辞書は新しいのいい。」のような文は、「新しい辞書がいい(こと)」という格関係から、被修飾名詞の「辞書」が主題になってできた文だと考えられる点で、格成分連体部主題文や述語連体部主題文とは違う。

ここでは、「魚は鯛がいい。」という文も、「辞書は新しいのいい。」と同じように、被修飾名詞主題文の一種だと考えるが、「魚は鯛がいい。」のような文については、これまで、さまざまな議論がおこなわれてきた。しかし、被修飾名詞主題文構文全体については、述語連体部主題文よりさらに使用頻度が低いためか、三上章(1960)や、柴谷方良(1978)、野田尚史(1988)などの研究があるだけである。

この節では、被修飾名詞主題文の構造や機能を調べていく。

2. 被修飾名詞主題文の構造

被修飾名詞主題文は、次の(1)のような格関係がもとになっていると考える。

- (1) 新しい辞書がいい(こと)

主題

(1)で「辞書」が主題に指定されると、「辞書」に「は」がつき、それが文頭におかれる。しかし、もしここで(1)の「辞書」が消えてなくなると、次の(2)のように、形容詞「新しい」に格助詞の「が」が直接つながるといふ非文法的な形になってしまう。

- (2) *辞書は新しいがいい。

そこで、もともと「辞書」があったところに、かわりに「の」や「もの」を入れて、次

の(3)のような文になると考える。

(3) 辞書は新しいのがいい。

この考えかたは、基本的に、三上章(1960:第一章8)と同じである。ただ、三上は、「鼻は、象が長いよ。」では「象の鼻が長い(こと)」から「の鼻」が主題になるという意味の説明をしているが、野田尚史(1988)で詳しく述べたように、「の鼻」ではなく「鼻」が主題になると考えるほうがよい。

なお、被修飾名詞主題文の場合、「新しい辞書がいい(こと)」から「辞書は新しいのがいい。」になる途中、「辞書が新しいのがいい(こと)」という段階を通ると考える必要はとくにないと思われる。それは、「?辞書が新しいのがいいことは……」のような形は不安定だからである。

3. 被修飾名詞主題文の機能

被修飾名詞主題文は、「新しい辞書がいい(こと)」という格関係から、「辞書」を主題にしたものであった。これは、「新しい辞書」という強いつながりの中から被修飾名詞の「辞書」だけを主題にするという、かなり無理なことをして、できたものである。

このような無理をしてまで、「辞書」を主題にしたこの構文が使われるのは、「新しい辞書」などではなく、「辞書」を主題にしたいときである。

たとえば、次の(4)では、最後の文が被修飾名詞主題文になっている。この文が被修飾名詞主題文になっているのは、前の「レンタ・カー」をうけて、「車」を主題にしたいからだと考えられる。

(4) 結局いろいろと考えた末にレンタ・カーを借りてその後部座席にバッグを放りこんでいくのがいちばんまともなやり方ではないかという結論に辿りついた。それならバッグを提げて歩きまわる面倒もないし、服のとりあわせを気にする必要もない。車はできることならシックなヨーロッパ車がいい。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p.528)

次の(5)も同じである。

(5) 牡蠣は中国でも南の海で獲れ、一般には乾燥したものを料理に使います。

(『あまから手帖』1992.12 p.3)

この(5)は、次の(6)と(7)を1つの文にした複文である。複文にするとき、共通の主題として「牡蠣」が選ばれると、(7)は、前の(5)のように、被修飾名詞主題文になるの

である。

- (6) 牡蠣^{かき}が中国でも南の海で獲れる (こと)
- (7) 一般には乾燥した牡蠣^{かき}を料理に使う (こと)

4. 「新しいの」の部分の種類

被修飾名詞主題文の「新しいの」の部分には、次の1), 2), 3) のような3つのタイプがある。

1) 「辞書は例文の多いのがいい」タイプ

これは、「例文の多いの」、「みんながいいと言うもの」のように、形容詞や動詞に「の」、「もの」、「人」、「ところ」など名詞の代用形式がついたものが入るタイプである。もとの格関係は次の(8)である。

- (8) 例文の多い辞書がいい (こと)

このタイプになるのは、「辞書」を修飾するものが、「例文の多い(辞書)」や「みんながいいと言う(辞書)」のように、形容詞や動詞のときである。

次の(9)は、動詞に「品」がついた例である。

- (9) 福祉機器は高価・高度な品より年金の枠内で日常生活に密着して気軽に利用できる品が必要だ。 (『朝日新聞』1992.12.19 朝刊 p.20 「老いを商う」)

2) 「辞書は白水社がいい」タイプ

これは、「新しいの」の部分に「白水社」のような名詞が入るタイプである。もとの格関係は次の(10)である。

- (10) 白水社の辞書がいい (こと)

このタイプになるのは、「辞書」を修飾するものが、「白水社の辞書」のように、名詞に「の」がついたものときである。

次の(11)は、このタイプの例である。

- (11) なんとって雑煮は讃岐(さぬき)が一番。と、私は思う。
(『朝日新聞』1989.1.5 朝刊 p.13 「ひととき」)

3) 「辞書は新西和辞典がいい」タイプ

これも、2)と同じように「新しいの」の部分に名詞が入るものである。しかし、もとの格関係を2)と同じように、次の(12)だと考えることはむずかしく、その次の(13)のように考えなければならない点が違う。

(12) *新西和辞典の辞書がいい (こと)

(13) 新西和辞典がいい (こと)

前の2)では、たとえば、(10)の「白水社の辞書」は、修飾部である「白水社の」と被修飾名詞である「辞書」に分離できた。しかし、この場合は、たまたま「新西和辞典」という一語の中に「辞書」という概念が含まれていて、「～の」という修飾部と被修飾名詞に分離できない。

このタイプでは、前の(13)は、次の(14)のようなものであり、この中の「辞書」が主題になったと考えられる。

(14) 新西和辞典という辞書がいい (こと)

主題

次の(15)は、このタイプの例である。

(15) 料理は、山里の素朴な趣向を盛りこんだ「御狹鍋」がお薦め。

(『あまから手帖』1992. 12 p. 13)

このように考えると、これまで特殊な文とみられてきた「鯛は魚がいい。」という文は、被修飾名詞主題文の一種で、「新しいの」の部分が3)のタイプになっているものだと考えることができる。¹⁷

このように、「新しいの」の部分には、1)「例文の多いの」のようなタイプ、2)「白水社」のようなタイプ、3)「新西和辞典」のようなタイプの3つがある。しかし、どのタイプでも、「新しいの」の部分と「辞書」の部分の関係はよく似ている。

1)の場合は、「例文の多いの」つまり「例文の多い辞書」が、「辞書」という集合の一部になっている。2)の場合は、「白水社」は「辞書」という集合の一部にはなっていないが、「白水社の辞書」が「辞書」という集合の一部になっている。¹⁸ 3)の場合も、「新西和辞典」が「辞書」という集合の一部になっている。

¹⁷ これまでは、たとえば、Nakau(1973)やMuraki(1974)では「魚の鯛がいい」から派生させ、久野暉(1973)や柴谷方良(1978)では、「父はこの本を買ってくれた」構文などとはまったく別の扱いで、深層構造の段階から「魚は鯛がいい」としていた。

¹⁸ 「白水社」は「白水社の辞書」を簡略にしたものだと考えることもできる。

5. 被修飾名詞主題文の2種類

被修飾名詞主題文には、典型的なものとして、選択型と並列型の2種類がある。¹⁹

選択型というのは、次の(16)のような文である。

(16) 辞書は新しいのがいい。

選択型では、述語は、典型的には「いい」のような形容詞である。そして、この型の文は、「辞書」のなかから「新しい辞書」を「いい」ものとして選択する機能をもっている。

もうひとつの並列型というのは、次の(17)のような文である。

(17) 値段はLサイズが500円、Sサイズが300円だ。

並列型では、「～が」の部分が並列して2つ以上ある。そして、この型の文は、「値段」を共通の主題にして、「Lサイズの値段が500円だ」と「Sサイズの値段が300円だ」を1つの文にまとめる機能をもっている。

同じ被修飾名詞主題文でも、選択型と並列型では構造も機能もかなり違うので、それぞれの型を次の6.と7.でさらに詳しくみていく。

6. 選択型の被修飾名詞主題文

選択型の被修飾名詞主題文というのは、たとえば、次の(18)の最後の文や(19)のような文である。

(18) 私は伊豆さんにはいい女ぶりっこしている。しかし、ワタルには(ノターツ)なのだ。やはり男はノターツとできるのがいい。

(田辺聖子『風をください』p. 250)

(19) 同じ歳月成長した魚は、大きいものより小さいものの方が“年輪”が詰まっ
いて、コリコリして甘いのだそうだ。 (『あまから手帖』1992. 9 p. 19)

この型の文では、述語は、典型的には、「いい」という意味をもった形容詞である。「いい」のほか、「適当」、「理想的」、「おいしい」、「好き」、「ほしい」などが使われる。

述語が動詞や名詞のときでも、「選ぶ」、「買う」、「お勧め」、「いちばん」など、いいものとして選ぶといった意味をもつものであることが多い。次の(20)は述語が「求める」の例、(21)は「お勧め」の例である。²⁰

¹⁹ 野田尚史(1988:5.)では、選択型と並立型になっている。

²⁰ 述語が動詞のときは、(20)のように、「～が」の部分は「～を」になることがある。

(20) 種いもは種苗店から病気の恐れのない良質のものを求め、大きな種いもは芽を確かめながら、半分あるいは四半分に切り、腐れ止めに草木灰を切り口につけて植えます。 (『朝日新聞』1987. 2. 20 朝刊 p. 12「園芸ごよみ三月」)

(21) 温泉は、高台にある女性専用の露天風呂がお勧め

(『Hanako WEST』1992. 10 p. 26 写真の説明文)

選択型の被修飾名詞主題文は、「～は」の部分の名詞(「辞書」)から「～が」の部分の名詞(「新しい辞書」)を好ましいものとして選択するという機能をもっている。そのため、この文のなかでいちばん主張したい部分は「～が」の部分になり、この「～が」は排他的な意味をもつ。

このように、選択型の被修飾名詞主題文は、述語が典型的には形容詞であるという点で、格成分連体部主題文に似ている。その一方で、「～が」の部分が排他的な意味をもつという点で、述語連体部主題文に似ている。

7. 並列型の被修飾名詞主題文

並列型の被修飾名詞主題文というのは、たとえば、次の(22)や(23)のような文である。

(22) 全国製麺連が調べた一人当たり麺類消費量の全国平均は、うどんが年間一・九キロ、ラーメン類が二・八キロ、蕎麦が〇・六キロ。これが香川県だと、うどん十二キロ、ラーメン類一・八キロ、蕎麦〇・九キロ。 (『AERA』1990. 2. 6 p. 63)

(23) 瀬戸副社長によると、わが国のビールの消費は、飲食店などが3割なのに対し、家庭で飲む人が7割と、ビール先進国の欧米より家庭消費が高いという。

(『毎日新聞』1992. 8. 11 朝刊 p. 9「ビジネス情報」)

並列型の被修飾名詞主題文は、選択型のものとは違い、「～が」の部分が2つ以上、並列的に並べられているのが特徴である。たとえば、前の(22)は、次の(24)と(25)と(26)の3つが、「一人当たり麺類消費量の全国平均」を共通の主題にして、1つの文になったものである。

(24) うどんの一人当たり麺類消費量の全国平均が年間一・九キロ(であること)

(25) ラーメン類の一人当たり麺類消費量の全国平均が二・八キロ(であること)

(26) 蕎麦の一人当たり麺類消費量の全国平均が〇・六キロ(であること)

この型の文では、述語は、選択型のものとは違い、典型的には名詞である。名詞といっても、前の(22)の「一・九キロ」などや、(23)の「3割」などのように、数値を表すもので

あることが多い。²¹

また、並列された「～が」のうち、とくに2つめより後の「～が」は、次の(27)のように、対比的な意味をもった「～は」になることも多い。

- (27) 工場→輸送車→店頭ケースまでの温度は、弁当類が二〇度(社により一八度)、
そうざい類は約五度に管理されているという。

(『朝日新聞』1992.9.1朝刊 p.13「家庭料理はどこへ」)

なお、「～が……、～が……。」の形をした、次の(28)の2つめの文のような文も、「値段は」などが省略された、この型の文だと考えられる。

- (28) 店内のいけすから1日当たりタイ50匹、ヒラメ10匹が売れていく。1kg強
のタイが1匹2500円、800gのヒラメが1匹3300円だ。

(『日経トレンドィ』1993.5 p.22)

並列型の被修飾名詞主題文の機能は、前の(22)を例にすると、「一人当たり麺類消費量の全国平均は何キロか」を言うのに、「うどん(の全国平均)」と「ラーメン類(の全国平均)」と「蕎麦(の全国平均)」にわけて言うことである。そのため、この型の文の「～が」は、選択型の文の「～が」とは違って、とくに排他的な意味をもつわけではない。

このように、並列型の被修飾名詞主題文は、述語が典型的には名詞であるという点で、述語連体部主題文に似ている。その一方で、「～が」の部分が排他的な意味をもたないという点で、格成分連体部主題文に似ている。

8. 被修飾名詞主題文の周辺

ここまで、被修飾名詞主題文の典型的な2つのタイプである選択型と並列型をみてきた。ここでは、典型的なこの2つのタイプからはずれたものとして、1)「辞書は高校のとき買ったのを使っている」型と、2)「辞書は3万部が印刷された」型、3)「最近の辞書は使いやすいのが多い」型の3つをみていきたい。

1) 「辞書は高校のとき買ったのを使っている」型

選択型の被修飾名詞主題文では、述語が、選択する意味をもった「いい」のような形容詞で、「～が」の部分が排他的な意味をもっているのがふつうであった。これが、「辞書は高校のとき買ったのを使っている。」のように、述語が選択する意味をもたない動詞にな

²¹ このほかの周辺のものについては、菊地康人(1995a)が詳しい。

ると、選択するという意味はなくなり、ただ「辞書」について、その種類を述べるだけの文になる。

次の(29)は、このタイプの例である。

- (29) 自動列車停止装置、列車無線および列車選別装置は既存車両と同じ装置を取り付けた。
(『鉄道ジャーナル』1992.4 p.95)

2) 「辞書は3万部が印刷された」型

これは、「辞書は3万部が印刷された。」のように、「～が」の部分の名詞が数量を表すものになっている文である。このタイプの文でも、「辞書」の中から「3万部」を選択するというような意味はなく、「辞書は3万部印刷された。」という文と、意味はあまりかわらない。

次の(30)は、このタイプの例である。

- (30) 今春はぐんと増えて後輩は三十四人が入社した。
(『朝日新聞』1989.6.19 夕刊 p.2 「人きのうきょう」)

3) 「最近の辞書は使いやすいのが多い」型

「多い」や「圧倒的だ」が述語になっている「最近の辞書は使いやすいのが多い。」のような文は、被修飾名詞主題文だとも考えられる。しかし、むしろ、次の(31)のような構造をもった格成分主題文だと考えるほうがよい。こうした文は、格成分主題文だが、被修飾名詞主題文に近いものと位置づけたい。

- (31) 最近の辞書に使いやすい辞書が多い (こと)
主 題

次の(32)は、このタイプの例である。

- (32) 一方、ユウガオの果実はスイカより一回り大きい球形が多い。
(『朝日新聞』1986.8.25 朝刊 p.13 「野菜細見」)

9. 被修飾名詞主題文のまとめ

被修飾名詞主題文について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 選択型の被修飾名詞主題文の構造と機能

次の(33)のような格関係から、「辞書」の部分が主題になって、(34)のような文になったと考えられる。

(33) 新しい 辞書が いい (こと)

主題

(34) 辞書は 新しいのが いい。

典型的には、「いい」などの形容詞

「辞書」の種類を表す名詞

前後の文の主題などにあわせて選ばれた主題

選択型の文は、「辞書」の中から「新しい辞書」を「いい」ものとして選ぶという働きをする。

2) 並列型の被修飾名詞主題文の構造と機能

次の(35)と(36)の2つの格関係から、「値段」の部分共通の主題になって、(37)のような1つの文になったと考えられる。

(35) Lサイズの 値段が 500 円 (であること)

主題

(36) Sサイズの 値段が 300 円 (であること)

主題

(37) 値段はLサイズが 500 円, Sサイズが 300 円だ。

「値段」の種類を表す名詞

典型的には、数値などの名詞

前後の文の主題などにあわせて選ばれた主題

並列型の文は、「値段」を言うのに、「Lサイズ(の値段)」と「Sサイズ(の値段)」にわけて言う働きをする。

第5節 従属節内成分主題文

1. はじめに

第1節から第4節でみてきた顕題文はどれも、単文（または、複文の主文）の中の成分が主題になったものであった。実際、顕題文の多くは、単文（または、複文の主文）の中の成分が主題になったものであるが、複文の従属節の中の成分が主題になったと考えられる顕題文もある。たとえば、「この問題はとくのがむずかしい。」のような文である。

この文は、「この問題をとくのがむずかしい（こと）」をもとにして、「この問題をとくの」という節の中にある「この問題」が主題になったと考えられる。

こうした文については、これまで、菊地康人(1988)をのぞいて、本格的な研究はおこなわれていない。

この節では、従属節の中の成分が主題になっているように見える従属節内成分主題文について、その構造や機能などをみていく。

2. 従属節内成分主題文の構造

従属節内成分主題文は、次の(1)のような格関係がもとになっていると考えられる。

(1) この問題をとくのがむずかしい（こと）

主題

(1)で「この問題」が主題に指定されると、「この問題を」に「は」がつき、それが文頭におかれ、従属節内成分主題文になる。

こう考えると、従属節内成分主題文の構造は、第1節で扱った格成分主題文と同じということになる。つまり、「この問題はもうといた。」のような文が、次の(2)のような格関

係をもとにしていたのと同じということである。²²

(2) この問題をもうといた (こと)

主題

しかし、従属節内成分主題文の構造は、格成分主題文の構造とは、違うところがある。それは、従属節内成分主題文では、主題になっている名詞の格成分「この問題を」が「この問題をとくの」という名詞節、つまり、強い従属節の中にあることである。

前の第1章第2節の6. で述べたように、強い従属節の中には、ふつう、主題はでてこない。たとえば、次の(3)のような格関係から、「この問題をとくの」という名詞節の中にある「この問題」を主題にした、その次の(4)のような文はなりたたない。

(3) この問題をとくのが私のライフワークだ。

主題

(4) *この問題はとくのが私のライフワークだ。

このように、ふつうは、名詞節のような強い従属節の中の成分の名詞を主題にすることはできない。それなのに、従属節内成分主題文では、強い従属節の中の成分が主題になっている点が特殊なのである。

3. 従属節内成分主題文の機能

従属節内成分主題文は、格関係のレベルでは、次の(5)のように、「この問題をとくのが」と「むずかしい」の2つの成分からできている。

(5) この問題をとくのが / むずかしい (こと)

このような構造から主題をもつ文をつくるとすると、「この問題をとくのが」を主題にして、次の(6)のような文にするのがいちばん自然なはずである。こうすれば、前の(5)と同じように、大きく、「この問題をとくのが」と「むずかしい」の部分にわかれるからである。

(6) この問題をとくのは // むずかしい。

これにたいして、「この問題はとくのがむずかしい。」という文は、次の(7)に示すように、前の(5)に示した格関係のレベルとは大きく違った構造をもっている。まとまりが強

²² 三上章(1960:p. 20-p. 22, p. 30-p. 31)は、ここでいう従属節内成分主題文をとりあげているが、ここでいう格成分主題文の一種としている。

い「この問題をとくのが」の内部で、文が2つの部分にわかれている。

(7) この問題は // とくのがむずかしい。

このように格関係の構造を無理に大きくかえてまで、前の(6)のような文ではなく、この(7)のような文をつくるのは、一方では、「この問題」の部分に独立させるためであり、もう一方では、「とくのが」の部分と「むずかしい」の部分のつながりを強くするためである。

ということは、従属節内成分主題文を使うのは、一方では、「この問題をとくのが」ではなく「この問題」についての叙述をしたいときであり、もう一方では、「とくのがむずかしい」という叙述をしたいときということになる。

たとえば、次の(8)は、「山田が打たれた8安打」について述べたい文ではなく、「山田」について述べたい文である。「山田」を主題にすると、このように、従属節内成分主題文になる。

(8) 山田は打たれた8安打がいずれも短打、要所を締めての完投で、両リーグを通じて十勝一番乗り。 (『朝日新聞』1984.6.11 夕刊 p.9)

4. 従属節内成分主題文の成立条件

前の3.でみたように、従属節内成分主題文は、次の(9)のような構造を、無理をして、その次の(10)のような構造にかえたものだった。このような無理がゆるされるのには、かなりきびしい条件がある。

(9) [この問題をとくのが] が / むずかしい (こと)

(10) この問題は // とくのがむずかしい。

その条件は、大きくわけて、次の(ア)から(ウ)の3つにまとめられる。

(ア)「の」の部分に、実質的な意味をほとんどもたないものである

(イ)「とくのがむずかしい」が「この問題」の叙述になっている

(ウ)「とくのが」と「むずかしい」の結合が強い

(ア)は、「この問題をとくのが」の「の」の部分に、「の」、「こと」のような名詞化辞や、次の(11)の「人」のような、かなり形式的な名詞になっているという条件である。²³

²³ このような条件は、尾上圭介(1981:p.107)が、対比の色がない「は」が連体修飾句内にはいるときの条件としてあげている。

- (11) ジョセフ・ホフマンの名前は、今日日本では既に知る人も少なく、なんと音楽之友社発行の人名辞典にさえものっていない有様だが、それはひとつには彼がモーツァルトやリストとちがって作曲家として一流の作品を残さなかったこと、更に演奏家としても、晩年にアルコールで健康を害していたこともあって、惜しむらくはそのレコードのすべてが大変に古く悪い状態でしか残されていないことなどにも原因があると思われる。

(中村絃子『チャイコフスキー・コンクール』p. 48)

(ア)のような条件があるのは、次のような事情によるのだろう。前の(9)で名詞節の中にある「この問題」が主題になって「この問題をとくのが」という名詞節の中からとびだすときには、名詞節をまとめている「の」が壁になる。また、(10)で主題になると、「この問題」は、「の」をとびこえて、文末の「むずかしい。」までかかっていくことになるが、このときも「の」が壁になる。こうした壁はできるだけ低くしたほうがいい。壁の高さが低いものという、実質的な意味をもたない、名詞化辞や形式的な名詞になるのである。

ただ、実際には、「の」の部分に実質的な意味をもった名詞が使われることもある。次の(12)では、「食料品輸入会社」という名詞が使われている。

- (12) 当時、安藤さんは経営していた食料品輸入会社が破産し無一文に近かった。

(『朝日新聞』1994. 9. 7 朝刊 p. 17「台所いまむかし」)

しかし、こうした文がなりたつのは、「安藤さん」と「食料品輸入会社」との結びつきが強いときに限られる。結びつきが強いというのは、「安藤さんが経営していた食料品輸入会社」を「安藤さんの食料品輸入会社」としても意味がほとんどかわらないようなときである。

次に、(イ)の条件は、「とくのがむずかしい」の部分が「この問題」についての叙述になっているという条件である。²⁴

たとえば、次の(13)は、「といた人が何人もいる」が「この問題」について「むずかしい」ことを述べる叙述になっているので、なりたつ。それにたいして、その次の(14)は、「といた人が今広島に住んでいる」が「この問題」についての叙述にならないので、なりたたないのである。

- (13) この問題はといた人が何人もいる。

²⁴ この条件については、菊地康人(1988)が「情報度」という用語を使って述べている。

(14) *この問題はといた人が今広島に住んでいる。

最後に、(ウ)の条件は、「とくのがむずかしい」の部分の結合が強く、1つの述語のようになっているという条件である。

たとえば、次の(15)では、「四国に上陸する」と「可能性が高い」が強く結びつき、「四国に上陸しそうだ」と同じ意味になっている。「可能性が高い」でモダリティを表す助動詞のような働きをしているのである。

(15) 台風は [四国に上陸する可能性が高い]。

このような(ア)から(ウ)の条件のたがいの関係は、次のようになっている。それは、(ア)の条件はどんなときも必要であるが、(イ)と(ウ)は、そのどちらかがみたされればよいというものである。

5. 従属節内成分主題文の2種類

従属節内成分主題文は、その構造や機能などから、大きく2つにわけられる。それを、主題分離型と述部結合型とよぶことにする。

主題分離型というのは、次の(16)のような文である。

(16) 換気扇は掃除するのがたいへんだ。

主題分離型は、従属節の中から主題をとり出すという面が強くでている型である。この型の文では、主題の「換気扇」について、「掃除するのがたいへんだ」の部分で叙述するという機能が強い。

もうひとつの述部結合型というのは、次の(17)のような文である。

(17) 台風は四国に上陸する可能性が高い。

述部結合型は、述部の「四国に上陸する可能性が高い」が強く結合するという面が強くでている型である。この型の文では、「可能性が高い」の部分が助動詞のような機能をもつことになる。

このように、従属節内成分主題文は、大きく、主題分離型と述部結合型の2つに分けられる。ただ、これは、主題分離と述部結合のどちらの働きが強くでているかという相対的なものであり、もうひとつの働きがまったくないというものではない。

次の6.と7.では、それぞれの型の文をもうすこし詳しくみていく。

6. 主題分離型の従属節内成分主題文

主題分離型の従属節内成分主題文は、さらに細かくみると、次の1)から3)のような種類がある。

1) 「換気扇は掃除するのがたいへんだ」型

これは、格成分連体部主題文と似ているものである。典型的には、述語は形容詞で、「掃除するのがたいへんだ」の部分が「換気扇」の性質や状態を表す。次の(18)のような文である。

(18) バイクのヘルメットは外すのがめんどろうだが道を聞くときは外すと効果てき面だ。
(『毎日新聞』1980.8.28 朝刊 p.24 「エフエム」)

2) 「材料はすべて地元産なのが特徴だ」型

これは、述語連体部主題文と似ているものである。典型的には、述語は名詞で、「特徴」を「地元産なのが」の部分で表す。次の(19)のような文である。

(19) ワケギはゆでずに空いりするのがコツ。
(『朝日新聞』1984.2.22 朝刊 p.15 「忙し母さんの“手抜き”料理」)

3) 「この山は南から登るほうが楽だ」型

これは、被修飾名詞主題文の選択型と似ているものである。典型的には、述語は「いい」や「楽」など形容詞的なもので、「南から登る」を「楽」なこととして選択する働きをする。次の(20)のような文である。

(20) 「お産は助産婦が中心になってやるのがいちばん安全だし、妊婦のためにもいい」と主張した文化人類学者シーラ・キチンガーもオクスフォードの出身です。
(柳原和子『「在外」日本人』p.213)

こうした主題分離型の3つの型は、それぞれ、格成分連体部主題文、述語連体部主題文、被修飾名詞主題文と似ていると述べたが、これは単なる偶然ではない。主題分離型の従属節内成分主題文は、格成分連体部主題文などと、述語とは直接関係しない成分が主題になるという点で、同じだからである。

具体的に説明すると、主題分離型の従属節内成分主題文は、次の(21)のような構造がもとになっている。一方、格成分連体部主題文は、その次の(22)のような構造がもとになっている。

- (21) [この問題をとくの]がむずかしい(こと)

主題

- (22) [象の鼻]が長い(こと)

主題

この(21)と(22)は、まったく同じように、主題に指定された「この問題」や「象」が、述語の「むずかしい」や「長い」とは直接関係がなく、名詞に相当する成分である「この問題をとくの」や「象の鼻」の内部にある。

このようなことから、主題分離型の従属節内成分主題文は、格成分連体部主題文などと、よく似ているのである。

7. 述部結合型の従属節内成分主題文

述部結合型の従属節内成分主題文は、さらに細かくみると、次の1)から3)のような種類がある。

1) 「ゴミの量は増えているのが現状だ」型

これは、「~の」や「~こと」という名詞節の中の成分が主題になっているものである。文末は「~のが現状だ」のほか、「~のが実情だ」、「~のが普通だ」、「~のが一般的だ」、「~のが常識だ」、「~のは事実だ」、「~ことが明らかになった」、「~ことは明らかだ」、「~ことは確実だ」などがある。次の(23)のような文が、これにあたる。

- (23) 結局、日本人の実質的な生活水準は外から見るとは向上していないのが現実なのである。 (『日本経済新聞』1987.8.2 朝刊 p.8 「ファミリー経済教室」)

この型では、「のが現状だ」の部分を取りさっても、意味はあまりかわらない。「のが現状だ」の部分、モダリティを表す形式のように、断定をすこし強めたり弱めたりする働きをしている。

2) 「台風は四国に上陸する可能性が高い」型

これは、「台風が四国に上陸する(可能性)」のような連体修飾節の中の成分が主題になっているものである。文末は「~可能性が高い」のほか、「~恐れがある」、「~傾向が強い」、「~必要がある」、「~感がある」などがある。次の(24)の2つめの文のようなものが、これにあたる。

- (24) 『列仙伝』の図をみても、黒髪でわかわかしい仙人がおおい。仙人にたいするイメージは、視覚的にもたす必要がある。 (大形徹『不老不死』p.150)

この型では、「可能性が高い」の部分が、「(し)そうだ」や「かもしれない」、「なければならない」などのモダリティを表す形式とよく似た働きをしている。²⁵

3) 「人の意見は聞かないとだめだ」型

これは、「～(れ)ば」や「～と」のような条件節の中の成分が主題になっているものである。次の(25)の引用部分の最初の文が、これにあたる。

- (25) 従って、英語らしい言い回しより教科書的な英語教育を支持し、「日本人の話す英語は、日本人らしく響かなければおかしい。英語という国際語の日本方言でよい」と言っていた。(『AERA』1990. 8. 14 p. 64)

この型では、「ないとだめだ」の部分が、「なければならない」のようなモダリティを表す形式とよく似た働きをしている。

8. 従属節内成分主題文の周辺

ここまで、従属節内成分主題文を主題分離型と述部結合型にわけ、それぞれの典型的なものをみてきた。ここでは、述部結合型の述部の結合がさらに強くなり助動詞のようになっているものを、1) から3) の3種類にわけてみていく。

1) 「日程は変更されることがある」型

これは、述部結合型の1)の「ゴミの量は増えているのが現状だ」型の述部の結合がさらに強くなったものである。この型では、「(する)ことが多い」や「(した)ことがある」、「ことになった」、「ことができる」などが助動詞のようになっている。次の(26)のような文がその例である。

- (26) 新しい機械の基本的なアイデアは、高鳥社長から出ることが多い。

(『朝日新聞』1982. 10. 11 朝刊 p. 4 「まかしといて この分野」)

2) 「けが人はいない模様だ」型

これは、述部結合型の2)の「台風は四国に上陸する可能性が高い」型の述部の結合がさらに強くなったものである。この型では、「模様だ」や「状態だ」、「見通しだ」、「予定だ」などが助動詞のようになっている。²⁶ 次の(27)のような文がその例である。

- (27) 同国はパーレル当たり三八・五〇トルを希望している模様である。

²⁵ このような形式については、田中寛(1990)が、「モーダルな名詞成分」として、例をあげている。

²⁶ このような形式については、新屋映子(1989)が「文末名詞」として詳しく考察している。

『毎日新聞』1981.8.22 夕刊 p. 1)

3) 「人の意見は聞かなければならない」型

これは、述部結合型の3)の「人の意見は聞かないとだめだ」型の述部の結合がさらに強くなったものである。この型では、「なければならぬ」や「てはいけない」、「でもない」、「(れ)ばいい」などが助動詞のようにになっている。次の(28)のような文がその例である。

(28) 選手は移動中はネクタイを着用しなければならぬ。

(足立倫行『人、旅に暮らす』p. 16)

9. 従属節内成分主題文のまとめ

従属節内成分主題文について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 従属節内成分主題文の構造

次の(29)のような格関係から、「この問題」の部分が主題になって、(30)のような文になったと考えられる。

(29) [この問題を とくの] が むずかしい (こと)

主題

(30) この問題は [とくのが むずかしい]。

2) 従属節内成分主題文の機能

ア) 主題分離型の従属節内成分主題文の機能

(31) 換気扇は 掃除するのがたいへんだ。

└─── 主題について叙述する働き

イ) 述部結合型の従属節内成分主題文の機能

(32) 台風は [四国に上陸する可能性が高い]。

└─── モダリティを表すような働き

第6節 述語主題文

1. はじめに

第1節から第5節でみてきた顕題文は、どれも名詞が主題になっているものであった。それにたいして、この節で問題にする「花が咲くのは7月ごろだ。」のような文は、名詞ではなく、「花が咲く(の)」のような、述語を含んだ節が主題になっているものである。

これまで、このような文は、強調構文とか分裂文 (cleft sentence) などといわれ、「～のは～だ。」という形をした特殊な構文とみられてきた。しかし、このような文は、名詞でなく節が主題になっていることが特殊なだけで、これまでみてきた顕題文と、基本的には同じものである。

この節では、述語主題文を、顕題文のひとつと位置づけ、その構造や機能を調べていく。

2. 述語主題文の構造

述語主題文は、次の(1)のような格関係がもとになっていると考える。

- (1) 7月ごろ花が咲く (こと)

主題

(1)では、「花が咲く」という、述語を中心にした節が主題に指定されている。もし主題が名詞であれば、その名詞に「は」がついて、それが文頭におかれる。しかし、主題が節の場合は、その節にそのまま「は」をつけると、次の(2)のように、非文法的な文になってしまう。

- (2) *花が咲くは7月ごろ。

そのため、このような節は、次の(3)のように、名詞化辞「の」によって名詞化され、「～のは」という形の主題になる。

- (3) 花が咲くのは7月ごろ。

こうしてできた(3)は、肯定か否定か、断定か推量かなどを表しわけられる述語をもっていない。そこで、次の(4)のように、「7月ごろ」に「だ」がつけられる。この「だ」によって、肯定の「～だ」と否定の「～ではない」、断定の「～だ」と推量の「～だろう」などが表しわけられるのである。

(4) 花が咲くのは7月ごろだ。

なお、この構文では、前の(1)から(3)にいたる途中で、格成分連体部主題文と同じように、次の(5)の段階を通ると考えたい。それは、従属節の中などで、この(5)のような形がでてくるからである。

(5) 花が咲くのが7月ごろ (であること)

3. 述語主題文の機能

このような述語主題文が使われるのは、一方では、「花が咲く」というまとまり全体を主題にしたいからである。また、一方では、「7月ごろ」を、聞き手に伝えたいこととして、きわだたせたいから、つまり、そこを文の焦点にしたいからである。

まず、「花が咲く」というまとまりを主題にしたいというのは、次のようなことである。たとえば、次の(6)では、会話の最初の文が述語主題文になっている。これは、それより前の文の「席が空いているのに客を待たせている」をうけて、「空席があっても客を入れない」を主題にしたいからである。

(6) ディナータイム、あるいはランチタイムのファミリーレストラン。

中に入ると席が空いているのに客を待たせている。

……[省略]……

「空席があっても客を入れないのは、人手不足だからですよ。客を入れてしまうと水やおしぼりを持っていき注文をとらねばならない。」

しかし、さばききれないんです。入れてしまえば待たせることになってお客さんは余計にイライラしますからね」 (『別冊宝島 165 もっと食わせろ!』p. 64)

ただし、この(6)のように、前にでてきた節がほとんどそのままの形で主題になっていることは少ない。多くは、次の(7)の2つめの文のように、前にでてきた内容に関係のあることが主題になる。²⁷

²⁷ この構文でどのようなものが主題になるかについては、砂川有里子(1995)が詳しい。

(7) 三カ月間の狩猟シーズンが十五日、終わった。猟期を冬に限ったのは、葉が落ち見通しがいい、行楽客が少ない、鳥獣の繁殖期ではないなど、安全面や動物保護の配慮からだ。(『朝日新聞』1994.2.16 朝刊 p.1「きょうの天気」)

一方、「7月ごろ」の部分で、文の焦点として、きわだたせたいというのは、次のようなことである。たとえば、次の(8)の最後の文は、これより前に俳句のことがでてきていないのに、「俳句が流行した」を主題にした述語主題文になっている。これは、話し手が「そのためである」という理由を、文の焦点として、聞き手に伝えたいからである。

(8) 何も云えない、云うとすれば、定められた軍国の教条を鸚鵡のように真似て繰り返すほかはなかった。

だから、自己を表現するためには、社会的な問題を離れた自己表現の道を捜さねばならなかった。

俳句が流行したのは、そのためである。(黒澤明『^{がき}蝦蟇の油』p.270)

この文を、述語主題文ではなく、次の(9)のようにすると、「俳句が流行した」という事実を伝えるだけの文になってしまう。

(9) そのため、俳句が流行した。

4. 「7月ごろ」の部分に入りやすい成分

述語主題文の焦点である「7月ごろ」の部分に入りやすいのは、次の(10)のような理由を表す成分や、(11)のような時を表す成分、それに、(12)の最初の文のような「が」格の成分である。

(10) 達川が引退を決意したのは、西山の一塁へのバックアップの速さに、自らの限界を悟ったからだ。(『朝日新聞』1993.2.21 朝刊 p.20「キャンプレポート'93」)

(11) フィリピンで終戦を迎えた竹内鉄男が復員してきたのは昭和二十一年だった。(宮本輝『道頓堀川』p.40)

(12) こんなに地球を悪くしているのは、「アメリカン・ドリーム」だ。大きな家、広い庭、一家に二台の車。こんなばかげた生活様式を全人類が要求したら、地球が十個あっても足りない。(『朝日新聞』1992.6.10 夕刊 p.3)

このほか、「を」格や「に」格や「で」格などの成分も、用法にもよるが、「7月ごろ」の部分にかなり入りやすい。次の(13)は、相手を表す「に」格が「7月ごろ」の部分に入

っている例である。²⁸

- (13) 佐渡をまわっていると、よく出会うのは石仏であり、石塔であり、石碑の類である。 (工藤宜『佐渡にんげん巡礼』p. 107)

反対に、「7月ごろ」の部分に入りにくいのは、次の(14)のような結果を表す「に」格や、その次の(15)のような手段を表す「で」格などである。

- (14) *弟が大学を出てなったのは、銀行員だった。

- (15) *ぼくたちが函館にいったのは、飛行機でだ。

また、次の(16)の「はっきり」のような様態を表す副詞的な成分なども、「7月ごろ」の部分に入りにくい。

- (16) *ここから冬に富士山が見えるのは、はっきりだ。

5. 「7月ごろ」の部分に入る成分の数

述語主題文では、「7月ごろ」の部分を中心としてきわだたせるため、「7月ごろ」の部分には、基本的に、1つの成分しか入らない。たとえば、次の(17)のような文はなりたつが、その次の(18)のように「7月ごろ」の部分に2つの成分が入った文は、ふつうなりたない。

- (17) 調布市の会社員、北田健雄さん(五〇)が、肝臓の異常を指摘されたのは、八九年の会社の健康診断でだった。 (『AERA』1992. 7. 7 p. 22)

- (18) *調布市の会社員、北田健雄さん(五〇)が指摘されたのは、八九年の会社の健康診断で、肝臓の異常だった。

ただし、次の(19)のように、「7月ごろ」の部分に2つの成分が入ることがないわけではない。(19)では、「昭和四十九年の四月」という時を表す成分と、『虞美人』でという場所を表す成分が入っている。

- (19) 遙が初舞台を踏んだのは昭和四十九年の四月、『虞美人』でである。

(佐高信『師弟』p. 61)

このようなことがおきやすいのは、時の成分と場所の成分のように、2つの成分がたがいに関連のあるものとして1つにまとまりやすい場合であり、それにくわえて、どちらの成分も述語との結びつきが弱い場合である。

²⁸ 「7月ごろ」の部分に入るかどうかの、用法による違いについては、渡部真一郎(1979)が詳しい。

次の(20)は、一見、「7月ごろ」の部分に、時の成分と「を」格の成分が入っているように見える。

(20) 播くのはジャガイモを掘る直前で、ウネ間に反当たり三和の種子です。

(『現代農業』1992. 11 p. 235)

しかし、これは、次の(21)と(22)が、いわゆる連用中止形の「～で」で、並列的に結びついたものであり、「7月ごろ」の部分に2つの成分が入っている例にはならない。

(21) 播くのはジャガイモを掘る直前です。

(22) 播くのはウネ間に反当たり三和の種子です。

なお、述語主題文では、焦点である「7月ごろ」の部分をきわだたせたいことが多いので、焦点の部分の名詞は、はっきり限定された形になっていることも少なくない。たとえば、次の(23)の「～だけ」や、その次の(24)の2つめの文の「～ではなく、～(だ)」のような形である。

(23) 石油を自由に輸入できるのは精製会社と元売り会社だけだ。

(『朝日新聞』1993. 3. 3 朝刊 p. 3「時時刻刻」)

(24) 食料を密封容器に入れて加熱殺菌するという保存法は、ナポレオン時代の一八〇四年にフランスで考案され、つづいて一八一〇年、イギリスでこの原理にもとづいてブリキ(スチール)を用いた缶詰が開発された。だが、缶詰の技術をひきつぎ改良し、実用化していったのは、フランスやイギリスではなく、そのころ西部開拓をはじめていたアメリカであった。

(^{えんじゆ}槐一男『空き缶「リサイクル」は地球にやさしいか』p. 56)

これは、文をつくるほうからいうと、1つの成分だけを焦点としてきわだたせたいときは、述語主題文を使うということである。

6. 焦点になりやすい成分と主題になりやすい成分

この節の4. でみたように、述語主題文の焦点である「7月ごろ」の部分に入りやすいのは、理由の成分、時の成分、「が」格の成分であった。反対に、その部分に入りにくいのは、結果の「に」格の成分、手段の「で」格の成分、様態の成分などであった。では、「7月ごろ」の部分に入りやすい成分と入りにくい成分の違いはどこにあるのだろうか。

この違いとして考えられるのは、述語との結びつきの強さである。述語との結びつきが弱い成分は「7月ごろ」の部分に入りやすく、述語との結びつきが強い成分は「7月ごろ」

の部分に入りにくいということである。こういうことになるのは、述語主題文が、次の(23)のように、「咲く」という述語の部分と「7月ごろ」という焦点の部分が切り離される構造をもっているからである。述語との結びつきが強い成分は、述語と切り離されてこの構文の焦点になるのがむずかしいのである。

(23) 花が咲くのは // 7月ごろだ。

ところで、述語との結びつきの強さというのは、主題になりやすい成分となりにくい成分の違いを考えたときにもでてきた。第1節の7.で述べたように、文の主題になりやすいのは、述語との結びつきが弱い成分で、主題になりにくいのは、述語との結びつきが強い成分であった。

そうすると、焦点になりやすい成分と、主題になりやすい成分は、同じになりそうである。たしかに、「が」格の成分は焦点にも主題にもなりやすく、手段の「で」格の成分は焦点にも主題にもなりにくいなど、一致するものも多い。しかし、理由を表す「～から」は焦点にはなりやすいが主題にはならないなど、一致しないものもある。

こうした不一致がおきるのは、主題になりやすいかどうかは、述語との結びつきの強さだけで決まるのではないからである。第1節の7.で述べたように、主題になるためには、格成分の中の名詞が、特定の個体としてとらえやすいものでなければならない。そのため、理由を表す成分のように、特定の個体を指さない成分は、焦点にはなるが、主題にはなれないのである。

7. 「驚いたのはその安さにだ」型と「驚いたのはその安さだ」型

述語主題文には、次の(26)のように、焦点の「7月ごろ」の部分に、もとの格助詞がそのまま残っているものと、その次の(27)のように、もとの格助詞がなくなっているものがある。²⁹

(26) 私が驚いたのはその安さにだ。

(27) 私が驚いたのはその安さだ。

「だ」の前の格助詞が残るかどうかは、文体によって違うこともあり、かなり微妙なところがあるが、次の(ア)のような大原則が考えられる。

(ア) 焦点の部分が、述語にとって必須の格成分のときは、格助詞は残らないことが多

²⁹ 格助詞の用法別に格助詞が残るかどうかを観察しているものに、渡部真一郎(1979)がある。

い。必須でない成分のときは格助詞が残ることが多い。

この大原則で説明できるのは、たとえば、次の(28)と(29)の違いである。

(28) エコール・キュリネール国立を運営するのは、大阪・阿倍野区に本部を置く辻調理師専門学校である。 (『別冊宝島 165 もっと食べせろ!』p. 68)

(29) 目がさめたのは水音でだった。 (吉本ばなな『キッチン』p. 28)

(28)は「*……辻調理師専門学校がである。」にはできず、(29)は「*……水音だった。」にはできない。それは、(28)の「辻調理師専門学校が」が「運営する」という述語にとって必須の成分であるのにたいして、(29)の「水音で」は「さめる」にとって必須の成分ではないからである。

焦点の部分が「が」格や「を」格の場合、格助詞の「が」、「を」はふつう残らないが、これはこれらの格が述語にとって必須のものだからである。

この大原則のほか、次の(イ)と(ウ)のような2つの原則も考えられる。

(イ)ほかの格成分と混同しやすいときは、格助詞が残ることが多い。

(ウ)「～のは」の「の」を名詞におきかえられるときは、格助詞は残らないことが多い。

(イ)で説明できるのは、次の(30)のような例である。この文から「矢富クんに」と「男の子に」の「に」をとってしまうと、「矢富クン」と「男の子」は「怒る」の主格と解釈されてしまう。そのため、「に」が必要なのである。

(30) むしろ怒ってるのは、矢富クんにではなく、昔、ツキ合ってた男の子に、である。 (田辺聖子『愛してよろしいですか?』p. 70)

(ウ)で説明できるのは、次の(31)のような例である。この文の「帰宅するのは」は「帰宅する時間」におきかえられる。そのため、「一〇時か一一時」に「に」はつかないのである。

(31) 午前六時すぎには起き、毎朝決まった手順で家を出ると、帰宅するのはほとんど毎晩、一〇時か一一時だ。 (斎藤茂男『破局』p. 85)

この(31)のような文は、単純な「[名詞]は[名詞]だ。」という形の文だとも考えられる。これについては、次の8.でもう少し詳しく考える。

8. 「花が咲くのは7月だ」型と「花が咲く時期は7月だ」型

ここまで考えてきた次の(32)のような述語主題文と、形も機能もよく似た文として、そ

の次の(33)のような文がある。(32)と(33)の違いは、(32)で「の」になっているところが、(33)では「時期」という具体的な名詞になっていることだけである。

(32) 花が咲くのは7月ごろだ。

(33) 花が咲く時期は7月ごろだ。

しかし、この2つの文は、ふつう、まったく別の構文だとされる。(32)のような文は、いわゆる分裂文、ここでいう述語主題文だと考えられる。それにたいして、(33)のような文は、基本的に「時期は7月ごろだ。」という形をした単純な名詞文だと考えられる。つまり、(33)は、ここでの分類でいえば、次の(34)から主格の「花が咲く時期」が主題に指定されてできた格成分主題文だと考えられる。

(34) 花が咲く時期が7月ごろ (であること)

主 題

このように、(32)と(33)は、ふつうまったく別のものとして扱われるのであるが、実際には、2つのタイプの間には中間的な段階の文があり、この2つは連続的である。具体的にいうと、次のようになる。

まず、述語主題文のなかで、もっともこの構文らしいのは、次の(35)のように、「だ」の前に格助詞が残る文である。このような文の「の」は、ほかの名詞におきかえることができない。たとえば、(35)の「の」を、その次の(36)のように「こと」にかえることはできない。

(35) 驚いたのは、その値段の安さにです。

(田中康夫『ファディッシュ考現学』p. 156)

(36) *驚いたことは、その値段の安さにです。

このような文にくらべると、次の(37)のような文は、述語主題文ではあるが、すこし格成分主題文に近づく。この文の「の」は、「党」のような名詞におきかえることができ、おきかえると格成分主題文になるからである。

(37) 自民党ともっともくっつけないのは、社会党以上に新生党なんだ。

(『朝日新聞』1993. 9. 29 朝刊 p. 7 「「連立」回り舞台」)

さらに、次の(38)のように、「～のは」ではなく「～ことは」が使われた文になると、述語主題文とはいえなくなる。「～ことは」では、その次の(39)が言えないように、自由に述語主題文をつくれなからである。

(38) いま、応用解析、とくに非線形現象を対象にした研究をしていて感じることは、

数学はたえず発展しているということです。

(数学セミナー編集部(編)『数学の最前線』p.216)

(39) *花が咲くことは7月ごろだ。

そして、次の(40)の「最大の原因」のように、具体的な意味をもった名詞が入った文になると、完全な格成分主題文になる。

(40) スクリーンの効率を悪くしている最大の原因は、回転速度が上がると、スクリーンの先端で気泡が生じてしまうことである。

(本川達雄『ゾウの時間 ネズミの時間』p.76)

9. 述語主題文の周辺

この節の最後に、述語主題文と関係が深いと考えられる型の文を2つとりあげる。

1) 「花が咲いたのは7月のことだった」型

これは、「だ」の前の焦点の部分が時を表す成分のとき、その、時の成分に「のこと」がついた文である。次の(41)は、その例である。

(41) 千佳子の実家へ足を運ぶ回数がふえはじめたのは、新居へ引っ越して二カ月ほどしてからのことだ。 (斎藤茂男『破局』p.86)

このような文は、「のこと」をつけたままでは、次の(42)のように、もとの格関係にもどせない。そのため、このような文は、典型的な述語主題文だとはいえないが、この構文に近いものである。

(42) *新居へ引っ越して二カ月ほどしてからのこと、千佳子の実家へ足を運ぶ回数がふえはじめた。

述語主題文では、「7月ごろ」の部分が副詞的な成分だと、構造が不安定になりやすい。しかし、副詞的な成分でも「のこと」をつければ、「[名詞]は[名詞]だ。」という形の名詞文になり、構造がより安定する。そのため、このような型の文がうまれたのだと思われる。

2) 「花が咲くのが7月ごろだ」型

これは、述語主題文の「は」が「が」になっている文である。次の(43)は、その例である。

(43) 台湾のパソコンを支えるのが部品産業だ。

(『朝日新聞』1993.3.11 朝刊 p.10 「日本とアジア 同時経済圏」)

熊本千明(1989)や砂川有里子(1995)では、このような文を「ガ分裂文」などとよび、述語主題文を「ハ分裂文」などとよぶ。そして、この2つをペアにして、2つの文の機能の違いなどを考えている。

しかし、この2つ、つまり「は」を使った文と「が」を使った文は、かなり違う構造をもっていて、単純に比較することはできないと考える。というのは、「が」を使った文では、「だ」の前に格助詞が残らない次の(44)のような文しかなく、「だ」の前に格助詞が残るその次の(45)のような文はないからである。³⁰

(44) 驚いたのがその安さだ。

(45) *驚いたのがその安さにだ。

このようなことを考えると、「ガ分裂文」はすべて、「[名詞]が[名詞]だ。」という形の単純な名詞文だとみなすことができる。このような文については、第4章で、陰題文として考える。

10. 述語主題文のまとめ

述語主題文について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 述語主題文の構造

次の(46)のような格関係から、「花が咲く」という、述語を含んだ節が主題になって、(47)のような文になったと考えられる。

(46) 7月ごろ 花が 咲く (こと)

主 題

(47) 花が 咲くのは 7月ごろ だ。

典型的には、理由の成分、時の成分、

「が」格成分などのうちの1つ

2) 述語主題文の機能

この構文は、次の(48)のような働きをする。

(48) 花が 咲くのは 7月ごろだ。

主題

焦点 (いちばん主張したいところ)

³⁰ この現象そのものは、熊本千明(1989)で指摘されている

第7節 破格主題文

1. はじめに

「～は」という形 of 主題をもつ文は、ほとんど、第1節から第6節でとりあげた6つの題題文のどれかにあてはまる。しかし、まれに、「このにおいはガスが漏れてるよ。」のように、この6つのどれにもあてはまらない文がある。このような文は、話しことばや、書くことになれていない人が書いた文章などにとくによく現れ、整った文とはいいいにくいものも多い。

こうした文は、これまで、誤用と考えられることが多く、あまりまともに研究されてこなかった。わずかに、三上章(1960)が「雑例」として、とりあげていたり、菊地康人(1995b, 1995d, 1995e)が「〈特定類型〉の「は」構文」として、意味の面からの類型化を詳しくおこなっているぐらいである。

この節では、このような破格主題文を構造の面から類型化し、こうした文がでてくる原因や、こうした文がもつ機能を分析していく。

2. 破格主題文の種類

第1節から第6節でとりあげた格成分主題文、格成分連体部主題文、述語連体部主題文、被修飾名詞主題文、従属節内成分主題文、述語主題文の6つは、どれも、格関係の中の一部が主題になったものだった。

たとえば、「父はこの本を買ってくれた。」という文は、「父がこの本を買ってくれた(こと)」という格関係の中で、「が」格の格成分の名詞「父」が主題になったものだった。また、「象は鼻が長い。」という文は、「象の鼻が長い(こと)」という格関係の中で、「象の鼻が」という「が」格の格成分の中にある連体修飾部の名詞「象」が主題になったものだった。

これらにたいして、この5つのどれにもあてはまらない主題をもつ文が、破格主題文である。たとえば、「このにおいはガスが漏れてるよ。」という文の場合、「*このにおいがガスが漏れている (こと)」のような格関係にもどすことができないということである。

このような文については、次のように考える。それは、こうした文は、不必要なものが加わったり必要なものが抜けたりする「異常」によって、ふつうの主題をもつ文からずれてできた、特殊で周縁的なものだという考えである。そして、この種の文を、どんな「異常」が原因でできたかという観点から、大きく、過剰型、不足型、漠然型の3つに分類する。

第1の過剰型というのは、不必要なものが過剰に加わっているために、整った格関係にもどせなくなったタイプである。次の(1)は、「お問い合わせ」が重複し、過剰になっている例である。

- (1) なお、出航時間、運賃・料金等のお問い合わせは、神戸本社〔電話078(331)5007〕までお問い合わせください。

(『阪急沿線』112(1985.2.1)p.8)

第2の不足型というのは、必要なものが脱落し、不足しているために、整った格関係にもどせなくなったものである。次の(2)は、「(新聞)を買う方(は)」や「(新聞)を買うとき(は)」などが不足している例である。

- (2) 新聞は小銭を御用意下さい

(羽田空港モノレール乗り場の売店の貼り紙 1992.6)

第3の漠然型というのは、文のはじめに、文全体の内容を示す漠然とした主題をたてたために、後ろの部分との関係が整った格関係におさまらなくなったものである。次の(3)は、この型の例である。

- (3) 練習は、聞きだす回数を徐々に減らしていきましょう。

(『フィーリング・スキー・レッスン』(ビデオ)0:13)

次の3.から5.では、それぞれ、過剰型、不足型、漠然型の構造や機能を考えていく。

3. 過剰型の破格主題文

過剰型の破格主題文というのは、たとえば次の(4)のような文である。

- (4) 五百円硬貨の両替は、左側5番の機械で両替してください。

(京王新線新宿駅のきっぷ売り場の掲示 1987.8)

この文は、次の(5)か(6)であれば、どちらの場合も、「を」格の格成分が主題になった格成分主題文である。

(5) 五百円硬貨の両替は、左側5番の機械でしてください。

(6) 五百円硬貨は、左側5番の機械で両替してください。

前の(4)は、この(5)と(6)が重なったような文である。2つの「両替」のうち1つは、かならずしも必要でない過剰なものとみることができる。

しかし、このような過剰をすべて不必要なもので誤用だと決めつけるわけにはいかない。過剰な反復によって、言いたいことを強調したり、文を理解しやすくしたりする効果をもつことがあるからである。

たとえば、次の(7)では、「第一条件」と「でないと不可能」が、実質的には同じような意味をもち、過剰に反復されている。この場合、この反復によって、「第一条件」や「でないと不可能」が強調される効果がある。

(7) 三冠王への第一条件は、まずホームランを打てる打者でないとは不可能。

(『朝日新聞』1983.4.6 朝刊 p.16 「大記録へ挑む」)

また、たとえば、列車の案内放送で、次の(8)のように、「禁煙車は」と「禁煙車です」などが過剰に反復されることがよくある。

(8) なお、禁煙車は、8号車、3号車、2号車と、1号車の一部が禁煙車です。

(長野発大阪行特急電車しなの号の車内アナウンス 1993.8)

この場合、はじめに「禁煙車は」を出すことによって話の方向をまえもって知らせることができ、また最後に「禁煙車です」をつけることによって、話をはじめから聞いていなかった人にも文の意味を正確に伝えることができる。

なお、ここまでにあげた例はどれも、主題の部分と述語の部分で、過剰なくりかえしが起こっていたが、次の(9)の「波は」のように、主題そのものが過剰にくりかえされる例もある。

(9) 海上の波は、北部、南部とも、きょう、今夜、あすともに、波は1.5mから2mでしょう。

(NTTお天気ダイヤル茨城 1987.8)

4. 不足型の破格主題文

不足型の破格主題文というのは、たとえば次の(10)のような文である。

(10) でも、いまのうちの会社のいいところは、雰囲気自由なんですね。

(足立倫行『人、旅に暮らす』p. 105)

この文では、「いまのうちの会社のいいところは」にたいして、文末を「雰囲気自由なことなんですね」のようにするのが自然なのだが、「ことだ」が脱落し、不足しているとみることができる。

このような文は、とくに話しことばでよくみられる。話しているうちに、前に言ったことを忘れ、文の後ろのほうとの呼応がおかしくなるからである。文末の「からだ」などがなくなったり、「私は」と話しはじめたのに「思います」などがぬけたりというのが典型的なものである。次の(11)も、「怖いのは」の結びがいつのまにかなくなっている例である。

- (11) 怖いのは、たとえば、去年やったAという番組は二〇パーセントの視聴率をとった。ところが、今年はそんなことみな忘れてますね。そういう意味での実績というのは、おそらくぼくはないと思いますよ。

(鎌田慧(編)『日本人の仕事』p. 640)

しかし、不足型の破格主題文をすべて、話し手の不注意からおきた誤用だとしてしまうわけにもいかない。表現を簡潔にしたり、文がさらに後ろに続いていくように思わせたりする効果をもつことがあるからである。

たとえば、次の(12)は、「益子焼を見に行く人は左折してください」というような意味であり、いろいろなものが省略された表現になっているが、一目でわかる簡潔な表示としては効果的である。

- (12) 益子焼は左折 (栃木県益子町の交差点の看板 1988. 8)

また、たとえば、次の(13)の最後の文では、文末から「話」がぬけているといえる。ただ、この文でこの文章はおわっているのだが、この後にさらに文が続きそうな感じをあたえる点で、この文は効果的だともいえる。

- (13) 桂小南「いかけ屋」、柳家権太楼「初天神」の落語二題を送る。いずれも子供の行動をテーマにした話。「いかけ屋」は、悪童たちがいたずらをし、いかけ屋の商売を邪魔する話。「初天神」は、熊さんが初天神に出かけようとした矢先、腕白小僧の金坊に見つかり一緒に連れて行かざるを得なくなる。

(『朝日新聞』1987. 1. 16 朝刊 p. 24 テレビ欄)

5. 漠然型の破格主題文

漠然型の破格主題文というのは、たとえば次の(14)のような文である。

- (14) 京葉線の利用状況は、多様な快速のダイヤ構成からもうかがえるように、通勤通学と行楽・レジャーの双方に大きな流動がある。

(『鉄道ジャーナル』1993.1 p.59)

この文の主題「京葉線の利用状況」は、この文全体の「表題」とでもいったらいいものを、とりあえず漠然と示しているだけである。

次の(15)も、よく似た例である。

- (15) 御使用法はローストビーフにお肉のわさび(レホール)を少量のせ、肉汁ソース(グレービー)をかけてお召し上がり下さい。

(カネク肉汁ソースグレービーのバック裏の説明書き 1988.9)

この漠然型は、3. でみた過剰型と似ているようにみえるかもしれない。前の(14)では「の利用状況」が過剰であり、(15)では「御使用法は」が過剰であると考えればである。ただし、過剰型の場合は、同じような語句が過剰に反復されていたが、漠然型の場合は、主題が文全体の内容を表しているだけで、同じような語句が反復されているわけではない。

このような漠然型の破格主題文も、すべて誤用としてかたづけしてしまうわけにはいかない。この種の文では、はじめにその文で述べることがらが主題として示されるため、聞き手の理解の助けになる場合が多い。とくに、次の(16)のような長い文では非常に効果的である。

- (16) 焼き豆腐と豆腐の使い分けは、豆腐は煮汁が少ないと煮くずれしやすいので、ちり鍋や寄せ鍋など煮汁のたっぷりしたものに用い、焼き豆腐は煮汁の少ないすき焼き、土手鍋などに用いる。(『別冊主婦と生活 鍋もの百科事典』p.65)

ただし、次の(17)のように、主題が単にその後の部分を言うきっかけにすぎず、主題とその後の部分の関係が希薄である場合は、ほとんど誤用とみなされるようである。

- (17) 九月号の「読者と編集部」欄の「雷をさけることば」は、私は石川県出身だが、一般的に北陸では雷をおそれない風習があった。

(『言語生活』420 (1986.11) p.95 「読者と編集部」)

6. 破格主題文の周辺

ここまで、破格主題文の代表的な3つのタイプとして、過剰型と不足型と漠然型をみてきた。ここでは、これらに関連して、1) 定型的な破格構文、2) いわゆる「うなぎ文」3) 格関係のレベルの破格についてふれておきたい。

1) 定型的な破格構文

これまでにみてきた破格主題文は、そのときどきで、たまたま破格になった臨時的なものであった。それにたいして、次の(18)の「～は～によるところが大きい」や、「～は～の存在が大きい」のように、破格の構文が定型的・慣用的になっているものがある。

- (18) 公園通りを中心とした渋谷のにぎわいは西武デパートとパルコによるところが大きいと思う。 (川本三郎『雑踏の社会学』p. 221)

また、次の(19)のような構文も、定型的な破格構文と考えられる。この文では、「(ボリュームと安さ)の秘密(は)」や「(大量購入に)原因が(ある)」などが不足しているとも考えられるが、すでに「～は～にある」の形で定型的に使われるようになっている。

- (19) ボリュームと値段の安さは、披露宴会場ならではの大量購入にある。 (『あまから手帖』1992. 11 p. 29)

さらに、次の(20)のような構文も、定型的な破格構文と考えてよいだろう。この文でも、「(断行すること)が必要(だ)」などが不足しているとも考えられるが、すでにこの形で定型的な表現になっている。

- (20) 景気をよくするには、何よりもまず所得税の大幅減税を断行することだ。 (『朝日新聞』1983. 4. 6 朝刊 p. 1「天声人語」)

こうした定型的な破格構文は、新聞など論説的な硬い文章によくでてくる。

2) いわゆる「うなぎ文」

いわゆる「うなぎ文」というのは、奥津敬一郎(1978)などでとりあげられた、食堂で注文するときの「僕はうなぎだ。」のような文のことである。どの範囲までを「うなぎ文」とするかはあまりはっきりしないが、たとえば、次の(21)のような文も「うなぎ文」の一例になるのだろう。

- (21) お父さんはビールで、おすしをつまんでいる。上の子は「うなぎ」で、下の子は「お子さまランチ」。 (深代惇郎『続 深代惇郎の「天声人語」』p. 322)

このような文は、この節でみてきた不足型の破格主題文の一種だと考えたい。前の(21)

の場合は、「(うな重) を食べている」、「(お子さまランチ) を食べている」などが省略され、不足しているのである。このような省略ができるのは、省略されているものが文脈や場面からあきらかだからである。

そして、文末に現れることがある「だ」は、テンスやムードを示すためにつけられるものだと考える。この種の文では述語が省略されているため、テンスやムードを示すことができない。そこで、とくに書きことばでは、文としての体裁を整えるために「だ」がつけられるのである。この「だ」は、次の(22)の2つめの文にみられるような「だ」とまったく同じものである。

(22) 鈴木孝政もよく怒鳴りつけられるひとりだ。それも、満座の中で、だ。

(『AERA』1988.9.6 p.18)

なお、「うなぎ文」についての考えかたには、奥津敬一郎(1978)などの「述語代用説」と、北原保雄(1981)などの「分裂文説」、久野暉(1978)や杉浦滋子(1991)、佐藤雄一(1992)の「省略説」の3つがある。ここでは、このうちの「省略説」をとっていることになる。これは、「うなぎ文」を特別な構文とはみないということでもある。

3) 格関係のレベルの破格

この節で扱った破格主題文は、主題のたてかたが特殊で、整った格関係にもどすことができないものであった。つまり、文の主題のレベルでの破格であった。これにたいして、次の(23)のような文は、主題のレベルではなく、格関係のレベルでの破格と考えたい。

(23) 大阪の地下鉄は、昭和初期の不況対策の一環として、一九三〇年一月に失業対策事業として始まっている。 (『朝日新聞』1993.2.2 夕刊 p.2「窓」)

この文は、「大阪の地下鉄の工事は」とでもしたほうが整った文になるため、「工事」が不足していると考えられる。しかし、この不足は「大阪の地下鉄は」という主題になるまえの「大阪の地下鉄が」という格関係のレベルですでに不足し破格になっていると考えたい。

それは、主題になっていない場合にも、格成分などの過剰や不足がおきることがあるので、格関係のレベルでの破格を認める必要があるからである。次の(24)は、主題でない「速度が」が重複し過剰になっている例である。

(24) なお、ホーム等で列車をお待ちの際は、通過列車の速度が従来より速度があがっておりますので、十分ご注意くださいようお願い申し上げます。

(JR常磐線荒川沖駅のホームの掲示 1986.11)

主題のレベルの破格か格関係のレベルの破格かは、決めるのがむずかしい場合もあるが、この2つのレベルの破格は基本的にはわけて考えておきたい。

7. 破格主題文のまとめ

破格主題文について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 破格主題文の種類

破格主題文には、代表的なものとして、次の3種類がある。

ア) 過剰型——不必要なものが過剰に加わっているもの

(25) お問い合わせは、本社営業部までお問い合わせください。

イ) 不足型——必要なものが不足しているもの

(26) 新聞は小銭をご用意ください。

ウ) 漠然型——文全体の内容を示す漠然とした主題をたてているもの

(27) 作り方は、材料を弱火で1時間ほど煮込みます。

2) 破格主題文の機能

破格主題文には誤用に近いものもあるが、聞き手に文の内容を明確に伝えたり簡潔に伝えたりする効果をもつものもある。

第8節 主題の選択

1. はじめに

第2章では、ここまで、主題をもつ顕題文を7種類にわけ、それぞれの構造と機能を見てきた。この章の最後の第8節では、実際一つ一つの文でどんなものが主題になるのか、その条件を考えていきたい。

この問題は、前の第1章第3節の3.で述べたように、これまで「新情報と旧情報」とか「既知と未知」という概念によって説明されてきた。ただ、これまでの研究では、どんなものが新情報になり、どんなものが旧情報になるのかといったことが、具体的に細かく規則化されていたとはいえない。

この節では、主題をもつ文の中で、何が主題になるのかを、単語のレベル、文のレベル、文章・談話のレベルにわけて考えていく。

2. 主題の選択の基本原則

主題をもつ顕題文は、機能の面からみると、ある主題について、なにかを伝える文である。そのため、顕題文は、主題の部分と、伝えたいことの部分からなりたっている。つまり、次の(1)のような形をしている。

(1) [主題] は [伝えたいこと]。

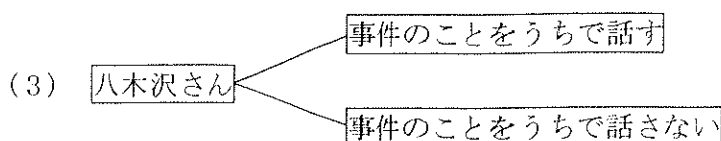
このような文で、何が主題になり、何が伝えたいことになるのかは、基本的には、文の成分のなかで、選択肢がないものが主題になり、選択肢があるものが伝えたいことになるといえる。

たとえば、次の(2)の質問文では、その次の(3)のように、「八木沢さん」について、「事件のことをうちで話す」か「話さない」かを質問している。

(2) 「八木沢さんは、事件のことをうちで話すかい？」

「ええ。ときどき」

(宮部みゆき『東京下町殺人暮色』p. 137)



このようなときは、主格の「八木沢さん」が主題になり、述語の「事件のことをうちで話すかい」が伝えたいことになる。そのため、この文では、主格の「八木沢さん」に「は」がついているのである。

3. 主題の選択の3つのレベル

前の2. でみたように、文の主題になるのは、基本的には、文の成分のなかで、選択肢がないものであった。では、選択肢がないために文の主題になりやすいものというのは、具体的には、どのようなものだろうか。

代表的なものとしては、前の文脈にでてきた名詞があげられる。たとえば、次の(4)の2つめの会話文では「馬鹿」が主題になっているが、これは、その前の会話文にでてきた名詞である。

(4) ドアを開けてから、二人の方を振り返って、

「馬鹿だね、私って……」

と、言った。

「馬鹿は、おれや」

良介が言った。

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(下)』p. 139)

これまでの研究では、文の主題の選択は、このように、前の文脈や話の現場の状況などによって説明されることが多かった。しかし、文の主題をどれにするかは、文脈や状況に関係なく、文のレベルで決まることもある。

そこで、ここでは、文の主題の選択を、大きく3つのレベルにわけて考えたい。つまり、次の(ア)から(ウ)の3つである。

(ア) 単語のレベル

(イ) 文のレベル

(ウ) 文章・談話のレベル

これから、この順に、それぞれのレベルで、どのように主題が選択されるのかをみてい

くことにする。このうち、(イ)の、文のレベルでの主題の選択については、名詞文、形容詞文、動詞文にわけて考える。

4. 単語のレベルでの主題の選択

文の主題になれるのは、基本的に、名詞だけだが、かならず文の主題になるというような名詞はない。反対に、文の主題にはならず、かならず伝えたいことになる名詞はある。次の(エ)のような名詞である。

(エ) 疑問語

(エ)は、「だれ」や「何」のような疑問語である。こうした疑問語は、主題にはならず、次の(5)の「何」のように、かならず伝えたいことになる。

(5) 松本 胃下垂なんですよ。バリウム飲むと、胃が腰のあたりまで下がっちゃうんです。

桑野 じゃあ、胃の位置には何があるの？

松本 なんにもない(笑)。(大阪読売テレビ(編)『たかじん no ぼあー2』p. 82)

ただ、このような疑問語は、次の(6)や(7)のように、一見、主題になっているように見えるときがある。

(6) だれは来て、だれは来なかったの？ (Miyagawa(1987:p. 186))

(7) 母君は、自分が縫ったことを証明するため、どこは何針、どこは何針と、針目の数を全部当ててみせた▶ (『朝日新聞』1991. 4. 6 朝刊 p. 1「天声人語」)

しかし、このような疑問語は主題になっているとは考えない。(6)の「は」は、「が」にかえてもなりたつことからわかるように、対比的な意味を表しているだけで、主題を表してはいないからである。また、(7)の「どこ」は、「ここ」にかえてもなりたつことからわかるように、疑問を表していないからである。³¹

このように、疑問語は、主題にならず、かならず伝えたいことになる。

5. 名詞文での主題の選択

次に、文のレベルで、どの成分が主題に選択されるのかを考えていこう。まず、名詞文についてである。名詞に「だ」がついたものが述語になっている名詞文は、主格名詞と述

³¹ (14)のような文については、Miyagawa(1987)が詳しい。

語名詞という2つの名詞をもっている。名詞文での主題の選択というのは、2つの名詞のうち、どちらが主題になり、どちらが伝えたいことになるかということである。

2つの名詞のどちらが主題になるかがほぼ決まっている組み合わせとしては、次の(オ)から(キ)のようなものがあげられる。

(オ) 「特徴」, 「原因」などが主題で, その内容が伝えたいこと

(カ) 「高さ」, 「色」などが主題で, その数量や種類が伝えたいこと

(キ) 「～というもの」が主題で, その説明が伝えたいこと

(オ)は、次の(8)のように、「～の特徴」のような名詞が主題になり、その内容の「主食があること」などが伝えたいことになる場合である。

(8) アジア人の食生活の特徴は、主食があることです。

(『朝日新聞』1993. 6. 2 朝刊 p. 16 「食と健康」)

(オ)の主題になる名詞には、このほか、「中心」、「目的」、「基盤」、「限度」などがある。これらは、第3節でみた述語連体部主題文の「本場」の部分にくる名詞とほぼ重なる。

ただし、それより範囲が広い。述語連体部主題文の「本場」の部分の名詞は「かき料理」の部分の重要な側面を表す名詞であったが、ここの(オ)で主題になる名詞は、次の(9)の「目的の一つ」のように、「重要な側面」を表す名詞である必要はない。「ある側面」を表す名詞であればよいのである。

(9) 研究所の目的の一つは、プラスチックやゴム部品を分別して再利用するため、それらを粉砕する前に取り外す方法を見つけることだ。

(『朝日新聞』1993. 1. 7 夕刊 p. 3)

次に、(カ)は、次の(10)のように、「～の所要時間」のような名詞が主題になり、その数量や種類を表す名詞が伝えたいことになる場合である。

(10) 普通のコースターの所要時間は約3分ほど。

(『日経トレンディ』1994. 10 p. 101)

(カ)の主題になる名詞には、このほか、「値段」、「年齢」、「名前」、「メニュー」など、いろいろある。これらの名詞は、あるものの側面を表す名詞であり、(オ)の名詞と本質的にはかわらない。ただ、これらは、格成分連体部主題文の「鼻」の部分にくる名詞と一部重なるものである。

なお、次の(11)のように、「の値段」などが省略されることもある。

(11) お昼のランチコースは千円から3千円。ディナーは4千500円から8千円。

(『あまから手帖』1993.3 p.27)

最後に、(キ)は、「～というもの」が主題になり、その説明が伝えたいことになる場合である。とくに、次の(12)のように、「～というもの」が縮まって「～と」になったものは、主題にしかならない。

(12) 炭焼きとは、木材を熱分解して、揮発しやすい成分を可燃性のガスとして燃やしたり、蒸気にして追い出したりした後、炭素が燃えてしまう手前で燃焼を止める作業である。 (『科学朝日』1995.3 p.133)

このほか、「～というもの」という形になっていなくても、次の(13)のように、ある名詞について説明をする文では、その名詞が主題になる。

(13) このナタデココは、ココナッツミルクを静かに寝かせて発酵させたもの。 (『POPEYE』1993.7.21 p.66)

このように、(オ)、(カ)、(キ)のような名詞の組みあわせで、どちらが主題になるかがほぼ決まっているのは、たとえば、「(ジェット)コースターの所要時間」について、「1分」とか「3分」とかの選択肢から選ぶことはあるが、「3分」について、「コースターの所要時間」とか「この曲の長さ」とかの選択肢から選ぶことは現実にはあまりないからである。

6. 形容詞文での主題の選択

形容詞が述語になっている形容詞文は、典型的には、主格名詞と述語からできている。したがって、形容詞文での主題の選択というのは、主格名詞と述語のどちらが主題になり、どちらが伝えたいことになるかということである。これについては、次の(ク)と(ケ)のような傾向がある。

(ク) 比較を表さない文では、主格が主題になりやすい

(ケ) 基本語順で前のほうにおかれる格成分が主題になりやすい

(ク)は、「～のほうが[形容詞]」や「～がいちばん[形容詞]」のような形で比較を表わす文をのぞくと、ふつう、主格名詞が主題になり、述語が伝えたいことになるということである。たとえば、次の(14)では、主格名詞の「亭主関白の家」が主題になり、これに「は」がついている。

(14) 亭主関白の家は暗い。カカア天下の家は明るいです。

(『朝日新聞』1992.12.21 夕刊 p.3「スポーツワールド」)

格成分を2つとる形容詞の場合は、前の(ケ)のように、基本語順で前のほうにおかれる

格成分が主題になりやすい。たとえば、「好き」が述語のときは、次の(15)のように、感情の持ち主が主題になるのがふつうである。

(15) ネコはよく知られているように高い所が好きだ。 (『SINRA』1995.5 p.25)

なお、「～のほうが[形容詞]」や「～がいちばん[形容詞]」の形で比較を表す文では、ふつう述語が主題で、主格が伝えたいことになるため、次の(16)のように、主格の「永尾くん」に「が」がつく。³²

(16) さとみ「でも、リカさんと一緒にいる永尾くんが、私の知ってる永尾くんの中で一番元気」 (柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p.81)

7. 動詞文での主題の選択

動詞が述語になっている動詞文は、格成分をいくつかもつものが多い。したがって、動詞文の主題の選択でいちばん問題になるのは、どの格成分が主題になるかということである。

これについては、第1節の格成分主題文のところでも述べたように、次の(コ)のような傾向がある。

(コ) 基本語順で前のほうにおかれる格成分が主題になりやすい

具体的にいうと、基本語順が「～が～をする」である次の(17)では、「が」格の「三郎」が主題になりやすい。また、基本語順が「～に～がある」であるその次の(18)では、「に」格の「聖子」が主題になりやすい。

(17) その頃、三郎は刑務所の係長の部屋で茶坊主(給仕)をしていた。

(家田莊子『極道の妻たち』p.232)

(18) 「アンチ百恵」としての聖子には、百恵的エロティシズムを歌わないという宿命がありました。

(小倉千加子『松田聖子論』p.197)

ただし、これは、おおまかな傾向にすぎない。次の8.でみる文章・談話のレベルでの主題の選択にしたがって、基本語順で後ろのほうにおかれる格成分が主題になることもある。

³² 形容詞が述語の比較を表す文は、主題が「は」で明示される顕題文でなく、主題が「は」で明示されない陰題文になることが多い。つまり、「私の知ってる永尾くんの中で一番元気なのは、リカさんと一緒にいる永尾くん」のような文ではなく、「リカさんと一緒にいる永尾くんが、私の知ってる永尾くんの中で一番元気」のような文が好まれる。この問題については、第4章第2節でさらに詳しく検討する。

8. 文章・談話の中での主題の選択

文章・談話のレベルでは、主題の選択に、次の(サ)と(シ)のような傾向がある。

(サ) 話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞は、主題になりやすい

(シ) 話の現場や前の文脈と関係のある名詞は、主題になりやすい

(サ)は、次のようなことである。次の(19)の最初の文の「俺」は、話の現場にいる人を指す名詞である。その次の(20)の2つめの文の「同駅」はその前の文にでてきた「西宮名塩」を指す名詞である。こうした名詞は、文の主題になりやすい。

(19) 俺は中卒さ。 (柳原和子『「在外」日本人』p. 20)

(20) 途中に西宮名塩がある。同駅は複線電化時に名塩の各住宅団地のために作られた。 (川島令三『全国鉄道事情大研究 神戸篇』p. 187)

(シ)は、次の(21)の最後の文の「お相手」のような名詞である。この「お相手」は、その前の教授の発言にでてきた「結婚」と関係のある名詞である。このような名詞も主題になりやすい。

(21) 教授「澤井憬子さんが、この度、結婚することになりました」

みんな拍手。

入江——凍っている。

杉矢——「……」

教授「お相手は、隣の研究室の村上さんです」

(北川悦吏子『君といた夏』p. 21)

ただし、これは傾向であって、絶対的なものではない。次の(22)の最後の文の「これ」のように、こうした名詞が主題にならず、伝えたいことになることがあるからである。

(22) しかし、天気は、大気の循環というか、気象全体がカオスになっているため、初期条件がほんの少し変わると、天候大異変になってしまう。

これが、天気予報の当たらない物理学的な理由である。

(竹内薫『宇宙フラクタル構造の謎』p. 196)

この(22)で「これ」ではなく「天気予報の当たらない物理学的な理由」が主題になっているのは、(サ)よりも、5. でみた(オ)が優先するからである。つまり、前の文脈を指す「これ」が主題になるという規則より、「理由」とその内容「これ」の組みあわせでは、「理由」が主題になるという規則が優先するということである。一般に、文章・談話のレベル

での(サ), (シ)より, 名詞文, 形容詞文のレベルでの(オ)や(ク)のほうが優先するようである。³³

9. 「象の鼻は長い」型と「象は鼻が長い」型

ここまで, 文の中のどの成分が主題になるかをみてきた。主題になる名詞が単純な名詞のときは, それだけですむが, 主題になる名詞が「[名詞]の[名詞]」のような形をしているときは, 次のような問題がでてくる。

たとえば, 次の(23)で, 「長い」は伝えたいことであり, 文の主題でないことがはっきりしているとしよう。そのとき, 「象の鼻」を主題にするのか, 「象」だけを主題にするのかという問題である。「象の鼻」を主題にすれば, その次の(24)のような格成分主題文になり, 「象」を主題にすれば, その次の(25)のような格成分連体部主題文になる。

(23) 象の鼻が長い (こと)

(24) 象の鼻は長い。

(25) 象は鼻が長い。

この(24)と(25)のどちらを選ぶかは, 第2節の格成分連体部主題文のところでも述べたが, 前後の文とのあいだや, 複文の主文と従属節のあいだで主題がそろおうほうにするのがふつうである。

たとえば, 次の(26)で, 「カボチャ」を主題にした格成分連体部主題文が使われているのは, 「カボチャの糖度が非常に高い (こと)」と「カボチャの組織がしっかりしている (こと)」の主題をそろえるためである。

(26) まずナマで野菜を味わってみたのですが, カボチャは非常に糖度が高く, 組織がしっかりしています。 (『毎日新聞』1986. 8. 21 夕刊 p. 8)

このような主題の選択は, 次の(27)で, 「かき料理の本場」を主題にして, その次の(28)のような格成分主題文にするか, 「かき料理」を主題にして, その次の(29)のような述語連体部主題文にするかでも, 同じである。

(27) 広島がかき料理の本場 (であること)

(28) かき料理の本場は広島だ。

(29) かき料理は広島が本場だ。

³³ 文章・談話の中での主題の選択については, 第6章でさらに詳しく述べる。

また、次の(30)で、「Lサイズの値段」と「Sサイズの値段」を主題にして、その次の(31)のような格成分主題文にするか、「値段」を主題にして、その次の(32)のような並列型の被修飾名詞主題文にするかでも、同じである。

(30) Lサイズの値段が500円で、Sサイズの値段が300円（であること）

(31) Lサイズの値段は500円で、Sサイズの値段は300円だ。

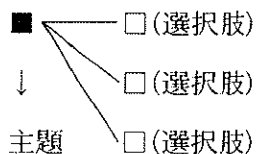
(32) 値段はLサイズが500円で、Sサイズが300円だ。

10. 主題の選択のまとめ

文の主題の選択について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 主題と伝えたいことの基本的な選択

選択肢がないものが主題になり、選択肢があるものが伝えたいことになる。



2) 主題になりやすいものと伝えたいことになりやすいもの

| | | 主 題 | 伝えたいこと |
|-----------|---------------|---------------|---------|
| 単語のレベル | | | 疑問語 |
| 文のレベル | 名 詞 文 | 「特徴」、「原因」など | その内容 |
| | | 「高さ」、「色」など | その数量や種類 |
| | | 「～というもの」 | その説明 |
| | 形容詞文 動 詞 文 | 基本語順で前にある格成分 | |
| 文章・談話のレベル | | 現場や文脈と関係のある名詞 | |

第 3 章

無題文の構造と機能

第1節 無 題 文

1. はじめに

主題を表す「は」が使われない文には、2つのタイプがある。1つは、主題をもっていないと考えられる「富士山が見えるよ。」のような無題文で、もう1つは、述語が主題になっていると考えられる「君が主役だ。」のような陰題文である。

この章では、そのうち、「富士山が見えるよ。」のような無題文をとりあげる。第1節では、無題文の構造と機能について、第2節では、前の第2章でみた顕題文とこの章でみる無題文の使いわけについて考える。

これまで、このような文は、目の前のできごとなどを、話し手が判断を加えないで、そのまま描写した「現象文」として考察されることが多かった。しかし、「現象文」という分類と「無題文」という分類は、かならずしも一致しない。

ここでは、主題をもっていないという点から、「富士山が見えるよ。」のような文を無題文として、その構造や機能を考える。

2. 現象文と無題文

この章で扱う無題文というのは、これまで「現象文」といわれたり、「無題文」といわれたりしてきたものである。しかし、「現象文」というのと「無題文」というのでは、一見、同じものを指しているように見えても、その規定のしかたは根本的に違う。

現象文というのは、判断文と対立させた文の分類である。これは、文を主題の面から分類したものではなく、モダリティの面から分類したものである。三尾砂(1948)の「現象文」のほか、佐治圭三(1973)の「存現文」、仁田義雄(1986)の「現象描写文」などが代表的なものである。仁田によれば、現象描写文とは、「ある時空のもとに生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べ伝えたもの」だということである。

現象文の規定は、このように、主題をもっているかどうかではなく、話し手の判断が加わっているかどうかということが中心になっている。そのため、主題をもっていないと考えられる文でも、話し手の判断が入っているということで、現象文ではなく判断文に分類されることがある。

たとえば、三尾は、述語が形容詞や名詞になっている次の(1)の最後の文のようなものを現象文に入れず、佐治は、述語が否定形になっているその次の(2)のような文を存現文に入れず、仁田は、述語が推量形になっているその次の(3)のような文を現象描写文に入れず。

(1) 「だって、君が来ればいっぺんですむんだからさ。ほーら、月がきれいだよ。」

(吉本ばなな『キッチン』p.95「満月」)

(2) 去年のサマージャンが宝くじの一等六千万円百七十七本のうち、土本が今も換金されていない。

(『朝日新聞』1993.9.2 朝刊 p.31「青鉛筆」)

(3) ヒターノがわたしを探しているだろうな。

(逢坂剛『カディスの赤い星』p.266)

一方、無題文というのは、有題文と対立させた文の分類である。これは、文が主題をもつかどうかという点から分類したものである。この分類としては、松下大三郎(1928)の「無題断句」¹、野田尚史(1984, 1994a)の「無題文」、丹羽哲也(1988)の「無題文」などがある。この分類は、文を、主題をもつかどうかだけでわけたものなので、前の(1)や(2)や(3)のような文は無題文になる。

このような現象文と無題文は、重なる部分も大きいですが、基本的にはまったく別のものである。ここでは、文が主題をもつかどうかを問題にしたいので、現象文ではなく無題文について、無題文として考えていく。²

なお、松下の「無題断句」や丹羽の「無題文」には、「君が主役だ。」のような文も含まれるが、このような文は、無題文ではなく、述語が主題になっている陰題文として、次の第4章で、別に考えることにする。

¹ 「断句」は松下の用語で、「文」に相当する。

² 現象文と無題文の間に対応関係がないことは、丹羽哲也(1988)で詳しく論じられている。

3. 無題文の種類

前の2.で、無題文をすべて無題文と規定したため、無題文には、モダリティやテンスの面でいろいろな文が含まれることになった。そこで、ここでは、モダリティやテンスの面から無題文を大きく3つに分類しておこう。1) 眼前描写型と、2) 現象叙述型と、3) 法則叙述型である。

1) 眼前描写型

眼前描写型というのは、話し手がそのときその場で知覚したことをそのまま描写するもので、次の(4)の最初の文のようなものである。

(4) 「何か音が聞こえるわ。耳を澄ませて！」

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p. 332)

この眼前描写型の無題文は、発話の現場にもっとも密着したものである。そのため、ふつう、書きことばではなく話しことばに現れる。述語は発話の時点である現在の事象を表すことが多い。³

ただし、発話の時点の直前におきた過去の事象や、次の(5)のように、発話の時点の直後におきると予想される未来の事象を表すこともある。

(5) 「いいか……今……血管がふさがる」 (新井素子『……絶句(上)』p. 407)

2) 現象叙述型

現象叙述型というのは、そのときその場で知覚したのではない現象を叙述するものである。つまり、次の(6)のように、過去におきた一回かぎりのできごとを述べる文や、その次の(7)のように、その場で知覚できない現在の一時的な状態を述べる文である。

(6) 大阪府立東住吉高校(大阪市平野区)に全国で初めて設けられる芸能文化科で二十六日、第一期生の合格発表があり=写真、府外からの三人を含む四十人の入学が決まった。 (『日本経済新聞』1993. 2. 27 朝刊 p. 35「窓」)

(7) ファーストフードもついにここまで——と思わせる「さしみバーガー」が、神

³ 三尾砂(1948)は「現象文」を「場の文」としているが、発話の現場に密着しているという意味で「場の文」といえるのは、1)の眼前描写型の文である。これまで、「現象文」を「判断文」と区別したいと考えるとき、頭にあったのは、1)の眼前描写型の文だったと思われる。眼前描写型の文は、モダリティの面でも話し手が知覚したことそのまま描写するという特殊性をもち、テンスの面でも基本的に現在を表すという特殊性をもっているからである。

もし、文の表現類型として、命令文や感情表出文などとならべるとすると、それは現象叙述型などをふくんだ現象文ではなく、眼前描写型の無題文だけにかぎった「眼前描写文」にするのがよいだろう。

戸・三宮の高架下で人気を呼んでいる。 (『朝日新聞』1993.4.15 夕刊 p.1)

この現象叙述型の無題文は、前の眼前描写型のものにくらべて、発話の現場に密着していない。そのため、話しことばより書きことばにとくによく現れる。述語のテンスには制限がない。使用例をみると、前の(6)のように過去を表すものが多いが、(7)のように現在を表すものや、未来を表すものもある。

3) 法則叙述型

法則叙述型というのは、「こういう条件があればかならずこういう現象がおきる」という法則を述べるもので、次の(8)のような文である。

(8) 「このボタンを押すと波長の違う音が出てくるんです」と僕は言った。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p.444)

この法則叙述型の無題文は、発話の現場との結びつきもなく、テンスの面でも現在や過去といった特定の時と結びついていない。

このように、モダリティやテンスの面からみると、無題文は、大きく、眼前描写型、現象叙述型、法則叙述型の3つに分類できる。

4. 無題文の構造

前の第2章でみた顕題文は、格成分や連体修飾部などの中の名詞が主題に指定されてできた文であった。たとえば、次の(9)のような文は、その次の(10)のような格関係の中の「この本」が主題に指定されたために、「この本」を含む格成分「この本を」に「は」がつき、それが文頭におかれてできた文だと考えた。

(9) この本は父が買ってくれた。

(10) 父がこの本を買ってくれた (こと)

主題

このような顕題文にたいして、無題文は、主題をもたない文である。主題をもたないので、主題に「は」がついたり、主題が文頭におかれたりといったことはおこらない。そのため、もとの格関係である次の(11)のような形と基本的に同じ形になる。

(11) 富士山が見える (こと)

つまり、無題文で「が」が使われるのは、主題を表す「は」が使われないからである。「は」が使われないので、格関係を表す格助詞の「が」がそのまま現れるのである。次の(12)の「出火する」のように、もとの格関係に「が」がない場合は、「が」も現れない。

- (12) 十八日午前九時ごろ、和歌山市弘西二〇七、末広荘アパート一階八号室、タクシー運転手、岡本康文さん(三一)方台所から出火、木造モルタル二階建てのアパート延べ約七四〇平方メートルを全焼し、約五十分後に消えた。

『毎日新聞』1980. 7. 18 夕刊 p. 15)

ところで、「は」が使われず「が」が使われる無題文の形は、次の(13)の「～たら」のような従属節の中の形と同じである。

- (13) 富士山が見えたら、教えてね。

(13)のような従属節は、何を主題にして述べるかを考える以前の段階、つまり「富士山が見える」という概念をただ概念としてそのまま表わしている段階のものだといえる。そうすると、無題文は、「富士山が見える」という概念をただ概念として表わしている段階の構造がそのまま現れたものだとみることができる。¹

5. 無題文の述語

無題文の述語としてもっともよく使われるのは、知覚を表す「見える」や「聞こえる」のほか、存在を表す「ある」や「残っている」、出現を表す「来る」や「出てくる」、できごとの発生を表す「起きる」や「始まる」や「死ぬ」、一時的な状態を表す「光っている」や「はやっている」のような動詞である。

もっとも典型的には、「～を」などをともなわず「～が」だけをともなうもの、つまり自動詞や、他動詞の受動形である。次の(14)の「初入荷する」は、その一例である。

- (14) カニといえば冬。が、北の海、オホーツクでは夏の味覚とか。八日朝、オホーツク産のズワイガニが大阪中央卸売市場に初入荷した。

『朝日新聞』1982. 5. 8 夕刊 p. 10)

反対に、動詞のなかでも無題文の述語になりにくいのは、「～を」をともなう人間の意志的な動作を表す他動詞である。そのような動詞が使われることもあるが、その場合は、次の(15)のように、ある人の意志的な動作を述べているというより、文全体でひとつのできごとを述べているという感じが強い。

- (15) 松下電器産業が小型の自転車にモーターを組み込んだ「電気自転車」を八月か

¹ 尾上圭介(1977:二)では、なぜ「事態の素材的表示形」が「眼前描写」に用いられるかが説明されている

らテスト販売する。

(『毎日新聞』1980.7.26 朝刊 p.8)

形容詞類は、動詞にくらべて無題文の述語になりにくい。ただ、次の(16)のように、一時的な状態をできごととして表すものは使われる。

(16) 大阪府豊能郡能勢町山辺地区の住民から十日夜、「水道の水が石油臭い」という苦情が十数件、同町役場に相次いだ。(『朝日新聞』1992.3.11 夕刊 p.15)

名詞類も、無題文の述語に使われにくい。ただ、「危篤」、「火事」、「大好評」、「急増中」など、一時的な状態をできごととして表せるものは使われる。次の(17)は「ばかうけ」が使われた例である。

(17) いま、鳥山明という若者が描いているマンガ「Dr・スランプ」がばかうけだ。

(『朝日新聞』1981.7.26 朝刊 p.4)

6. 無題文の主格名詞

無題文の主格名詞は、それまでの文脈に現れていないものであることが多い。たとえば、次の(18)は文章の最初の部分なので、この中の「新種の鳥」は、はじめて文脈に現れたものである。

(18) ほぼ百年ぶりに新種の鳥が日本で発見された。名づけてヤンバルクイナ、鮮紅色のくちばしと脚をもった南国の鳥である。

(『朝日新聞』1981.11.15 朝刊 p.1「天声人語」)

ただし、無題文の主格名詞は、はじめて文脈に現れたものにかぎられるわけではない。たとえば、次の(19)の最後の文の「祖父」は、その前に「祖父母」としてでてきているものである。

(19) 私、桜井みかげの両親は、そろって若死にしている。そこで祖父母が私を育ててくれた。中学校へあがる頃、祖父が死んだ。(吉本ばなな『キッチン』p.8)

一方、一人称の「私」や二人称の「あなた」などの名詞は、基本的に、文の主題になりやすいものである。そのため、無題文の主格名詞になりにくい。なかでも、眼前描写型のものは、とくにそうである。⁵

一人称の名詞がこの構文の主格名詞になりにくいのは、話し手が話し手自身の動作を外

⁵ 仁田義雄(1986:五 3)は、「現象描写文」の「現前状況の描写」というタイプについて、主格名詞が三人称の名詞に限られることを指摘している。

から客観的に観察したできごととして述べることがふつうはないからである。また、二人称の名詞がこの構文の主格名詞になりにくいのは、話し手が聞き手の動作をできごととしてわざわざ聞き手に伝える状況があまりないからである。

したがって、特別な文脈や状況では、一人称や二人称の名詞もこの構文の主格名詞になる。たとえば、次の(20)では、聞き手の愛称である「スウ」が主格名詞として使われている。

(20) 「スウが、ものすごい怖い顔でにらんでたやろ」

(田辺聖子『風をください』p. 298)

7. 無題文の機能

前の第2章でみた顕題文は、主題をたててその主題についてなにかを述べる働きをするものであったが、無題文は、できごとをできごととして、そのまま述べる働きをする。

なかでも、眼前描写型の無題文は、見たことをそのまま述べるという働きが強く感じられる。その意味で、眼前描写型の無題文は、名詞だけで述語のない、次の(21)の最初の文のような「一語文」とよく似ている。⁶

(21) 「ほら、ゆきちゃん飛行船。見てごらんなさい。きれいだよ。」

(吉本ばなな『キッチン』p. 55)

このように無題文はできごとをそのまま述べるのであるが、そのできごとは、あまり予想していなかったものや、人を驚かせるようなものであることも多い。次の(22)はそのような例である。

(22) 近鉄がまさかの逆転優勝を果たした。 (『毎日新聞』1980. 10. 12 朝刊 p. 16)

このような、意外性や驚きの意味が強くやすいのは、述語が形容詞や名詞、意志的な動作を表す動詞など、無題文にあまり使われないものときである。

8. 文章・談話の中の無題文

文章や談話の中で無題文が使われる位置は、文章・談話の初めや段落の初めなど、前の文脈とのつながりがなく、話題が変わるところが多い。たとえば、次の(23)は、新聞記事の最初に使われた文であり、その次の(24)は、会話で話題が変わるところに使われた文で

⁶ 「眼前描写」の文と一語文の対応については、尾上圭介(1973: § 2-1.)で指摘されている。

ある。

- (23) 世界で初めての本格的な海上空港・関西空港が、四日午前零時に開港した。

(『朝日新聞』1994.9.4 朝刊 p. 1)

- (24) 「そういえば今朝、君が帰ってすぐお袋から電話があったよ」

(内館牧子『思い出にかわるまで』p. 68)

顕題文では、前の文脈にでてきたものやそれに関係したものが文の主題に選ばれるのがふつうだった。そのため、顕題文は、基本的に、前の文脈の話題を引きついで、それを展開させていく働きをすることが多い。それにたいして、無題文は、そうした主題をもたないので、前の文脈とのつながりをもたないのがふつうである。そのため、無題文は、基本的に、文章・談話の中に新しい事物やできごとを導入したり、話題をかえる働きをすることが多い。

9. 無題文の否定文と質問文

無題文はそのままの形では否定文にしにくいことが、寺村秀夫(1979:3.)や仁田義雄(1986:五 5)などで指摘されている。たとえば、次の(25)のような否定文は不自然だという。

- (25) ?雨が降っていない。

しかし、次の(26)のように、述語が否定形になっている無題文は、けっしてめずらしいものではない。

- (26) そして早口で何やらまくしたててから電話を切り、

「娘が、おらん……」

と言った。

(宮本輝『夢見通りの人々』p. 84)

このような否定の無題文というのは、「娘」が「おる」か「おらん」かを述べるのではなく、「娘がおらん」というできごとがおきたことを述べている。このとき、(26)の「ん」が否定しているのは、動詞「おる」がもつ「存在」という語彙的な意味の部分だけである。いいかえると、「おらん」という否定形が使われるのは、「不在」を表す一語の動詞がないためにすぎないのである。

また、否定の無題文がもつ意味・機能については、寺村秀夫(1979:3.)や仁田義雄(1986:五 5)が、次のような特殊性を指摘している。たとえば、次の(27)のように、否定で無題文が使われるのは、「電話が通じる」という前提があるときであり、「電話が通じるはずな

のになぜか通じない」という意味になるというのである。

(27) 電話が通じない。

しかし、このような意味・機能は、否定だけでなく肯定の無題文でもよくみられるものである。たとえば、前の(26)を肯定にした「娘が、おる……」を例にすると、実際の会話でこういう文がでてくるのは、「娘がおらんはずだ」という前提があるときであり、「おらんはずの娘がおる」という意味で使われると思われる。とくに、述語が形容詞や名詞、意志的な動作を表す動詞など、無題文にあまり使われないものであるときは、このような意外性や驚きの意味がやすい。

次に無題文の質問文であるが、無題文は、そのままの形では質問文にしにくいことが、久野暲(1973:第25章)や仁田義雄(1986:五 5)などで指摘されている。たとえば、次の(28)のような質問文は、中立的な質問としてはぎこちないというのである。

(28) ?太郎が来ましたか。

このように無題文の質問文が使われないのは、久野が説明しているように、質問というのはなにかについて質問するのがふつうであって、唐突に、予想できないようなできごとを示して、それがおきる(または、おきた)かどうかを質問するようなことはあまりないからである。ただし、そのような状況があれば、次の(29)のように、無題文の質問文は使われる。

(29) 「ワハハ、陰気の夕立はいい、夕立のあと虹がたちますか？」

(田辺聖子『風をください』p. 150)

10. 無題文の周辺

この節の最後に、無題文と関係がある文として、「沖には船が浮かんでいる。」のような文と、「水が飲みたい。」のような文についてふれておきたい。

1) 「沖には船が浮かんでいる」型

「沖には船が浮かんでいる。」という文は、場所を表す成分に「は」がついているので、基本的には、題文だと考えられる。ただ、この「沖には」が「砂浜には」などと対比する意味を強くもっているときは、「沖」がこの文の主題になっているとはいいいにくく、この文は、「沖に船が浮かんでいる。」という無題文に近いものになる。

たとえば、次の(30)では、第2文の「北陸の町では」の「は」は、前の文の「四国の町」との対比でつけられたものであり、前の文がなければ「は」がつかない無題文になったと

考えられるものである。

- (30) ある四国の町の国鉄駅前に、駅長名で「放置自転車はゴミとして処分します」の掲示が出た。北陸の町では、駅前に放置されていた自転車などが、四トン積みトラック三台に山積みされて警察に運び込まれた。

(『朝日新聞』1980.7.16 夕刊 p.2「今日の問題」)

とくに、次の(31)のように、「～は」が「～が」の後にあると、対比的な意味が強くなり、さらに無題文に近くなる。

- (31) 罪名や受けた刑罰を政令で定め、それに該当すれば、個々の情状には一切かわりなく一律に適用される「政令恩赦」が、今回は実施される。

(『AERA』1989.1.24 p.16)

このように、場所の成分や時の成分に対比的な意味の強い「は」がついている文は、無題文に近いものである。

2) 「水が飲みたい」型

「水が飲みたい。」のような文は、表面的には主題を表す「～は」が使われていないので、無題文と同じ形をしている。そのため、金水敏(1990:3.2.)や益岡隆志(1991:第2部第4章)のように、このような文を「無題文」とする考えがでてくる。たしかに、次の(32)のような文は、「私は」などが省略されたという感じがあまりしないため、ここでいう無題文に近い性質をもっているといえる。

- (32) 晴江「耳が痛いけど――」 (山田太一『ふぞろいの林檎たちⅢ』p.154)

しかし、主題が省略されたと感じるかそうでないかは連続的なものであり、どこで線を引くかはむずかしい。たとえば、「水が飲みたい。」を、ほとんど同じ意味の「水を飲みたい。」にかえると、「私は」が省略されたという感じがすこし強くなるというふうに、連続的なのである。

ここでは、このような文は、すべて、表面には現れていないが、「私は」のような主題をもつ顕題文だと考える。そうすると、次の(33)の2つめの文と3つめの文は、表面的に「は」があるかどうかに関係なく、どちらも、同じように顕題文と分析されることになる。

- (33) 良雄「多少無茶なのは分っている。ただ、俺はいま、すまないが、がんがん仕事をしたいんだ。いろんな事を忘れちゃうような仕事をしたいんだ」

(山田太一『ふぞろいの林檎たちⅢ』p.119)

11. 無題文の構造と機能のまとめ

無題文の構造と機能について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 無題文の種類

ア) 眼前描写型

(34) なにか音が聞こえるわ。

イ) 現象叙述型

(35) きのう合格発表があった。

ウ) 法則叙述型

(36) ボタンを押すと、音がでる。

2) 無題文の構造

次の(37)のような格関係がそのまま文になった(38)のような形をしている。

(37) 富士山が 見える (こと)

(38) 富士山が 見える。

もっとも典型的には、自動詞や、他動詞の受動形
 もっとも典型的には、それまでの文脈に現れていない名詞

3) 無題文の機能

できごとを表す。文章・談話の中では、話題の導入や転換に使われる。

第2節 顕題文と無題文の選択

1. はじめに

前の第1節では、主題をもたない無題文の構造と機能をみた。この第2節では、第2章でみた顕題文とこの章の第1節でみた無題文の使いわけを考える。どんな条件があれば顕題文になり、どんな条件があれば無題文になるのかを、なるべく客観的な形で示したい。

無題文については、第1節であげたように、これまでにかなり多くの研究がある。しかし、顕題文と無題文の選択を中心的に扱った研究は、永野賢(1965)、野田尚史(1984)、馬場俊臣(1985)などがあるだけである。

ここでは、顕題文と無題文の使いわけを、5つの面、つまり、述語の面、主格名詞の面、文の機能の面、語順の面、文章・談話の中での機能の面からあきらかにしていきたい。

2. 顕題文になりやすい述語

述語のなかには、それが文の述語になると、かならず顕題文になるものから、かならず無題文になるものまで、いろいろある。ここでは、かならず顕題文になる述語と、顕題文になりやすい述語をみていく。

まず、かならず顕題文になる述語としては、次の(ア)と(イ)がある。これらの述語は、そのときその場で知覚したことをそのまま表すのではなく、その事態がほかの時間にもおきることを考えたうえで述べる述語である。

(ア)恒常的な状態を表す述語

(イ)くりかえしおきる動作やできごとを表す述語

(ア)は、一時的な状態を表すことがなく、いつも恒常的な状態を表す述語である。「天才」のような名詞や、「高い」のような形容詞が代表的なものである。動詞でも、「すぐれている」のようなものや、「(ピアノが)弾ける」のような人の能力を表す可能形などは、

ここに入る。こうしたものが述語になっている文は、次の(1)のように、かならず顕題文になる。

(1) バクテリア類が生物生態系全体の中で果たしている役割はたいへん重要である。

(中尾佐助『分類の発想』p. 240)

(イ)は、本来、一回かぎりの動作やできごとを表す動詞が、くりかえし起きるできごと、つまり、真理や習慣を表す場合である。このような場合も、次の(2)のように、かならず顕題文になる。

(2) ゴリラは、毎日昼と夜の二回寝床をつくって寝る。

(立花隆『サル学の現在』p. 207)

ただし、くりかえし起きるできごとを表す文でも、次の(3)のように、「～(する)と」などで示された条件がととのったときだけに起きるできごとを表すものは、一回、一回のできごとを表す文として、無題文になることがある。

(3) 空が澄み始めた秋空。夜八時すぎになると東の空に「ペガサスの大四角形」が現れる。

(『朝日新聞』1980. 9. 10 夕刊 p. 7 「星空ノート」)

このほか、次の(ウ)も、かならず顕題文になる述語だといえる。

(ウ)心の中の状態を表す述語

(ウ)は、外からの観察ではわからない心の中の状態を表す述語である。具体的にいうと、「うれしい」、「気になる」のような感情・感覚を表す形容詞や動詞、「思う」のような精神活動を表す動詞、「行こう」のような動詞の意志形などである。こうしたものが述語になっている文も、次の(4)のように、かならず顕題文になる。

(4) 朝起きてから、今日はろくに何も食べていないということに気付くと、真規は急に空腹を感じた。

(鷲沢萌『少年たちの終わらない夜』p. 44)

次に、かならず顕題文になるとはいえないが、比較的、顕題文になりやすい述語としては、次の(エ)がある。

(エ)意志的な動作を表す他動詞

この(エ)は、典型的には、人が主格にくる他動詞である。具体的には、「売る」や「決める」、「発表する」のような動詞である。このような動詞が述語になっているときは、次の(5)のように、顕題文になりやすい。

(5) 陸上競技場の下はでっかい浄水場に——大阪府水道部は二十三日、こんな新浄水場の建設計画を発表した。

(『毎日新聞』1982. 3. 24 朝刊 p. 22)

3. 無題文になりやすい述語

前の2. であげた述語とは反対に、かならず無題文になる述語としては、次の(オ)がある。

(オ) その場で知覚したできごとをそのまま表す述語

(オ)は、その場で見たことや聞いたことを反射的に言うときの述語である。こうした状況でよく使われるのは、一時的な状態や一回かぎりのできごとを表す「見える」や「聞こえる」、「来る」のような述語である。たとえば、次の(6)の述語「いらした」は、その場で見たことをそのまま伝えるものなので、無題文になっている。

(6) 「るり子ーッ、高原さんがいらしたわよーッ」

(内館牧子『思い出にかわるまで』 p. 46)

また、かならず無題文になるとはいえないが、比較的、無題文になりやすい述語としては、次の(カ)がある。

(カ) できごとを表す自動詞や、他動詞の受動形

この(カ)は、典型的には、物やことが主格にくる自動詞や、他動詞の受動形である。具体的には、「売れる」や「決まる」、「発表される」のような、できごとを表す動詞である。このような動詞が述語になっているときは、主格名詞が前の文脈にでてきているといったことがないかぎり、次の(7)のように、無題文になりやすい。

(7) 吹田市の万国博記念公園内にある陸上競技場の地下に、大阪府営水道の浄水場を設置することが二十三日、大阪府と日本万国博覧会記念協会から発表された。

(『朝日新聞』1982. 3. 24 朝刊 p. 22)

4. 顕題文になりやすい主格名詞

名詞のなかには、それが主格名詞として使われると、顕題文になりやすいものと、無題文になりやすいものがある。ここでは、顕題文になりやすい主格名詞をみていく。

比較的、顕題文になりやすい主格名詞としては、次の(キ)がある。

(キ) 話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞

(キ)は、話の現場や前の文脈に存在する人や物を指す「私」や「あいつ」、「これ」、「それ」のような名詞である。こうしたものが主格になっているときは、次の(8)のように、主格名詞が主題になることが多い。

(8) 「これは楽器のお礼です。受けとって下さい」と僕は言った。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p. 446)

この(キ)の延長として、次の(ク)や(ケ)のような名詞が主格名詞になっているときも、比較的、題文になりやすい。

(ク)話の現場や前の文脈と関係のある名詞

(ケ)いつでも聞き手の意識の中にある名詞

(ク)は、次の(9)の2つめの文の「原因」のような名詞である。この「原因」は、「パイロットの家庭が大変な原因」であり、前の文と関係がある。

(9) パイロットの家庭は、大変なんだ。原因はすべて時差にある。

(鎌田慧(編)『日本人の仕事』p. 259)

(ケ)は、新聞の中で使われた、次の(10)の「気象庁」のような名詞である。このような名詞は、新聞を読む読者の意識の中にいつもあるように扱われる。こうしたものが主格になっているときは、主格名詞と述語との結びつきに意外性があるといった場合をのぞいて、題文になりやすい。

(10) 気象庁は七日、阪神大震災（兵庫県南部地震）の現地調査結果を発表した。

(『朝日新聞』1995.2.8 朝刊 p. 1)

5. 無題文になりやすい主格名詞

前の4. であげた主格名詞とは反対に、かならず無題文になる主格名詞としては、次の(コ)がある。

(コ)不定名詞

(コ)は、「だれか」や「なにか」、「知らない人」のように、何をさすのか特定できない名詞である。こうした名詞が主格になっているときは、次の(11)のように、無題文になる。

(11) 十一時に誰かがやってきた。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p. 186)

ただし、不定名詞でも、次の(12)の最後の文の「その誰か」のように、特定のものを指す特殊な用法のときには、題文になることがある。

(12) 十一時に誰かがやってきた。事のなりゆきからいって誰かがやってくる頃だとおもっていたので、私はあまり驚かなかった。しかし、その誰かは呼び鈴も押さずに、私の部屋の扉に体あたりしていた。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p. 186)

次に、かならず無題文になるとはいえないが、比較的、無題文になりやすい主格名詞としては、次の(サ)がある。

(サ) 話の現場や前の文脈にないものを指す名詞

この(サ)は、話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞でもなく、いつも聞き手の意識の中にある名詞でもなく、はじめて文脈に現れる名詞である。このような名詞が主格になっているときは、述語が恒常的な状態を表すといったことがないかぎり、次の(13)のように、無題文になりやすい。

(13) ところが、その翌年、一九八九年の初夏にパソコン雑誌で「サージョンウイルス」が騒がれた。 (山本隆雄(他)『コンピュータ・ウイルス』p. 15)

6. 文の機能からみた顕題文と無題文

文の機能という点から、顕題文と無題文の使い分けをみると、基本的には、次のようなことがいえる。なにかについて説明する文は、顕題文になり、できごとの発生を述べる文は、無題文になるということである。

ただ、文の機能というのは、客観的にはとらえにくい。そこで、客観的にわかりやすい手がかりをさがすと、次のようなものが見つかる。

まず、顕題文になりやすい場合としては、次の(シ)がある。

(シ) 述語を修飾する比較的長い成分が主格名詞と述語の間に入っている

これは、理由や目的などを詳しく述べるような成分が主格名詞と述語の間に入ると、できごとを表す性格が弱くなり、説明的な性格が強くなるため、顕題文になりやすいということである。

たとえば、次の(14)と(15)をくらべると、(14)は無題文になっているのにたいして、(15)は顕題文になっている。この違いは、(14)では、主格名詞と述語の間になにもないのにたいして、(15)では、「人気作家マイクル・クライトンのベストセラーの映画化というだけでなく、ダイナミックなビジネス展開でも」という比較的長い説明的な成分が主格名詞と述語の間に入っていることが原因として考えられる。

(14) 最近、「特定の食物」摂取後の運動、あるいは食事内容によらず「食後二時間以内」の運動中に出るショックが注目されている。

(『朝日新聞』1992. 3. 5 朝刊 p. 16 「健康づくりのワナ」)

- (15) 日本公開が間近に迫った『ジュラシック・パーク』は、人気作家マイクル・クライトンのベストセラーの映画化というだけでなく、ダイナミックなビジネス展開でも注目を集めている。 (『日経トレンディ』1993.8 p.86)

これとは反対に、無題文になりやすい場合としては、次の(ス)がある。

- (ス) 文が表す内容に意外性や驚きがある

これは、「驚いたことに」や「世界で初めて」、「突然」のような語句がついていたり、または常識的に考えて意外性のある内容であったりするとき、できごとを表す性格が強くなるため、無題文になりやすいということである。

たとえば、次の(16)と(17)はほぼ同じ事実を述べているが、(16)は顕題文になり、(17)は無題文になっている。これは、(16)に「初めて」ということばが使われていることも原因になっていると考えられる。

- (16) 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部(岡田英男部長)は十六日までに奈良市佐紀町、平城宮跡の幹線排水路の東大溝跡で奈良時代の手のひら大の白木の彫刻面を見つけた。 (『毎日新聞』1982.6.17 朝刊 p.3)

- (17) 奈良平城宮の幹線排水路「東大溝」跡を発掘調査している奈良国立文化財研究所が奈良時代の木彫り面を初めて見つけ、十六日公開した。 (『朝日新聞』1982.6.17 朝刊 p.22)

7. 語順からみた顕題文と無題文

語順という点から、顕題文と無題文の使いわけをみると、次のようなことがいえる。それは、主格が対格などより前にあるふつうの語順の文にくらべて、対格などが主格より前にある特別な語順の文は、無題文になりやすいということである。

たとえば、次の(18)と(19)はよく似たことを述べているが、語順が違っている。(18)は主格が対格より前にあるふつうの語順の文であるが、(19)は対格が長く複雑なために、対格が主格より前におかれた特別な語順の文である。(18)は主題の「は」をもつ顕題文になっているのにたいして、(19)は主題の「は」をもたない無題文になっている。

- (18) オムロンは家庭用向け地震警報装置「揺れっ太」＝写真＝を開発、二十日から発売する。 (『日本経済新聞』1995.7.19 朝刊 p.17)

- (19) 地震発生時に、震度に合わせて「火を消しなさい」などの音声でとるべき行動を指示する、一般家庭用地震警報器「揺れっ太」＝写真＝を、オムロンが 20日

から、通信販売ルートを中心に売り出す。

(『朝日新聞』1995.7.19 朝刊 p.15 「情報ファイル」)

この(19)のような文が無題文になるのは、主格が対格などより後ろにある場合、それに「は」をつけると、対比的な意味がでてきやすいからである。それをさけるために、「は」を使わない無題文になるのである。

8. 文章・談話の中での顕題文と無題文

文章・談話の中での機能という点から、顕題文と無題文の使いわけをみると、次のようなことがいえる。文章・談話の中で、新しい場面を設定したり、話題をかえるようなときには、無題文が使われやすい。反対に、話題をかえないで継続させていくようなときには、顕題文が使われやすい。

たとえば、次の(20)の最初の文はこの記事の最初の文で、話題を設定する機能をもっている。そのため、この文は無題文になっている。それにたいして、この文に続く次の文は、最初の文で設定された「片腕の小学生投手」の話題を継続させる機能をもっている。そのため、この文は、「将来はプロ野球の選手になりたいという少年」を主題にした文になっている。

(20) 大分県の少年野球チームで、片腕の小学生投手が活躍している。将来はプロ野球の選手になりたいという少年は、「大分のアボット投手」と呼ばれ注目を集めている。 (『日本経済新聞』1994.7.27 夕刊 p.15)

なお、文章・談話の中で、顕題文と無題文がどう使い分けられるかについては、「第6章 文章・談話の中の主題」でさらに詳しく述べる。

9. 顕題文と無題文のゆれ

ここまで、顕題文と無題文の選択の規則をみてきた。ただ、実際には、同じような文でも、顕題文になったり、無題文になったりする「ゆれ」もみられる。

たとえば、次の(21)と(22)は、どちらも、同じようなことが書かれた新聞記事の最初の文であり、文の形もほとんど同じである。しかし、(21)は無題文、(22)は顕題文になっている。

(21) インドのラオ外相が十七日午後六時前、大阪空港着の日航機で来日した。

(『朝日新聞』1982.4.18 朝刊 p.2)

- (22) インドのナラシマ・ラオ外相は十七日午後六時前、大阪空港着の日航機で来日した。
 (『毎日新聞』1982.4.18 朝刊 p.2)

また、長友和彦(1991)は、川端康成の小説『雪国』の冒頭部分の文章を使って、「は」と「が」のゆれをアンケート調査している。それによると、たとえば、次の(23)の【 】に、原文と同じ「が」を選んだ人が約 30%、原文と違う「は」を選んだ人が約 70%という結果がでていいる。

- (23) 汽車が動き出しても、彼女は窓から胸をいれなかった。そうして線路の下を歩いている駅長に追いつくと、
 「駅長さあん、今度の休みの日に家へお帰りって、弟に言ってやって下さあい。」
 「はあい。」と、駅長【 】声を張りあげた。

このようなゆれがあるため、この節で示した題文と無題文の選択の規則も、「こういう条件をみたせば題文になりやすい」といった相対的なものが多くなり、「こういう条件をみたせばかならず題文になる」といった絶対的なものは少なかった。

これからの課題は、この選択の規則を、こうしたゆれの度合いまで予測できるような規則にすることである。⁷

そのための方法としては、それぞれの条件に重みをつけて数値化することが考えられる。たとえば、題文を選ぶ人の割合を、この文なら 70%ぐらいというように予想する規則をつくるなら、次のようにする。まず、どの文にも基本の持ち点として 50 があたえられる。そして、題文になりやすい条件があれば、そのたびに点数が加えられるようにする。たとえば、「直前の文に出てきた名詞がその文の主格名詞になっているときは+50」というようにである。また、無題文になりやすい条件があれば、そのたびに点数が引かれるようにする。たとえば、「主格より前に「突然」という語があるときは、-40」というようにである。

ひとつの文が、題文になりやすい条件と無題文になりやすい条件を同時にもっているときもあるが、はじめの持ち点 50 にひとつひとつの条件による点数を加えたり引いたりしていくと、最終的な点数がでてくる。その点数が 100 以上であれば、かならず題文になり、0 以下であれば、かならず無題文になる。そして、その間の点数であれば、その点数が、題文を選ぶ人のパーセンテージになるのである。

⁷ ゆれにも規則性があることを見つけようとする研究に、長友和彦(1992)がある。

ただ、ひとつひとつの条件に点数をつけるためには、非常に多くの調査が必要であり、今のところ、具体的な形で、条件と点数を示すことはできない。

10. 顕題文と無題文の使いわけのまとめ

この節のまとめとして、典型的な顕題文と、典型的な無題文の違いを表にすると、次の(24)のようになる。

(24)

| | 顕 題 文 | 無 題 文 |
|------|--|---|
| 述 語 | その場で知覚できない 恒常的、くりかえしの事態 意志的な動作を表す他動詞 | その場で知覚できる 一時的、一回かぎりの事態 できごとを表す自動詞 |
| 主格名詞 | 疑問語 話の現場や文脈にある名詞 | 不定名詞 話の現場や文脈にない名詞 |
| 文の機能 | なにかについて説明する | 意外なできごとの発生を表す |
| 語 順 | 主格－他の格成分－述語 | 他の格成分－主格－述語 |
| 談話の中 | 話題を継続する | 話題を設定したり転換する |

第 4 章

陰 題 文 の 構 造 と 機 能

第1節 陰 題 文

1. はじめに

この節では、主題の「は」が使われない文の2種類のうち、述語が主題になっていると考えられる陰題文、つまり「君が主役だ。」のような文についてみていく。

「君が主役だ。」という文は、主題の「は」をもっていない。しかし、この文は、「主役」が「は」によって主題になっている「主役は君だ。」という文とほぼ同じ意味で使われる。そこで、ここでは、「君が主役だ。」のような文を、実質的に「主役」が主題になっている文と考えることにする。

このような文は、三尾砂(1948)によって「転移文」と名づけられたものだが、これまであまり詳しい研究はおこなわれてこなかった。とくに、述語が名詞でなく、動詞や形容詞になっている文、つまり「だれがそんなことを言ったんだ。」のような文については、ほとんど研究されていない。

この節では、このような陰題文について、その構造や機能、述語の性質、前後の文脈とのつながりなど、いろいろな角度から調べていく。

2. 陰題文の構造

前の第3章でみた無題文は、次の(1)のような格関係を表す段階の構造がそのまま現れたものであった。

(1) 富士山が見える (こと)

この章でとりあげる陰題文も、無題文と同じように、次の(2)のような格関係の段階の構造がそのまま現れたものだと考えられる。

(2) 君が主役 (であること)

この点では、陰題文は、無題文と同じ構造をもっている。しかし、この2つの構文は、

使われる述語が違う。

無題文では、述語は、典型的には、できごとを表す動詞だった。それにたいして、陰題文では、述語は、典型的には、次の(3)のように、名詞である。

(3) 「あ、あれが、おれのところに来た女性記者だよ」

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』p.64)

同じように主題の「は」が使われない構造をもっている、述語ができごとを表す動詞のときは、無題文になるが、述語が名詞のときは陰題文になるのである。

これは、次のように説明できる。述語が名詞になっている文は、主題をもたない無題文にはなりにくいので、ふつう主題をもつ文になる。「主役は君だ。」のように「～は」があれば、その名詞が主題であり、問題はない。「君が主役だ。」のように「～は」がないときは、「君」か「主役」のどちらかが主題にならなければならない。しかし、「君」のほうは、「君が」になっていることで、主題でないことを表している。したがって、「主役」のほう主題と解釈されることになる。

このような陰題文の主題は、「は」によって積極的にはっきり表される「主役は君だ。」のような文の主題とは違う。「君が主役だ。」のような文の主題は、「は」で表される主題がないために結果として主題の役割をはたすことになるもので、消極的で間接的なものである。この違いをはっきり言い表したいときは、「は」によって表される主題を「明示的な主題」とよび、陰題文の主題を「暗示的な主題」とよぶことにする。¹

3. 陰題文の述語

陰題文は、述語に名詞が使われるのがもっとも典型的である。述語として使われる名詞は、次の(4)のように、前の文脈にでてきたものを指す名詞であることもあるが、その次の(5)のように、前の文脈にでてきたもの（この場合は「ハーレクイン」）に関係のある名詞であることも多い。

(4) 「これが君の言っていた大変なことなのかい?」

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p.354)

(5) こうした作品作り、編集に加え、雑誌的な販売方式がハーレクインの特徴だ。

¹ 三上章(1953)では、ここでいう「明示的な主題」を「顕題」、「暗示的な主題」を「陰題」とよんでいる。

『日本経済新聞』1993.5.29 朝刊 p.36)

(5)の「特徴」のような、前の文脈にでてきたものに関係のある名詞というのは、第2章第3節でみた「かき料理は広島が本場だ。」のような述語連体部主題文の述語になる名詞、つまり「特徴」、「原因」、「目的」のような名詞と重なるものが多い。

陰題文の述語としては、このような名詞のほか、動詞や形容詞が使われることもある。動詞が使われる場合は、次の(6)のように、「のだ」がついた形になるか、その次の(7)の「握っている」のように、ほとんど意味をもたない形式的な動詞が使われることが多い。

(6) 「この映画観ましたよ」と僕は言った。

「誰がでてるの？」

(村上春樹『ノルウェイの森(上)』p.252)

(7) もう少しパワーとスピードをつけて貴花田ならではの型を早く身につけることが、横綱へのカギを握っている。

(『毎日新聞』1992.2.28 朝刊 p.23「ぶりずむ貴花田」)

前の(6)のような、動詞に「のだ」がついた文は、「の」によって動詞が名詞化されるため、実質的には、名詞述語の文と同じになる。²

また、前の(7)のような、述語が形式的な動詞になっている文は、実質的には、次の(8)のような名詞述語の文と同じだといえる。

(8) もう少しパワーとスピードをつけて貴花田ならではの型を早く身につけることが、横綱へのカギだ。

一方、陰題文の述語として形容詞が使われるときには、特別な理由がないかぎり、「のだ」は必要ではない。ただし、次の(9)の最後の文のように、形容詞は恒常的な状態を表すもので、文の形は比較を表す「～のほうが……。」や「～がいちばん……。」になっていることが多い。

(9) はっきりいって、調理師免許なんて糞の役にも立ちません。それよりも知識を身につけ、腕を磨くことのほうが大切です。

(『別冊宝島 165 もっと食べろ！』p.69)

² ただし、意志を表す文のように、もともと動詞に「のだ」がつかない場合は、「のだ」がつかない形で使われる。次の(a)の最後の文がその例である。

(a) 「下の工場からなんだけど、水口さんが来ていてオヤジさん出してくれって、また良夫に怪我をさせた上、またも押しかけてくる水口という男の図々しさに、るり子は激しい憤りを覚えた。
「いいわ。私が行ってくる」

(内館牧子『思い出にかわるまで』p.42)

このように、陰題文では、述語に使われるのは、名詞のほか、「のだ」がついた動詞や、恒常的な状態を表す形容詞である。前の第3章でみた無題文では、述語に使われるのは、「のだ」がつかない動詞や一時的な状態を表す形容詞だった。このように、陰題文の述語は、無題文の述語とは違うのである。

4. 陰題文の主格名詞

陰題文の主格名詞としてよく使われるのは、話しことばでは、「これ」、「それ」、「私」、「君」のような名詞である。これらは、話の現場に存在するものや、前の文脈にでてきたものを指す名詞である。次の(10)と(11)は、それぞれ主格名詞が「それ」と「君」になっている例である。

- (10) 「それがダイヤを見分ける、理想的な明るさなの」
(逢坂剛『カディスの赤い星』p. 171)

- (11) 「ええ。でもずいぶんきれいにかたづいていたでしょ？」
「君がかたづけたの？」
(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p. 499)

また、次の(12)の最後の文のように、「だれ」、「どれ」のような疑問語もよく使われる。

- (12) 夫がめったにない泊まりの出張の日。二歳になる娘との会話。
私「きょうは、お父さん帰って来ないよ」
娘「じゃあ、だれが帰って来るの」
(『朝日新聞』1991. 9. 29 朝刊 日曜版 p. 7 「いわせてもらお」)

書きことばでは、陰題文の主格名詞として、次の(13)のように、前の文脈をうける「これ」や「それ」もよく使われるが、その次の(14)のように、「……の」という節もよく使われる。³

- (13) 口ぐせの「まじめなけいこと、一生懸命な相撲」は見ていて胸をうたれる。これが貴ノ花の人気の秘密だ。
(『朝日新聞』1980. 7. 17 朝刊 p. 17 「東西トーザイ」)

- (14) 神戸に住んで、大阪で仕事し、京都で遊ぶ、というのが関西人の理想のライフ

³ 主格名詞が「……の」という節になっている文については、備前徹(1983)が、主格名詞の分類をおこない、主格名詞と述語名詞との関係も考察している。

スタイルらしい。

(『あまから手帖』1992.3 p.10)

このように、陰題文の主格名詞としてよく使われるのは、話の現場にあるものや前の文脈にでてきたものを指す「これ」、「それ」、「私」のような名詞や、疑問を表す「だれ」や「どれ」、そして「……の」という節である。前の第3章でみた無題文では、主格名詞としてよく使われるのは、このような名詞ではなく、前の文脈に出てきていない名詞だった。ということは、主格名詞についても、陰題文は、無題文とは対照的だということである。

5. 話しことばでの陰題文の機能

陰題文というのは、かなり特殊な構文である。主題をもつ文なのに、主題を明示的に表す「は」を使わず、主題をもたない無題文と同じような形をしているからである。では、このような特殊な文をわざわざ使うのは、どんなときだろうか。

主題を「は」で表す文では、次の(15)のように、主題が伝えたいことより前にくる。それにたいして、主題を「は」で表さない陰題文では、その次の(16)のように、伝えたいことが主題より前にくる。

(15) 主役 は 君 だ。

[主題] [伝えたいこと]

(16) 君 が 主役 だ。

[伝えたいこと] [主題]

ということは、この(16)のような陰題文が使われるのは、伝えたいことを前におきたいときか、主題を後ろにおきたいときである。

陰題文がよく使われるのは、話しことばでは、次の(ア)や(イ)のようなときである。

(ア) 主格名詞が、話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞のとき

(イ) 主格名詞が疑問語のとき

(ア)で陰題文が使われるのは、「これ」や「私」のような名詞を、文の前のほうにおきたいからである。そのほうが、話の現場や前の文脈とのつながりがスムーズになってよいのである。¹

このことは、次の(17)と(18)をくらべてみると、よくわかる。(17)の「そこ」は、話の

¹ 文脈指示語がほかの名詞より文の前のほうにきやすいことは、佐伯哲夫(1960)で指摘されている。

現場の近くの場所なので、陰題文が使われている。それにたいして、(18)の「南のたまり」は、頭のなかで考えた場所なので、陰題文の「南のたまりが出口だ。」ではなく、「出口は南のたまりだ。」という文が使われている。

(17) 「そこが出口よ」と彼女は言った。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p. 455)

(18) 「いや、違うね。出口はどう考えてもあそこしかないんだ。俺は何もかもを隅から隅まで考え抜いたんだ。出口は南のたまりだ。……[省略]……」

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』p. 591)

また、(イ)で陰題文が使われるのは、「だれ」や「どれ」のような疑問語を文の前のほうにおきたいからである。そのほうが、その文が質問文だということを、はやく聞き手に知らせることができてよいのである。⁵

実際、疑問語がある質問文では、話し手が言いたいのは疑問語だけであり、述語の部分は文としての形式を整える働きしかしていないことが多い。そのため、話しことばでは、次の(19)のように述語がない文もよくみられる。

(19) 「怖いんだもの」

「何が？」

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(下)』p. 263)

6. 書きことばでの陰題文の機能

書きことばでも、陰題文が使われるのは、伝えたいことを前におきたいときか、主題を後ろにおきたいときである。

書きことばで陰題文がよく使われるのは、次の(ウ)や(エ)のようなときである。

(ウ) 主格名詞が、前の文脈にあるものを指す名詞のとき

(エ) 主格名詞が、「……の」という長い節になっているとき

(ウ)で陰題文が使われるのは、話しことばの場合と同じで、「これ」や「それ」を文の前のほうにおくことによって、前の文脈とのつながりをスムーズにするためである。

(エ)は、もうすこし複雑である。次の(20)の最初の文を例にすると、ここで陰題文が使われるのは、一方では、長い成分を文の前のほうにおくという日本語の語順の一般的な傾

⁵ 半藤英明(1987)は、疑問語が「が」をともなって文頭に来やすいことを指摘し、その理由を、疑問文だと認識しやすくするためだろうとしている。

向からである。⁶ しかし、一方では、主題である「淀川」を文の後ろのほうにおいて、「淀川」が主題になっている後ろの文とのつながりをスムーズにしたいからでもある。

- (20) 大阪と京都の境から次第に川幅を広げ、堂々と街を横切りつつ大阪湾に流れ込むのが淀川だ。 広々とした河川敷の野草広場には天然記念物のイタセンパラやアユモドキなどの魚をはじめ、多くの野生生物が棲息。また、テニスコート、野球場、サッカー場などの施設が充実していることも大きな魅力だ。

(『Kansai Walker』1994.8.9 p.40)

このほか、書きことばで陰題文が使われる場合として、次の(21)の最後の文のようものがある。

- (21) 絵画の歴史には、時に奇蹟としか言いようのない不思議が起こることがある。様式の発展とか、時代の動きなどというものとはまったく無関係に、思いがけない傑作が、まるで別の星の世界から突然やって来たかのように、われわれの眼の前に出現する場合がある。一八九七年のパリのサロン・デザンデパンダン(アンデパンダン)展に並べられたルソーの「眠るジプシー女」の場合がそれであった。

(高階秀爾『続 名画を見る眼』p.107)

この(21)は、主題を「は」で明示した次の(22)とほぼ同じ意味を表す。ただ、(22)は(21)の最後の文としては使いにくい。(22)のようにすると、「それ」は「様式の発展とか、時代の動きなどというものとはまったく無関係に、思いがけない傑作が、まるで別の星の世界から突然やって来たかのように、われわれの眼の前に出現する場合」のすべてを指すと解釈されやすい。

- (22) それは、一八九七年のパリのサロン・デザンデパンダン(アンデパンダン)展に並べられたルソーの「眠るジプシー女」の場合であった。

そのため、「～がある。」や「～が多い。」など存在を表す文の後で、その例をあげるときは、「～がそれである。」や「～がそうである。」という文が使われるのである。

7. 陰題文の否定文と質問文

前の第3章の9.で述べたように、無題文は、否定文としてはかなり使われるが、質問文としてはほとんど使われない。それにたいして、陰題文は反対で、否定文としてはあま

⁶ 成分の長さと言順の関係は、佐伯哲夫(1960)で指摘されている。

り使われないが、質問文としてはよく使われる。

まず、否定文であるが、「主役は君だ。」の否定文である次の(23)は自然なのに、「君が主役だ。」の否定文であるその次の(24)は不自然になる。

(23) 主役は君ではない。

(24) ?君が主役ではない。

(24)が不自然になるのは、次のような事情からである。(24)では、「ない」の否定のしかたとしては、次の(25)と(26)が考えられる。

(25) 君が [主役ではない]。

(26) [君が主役] ではない。

このうち、(25)のように「主役」の部分だけを否定するほうは、次の(27)のような例もあるが、あまりなく、とくに述語が名詞の例はほとんどない。

(27) 「ない！」

桃子は、慌ててスーツケースを開けた。

「何がないの？」

「パスポートがないの」 (鎌田敏夫『男女七人夏物語(下)』p. 259)

一方、前の(26)のような否定、つまり「君が主役だ」という結びつきを否定するほうは、次の(28)の最後の文のように、「～のではない」や「～わけではない」の形になりやすく、単純な否定形ではあまり使われない。

(28) 「ちょっと、待ちなさいッ」

追いかけてようとするるり子を、吉野が止めた。

「今の人が悪いんじゃないんですよ」

(内館牧子『思い出にかわるまで』p. 43)

ただし、述語が名詞のときは、次の(29)のように、単純な否定形が使われることもある。「の」や「わけ」は述語を名詞化するものなので、述語が名詞のときは、こうしたものを使わずにすませることができるからである。

(29) 県教委は「進学率アップだけが目的ではない」としているが、旧制中学系を中心にした進学校に手厚い配分になっており、最高で四百二十四万円（鳥取西）、最低で六十二万円（米子）。 (『朝日新聞』1993. 2. 2 朝刊 p. 23)

一方、陰題文の質問文のほうは、非常によくみられる。次の(30)のような疑問語をもつ質問文も、その次の(31)のような疑問語をもたない質問文も、よく使われる。

(30) 「どの辺がスキー場になるんですか」 (増田みず子『シングル・セル』p. 150)

(31) 「あなたが代表者ですか？」 (新井素子『……絶句(上)』p. 259)

8. 陰題文の周辺

この節の最後に、陰題文に関係が深い文を3つとりあげる。1つはこの構文の一種である「ここにこの問題のむずかしさがある。」のような文、2つめは無題文との間に位置づけられる「終点までこの電車が先に到着します。」のような文、3つめは無題文に近い「そこに現れたのが陽子だった。」のような文である。

1) 「ここにこの問題のむずかしさがある」型

陰題文は、典型的には、述語が主題になっていて、伝えたい部分は「が」格にある。しかし、次の(32)のように、伝えたい部分が「が」格ではなく、「に」格などになっている文もある。

(32) ここに この問題のむずかしさがある。

[伝えたい部分] [主題]

この(32)は、「～は」という明示的な主題をもっていないが、主格の部分が主題の役割をはたして、次の(33)とほぼ同じ意味になる。したがって、このような文は、陰題文の一種だと考えるのがよいだろう。

(33) この問題のむずかしさはここにある。

また、伝えたい部分が「に」格ではなく、次の(34)のように、理由を表す「どうして」や「なぜ」になっている例も同じ種類のものと考えられる。

(34) 「なんで美鈴ちゃんが止めに入れへんの？」

(宮本輝『夢見通りの人々』p. 29)

2) 「終点までこの電車が先に到着します」型

陰題文と無題文は、形が基本的に同じであるため、区別がつきにくいときがある。というより、実際は、典型的な陰題文と典型的な無題文の間に、2つの構文の中間的なものがあると考えたほうがよい。⁷

たとえば、次の(35)のような例がそうである。

(35) 西宮北口までこの電車が先に到着いたします。

⁷ 2つの構文の連続性については、菊地康人(1997b)が詳しい。

(阪急電鉄神戸線梅田発高速神戸行き普通電車のアナウンス 1993. 3)

この文は、次の(36)のような意味と解釈すれば、「西宮北口まで先に到着いたします」が主題になっている陰題文になりそうだが、単にこれからおきるできごとを述べていると解釈すれば、主題をもたない無題文になりそうであり、2つの構文の間に位置づけられる。

(36) 西宮北口まで先に到着するのは、この電車です。

3) 「そこに現れたのが陽子だった」型

「そこに現れたのが陽子だった。」のような文は、述語が恒常的な状態を表す名詞で、陰題文のようにみえる。しかし、このような文は、陰題文より無題文に近いものだと考える。

それは、陰題文とは違って、述語名詞が主題になっていないからである。次の(37)の2つめの文を例にすると、この文は「米飯類やめん類など、主食になる商品」を「～は」という主題にしたその次の(38)にかえられない。むしろその次の(39)のような無題文に近い。

(37) このところの不景気をもものともせず、冷凍食品の売り上げが伸びています。特に好調なのが米飯類やめん類など、主食になる商品。家庭用の冷凍食品と云えば、かつてはフライ類のお総菜が中心でしたが、ピラフや焼きおにぎり、うどんなどの割合が年々拡大しています。

(『朝日新聞』1992. 10. 24 夕刊 p. 7「カタログ」)

(38) 米飯類やめん類など、主食になる商品は特に好調です。

(39) 米飯類やめん類など、主食になる商品が特に好調です。

このような文にたいして、天野みどり(1995a, 1995b)は、「「が」による倒置指定文」とか「「が」による後項焦点文」とよび、ふつうの「AがBだ。」とは反対に、「A」が前提で「B」が焦点だという、この場合だけの特殊な説明をしている。一方、新屋映子(1994)は、こうした文を、前提と焦点に分化していない「中立叙述文」としている。ここでは、新屋と同じように、主題をもたない無題文の一種と考えておく。

9. 陰題文の構造と機能のまとめ

陰題文の構造と機能について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 陰題文の構造

次の(40)のような格関係がそのまま文になった(41)のような形をしている。

(40) 君が 主役 (であること)

(41) 君が 主役だ。

└─── もっとも典型的には、名詞+「だ」、動詞+「のだ」

└─── もっとも典型的には、「これ」、「私」、「だれ」など

2) 陰題文の機能

陰題文は、典型的には、次のような機能をもっている。

(42) 君 が 主役 だ。
 └─── 「主役」より、話の現場や前の文脈と結びつきが強い
 [伝えたいこと] [主題]

第2節 顕題文と陰題文の選択

1. はじめに

前の第1節では、述語が主題になっている陰題文の構造と機能をみた。この第2節では、第2章でみた顕題文とこの章の第1節でみた陰題文の使いわけを考える。顕題文も陰題文も主題をもつ有題文であるので、顕題文と陰題文の使いわけというのは、主題を「は」によって明示するかしないかの選択である。

つまり、「君が主役（であること）」の「主役」を主題にするとき、「は」を使って主題を明示する「主役は君だ。」のような顕題文にするか、「は」を使わないで主題を暗示する「君が主役だ。」のような陰題文にするかの選択である。

この選択は、これまで、ほとんど問題にされてこなかった。これまで問題にされてきたのは、措定の文とされる「君は主役だ。」のような文と指定の文とされる「君が主役だ。」のような文の違いだけである。同じ指定の文とされる「主役は君だ。」のような文と「君が主役だ。」のような文の使いわけは、丹羽哲也(1988)などでふれられている程度で、ほとんど研究がない。

この節では、顕題文と暗示的な主題の使いわけを、名詞文だけでなく、形容詞文、動詞文についても、考えていく。

2. 顕題文と陰題文の構造

第1章第4節の3.で簡単に述べたように、文の成分のなかで格成分が主題に選ばれると、その主題は明示的な主題になる。それにたいして、述語が主題に選ばれると、その主題は「は」を使った明示的な主題になるか、「は」を使わない暗示的な主題になるか、2つの可能性がある。

たとえば、次の(1)のように、主格の「君」が主題に選ばれると、その主題「君」に「は」

がついて文頭におかれ、(2)のような顕題文になる。⁸

(1) 君が主役(であること)

主題

(2) 君は主役だ。

それにたいして、次の(3)のように、述語の「主役」が主題に選ばれると、2つの可能性がある。1つは、その次の(4)のように、主題である述語に「は」がついて文頭におかれ、顕題文になる可能性である。もう1つは、その次の(5)のように、「は」がつかず、もとの(3)の形がそのまま残り、陰題文になる可能性である。⁹

(3) 君が主役(であること)

主題

(4) 主役は君だ。

(5) 君が主役だ。

この(4)と(5)は、どちらも「主役」が主題になっている「指定」の文なので、ほぼ同じ意味になり、その使いわけが問題になる。

こうしたことは、名詞文だけでなく、形容詞文や動詞文でも同じである。たとえば、形容詞が述語の次の(6)で、述語の「いちばんおもしろい」が主題に選ばれると、その次の(7)のように、顕題文になる可能性と、その次の(8)のように、陰題文になる可能性がある。

(6) この本がいちばんおもしろい(こと)

主題

(7) いちばんおもしろいのはこの本だ。

(8) この本がいちばんおもしろい。

また、動詞が述語の次の(9)でも、述語を含む部分「この本を買ってくれた」が主題に選ばれると、明示的な主題をもつ(10)のような顕題文になる可能性と、暗示的な主題をもつ(11)のような陰題文になる可能性がある。¹⁰

⁸ 三上章(1953)などで「指定」といわれるのは、このような文のときである

⁹ 三上章(1953)などで「指定」といわれるのは、(4)と(5)の2つのタイプの文のときである。

¹⁰ このうち(10)は、第2章第6節で述語主題文と名づけたものである。そこではふれなかったが、前の(7)や、さらに(4)も同じ構文とみてよい。

- (9) 父がこの本を買ってくれた (こと)

主 題

- (10) この本を買ってくれたのは父だ。

- (11) 父がこの本を買ってくれたのだ。

この節で考えるのは、このような、述語が主題に選ばれたときの2つの形、つまり顕題文と暗示的な主題の使いわけである。このあと、3.から6.では名詞文、7.では形容詞文、8.では動詞文についてみていく。

3. 名詞文の主格名詞と述語名詞の配置

名詞文での顕題文と陰題文の選択を考えるまえに、名詞文の中にでてくる2つの名詞のうち、どちらが主格名詞になり、どちらが述語名詞になるのかをあきらかにしておきたい。

前の2.では、次の(12)のような構造を考え、「君」を主格名詞、「主役」を述語名詞とした。それにたいして、反対に、その次の(13)のように、「主役」を主格名詞、「君」を述語名詞と考えることもできるかもしれない。

- (12) 君が主役 (であること)

- (13) 主役が君 (であること)

しかし、この2つを比べると、(12)のように、「君」を主格名詞、「主役」を述語名詞とするほうがよいと考える。それは、(12)のほうが、次にみるように、いろいろな文を無理なく導きだせるからである。

(12)か(13)をもとにした文としては、次の(14)から(17)の4つが考えられる。そのうち、(14)から(16)の3つはなりたつが、(17)はなりたたない。

- (14) 君は主役だ。

- (15) 君が主役だ。

- (16) 主役は君だ。

- (17) *主役が君だ。

前の(12)と(13)のうち(12)をもとにすると、この(14)は、次の(18)から、主題の「君」に「は」をつけた顕題文として導きだせる。

- (18) 君が主役 (であること)

主題

また、前の(15)は、次の(19)をもとにして、その形をそのまま残した、陰題文として導

きだせる。前の(16)も、次の(19)をもとにして、主題の「主役」に「は」をつけた、顕題文として導きだせる。

(19) 君が主役 (であること)

主題

それにたいして、前の(13)をもとにすると、前の(14)から(17)をすべてうまく導きだすことはできない。(14)は、述語名詞の「君」を明示的な主題にした顕題文として導きだせ、(16)は主格名詞の「主役」を明示的な主題にした顕題文として導きだせる。しかし、(15)は、次の(20)をもとにすると、「主役」と「君」を入れかえるような無理なことをしないかぎり、導きだせない。

(20) 主役が君 (であること)

主題

したがって、この場合は、前の(12)のように、「君」を主格名詞、「主役」を述語名詞とするほうがよいと考えるのである。

これと同じ考えかたで、ほかの名詞の組みあわせについても、どちらが主格名詞でどちらが述語名詞かを定めることができる。ただし、前の(14)から(17)でみた4つの文のなりたちかたには、ほかに2つのパターンがある。

1つは、次の(21)から(24)のように、4つめの(24)だけでなく、2つめの(22)と3つめの(23)も、なりたないパターンである。この場合は、「ビルの高さ」を主格名詞、「85m」を述語とする。このパターンになるのは、主格名詞は主題にできるが、述語名詞は主題にできないときだと考えられる。

(21) ビルの高さは85mです。

(22) *ビルの高さが85mです。

(23) *85mはビルの高さです。

(24) *85mがビルの高さです。

もう1つは、次の(25)から(28)のように、4つめの(28)だけでなく、1つめの(25)もなりたないパターンである。この場合は、「漏電」を主格名詞、「その火事の原因」を述語名詞とする。このパターンになるのは、述語名詞は主題にできるが、主格名詞は主題にできないときだと考えられる。

(25) *漏電はその火事の原因だ。

(26) 漏電がその火事の原因だ。

(27) その火事の原因は漏電だ。

(28) *その火事の原因が漏電だ。

このようにして、名詞文の主格名詞と述語名詞が決められるのである。

4. 名詞文の主格名詞と述語名詞の性質

前の3.では、名詞文の2つの名詞のうち、どちらを主格名詞と考え、どちらを述語名詞と考えるのがよいのかをみた。では、主格名詞になっているのはどんな名詞であり、述語名詞になっているのはどんな名詞だろうか。

それをあきらかにするために、2つの名詞のうち、どちらが主格名詞になり、どちらが述語名詞になるかという組みあわせを、いくつかあげてみる。

「君」と「主役」では、「君」が主格名詞で、「主役」が述語名詞だった。「ビルの高さ」と「85m」では、「ビルの高さ」が主格名詞で、「85m」が述語名詞だった。また、「漏電」と「その火事の原因」では、「漏電」が主格名詞で、「その火事の原因」が述語名詞だった。

このほか、次の(29)では、「入ったときの食べ物」が主格名詞で、「麦ご飯」が述語名詞になる。その次の(30)の2つめの文では、「千明」が主格名詞で、「恋人」が述語名詞になる。この(30)は、「千明が恋人(であること)」をもとにして、「恋人」が明示的な主題になったものである。

(29) 入ったときの食べ物は、ほとんど麦ご飯だね。

(鎌田慧(編)『日本人の仕事』p. 51)

(30) 「私のことなんか放つといてよ！ 恋人は千明でしょ！」

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(下)』p. 96)

このような主格名詞と述語名詞の組みあわせをみると、共通していえそうなのは、次の(ア)のようなことである。

(ア) 指示性が高いほうの名詞が主格名詞になり、叙述性が高いほうの名詞が述語名詞になる

(ア)の「指示性」というのは、特定の個体を指す性質である。「叙述性」というのは、形容詞のように性質や種類などを述べる性質である。¹¹

¹¹ 「指示性」と「叙述性」とよく似た概念として、Kuno(1970)の「referential nounphrase」と「predicative noun phrase」や、山口光(1975)の「外延指示語」と「内包指示語」がある。

名詞それぞれの指示性の高さや叙述性の高さは、その名詞の使いかたによってかわる。たとえば、同じ「学生」という名詞でも、次の(31)の「学生」は指示性が高く、その次の(32)の「学生」は叙述性が高いと考える。

(31) きょうの昼休みは、堂生が卒論の相談に来ることになっている。

(32) あいつはまだ学生だから、3月は暇じゃないかな。

また、(ア)で「指示性が高い」とか「叙述性が高い」とかいうのは、2つの名詞を比べたときの相対的なものである。

たとえば、「私」という名詞は、一般的には、指示性が高く、叙述性が低い名詞だと考えられる。しかし、「私」という名詞は、「これ」という名詞に比べると、指示性が低く、叙述性が高いということになる。つまり、「私」と「これ」では、「これ」が主格名詞になり、「私」が述語名詞になるのである。このことは、古い写真を見ている場面で、次の(33)から(35)はなりたつが、(36)はなりたたないことからわかる。

(33) これは私だ。

(34) これが私だ。

(35) 私はこれだ。

(36) *私がこれだ。

つまり、名詞には、指示性と叙述性についての序列があるということである。たとえば、「私」と「これ」では、「これ」のほうが指示性が高く、叙述性が低いが、「私」と「学生」では、「私」のほうが指示性が高く、叙述性が低いというような序列である。

この序列でいちばん指示性が高く、叙述性が低いのは、「これ」や「それ」のような指示語である。¹² 反対に、いちばん叙述性が高く、指示性が低いのは、たとえば「85m」のような数量を表す名詞である。このような、叙述性が高く指示性が低い名詞は、もともと叙述性が高く指示性が低いものである形容詞や動詞につながっていく。

5. 名詞文の主格名詞と主題の関係

前の4.では、どんな名詞が主格名詞になるかをみた。では、主格名詞と主題にはどんな関係があるのだろうか。一見、主格名詞が主題になりやすく、述語名詞が伝えたいこと

¹² 「指示詞」のこのような性質は、三上章(1953:p. 46)が「指定にしか使われない」という言いかたで指摘している

になりやすいようにみえるかもしれない。

しかし、この2つは、たがいに別のものである。たしかに、次の(イ)のような場合は、主格名詞が主題になりやすい。

(イ) 「高さ」、「色」などが主格名詞で、その数量や種類が述語名詞

たとえば、次の(37)では、「ビルの高さ」が主格名詞で、「85m」が述語名詞になっている。このとき、主題になりやすいのは、主格名詞である。

(37) ビルの高さが85m (であること)

主 題

実際、主格名詞の「ビルの高さ」を主題にした次の(38)は自然だが、述語名詞の「85m」を主題にしたその次の(39)は不自然である。

(38) ビルの高さは85mです。

(39) ?85mはビルの高さです。

しかし、次の(ウ)のような場合は、主格名詞より、述語名詞のほうが主題になりやすい。

(ウ) 「特徴」、「原因」などが述語名詞で、その内容が主格名詞

たとえば、次の(40)では、「漏電」が主格名詞で、「その火事の原因」が述語名詞になっている。このとき、主題になりやすいのは、主格名詞の「漏電」ではなく、述語名詞の「その火事の原因」である。

(40) 漏電がその火事の原因 (であること)

主 題

実際、述語名詞の「その火事の原因」を主題にした次の(41)や(42)は自然だが、主格名詞の「漏電」を主題にしたその次の(43)は不自然である。

(41) その火事の原因は漏電だ。

(42) 漏電がその火事の原因だ。

(43) *漏電はその火事の原因だ。

ただし、主格名詞が主題になりやすいか、述語名詞が主題になりやすいかは、絶対的なものではない。たとえば、(イ)の場合でも、特殊な文脈では、次の(44)のように、述語名詞の「85m」が主題になることが可能である。

(44) 85mはビルそのものの高さであって、屋上のテレビ塔を含めた高さではない。

6. 名詞文での顕題文と陰題文の選択

名詞文で顕題文と陰題文の選択が問題になるのは、述語名詞が主題になっているときだけである。次の(45)のように、主格名詞が主題になっているときは、その主題はかならず「は」がついた明示的な主題になり、顕題文になるので、陰題文との使いわけは問題にならない。

- (45) 例えば谷崎潤一郎や川端康成の作品は、当時としては斬新な「実験小説」だったのですね。 (三田誠広『天気の良い日は小説を書こう』p. 89)

述語名詞が主題になっているときは、顕題文と陰題文の使いわけが問題になる。この使いわけは、それほどはっきりしたものではないが、次のような傾向がある。

まず、述語名詞が明示的な主題になって、顕題文になりやすいものとしては、次の(エ)のようなものがあげられる。

- (エ)「特徴」、「原因」などが述語名詞で、その内容が主格名詞

たとえば、次の(46)と(47)では、顕題文の(46)のほうが、陰題文の(47)より、よく使われる。

- (46) その火事の原因は漏電だ。

- (47) 漏電がその火事の原因だ。

ただし、実際には、この(46)ではなく、次の(48)のように、「その火事の原因」の「その火事」だけを主題にした述語連体部主題文になることも多い。

- (48) その火事は漏電が原因だ。

この(46)と(48)の違いは、文体的なものである。(46)は、「原因」が文の前のほうにでてくるので、話の流れがつかみやすい。そのため、よくいえば、明快で論理的、悪くいえば、事務的で冷たい文体になる。(48)は、「原因」が文の後ろのほうにでてくるので、話の流れがつかみにくい。そのため、よくいえば、おもしろみがある、悪くいえば、あまり明快でない文体になる。

一方、反対に、述語名詞が暗示的な主題になって、陰題文になりやすいものとしては、次の(オ)と(カ)があげられる。

- (オ)主格名詞が、話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞のとき

- (カ)主格名詞が疑問語のとき

次の(49)は、(オ)の例である。(49)の主格名詞は、前の文の内容を指す「それ」である。

このようなときは、陰題文の(49)のほうが、顕題文の(50)より、よく使われる。

(49) 「それがあなたを、婦人運動から消費者運動へと駆り立てた原因ですか」

(逢坂剛『カディスの赤い星』p. 411)

(50) 「あなたを、婦人運動から消費者運動へと駆り立てた原因はそれですか」

これは、「それ」のような名詞を文のはじめにおいたほうが、前の文脈とのつながりがスムーズになるからである。また、(カ)の疑問語の場合は、陰題文にしたほうが、疑問語が文のはじめにくるので、その文が質問文だということをはやく聞き手に知らせることができてよいのである。

7. 形容詞文での顕題文と陰題文の選択

形容詞文で顕題文と陰題文の選択が問題になるのは、述語の形容詞が主題になっているときだけである。主格名詞が主題になっているときは、次の(51)のように、その主題はかならず「は」がついた明示的な主題になり、顕題文になるので、陰題文との使いわけは問題にならない。

(51) 現在でも、このニューオリンズは、ジャズの街として有名である。

(内藤遊人『はじめてのジャズ』p. 52)

述語の形容詞が主題になっているときは、明示的な主題を使った顕題文より、暗示的な主題を使った陰題文になることが多い。とくに、前の6. であげた(オ)や(カ)のとき、つまり、主格名詞が、話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞や、疑問語のときは、陰題文になりやすい。

たとえば、次の(52)の2つめの文では、「一番おいしい」が暗示的な主題になった陰題文になっているが、これは、主格名詞の「しゃぶりつくの」が、その前の文にでてきたものだからである。

(52) 「バリバリしゃぶりついてるじゃないの、いつもは」

「そう、しゃぶりつくのが、本当が一番おいしいんだよ」

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』p. 214)

ただし、述語の形容詞が、前の文脈にでてきたものと関係があるときは、明示的な主題になりやすい。たとえば、次の(53)の最後の文では「一番恐ろしい」が明示的な主題になった顕題文になっているが、これは、「一番恐ろしい」が、その前の2つの文の内容と関係があるからである。

- (53) 悩み、^{まよ}惑っている先生は多い。組合をやめる人はまだ増えるかもしれない。でも、一番恐ろしいのは、組合がその中に反対派を持たなくなってしまったことね。
(『AERA』1990. 5. 15 p. 9)

述語の形容詞が前の文脈にでてきたものと関係があるときでも、質問と答えのように2つの文がペアになっているときは、同じ形の文になるのがふつうである。たとえば、次の(54)では、2つめの文の「厚い」は、その前の文の「大きい」と関係があるが、この「厚い」は明示的な主題にならず、前の文と同じ暗示的な主題になる。そのため、後の文も陰題文になっている。

- (54) 「こっちのブリのほうが大きいよ」
「こっちのブリが厚い」
お互いにへらず口を叩きあいながら、こんな風に話したのは久しぶりだなと、
良介も桃子も思っていた。(鎌田敏夫『男女七人夏物語(下)』p. 90)

8. 動詞文での顕題文と陰題文の選択

動詞文でも、名詞文や形容詞文と同じように、顕題文と陰題文の選択が問題になるのは、述語が主題になっているときだけである。主格名詞などが主題になっているときは、次の(55)のように、その主題はかならず「は」がついた明示的な主題になり、顕題文になるので、陰題文との使いわけは問題にならない。

- (55) 猫はふつう、一度に三～四匹の子を生む。
(加藤由子『雨の日のネコはとことん眠い』p. 186)

述語の動詞が主題になっているときは、述語が形容詞の場合とは反対に、陰題文より顕題文が使われることが多い。

たとえば、次の(56)の最後の文は、「出かけた」という動詞が明示的な主題になった顕題文になっている。

- (56) 一一月一八日から二週間、日本を留守にしました。出かけたのは、フランス、
ドイツ、イタリアです。(田中康夫『ファディッシュ考現学』p. 148)

もし、これを、次の(57)の最後の文のような陰題文にすると、「日本を留守にしたのは、フランス、ドイツ、イタリアに出かけたからです」の意味に解釈されやすくなる。そのため、陰題文は使いにくい。

- (57) 一一月一八日から二週間、日本を留守にしました。フランス、ドイツ、イタリ

アに出かけたのです。

こうした一般的な傾向とは反対に、陰題文が使われやすい場合もある。それは、6.であげた(オ)や(カ)のとき、つまり、主格名詞が、話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞や、疑問語のときである。

たとえば、次の(58)と(59)では、疑問語の「どちら」が主格名詞になっているので、陰題文の(58)のほうが、顕題文の(59)より、よく使われる。

(58) ——結局どちらが勝ったんですか。 (立花隆『サル学の現在』p. 314)

(59) ——結局勝ったのはどちらですか。

9. 顕題文と陰題文の選択のまとめ

顕題文と陰題文の選択について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

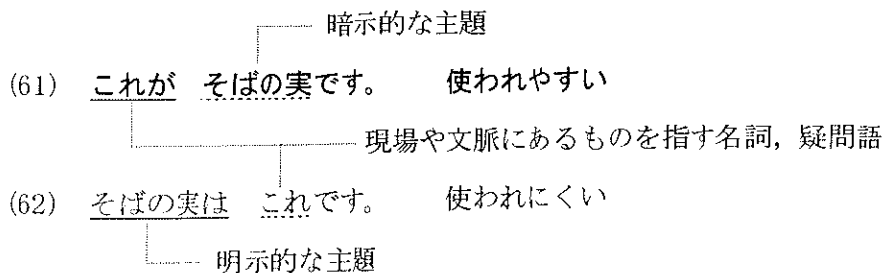
1) 顕題文と陰題文の選択の傾向

顕題文と陰題文の選択が問題になるのは、述語が主題になっている次の(60)のような文である。名詞文と動詞文では顕題文が使われることが多く、形容詞文では陰題文が使われることが多い。

(60)

| | | |
|------|---------------|-------------|
| 名詞文 | 火事の原因は漏電だ。 | 漏電が火事の原因だ。 |
| 形容詞文 | いちばんいいのはダイヤだ。 | ダイヤがいちばんいい。 |
| 動詞文 | そう言ったのは山田だ。 | 山田がそう言ったのだ。 |

2) 陰題文が使われやすい条件



第 5 章

複文の中の主題

第1節 従属節の中の主題

1. はじめに

ここまでは、基本的に、単文の中の主題の現れかたをみてきた。この章では、複文の中の主題の現れかたをみていく。

複文は主文と従属節からできている。主文の中の主題の現れかたは単文の中とほとんど違いはないが、従属節の中の主題の現れかたは単文の中とはまったく違うといってよい。たとえば、「～たら」や「～とき」のような従属節の中では、主題を表す「は」が使えないため、主格にはかならず「が」がつくというようなことがあるからである。

こうした現象は、山田孝雄(1936:第二十章)や松村明(1942:p.401-p.407)、三上章(1970:p.11-p.15)などで指摘されてきた。しかし、従属節といっても、「～けれど」のように、主題の現れかたが単文の場合とほとんどかわらない従属節もある。そのため、従属節の中の主題を考えるときは、野田尚史(1986)のように、従属節の種類別に考える必要がある。

この節では、従属節を大きく4つの種類にわけたうえで、それぞれの従属節をもつ文で主題がどのように現れるかをみていく。

2. 従属節の種類

一口に従属節といっても、いろいろなものがあり、主題の現れかたにも違いがある。そこで、主題の現れかたで、代表的な従属節を分類すると、次の(1)のように、大きく4種類に分類できる。¹

表の右のほうの「が」の欄の○と×は、その節の内部に主格の「～が」が現れることが

¹ このうち「従属句」は、狭い意味では従属節とはいえないが、ここにあげておく。

できるかできないかを表している。「は」の欄の○と×は、その節の内部に主題の「～は」が現れることができるかできないかを表している。

(1)

| 種類 | 代表例 | 「が」 | 「は」 |
|-------|--|-----|-----|
| 従属句 | 付帯状況句 (～ながら, ～まま, ～て) 継起句 (～て, ～[連用形]) | × | × |
| 強い従属節 | 継起節 (～と, ～たら, ～て, ～[連用形]) 仮定節 (～たら, ～(れ)ば, ～と, ～ては, ～ても) 様態節 (～ように, ～ほど) 時間節 (～とき, ～まえに, ～あとで, ～まで) 連体修飾節 (～[名詞]) 名詞節 (～こと, ～の, ～か) 理由節(1) (～ため, ～て, ～から(焦点), ～ので(焦点), ～のに(焦点)) | ○ | × |
| 弱い従属節 | 理由節(2) (～から, ～ので, ～のに) 並列節 (～て, ～[連用形], ～し, ～けれど, ～が) | ○ | ○ |
| 引用節 | 引用節 (～と, ～って) | ○ | ○ |

この表の「継起句」というのは、「健一は部屋に入って行って由紀に声をかけた。」のように、従属句と主文の主格が同じものである。「継起節」というのは、「健一が部屋に入っていくと、由紀は出ていった。」のように、従属節と主文の主格が違うものである。

この分類は、基本的には、南不二男(1974:第四章, 1993)の従属句の分類をもとにしている。この表の「従属句」が南の「A類の従属句」にほぼ対応し、「強い従属節」が南の「B類の従属句」に、「弱い従属節」が南の「C類の従属句」にほぼ対応している。

ただ、対応しない点もある。ひとつは、南がとりあげていない連体修飾節や引用節、「～とき」、「～ため」などの節もとりあげていることである。

もうひとつは、どこに分類するかが南と違うものがあることである。南の分類では、「～ので」と「～のに」はB類で、「～から」はC類になっている。それにたいして、ここでは、3つとも、焦点になっているときは、強い従属節、つまり南の分類でB類にあたるものになり、焦点になっていないときは、弱い従属節、つまり南の分類でC類にあたるものになっている。

それでは、従属句、強い従属節、弱い従属節の順で、それぞれの従属節の中の主題の現れかたをみていこう。

3. 従属句の中の主題

従属句というのは、付帯状況を表す「～ながら」や「～まま」に代表されるものである。

こうした従属句は、次の(2)が言えないことからわかるように、内部に独自の主格をもつことができない。独自の主格さえもつことができないのであるから、内部に独自の主題をもつことも、もちろんできない。

(2) *松前が大声で叫びながら、沢田は出入口に向かって走りだした。

従属句をもつ文では、主題の「～は」も主格の「～が」も、次の(3)と(4)に[]で示したように、従属句の外にあって、主文の主格になっている。

(3) 沢田は[大声で叫びながら]、留置場出入口に向かって走りだした。

(林葉直子『とんでもポリスは恋泥棒』p. 84)

(4) 瑠璃子は歩きだした。慎一が[肩を抱いたまま]、歩調を揃えてくれる。

(津島佑子『火の河のほとりで』p. 158)

そのため、こうした文で、前の(3)のように主題の「～は」が現れるか、(4)のように主題の「～は」が現れないかは、従属句とは関係がない。第2章から第4章でみてきた単文での主題の現れかたと同じである。

4. 強い従属節の中の主題

強い従属節というのは、主文への従属度が高い従属節、いいかえると、主文からの独立度が低い従属節のことである。「～たら」のような仮定節や、「由紀が買った指輪」のような連体修飾節が代表的なものである。

こうした強い従属節は、内部に独自の主題をもつことができない。そのため、強い従属節の内部には主題を表す「は」は現れず、次の(5)のように、主格にはかならず「が」がつく。

(5) 捜査員が「おまえが誘拐犯じゃろ」と聞くと、住谷隆士容疑者(三七)は「すみません」と素直に認めた。

(『朝日新聞』1995. 2. 25 朝刊 p. 31)

なお、強い従属節をもつ文の主文のほうの主題の現れかたは、基本的には、単文での主題の現れかたと同じである。第3章の2. や第4章の2. でみてきた規則によって、前の(5)のように「は」が使われることも、次の(6)の最初の文のように「が」が使われることもある。

(6) 「オレがみんなと仲が悪いの、君がいちばん知っているだろう。会社の中で、金を借りられるようなやつは一人もいやしねえよ」

(林真理子『最終便に間に合えば』p. 47)

ただし、従属節の主格と主文の主格が同じときは、ほとんど、次の(7)のように主題の「は」が使われる。これは、「が」を使うと、その「～が」は従属節中のもので、主文にはかかっていかないと解釈されやすいからである。

(7) 住谷容疑者は「お前が誘拐犯じゃろ」と捜査員に問い詰められると、「ハイ、そうです」と素直に誘拐を認めた。(『毎日新聞』1995.2.25 朝刊 p.1)

従属節と主文の主格が同じときに、次の(8)のように「が」が使われるのは、意外性が大きいなどのケースに限られ、まれである。

(8) こうして、アメリカを発つときは全く無名であった青年が、その一ヵ月後帰国したときは「国民的英雄」になっていた。

(中村紘子『チャイコフスキー・コンクール』p. 23)

なお、この(7)のように、従属節の主格と主文の主格が同じときの主題の「～は」は、従属節中のものではなく、主文のものである。前の(5)の「捜査員が」は、次の(9)に[]で示したように、従属節「～と」の中にあるのにたいして、前の(7)の「住谷容疑者は」は、次の(10)に[]で示したように、従属節「～と」の外にあると考えられる。

(9) [捜査員が「おまえが誘拐犯じゃろ」と聞くと]、住谷隆士容疑者(三七)は「すみません」と素直に認めた。

(10) 住谷容疑者は [「お前が誘拐犯じゃろ」と捜査員に問い詰められると]、「ハイ、そうです」と素直に誘拐を認めた。

この(10)は、理論的には、次の(11)のように、もともと従属節の中にあつた主格の「住谷容疑者(が)」が、それより前にある主文の主題の「住谷容疑者(は)」と同じなので消去されたのだと考えるのがよい。

(11) 住谷容疑者は [住谷容疑者が「お前が誘拐犯じゃろ」と捜査員に問い詰められると]、「ハイ、そうです」と素直に誘拐を認めた。

このように、強い従属節は内部に主題をもてないので、強い従属節の中では「は」が使われず、「が」が使われるのである。

5. 強い従属節の中の主題の例外

強い従属節をもつ文の主題の現れかたは、前の4.で述べたとおりだが、これには例外的といえる現象が3つある。

1つは、「～ということ」や「～という[名詞]」、「～かどうか」のような節の中では、主題を表す「は」が使われることがあるということである。次の(12)では、「意見」を連体修飾する節の中に「は」が入っている。

- (12) ところで、学者の間では、身元保証は徳川時代の「人請」に由来する封建的な主従関係の遺物であって、できるだけ早く、より近代的、合理的な保険などの制度に変えられるべきだという意見が強い。

(『朝日新聞』1992. 10. 24 夕刊 p. 9 「くらしと裁判」)

このような従属節は、ほかの強い従属節にくらべて、このあと8.でみる引用節に近い性質をもっていると考えられる。引用節の中での主題の現れかたは、基本的に単文の中と同じなので、「は」が現れるのである。

したがって、とくに主題の「は」が現れやすいのは、単文なら確実に「は」が使われるような場合である。具体的にいうと、従属節の述語が性質や恒常的な状態を表す場合や、前の(12)のように、従属節の中にさらに従属節があり、従属節の主格とその中の従属節の主格が同じ場合などである。²

2つめの例外的な現象は、強い従属節の中でも、対比的な意味の「は」なら現れることがあるという現象である。たとえば、次の(13)の最後の文では、連体修飾節の中に「は」が入っている。

- (13) 昆虫も含めて、ヒト以外の動物が食っている物の中から、ヒトだけが食わない物をさがすのは、たいへん困難だ。いくつあげられるか、あなたも考えてみてはいかがでしょう。反対に、ヒトは食うが、他の動物はけっして食わないものをあげるのは、きわめてやさしい。(栗本慎一郎『パンツをはいたサル』p. 212)

こうした「は」がでてくるのは、対比的な意味が非常に強いときに限られる。この(13)でも、「ヒトが食う」と「他の動物がけっして食わない」が非常に強い対比になっている。

3つめは、仮定節をもつ文で、仮定節の主格と主文の主格が同じとき、その主格が「～が」になりやすいことである。たとえば、次の(14)では、仮定節の主格も主文の主格も同

² こうした条件は、青木侖子(1992:p. 320-p. 321)で述べられている。

じ「俺」だが、その主格を表すのに「が」が使われている。これを「は」にかえることはできない。

(14) 三上「——俺が永尾なら、おまえを一人にさせやしない」

(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p. 151)

この文の構造は、次の(15)のようなものだと考えられる。つまり、もともと、仮定節の中に「俺が」があり、主文の中に「俺は」があったのだが、主文の「俺は」が消去されてきたものである。

(15) [俺が永尾なら]、俺はおまえを一人にさせやしない。

こうした文で、主文の主題より仮定節の主格を表示することが優先されるのは、「おまえを一人にさせやしない」というのは、「俺が永尾なら」という仮定がなければなりたないからである。つまり、「俺が永尾なら」という仮定節を言う段階で「俺が」を言う必要があるのである。

したがって、前の(14)のように、仮定が現実とは違うときほど、仮定節の主格を表す「が」が使われやすい。反対に、仮定が現実にあるときほど、次の(16)のように、主文の主題を表す「は」が使われやすいのである。

(16) ぼくは、期待をもつと、いつも裏切られるんだ。

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』p. 262)

6. 弱い従属節の中の主題

弱い従属節というのは、従属度が低く、独立度が高い従属節のことである。「～けれど」や「～が」のような並列節が代表的なものである。

こうした弱い従属節は、強い従属節とは違って、次の(17)の「東京は」のように、内部に独自の主題をもつことができる。

(17) 東京は震災前から大都市として変貌しつつあったが、震災復興がそれを一挙に加速した。

(石橋克彦『大地動乱の時代』p. 78-p. 79)

弱い従属節の中での主題の現れかたは、基本的には、単文での主題の現れかたと同じである。³

³ 市川保子(1995)は、話し手が節内のことがらを恒常的な事態ととらえれば「は」、一時的な事態ととらえれば「が」が使われるとしている。しかし、これは、単文での「は」と「が」の使いわけの条件のひとつをいっているにすぎない。

したがって、前の(17)のように「は」が使われることも、次の(18)のように「が」が使われることもある。

(18) 「許容範囲です」

ベティさんから初めてまともな言葉が返ってきたが、その声の沈みようは、かつて聞いたことのない暗さだった。 (高村薫『神の火(下)』p. 371)

ただし、主文との対比を表す「～けれど」や「～が」などの中では、次の(19)の“政党離れ”は」のように、対比的な「は」が使われることが多い。

(19) 一般勤労者の意識調査によれば、“政党離れ”は進んでいるが、政治への関心は決して低くない。 (『毎日新聞』1980. 7. 26 朝刊 p. 5「社説」)

なお、弱い従属節をもつ文の主文のほうの主題の現れかたは、基本的に、単文の場合と同じである。したがって、前の(18)のように「は」が使われることも、その前の(17)のように「が」が使われることもある。

ただし、従属節の主格と主文の主格が同じときは、ほとんど、次の(20)のように、主題の「は」が使われる。その次の(21)のように「が」が使われるのは、意外性が大きいといった、主題をもたない文になりやすい強い条件を主文がもっているときに限られ、まれである。

(20) イルカを例にとると、哺乳類なので手の骨は5本なんです、ヒレの形をしてるんです。 (『BE-PAL』1995. 7 p. 84)

(21) 三人連れの酔っ払いが、いやがらせをしようとして通せんぼしたが、竜一の顔を見ると慌てて道をあけた。 (宮本輝『夢見通りの人々』p. 160)

なお、従属節と主文の主格が同じときの主題の「～は」は、強い従属節をもつ文では、4. の(10)に示したように、主文のものだった。しかし、弱い従属節をもつ文では、次の(22)に示すように、従属節の中のものだと考えられる。

(22) [手の骨は5本なんです]、ヒレの形をしてるんです。

7. 理由節の中の主題

理由節の「～から」や「～ので」、それに「～のに」節は、強い従属節と弱い従属節の間の中間的なものである。これらの節は、文の焦点になっているときは強い従属節になり、

文の焦点になっていないときは弱い従属節になる。⁴

まず、これらの節が強い従属節になるのは、その節がその文の焦点になっているときである。いいかえると、主文の内容より従属節の内容のほうを相手に伝えたいときである。

その典型は、「どうして」や「なぜ」という質問に答える文である。たとえば、次の(23)の最後の文のようなものである。このような文では、「～から」節の中に主題が現れないので、主格には「が」が使われている。これを「は」にかえることはむずかしい。

(23) 「じゃ、どうして桃子に渡したりするのよ！ どうして直接会いにこないのよ！」

……[省略]……

「貞が、あなたのこと好きみたいだったから、なんか会いづらくなって……」

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』p. 274)

また、次の(24)のように「～は～からだ。」という形の文も、理由節が焦点になるので、理由節の主格が「が」になることが多い。

(24) なぜ猫には、こんなに派手に変化する瞳孔があるのだろう。それは、猫が優れた夜のハンターだからだ。(加藤由子『雨の日のネコはとことん眠い』p. 26)

これにたいして、「～から」節や「～ので」節が弱い従属節になり、単文と同じように、主題が現れることができるのは、その節がその文の焦点になっていないときである。

たとえば、次の(25)の最後の文では、「～から」節の中で「は」が使われている。これは、「～から」節が焦点になっていないからである。

(25) 曲の始めの音と終わりの音というのは、原則的に決まっています。

ふつう、その曲の調のI度で始まって、終わるときにもまたI度になります。…

…[省略]……

ハ長調でやってみましょう。ハ長調のI度はCですから、Cの中の音つまりドかミかソの中から、最初のメロディーの音を決めます。

(小林亜星『やさしい作曲のしかた』p. 52)

この文で伝えたいのは、主文の「ドかミかソの中から、最初のメロディーの音を決める」

⁴ この区別は、田窪行則(1987)のいう「制限修飾節」と「非制限修飾節」の区別に対応していると考えられる。

である。理由節の「ハ長調のI度はCだ」は、すでに説明してあることであり、焦点になっていない。

このように、理由節は、文の焦点になっているときだけ、強い従属節と同じになる。これは次のように説明できる。文の焦点になるのは、格成分や強い従属節など、従属度が高い成分に限られる。したがって、理由節も、文の焦点になるとときには、強い従属節のようになる必要があるということである。

8. 引用節の中の主題

引用節というのは、「～と言う」や「～と思う」などの「～と」に代表されるものである。

引用節は、次の(26)の「あなたは」のように、内部に独自の主題をもつことができる。そのため、引用節の中で「は」を使うか「が」を使うかは、基本的には、単文の場合と同じである。

(26) 私は、あなたは誰の料理がいちばん食べたいかと聞かれたら、私の料理と答える。
(つかこうへい『現代文学の無視できない10人』p.156)

ただし、「～とは思わなかった。」や「～なんて信じられない。」、「～とでも言うのか。」のような形で、「～と」節の内容に否定的な気持ちを表すときは、別である。単文で主題の「は」が現れるようなときでも、引用節の中では、次の(27)の最後の文のように、主題の「は」が現れず、「が」になるのがふつうである。⁵

(27) 「香里を傷つけないでね」
「え？」
そんなことを言われるとは思わなかったのだ。
「あの子は真面目な子なの」
「おれが不真面目だっていうのかい？」

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』p.102)

このような文で主題の「は」が現れず「が」が使われることは、次のように説明できる。それは、こうした文は、引用節の内容を主張するものではないために、引用節の、文とし

⁵ 渡辺誠治(1994)は、「花子はあの氷山さんが親切だと言いました。」のような文で、文話者の信念と引用部話者の信念とが一致しないとき、引用節で「が」が使われることを指摘している。

ての独立度が低くなる、つまり従属節としての従属度が高くなり、強い従属節のような性質をもつようになるからだということである。

なお、引用節をもつ文の主文のほうの主題の現れかたは、単文での主題の現れかたと同じである。ただし、従属節の主格と主文の主格が同じときは、次の(28)の2つめの文のように、主題の「は」が使われる。

(28) 女「何、考えてんの？」

掛居「……。僕はあなたの家に行って行こうと思ったんです」

(北川悦吏子『あの頃の君に逢いたい』p.122)

これは、弱い従属節をもつ文の場合と同じである。ただ、弱い従属節をもつ文では、文頭の「～は」は従属節の中のものと考えられたが、引用節をもつ文では、次の(29)に[]で示すように、主文のものと考えられる。

(29) 僕は [あなたの家に行って行こうと] 思ったんです。

9. 従属節の中の主題のまとめ

従属節の中の主題について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 従属節の種類

| 種類 | 代表例 | 節の内部に「が」 | 節の内部に「は」 |
|-------|----------|----------|----------|
| 従属句 | ～ながら、～まま | × | × |
| 強い従属節 | ～たら、～とき | ○ | × |
| 弱い従属節 | ～けれど、～が | ○ | ○ |
| 引用節 | ～と | ○ | ○ |

2) 従属節の中の主題

単文とのいちばん大きな違いは、強い従属節の中では主題が現れないことである。そのため、強い従属節では「は」が使えず、次の(30)のように、主格には「が」が使われる。

(30) 捜査員が「誘拐犯じゃろ」と聞くと、容疑者は素直に認めた。

第2節 従属的な文の中の主題

1. はじめに

文のなかには、文の形をしていても、強い従属節のような性質をもつものがある。そのような文では、主題の現れかたも、前の第1節でみた強い従属節の中の主題の現れかたと同じようになる。

たとえば、「～からだ」をもつ文で、「……は、人件費が高いからだ。」のように、主題が現れず、主格に「が」が使われるのは、強い従属節の「人件費が高いから、……。」の中で「が」が使われるのと同じ原理に基づいていると考えられる。

こうした文の主題の現れかたについては、丹羽哲也(1988:(下)p. 31-p. 32)でふれられているぐらいで、本格的な研究はおこなわれていない。

この節では、強い従属節と同じような性質をもつ「従属的な文」について、主題の現れかたをみていきたい。

2. 従属的な文の種類

従属的な文には、大きくわけて、「～からだ」のような特定の文末形式をもつ文と、そのような文末形式をもたないが強い従属節に相当する文がある。

はじめに、特定の文末形式をもつ文というのは、具体的には、次の1)から3)のようなものである。

- 1) 理由を表す「～からだ」や「～ためだ」をもつ文
- 2) スコープを表す「～のだ」や「～わけだ」をもつ文
- 3) 可能性を否定する「～わけがない」や「～はずがない」をもつ文

このような文では、主題をもたないことが多い。たとえば、次の(1)は、スコープを表す「～わけだ」をもつ文の例であるが、強い従属節の中と同じように、主題をもちにくい

ため、主格の「俺」に「が」が使われている。

- (1) 永尾「おまえな———だいたい、関口と三上がエッチして、何で俺があせるわけ？」
(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p.123)

これにたいして、文末形式をもつ文でも、この1)から3)でないもの、たとえば、「～らしい」や「～そうだ」、「～かもしれない」、「～はずだ」、「～ものだ」、「～ところだ」などをもつ文は、従属的な文にはならない。

そのため、こうした文での主題の現れかたは、ふつうの単文の場合と同じである。たとえば、「～はずだ」をもつ、次の(2)の2つめの文では、ふつうの単文と同じように、「は」が使われている。

- (2) 私は腕組みして両脚ひろげて突っ立っていた。私の顔はうしろに門灯を負って暗くてみえないはずである。
(田辺聖子『愛してよろしいですか?』p.68)

一方、従属的な文のもうひとつのタイプ、つまり、強い従属節に相当する文というのは、次の(3)の最初の文のようなものである。この文は、「私がいざという時のために現金をしまっとくクセがあるのを桃子が覚えてたのよ」と言いかえられることからわかるように、後ろの文に従属している。こうした文では、強い従属節の中と同じように、主題を含むことができないため、主格に「が」が使われる。

- (3) 「私が、いざという時のために現金をしまっとくクセがあるの。それを桃子が覚えてたのよ」
(鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』p.249)

それでは、それぞれのタイプの従属的な文について、順にみていこう。

3. 「～からだ。」や「～ためだ。」の中の主題

理由を表す「～からだ」や「～ためだ」をもつ文では、理由を表す部分には、主題が現れず、主格には「が」が使われるのがふつうである。

たとえば、次の(4)の最後の文は「～からだ」をもつ文だが、「あんた」に「が」がついている。

- (4) 「明日から、北海道にツアーに行くんや。^{てんじょういん}添乗員が金持っていないと、いざという時に困るやないか! どうしてくれるのや!」

「わたしのせいみたいに言わないでよ!」

「あんたがモタモタしてるからやないか!!」

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』p.243)

これは、理由を表す「～から」や「～ため」が強い従属節と同じものだからである。この(4)の最後の文は、次の(5)から主題の「金が下ろせなかったの」が消去されたものである。そして、(5)は、その次の(6)から、「金が下ろせなかった」が主題になり、理由節の「あんたがモタモタしてるから」が焦点になってできた文、つまり、第2章第6節でみた述語主題文、いわゆる分裂文である。

(5) 金が下ろせなかったのは、あんたがモタモタしてるからやないか。

(6) あんたがモタモタしてるから、金が下ろせなかった(こと)

前の第1節の7. でみたように、理由節の「～から」は、焦点になっているときは強い従属節になり、その中では主題が現れないため、主格には「が」が使われる。「～ため」も強い従属節で、主題が現れない。したがって、「～からだ」や「～ためだ」でも、内部に主題が現れず、主格には「が」が使われるのである。

ただし、「～からだ」をもつ文では、次の(7)の最後の文のように、理由を表す部分に主題の「は」が使われることもある。

(7) フロッピーディスクやパソコン通信のネットワークからパソコン本体に侵入したウイルスは、まずメモリーに常駐することが多い。メモリーは、ウイルスが居座ることができる最も安全な場所だからだ。

(山本隆雄(他)『コンピュータ・ウイルス』p. 88)

とくに「は」が使われやすいのは、「～から」の部分の主格名詞が、消去された「～は」の中にもあるときである。前の(7)の最後の文を例にすると、この文は、次の(8)から「メモリーに常駐することが多いのは」が消去されたものであるが、その消去された「～は」の中にも「メモリー」がある。このようなとき、「メモリーは」になりやすいのである。

(8) メモリーに常駐することが多いのは、メモリーがウイルスが居座ることができる最も安全な場所だからだ。

4. 「～のだ。」や「～わけだ。」の中の主題

「～のだ」や「～わけだ」がスコープを表す用法で使われるときは、主題の現れかたは、単文と違い、強い従属節の中と同じようになる。⁶

たとえば、次の(9)の最後の文の「ん」は、その次の(10)に[]で示すように、「俺

⁶ スコープを表す「のだ」については、野田春美(1997: 第2章)が詳しい

が」を否定のスコープに入れるためのものである。このようなとき、スコープの中の部分では、主題が現れず、主格は「が」になる。

- (9) リカ「(バトンを突きつけ) 永尾さん永尾さん、関口さとみさんを泣かせたつて噂は本当なんですか？」

永尾「俺が泣かせたんじゃない」

(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p. 156)

- (10) 「俺が泣かせたん」じゃない。

スコープとして「ん」や「の」でくくられた部分、つまり「俺が泣かせたん」の中に主題が現れないのは、この部分が強い従属節である名詞節のようにになっているからである。つまり、「俺が泣かせたん(じゃない)」のように「ん」や「の」で名詞化されたものは、「説明が日本語で書いてあるの(はありがたかった)」のように「の」で名詞化された名詞節と同じように、主題が現れず、主格は「が」になるのである。

「～わけだ」をもつ文も、「～のだ」をもつ文と同じで、次の(11)のように、否定のスコープに入っている部分では、主題が現れず、主格は「が」になる。

- (11) すべての猫がマタタビに目がないわけではない。

(加藤由子『雨の日のネコはとことん眠い』p. 211)

「～のだ」や「～わけだ」のなかでも、スコープを表す用法にもっともなりやすいのは、前の(9)や(11)のような否定の「～のではない」や「～わけではない」である。また、質問の「～の？」なども、スコープを表す用法になりやすい。次の(12)の最初の文の「～の？」は質問のスコープを表すもので、主題がなく、主格は「が」になっている。

- (12) 「私がからんだの？……意気投合してた?!……そんなことするわけじゃないの、あんな男に……」

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』p. 20)

こうした文は、第4章で陰題文としてとりあげたものである。陰題文では、述語が動詞のときは「のだ」が付きやすいことを述べたが、それは、主格を焦点にするために、主格をスコープに入れる必要があり、そのために「のだ」を使うからである。

ただ、ここで気をつけなければならないのは、スコープを表す「～のだ」や「～わけだ」をもつ文でも、主格がスコープの中に入っていないときは、「が」が使われるわけではないということである。

たとえば、次の(13)の最初の会話文には、否定のスコープを表す「～のではない」が使われている。しかし、否定しているのは「弟さんのことを」であって、主格の「私」では

ない。「私」は、その次の(14)のように、スコープの外にある。そのため、主題の「は」が使われているのである。

(13) 千歳に怒鳴りつけられて、父親が初めて口を開いた。

「私は、弟さんのことをどうのこうのと言っておるのではない」

教育者らしく、どことなく壇上から物を言うような感じである。それが、また千歳のカンにさわった。

「何をどうのこうの言うてるんですか?!」

「私どもとしては、娘のふしだらが許せないだけのことです」

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(下)』p.191)

(14) 私は、[弟さんのことをどうのこうのと言っておるの]ではない。

なお、スコープを表すとはいえない「～のだ」でも、次の(15)の2つめの文のように、「～からだ」と同じように使われているときは、主題が現れず、主格に「が」になることがある。

(15) だが美術館との話し合いの第一歩で計画はつまずいた。人手不足で困っているはずの美術館が、案外この計画に乗り気でないのである。理由は、ボランティアのお世話にかえて手間がかかるというのである。

(『朝日新聞』1980.7.19 夕刊 p.1「今日の問題」)

また、次の(16)の最後の文のように、「つまり」や「言い換えると」が文頭にあって、「～ということだ」という言いかえの意味のときも、主題が現れず、主格が「が」になることがある。

(16) このように、「7日」といういい表し方は、場合によって、ちがう意味をもつ。つまり、「7」という一つの数が二通りに使われるのである。

(山崎圭次郎『数を考える』p.5)

5. 「～わけがない。」などの中の主題

可能性を強く否定する「～わけがない」や「～はずがない」をもつ文では、主題が現れず、主格に「が」が使われることが多い。

たとえば、次の(17)は「～わけありません」をもつ文だが、「あいつ」に「が」がついている。また、その次の(18)は「はずはなかった」をもつ文だが、「岡田」に「が」がついている。

(17) 「月給日前に、あいつが金持ってるわけありません……貞もないだろうなあ……」
(鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』p. 245)

(18) 「ストライクを三つとも振るつもりで打席に入った」岡田が、燃えないはずはなかった。
(『毎日新聞』1980. 7. 20 朝刊 p. 17)

このような文で主題が使われないことが多い理由は、2つ考えられる。1つは、「わけ」や「はず」が、「理由」といった意味をまだ残していて、名詞としての性質が強いことである。そのため、「月給日前に、あいつが金持ってる」や「岡田が、燃えない」が、強い従属節である連体修飾節のようになり、主題がでてこないのだと考えられる。

もうひとつは、こうした文が、「月給日前に、あいつが金持ってる」や「岡田が、燃えない」の部分の内容を否定していることである。前の第1節の8. で、「～とは思わなかった」のように、従属節の内容に否定的なときは、その節の従属度が高くなり、主題が現れず、主格に「が」が使われやすくなることをみた。それと同じだとも考えられる。

このような「～わけがない」や「～はずがない」にたいして、スコープを表すのではない「～わけだ」や、「～はずだ」は、従属的な文にはならない。そのため、次の(19)の最後の文のように、主題の「は」を使うことができる。

(19) 「こっちも必死だったからな。『ラ・ナシオン』は、ヘリコプターによる空中取材を許された唯一の民間新聞社だった。……[省略]…… だれもフランコ支持の新聞社のヘリが、総統に爆弾をお見舞いするとは思わないからな」

フローラは体を乗り出した。

「それで、漆田さんたちは、『ラ・ナシオン』へ行ったわけね」

(逢坂剛『カディスの赤い星』p. 347)

このような「～わけだ」をもつ文が従属的な文にならないのは、「わけ」が、「理由」という意味をなくすなど、名詞としての性質を失い、「わけ」の前の部分が、強い従属節である連体修飾節ではなくなっているからである。

なお、このほか、次の(20)のような「～ことはない」をもつ文も、「～わけがない」などと同じように、主題が現れず、主格に「が」が使われることが多い。

(20) 「そっちが謝ることなんかないよ」 (鎌田敏夫『男女七人夏物語(下)』p. 80)

6. 強い従属節に相当する文の中の主題

強い従属節に相当する文というのは、文の形はしていても、ふつうの文とは違い、強い

従属節と同じように、ほかの文に従属している文である。そうした文では、主題の「は」が使われず、「が」が使われるのがふつうである。⁷

たとえば、次の(21)の2つめの文は、その後の文に従属している。それは、「……ウェイターの態度が……と変わらないのは、出来そうできて、なかなか難しいことである。」と言いかえられることからわかる。

(21) たとえば、ホテルのコーヒーハウスのサービスとして、キャピトル東急とセンチュリー・ハイアットを私が評価するのは、実はこの点にある。二十歳にもならない少女が私との待ち合わせ時刻より三十分も早く到着してオーダーをした際のウェイターの態度が、その後、私が来た際の物腰と変わらない。

出来そうできて、なかなか難しいことである。

(田中康夫『東京ステディ・デート案内』p. 87)

こうした文では、主題の「は」が使われず、主格が「が」になることが多い。「が」を使った、この(21)の2つめの文は、独立した文としては不自然であるが、後ろの文に従属することによってなりたっているのである。

このほか、理由を表す文末形式の「からだ」などがとれてしまった文も、強い従属節と同じ性質をもつようになり、主題が使われず、主格が「が」になることがある。

たとえば、次の(22)の最後の文は、「から」などがついていないが、「何で？」に対する答えで、理由を言う文である。このような文では、焦点になっている従属節の「～から」や、理由を表す「～からだ」をもつ文と同じように、「が」が使われることがある。

(22) さとみ「ううん——あ、今ね、電話のベルが鳴った瞬間、あ、永尾くんかな、
って思った」

× × ×

永尾「え、何で？」

× × ×

さとみ「ベルが永尾くんぽかった、ブルルル、って」

(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p. 33)

⁷ この種の文の性質については、野田尚史(1989a)が詳しい。

7. 従属的な文の中の主題のまとめ

従属的な文の中の主題について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 特定の文末形式をもつ文の中の主題

次のような文末形式をもつ文では、[] の中が強い従属節と同じようになり、主題が現れにくいため、主格は「が」になりやすい。

ア) 理由を表す「～からだ。」や「～ためだ。」

(23) 金が下ろせなかった。[あいつがモタモタしていたから]だ。

イ) スコープを表す「～のだ。」や「～わけだ。」

(24) [俺が泣かせたの]ではない。

ウ) 可能性を否定する「～わけがない。」や「～はずがない。」

(25) [あいつが金を持つてるわけ]がない。

2) 強い従属節に相当する文の中の主題

次の(26)のような強い従属節に相当する文では、[] の中が強い従属節と同じようになり、主題が現れにくくなる。

(26) [客への対応が]いつも変わらない。それ]がこの店の特徴だ。

第 6 章

文章・談話の中の主題

第1節 文章・談話の冒頭文の主題

1. はじめに

文の主題は、文の中だけで決まるものではない。その文がどんな種類の文章・談話の中のどんな位置で使われるのか、また、その文章・談話の中でどんな機能をはたすのかによって、かわる。

この第6章では、文章・談話の中で何が文の主題になるかということや、どんなときに無題文が使われるのかといった問題を考え、さらに、話しことばに特有の無助詞についてもみていきたい。

はじめに、第1節では、文章・談話の冒頭文をとりあげる。文章・談話の中では主題はそれより前の文との関係で決まることが多いが、冒頭文はそれより前に文がないという特殊な事情があるため、非冒頭文とは別に扱ったほうがよいからである。

冒頭文の主題については、永野賢(1986:第三章第二節)や安達隆一(1987:第五章,第七章)が文章論の観点から、いろいろな文章を分析している。しかし、何が主題になり、何が主題にならないかといった、文法論の観点からの規則化はまだあまりおこなわれていない。

この節では、文章・談話の中での主題を、次の2つの観点からみていくことにする。

- 1) 有題文では、何が文の主題になるのか
- 2) 無題文が使われるのはどんなときか

こうした点は、文章・談話の種類によって違うので、文章・談話を、日常の談話、報道の文章・談話、説明の文章・談話、物語の文章の4つにわけて考えていく。

2. 日常の談話の冒頭文の主題

日常の談話というのは、日常生活で使われる話しことば、つまり、ふつうの会話である。

こうした談話の冒頭文で、とくに主題になりやすいのは、次の(ア)と(イ)である。¹

(ア) 話の現場に存在するものを指す名詞

(イ) 聞き手の意識にあると思われるものを指す名詞

(ア)は、具体的には、話し手や聞き手を指す「私」、「君」などの名詞や、話の現場にあるものを指す「これ」、「その指輪」のような名詞である。

次の(1)は、「おまえ」が主題になっている例である。

(1) 同・外(夕方)

永尾と渡辺、出てくる——と、

クラクションが鳴る。

永尾、振り向くと、車に凭^たれて三上が立っている。

永尾「——おまえはいつだって、いきなりなんだな」

(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p. 30)

もうひとつの(イ)は、そのとき聞き手の頭の中にあるだろうと、話し手が思うような名詞、つまり、話し手が突然もちだしても聞き手が驚かないだろうと思うような名詞である。

たとえば、次の(2)で、憬子が「文京大学の平田先生」を主題にした文を使っているのは、「お店の人は、平田先生のところに後から連れが来ることを知っているはずだ。だから、平田先生の名前を意識しているだろう。」と思っているからである。

(2) 料理店・中

憬子、入って来る。

憬子「(お店の人に)あの、文京大学の平田先生は……」

(北川悦吏子『君といた夏』p. 90)

一方、無題文がとくに使われやすいのは、次の(ウ)のような場合である。

(ウ) 話し手がそのときその場で知覚したことを、そのまま描写するとき

たとえば、次の(3)のリカの発話は、そのときその場で感じたことをそのまま描写しているので、無題文になっている。

(3) 道路

走る自転車。

こいでいる永尾、後ろに立ち乗りしているリカ。

¹ 日常の談話の冒頭文で主題になれるものについては、Hinds (1976:Chapter III) が詳しい。

リカ「わー、顔が凍る!」

永尾「バカ、揺らすなよ」

(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p.62)

3. 報道の文章・談話の冒頭文の主題

報道の文章・談話というのは、新聞やテレビのニュースである。こうした文章・談話の冒頭文で、とくに主題になりやすいのは、次の(エ)である。

(エ)聞き手(または、読み手)の意識にあると思われるものを指す名詞

(エ)は、具体的には、首相や大臣、官公庁などを指す名詞である。こうしたものは、その動向がいつも注目されているとみなされているもので、冒頭文で主題になることができる。

次の(4)は、「村山富市首相」が主題になっている例である。

(4) 社会党首相として六日、初めて広島市での原爆死没者慰霊式・平和祈念式(平和記念式典)に出席した村山富市首相は、被爆者援護法制定について記者会見などで意欲は表明したものの確約はできなかった。

(『毎日新聞』1994.8.7朝刊 p.3)

日本の新聞では、日本の首相のような人物は、ほとんどかならず主題になり、「は」がつく。そのため、次の(5)のように、首相に「が」がついているときは、そこまで読んだだけで、この「首相が」が従属節の中のものだということがわかる。

(5) 村山首相が六日の広島市内での記者会見で、焦点の被爆者援護法の制定問題を「戦後処理問題」全般とは切り離して早急に検討を進める考えを表明したのは、「社会党色」を明確に打ち出し、村山内閣の意義を強くアピールする狙いからだ。

(『日本経済新聞』1994.8.7朝刊 p.2)

前の(4)のような、有題文にたいして、無題文がとくに使われやすいのは、次の(オ)のような場合である。

(オ)主格名詞が、聞き手(または、読み手)の意識にないと思われるものを指す名詞
のとき

たとえば、次の(6)の「琵琶湖の水位」は、その動向がいつも注目されているとはみなされていないものである。そのため、この文は無題文になっている。

(6) 琵琶湖の水位が三十日、マイナス一〇三センチまで下がり、五十五年前の過去最低

記録（一九三九年）に並んだ。

（『毎日新聞』1994.8.30 夕刊 p.1）

ただ、有題文と無題文の使いわけは、第3章第2節で述べたように、主格名詞だけでなく、述語や語順などによってもかわることがある。²

4. 説明の文章・談話の冒頭文の主題

説明の文章・談話というのは、専門分野についての解説書や、新聞・雑誌の解説記事や紹介記事の文章、それに学校の授業での先生の説明のことばなどである。こうした文章・談話にはいろいろなものがあるので、冒頭文で主題になるものにもいろいろなものがある。

なかでも、文の主題になりやすいのは、その文章・談話のテーマに関係がある名詞である。報道の文章・談話の場合は、主題になる名詞は、聞き手の意識にあるものであったが、説明の文章・談話の場合は、聞き手の意識にあるものに限られない。

たとえば、次の(7)は、「自己解体の病」という見出しのついたコラムの冒頭文である。この文では「生き物」が主題になっているが、この名詞は、見出しにもないものであり、聞き手の意識にあるとはいえないものである。

(7) 生き物は、遺伝子で決められた本来住むべき環境の中で最も快適な生涯を送る。

（『朝日新聞』1995.3.10 夕刊 p.5 「変わる情報環境」）

そのほか、とくに話しことばでは、話の現場に存在するものも、冒頭文の主題になる。次の(8)は、「ぼく」が主題になっている例である。

(8) ぼくはもともと京都大学出身なんですけど、ホモトピー論の権威・戸田宏さんのところで代数的トポロジーを専攻していました。

（数学セミナー編集部(編)『数学の最前線』p.139）

一方、無題文がとくに使われやすいのは、次の(カ)のような場合である。

(カ) 場面を設定したり、話題を導入するために使われるとき

たとえば、次の(9)の冒頭文は、そのあとに続く文に「文化服装学院」を導入するためのものなので、無題文になっている。

(9) 新宿駅南口から甲州街道を西に進んだ脇に、「ファッション人間」養成機関で

² 新聞記事の冒頭文が主題をもつかどうかについては、野田尚史(1984)が詳しい。永野賢(1965)は、新聞の政治面では有題文が多く使われ、社会面では無題文が多く使われることを調査している。また、坂口頼孝(1989)は、新聞の死亡記事の冒頭文について、政治家の場合は有題文が多く使われ、民間人の場合は無題文が多く使われることを調査している。

ある文化服装学院がある。この校門の前にしばらく佇んでいきかう若者たちを観察していると、しだいに気持ちが悪くなっていく。奇妙な格好の集団である。ピアスをつけ、スカートをもった男の子たちさえいる。明治の国粋主義者なら一刀両断のもとに切り捨てるであろう、装いである。

(『別冊宝島 87 ファッション狂騒曲』p. 11)

このような文は、場面を設定したり、話題を導入するものなので、その文の内容は、話し手がとくに主張したいことではないのがふつうである。いってみれば、それより後にでてくる文に従属している文である。

実際、この(9)の冒頭文も、次の(10)のように、後の文に従属させることができる。ということは、こうした文は、従属節にすると長く複雑でわかりにくくなるので、文として独立させただけのものだとみることもできる。

- (10) 新宿駅南口から甲州街道を西に進んだ脇にある「ファッション人間」養成機関である文化服装学院の校門の前にしばらく佇んでいきかう若者たちを観察していると、しだいに気持ちが悪くなっていく。

5. 物語の文章の冒頭文の主題

物語の文章というのは、小説や童話、民話などの文章である。こうした文章には、情景の描写から始まるもの、人物の紹介から始まるもの、人物の行動の記述から始まるものなど、いろいろなものがある。したがって、冒頭文で主題になるものにも、いろいろなものがある。

説明の文章・談話の場合も、聞き手の意識にないものまでふくめて、いろいろなものが主題になるのだったが、物語の文章の場合は、それがもっとはげしい。

たとえば、現代の小説では、次の(11)のように、冒頭文で、読み手の意識にないはずの、主人公を指す名詞が主題になることがある。

- (11) 気が付くと小田桐は人間一人がやっと通れるような森の中の狭いケモノ道をフラフラしながら歩いていた。 (村上龍『五分後の世界』p. 5)

さらに、読み手の意識にないだけでなく、読み手には何を指すのかわからないような名詞でも、主題になることができる。次の(12)では、何を指すのかわからない「その疑い」が、冒頭文で主題になっている。

- (12) その疑いは、男がサラダに手をつけ始めた時からすでに生じていた。

(林真理子『最終便に間に合えば』p. 9)

このように、現代の小説では、読み手が予想していないものを、いきなり主題にするというテクニックが使われることが多い。これは、読み手をすぐに物語の世界に引きこむためや、読み手に先を読みたくさせるためである。

一方、無題文がとくに使われやすいのは、次の(キ)のような場合である。

(キ)語り手や主人公からみた情景やできごとを描写するとき

たとえば、次の(13)は、主人公がみたできごとを述べる文なので、無題文になっている。

(13) 三本足の犬が、通行人の足元を縫って歩いてきた。(宮本輝『道頓堀川』p. 3)

このほか、童話や民話などでは、冒頭文で主人公を導入するために、次の(14)のような無題文が使われることがある。³

(14) むかし、あるところに、話売りがいた。(寺村輝夫『五平どん五つばなし』p. 10)

6. 文章・談話の冒頭文の主題のまとめ

文章・談話の冒頭文の主題について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 文の主題になる典型的な名詞

| | | | |
|----------|-----------|-------------|-------------|
| 日常の談話 | 話の現場にあるもの | 聞き手の意識にあるもの | 聞き手の意識にないもの |
| 報道の文章・談話 | | | |
| 説明の文章・談話 | | | |
| 物語の文章 | | | |

2) 無題文が使われる典型的な場合

| | |
|----------|-----------------------|
| 日常の談話 | 話し手が知覚したことを描写するとき |
| 報道の文章・談話 | 主格名詞が聞き手の意識にないものとき |
| 説明の文章・談話 | 場面を設定したり、話題を導入するとき |
| 物語の文章 | 語り手や主人公が知覚したことを描写するとき |

³ 小説の冒頭文については、糸井通浩(1987, 1992)が詳しい。糸井は、小説の冒頭文で人物提示をするとき、その人物を指すのが固有名詞や人称名詞、親族名称であれば「は」がつきやすく、普通名詞であれば「が」がつきやすいことなどを指摘している。

第2節 文章・談話の非冒頭文の主題

1. はじめに

前の第1節では、文章・談話の冒頭文について、主題の現れかたをみた。この第2節では、非冒頭文、つまり、文章・談話の第2文以降の文についてみていく。

文章・談話の非冒頭文の主題については、永野賢(1986:第三章第二節)をはじめ、畠弘巳(1985)や Hinds(1987)がいろいろな文章・談話を分析している。また、Iwasaki(1987)が説明の談話を、Maynard(1987)や Clancy and Downing(1987), Watanabe(1989)が物語の文章・談話を分析している。しかし、こうした研究はまだはじまったばかりである。

この節では、前の第1節と同じように、次の2つの観点から、文章・談話の主題をみていくことにする。

- 1) 有題文では、何が文の主題になるのか
- 2) 無題文が使われるのはどんなときか

文章・談話の非冒頭文では、文章・談話の種類による違いはそれほど大きくないが、第1節と同じように、日常の談話、報道の文章・談話、説明の文章・談話、物語の文章の4つにわけて、それぞれの代表的な例をみていく。

2. 日常の談話の非冒頭文の主題

日常の談話の非冒頭文で、とくに主題になりやすいのは、次の(ア)である。

(ア)それより前の文にでてきたものを指す名詞

たとえば、次の(1)では「あれ」が主題になっているが、これは、その直前に相手が出たことを指すものである。また、その次の(2)では「あいつ」が主題になっているが、これは、その前に自分が言った「赤名」を指すものである。

- (1) 華江「それを、あの子なんかと結婚しちゃって」

実「だからあれは、お袋があいつを気に入っちゃって、俺はほら、母一人子一人だから」
 (山田太一『ふぞろいの林檎たちIII』p. 98)

(2) 和賀「———どうだ？ 疲れがきてるようだな？」

永尾「はあ———このところ、接待だ何だで忙しかったもんで」

和賀「赤名のことだよ」

永尾「え———はあ」

和賀「(微笑って)最初に言った筈だ、あいつはそう簡単に付き合いきれぬ女じゃない」
 (柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p. 147)

このほか、日常の談話の冒頭文で主題になれるような名詞は、談話の非冒頭文でも主題になれる。次の(3)の3つめの文では、「わし」が主題になっている。⁴

(3) ボタン たかじんはわがままやからな、年のわりに。

たかじん 芸人はみんなそう違う？

ボタン わしはわがまま違うよ。

たかじん よう、おたくの口からそんなこと！

(大阪読売テレビ(編)『たかじん no ぼあー2』p. 120)

一方、無題文がとくに使われやすいのは、次の(イ)のような場合である。

(イ)できごとがおきた(または、おきる)ことを述べるとき

たとえば、次の(4)の最後の文や、その次の(5)の最後の文である。(4)の最後の文では、できごとがおきたことを述べている。また、(5)の最後の文では、できごとがおきることを述べている。

(4) 「大学中の話題だよ。すごいな一、耳に入らなかったの？」

困った顔をして笑いながら宗太郎は言った。

「あなたが知ってることすら知らなかったわ。何なの？」

私は言った。

「田辺の彼女が、前の彼女っていうの？ その人がね、田辺のこと学食でひっぱたいたのさ。」
 (吉本ばなな『キッチン』p. 40)

(5) 三上「いいのかよ、俺とこんな所にいて」

リカ「うん？」

⁴ 日常の談話の中で主題になれるものについては、Hinds (1976 : Chapter III) が詳しい。

三上「永尾が妬くぞ」

(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p.151)

このうち、(4)のようにすでにおきたことを述べる場合、日常の談話では、報道や説明、物語の文章にくらべて、文末が「~のだ」の形になりやすい。

そのほか、次の(6)の最後の文のように、話し手がそのときその場で知覚したことを描写するときも、無題文が使われる。ただし、こうした文は、前の文とのつながりがなく、唐突な印象をあたえやすい。

(6) 「……じゃあ、あなたが何度も往復すればいいのよ。」

「だって、君が来ればいっぺんですむんだからさ。ほーら、月がきれいだよ。」

(吉本ばなな『キッチン』p.95「満月」)

3. 報道の文章・談話の非冒頭文の主題

報道の文章・談話の非冒頭文で、とくに主題になりやすいのは、次の(ウ)である。

(ウ)それより前の文にでてきたものと関係のあるものを指す名詞

たとえば、次の(7)の2つめの文では、「最後まで残っていた大阪空港（伊丹）発着便」が主題になっているが、これは、その前の文の「欧州航空路線南回りルート」に関係のある名詞である。

(7) かつて日本人ビジネスマンの多くが利用した東南アジア、中東経由の欧州航空路線南回りルートが、この秋で四十年あまりの歴史に幕を閉じることになった。最後まで残っていた大阪空港（伊丹）発着便は関西国際空港オープンを機に、十一月までにシベリア上空を通過する直行便に切り替わる。また成田空港発着便で唯一、南回りを使用していたオリンピック航空（ギリシャ）も、経営不振を理由に十一月で運休する。 (『日本経済新聞』1994.8.7朝刊 p.27)

一方、無題文がとくに使われやすいのは、次の(エ)のような場合である。

(エ)できごとがおきた（または、おきる）ことを述べるとき

これには、次の(8)の2つめの文のようなものや、その次の(9)の最後の文のようなものがある。(8)は新聞記事の最初の部分であるが、最初の無題文に続けて、もうひとつ無題文を使っている。(9)は、前の(7)と同じ新聞記事の後ろのほうの部分である。この記事の最初に述べたできごとを、ここで、もう一度、無題文を使って述べている。

(8) スギ花粉症の予防・治療薬開発で、効果が出るまでの期間を大幅に短縮する注

射薬が、二〇〇〇年ごろにも登場する可能性が出てきた。共同開発中の林原生物化学研究所（岡山市）と三共が、本格的な臨床試験段階に入った。

（『毎日新聞』1995.7.5 朝刊 p.3）

- (9) しかし、これらの路線のうち、成田－アテネ線は、経営不振に陥っているオリンピック航空の赤字路線廃止策の対象となり、十一月一日の運航を最後に運休が決定した。また、九月四日の関西国際空港の開港を契機に、エールフランスなどが同空港発着の最短ルートを使った直行便に十一月までに切り替えることになったため、南回りルートが完全に姿を消すことになった。

（『日本経済新聞』1994.8.7 朝刊 p.27）

4. 説明の文章・談話の非冒頭文の主題

説明の文章・談話の非冒頭文で、とくに主題になりやすいのは、報道の文章・談話と同じで、次の(オ)である。

(オ) それより前の文にでてきたものと関係のあるものを指す名詞

たとえば、次の(10)の2つめの文では「それを可能にしたの」が主題になっているが、これは、その前の文の「サーフィンをどんどん変えていった」に関係のある名詞である。また、最後の文では「一枚板だったボード」が主題になっているが、これも、「サーフィン」に関係のある名詞である。

- (10) 彼より若い世代はサーフィンをどんどん変えていった。それを可能にしたのは技術革新である。一枚板だったボードはやがて骨組みの上に合板を張った中空型に代わり、重量がぐんと軽くなった。 （『SINRA』1995.5 p.141）

なお、青山文啓(1987)は、料理の文章では、下ごしらえを他の過程から浮かびあがらせるために、「カキは塩水の中で振り洗いをし、水けをふきとる。」のような、材料を主題にした文が使われることを指摘している。

一方、無題文がとくに使われやすいのは、次の(カ)のような場合である。

(カ) 話題を転換するとき

たとえば、次の(11)では、段落が変わった冒頭文で、無題文が使われている。これは、前の段落の話題「エネルギー消費量」を打ち切って、新しい話題「ミトコンドリアの量」を導入するためのものである。

- (11) ゾウの組織－グラムは、ネズミの組織－グラムより、エネルギー消費量がずっ

と少ない。なぜだろう？ 大きい動物は死んだ組織の割合が多いからエネルギー消費量が少なくなるのだ、というわけではない。死んではいない。しかし、細胞そのものの活発さが、ゾウとネズミとは違い、大きいとあまり活発でなくなるのである。

ミトコンドリアという細胞内小器官がある。これが細胞の中で酸素を使ってATPを作り出しているのだが、細胞のエネルギー需要が動物のサイズにより異なるのなら、細胞内に含まれているミトコンドリアの量も違っているかもしれない。実際に調べてみると、小さい動物ほど、ミトコンドリアがたくさん含まれていた。

(本川達雄『ゾウの時間 ネズミの時間』p. 29)

そのほか、できごとの記述が多い説明の文章・談話では、できごとを述べるために、次の(12)の最後の文のように、無題文がよく使われる。

- (12) フィリピン海プレートは、相模トラフで関東地方の下へ沈み込んでいる。そのために、図4-1のS領域(およその範囲、ほかの領域も同じ)で大正関東地震のようなM8級のプレート境界巨大地震が発生する。

(石橋克彦『大地動乱の時代』p. 122)

5. 物語の文章の非冒頭文の主題

物語の文章の非冒頭文で、とくに主題になりやすいのは、次の(キ)である。

(キ)それより前の文にでてきたものを指す名詞

たとえば、次の(13)では、この小説のはじめからでてきている主人公を指す「彼」が主題になっている。

- (13) その笑みを見るたびに、彼は、さよなら、という言葉のみこんでしまった。

(増田みず子『シングル・セル』p. 172)

このほか、それより前の文にでてきたものとの関係のあるものを指す名詞も、物語の非冒頭文で、主題になれる。次の(14)の会話文の後の文では、冒頭文の「泣き始めた」に関係がある「涙」が主題になっている。

- (14) えり子は突然泣き始めた。

「どうして、本当の事、言ってくれないのよ。私たち親友じゃないの。瞳美ちゃんのお母さん言ってたわよ。ボーイフレンドの家に行ったって」
えり子の涙は、もう決して私に訴えかけはしない。本当の事を言って、それか

ら、あなたが何をすることが解るから、怖くて言えないのよ。私は心の中で叫んだ。
 (山田詠美『蝶々の纏足』p.113-p.114)

また、現代の小説では、読み手が予想していないものを、突然、主題にすることもある。次の(15)の3つめの段落の冒頭文では、突然、「スナック・ミント」が主題になっている。

(15) お金なんかどうだっていいのよ。私とあなたは恋人同士じゃないの。このくらいのこと私にさせてちょうだい。

そんな言葉をあらかじめ反芻しながら、美登里は夜道を歩いた。

スナック・ミントは、外も内部の壁も木を張りめぐらしてある。流れているのはモダンジャズなのに、インテリアはどうみてもカントリー音楽風だ。それなのにママのエミちゃんも、客たちもこの矛盾に全く気づいていないふうだった。

美登里は店のドアを開けた。客は数人しかいない。エミちゃんは、あらっという風に笑顔を投げてよこした。
 (林真理子『最終便に間に合えば』p.31)

こうした有題文にたいして、無題文がとくに使われやすいのは、次の(ク)のような場合である。

(ク)新しいできごとがおきたことを述べるとき

たとえば、次の(16)の最後の文は、物語の途中で、新しいできごとがおきたことを述べるものなので、無題文になっている。このような文は、文章の最初や段落の最初にできてやすい。そして、話の場面をかえたり、話を新しい方向に展開するのに使われる。

(16) そして帰りみち電話ボックスに入って緑に電話をかけてみた。……[省略]……

「元気？」と僕は訊いてみた。

「なんとか」と彼女は言った。そして電話を切った。

五月の半ばにレイコさんから手紙が来た。

(村上春樹『ノルウェイの森(下)』p.195)

物語にすでにでてきている人物の行動を述べるときは、有題文になることが多いが、予想していなかった意外な行動を新しいできごととして述べるときは、次の(17)の「陽子が……」のように、無題文になる。

(17) 「大学行けるの？」

「だって無試験だもん」

「へえ……。じゃあ三年も遊んでられるんだ」

「うん」

陽子が急に睨むような目で真規を見あげた。

「そうやって、ずっとこれからもどうにかなると思ってんでしょ」

(鷲沢萌『少年たちの終わらない夜』 p. 19)

なお、登場人物が発言したことを述べる文は、できごととして、次の(18)の「慎一が言った。」のように、無題文になることがかなり多い。⁵

(18) 慎一も黙りこんで、瑠璃子の顔を見つめていた。瑠璃子は運ばれてきたジュースを一口で飲んだ。

——出ようか。

慎一が言った。瑠璃子は頷いた。(津島佑子『火の河のほとりで』 p. 324)

6. 文章・談話の非冒頭文の主題のまとめ

文章・談話の非冒頭文の主題について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 文の主題になる典型的な名詞

| | |
|----------------------|-----------------------|
| 日常の談話 物語の文章 | 前にでてきたものを指す名詞 |
| 報道の文章・談話 説明の文章・談話 | 前にでてきたものと関係のあるものを指す名詞 |

2) 無題文が使われる典型的な場合

| | |
|----------------------------|----------------------|
| 日常の談話 報道の文章・談話 物語の文章 | できごとがおきたことを述べる とき |
| 説明の文章・談話 | 話題を転換するとき |

⁵ こうした文の主題については、Kuroda(1987)の分析がある。

第3節 話しことばの無助詞

1. はじめに

話しことばでは、「ごはん、食べた？」の「ごはん」のように、「は」も「が」もつかない無助詞の形が使われることがある。

このような無助詞については、Tsutsui(1983)や筒井通雄(1984)、丹羽哲也(1989)、甲斐ますみ(1991)、長谷川ユリ(1993)、丸山直子(1995)など、かなり多くの研究がおこなわれてきた。

しかし、文体による違いや、主文の中と従属節の中の違いなど、まだほとんど研究されていない問題も多い。

この第3節では、話しことばに特有の無助詞を「主題性の無助詞」と「非主題性の無助詞」にわけたうえで、それぞれの無助詞の性質や機能を、「は」や「が」とも比べながらみていく。

2. 書きことばと話しことば

書きことばでは、格成分には「が」や「を」などの格助詞か、「は」や「も」などのとりたて助詞がつくのがふつうである。それにたいして、話しことばでは、そうした助詞がつかないことがある。

次の(1)は書きことばの例、その次の(2)は話しことばの例である。⁶

- (1) 私は、いくつになろうとも、自分につりあう年の男に美しくあってほしいし、
いかしてほしてほしいし、そして、物語の主人公にふさわしくあってほしい。

(中島梓『美少年学入門』p. 71)

⁶ 例文の中の「は」は、助詞がついていないことを表す。

(2) 埼玉「でも、この辺 ϕ 人通り ϕ ないから、帰りは送ります」

則子「そんなの ϕ 変よ (と笑ってしまう)」 (山田太一『真夜中の匂い』 p. 298)

ただし、書きことばと話しことばといっても、簡単に2つにわけられるものではない。一方に典型的な書きことばの文体があり、もう一方に典型的な話しことばの文体があり、その間にいろいろな段階があると考えられる。無助詞の現れかたも、そうした文体の違いによってかわってくる。

たとえば、前の(1)と次の(3)を比べてみよう。どちらも同ジェッセーの中の文だが、前の(1)は、ほぼ書きことばの文体になっているので、「は」がついた「私は」が使われている。それにたいして、次の(3)は、話しことばに近い文体になっているので、無助詞の「私」が使われている。

(3) 実は私 ϕ 、昔のことだけど、あんぐらいの髪の長さの男っていくらでも見たね
一。 (中島梓『美少年学入門』 p. 88)

また、たとえば、前の(2)と次の(4)を比べてみよう。どちらも同じシナリオの中の同じ二人の会話である。前の(2)は、親しくなった二人が、話の現場に密着した具体的な話をしているときの文である。このような文体では、「この辺」や「人通り」のように、無助詞になりやすい。それにたいして、次の(4)は、初対面の二人が、抽象的な話をしているときの文である。このような文体では、「ぼくは」のように、「は」が使われやすくなる。

(4) 埼玉「そりゃあそうです。ぼくは日本のミルクティを見ると、紅茶後進国である
とつくづく悲しくなります。ミルクはたっぷりとあつためた牛乳が来なければ、
ミルクティのおいしさを、ほとんど獲得することは出来ません」

則子「ええ (うなずく)」 (山田太一『真夜中の匂い』 p. 169)

このように考えてくると、典型的な話しことば、つまり、親しい人どうしが、インフォーマルに、話の現場に密着した具体的な話をするような文体に近づけば近づくほど、無助詞になりやすいといえる。

これまでの研究では、たとえば前の(2)の「この辺」は、「この辺は」から助詞の「は」が「省略」されたものだとして、そうした省略がおきる条件をもとめようとするものが多かった。しかし、もつとも話しことばらしい話しことばでは、こうした助詞は、むしろ、「省略」されるほうがふつうであると考えられる。

そうした考えにたつて、ここでは、次の(ア)のような原則を提案する。

(ア)もつとも話しことばらしい話しことばの場合、単文や、複文の主文の中では、基

本的に、主題の「は」や主格の「が」は使われない。「は」が使われるのは対比的な意味があるときであり、「が」が使われるのは排他的な意味があるときである。

この節では、このあと、もっとも典型的な話しことばの文体で、どんなときに無助詞になり、どんなときに「は」や「が」が使われるのかをみていく。

3. 主題性の無助詞と非主題性の無助詞

「は」や「が」などの助詞がつかない無助詞は、大きく、「主題性の無助詞」と「非主題性の無助詞」の2つに分けることができる。

主題性の無助詞というのは、主題を表す働きをするものである。つまり、書きことばなら主題の「は」がつくはずなのに、話しことばであるために、次の(5)の「おまえ」のように、「は」がついていないものである。

(5) 三上「俺が関口と別れたら、おまえ ϕ 嬉しいか？」

(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p. 94)

このような主題性の無助詞の成分は、主題の成分と同じように、基本的に、文頭におかれ、文を、主題の部分とそれ以外の部分に大きく二分する。

一方、非主題性の無助詞というのは、主題を表す働きをしないものである。つまり、書きことばなら主格の「が」などの格助詞がつくはずなのに、話しことばであるために、次の(6)の「お腹」のように、「が」などがついていないものである。

(6) 「お腹 ϕ 、痛い」 (鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』p. 163)

このような非主題性の無助詞の成分は、基本的に、述語の直前にあり、すぐ後ろの述語と強く結びついている。

この(6)の「お腹」は「が」がついていない非主題性の無助詞だが、「を」や「に」や「へ」がついていないものも、まったく同じ非主題性の無助詞である。たとえば、次の(7)では、「家(へ)」や「間(を)」や「風呂(に)」などが非主題性の無助詞になっている。⁷

(7) 雅 ふつう、家 ϕ 帰ったら、ある程度間 ϕ おいてから「風呂 ϕ 入るわ」 ϕ 言うのに、家 ϕ 帰った瞬間、「風呂 ϕ 入るう」 ϕ 言うて風呂 ϕ 入ってたら、嫁さんがドアをカチャとやって「に ϕ おい ϕ 消してんの？」(笑)

⁷ 関西方言では、(7)の「風呂入る」 ϕ 言う」のように引用の「と」も非主題性の無助詞になる。

(大阪読売テレビ(編)『たかじん no ばあー2』 p. 158)

なお、主題性の無助詞と非主題性の無助詞の区別は、丹羽哲也(1989)の「主題を表示する場合」と「単に格助詞の省略と考えてよい場合」の区別や、丸山直子(1995)の「遠くの動詞に係る大きい結合」と「直後の動詞に係る小さい結合」の区別などに、ほぼ対応する。

4. 「は」と主題性の無助詞

書きことばでは、主題を表すときも対比を表すときも「は」が使われる。

典型的な話しことばでは、なんらかの対比的な意味があるときは、書きことばと同じで、次の(8)の「私は」のように、「は」が使われる。

(8) 定岡正二：いや、私は根がまじめですもん。

高橋慶彦：おい。

浜田雅功：あ、そうですか？

定岡正二：うん。慶彦みたいにさ、あの一、なんていうの、軽い気持ちでつきあわないすよ。 (『ダウンタウンDX』1994. 2. 10 22:39)

しかし、単なる主題を表すときは、次の(9)の「私」や、その次の(10)の「三上くん」のように、「は」が使われず、主題性の無助詞になりやすい。

(9) 寺門 「私いつも男の人には大人っぽく見られちゃうんですよ。中学生のときは大学生に見られて、大学生のときはお勤めですかって常に聞かれて」

(柳田精次郎(他)(編)『恋のから騒ぎ』 p. 153)

(10) バー“ゼルダ”店内

並んで飲んでいる永尾とさとみ

さとみ「三上くん、どうしてる？」

永尾「顔じゃ笑ってるけど、結構ショック大きいみたいだな」

(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』 p. 170)

このような主題性の無助詞にとくになりやすいのは、次の(イ)や(ウ)のような名詞である。

(イ)話の現場に存在するものを指す名詞

(ウ)質問文の主題を表す名詞

(イ)は、具体的にいうと、「私」や「おまえ」、「これ」、「そのシャツ」のような名詞である。このような名詞は、第3章第8節で述べたように、主題になりやすい。そのため、

対比的な意味がないときは、典型的な話しことばでは、前の(9)のように、無助詞で使われることが多くなる。

また、(ウ)の質問文の主題を表す名詞というのは、前の(10)の「三上くん」のような名詞である。質問文は、第3章第1節の9.で述べたように、ほぼかならず主題をもつ。そうした主題の名詞は、対比的な意味がなければ、典型的な話しことばでは、無助詞で使われることが多くなる。⁸

ここまでのまとめとして、書きことばと話しことばの、「は」と主題性の無助詞のおおまかな使いわけを図にすると、次の(11)のようになる。

(11)

| | 典型的な主題 | 典型的な対比 |
|-----------|----------|--------|
| 典型的な書きことば | ～は | ～は |
| 典型的な話しことば | ～ ϕ | ～は |

5. 「が」と非主題性の無助詞

書きことばでは、主格を表すときも排他を表すときも「が」が使われる。

典型的な話しことばでは、なんらかの排他的な意味があるときは、書きことばと同じで、次の(12)の「司会者が」のように、「が」が使われる。

(12) 坂上二郎：で、司会者がいちばんもてない。夜、遊郭にひやかしに行くでしょ。

「あー、司会者、きょうはおもしろかった」って、それだけ。

中居正広：ちょ、ちょ。司会者、だめ？

(「キスした？SMAP」1995.3.19 1:36)

しかし、単なる主格を表すときは、次の(13)の「電池」のように、「が」が使われず、非主題性の無助詞になることがある。

(13) 朝美「あれ、電池 ϕ 切れた」

杉矢「仕方ないな、買って来るか」 (北川悦吏子『君といた夏』p.49)

単なる主格のなかでも、比較的、無助詞になりやすいのは、次の(エ)のような主格である。⁹

⁸ 久野暉(1973:p.218)は、疑問文に、助詞のつかない主語が用いられる場合が多いことを指摘し、その理由を述べている。

⁹ 述語の直前の主格が無助詞になりやすいことは、Tsutsui(1983)で述べられている。

(エ)述語の直前にあり、述語との結びつきが強い主格

(エ)は、「電池が切れる」の「電池が」や、「お腹が痛い」の「お腹が」のような主格である。このようなものは、「が」がなくても動詞との関係がわかりやすいので、「が」をつけずに使われることが多くなる。ちょうど「気がつく」が複合語の「気づく」になるのと同じように、「お腹が痛い」が「お腹痛い」になるのである。

そうではない次の(14)の「あいつが」のような主格は無助詞になりにくい。¹⁰

(14) 竹芝の声「そうしたら、あいつが同意書に判押して、墮ろすのも付き添ってやった。停学くらったけどな」 (北川悦吏子『あの頃の君に逢いたい』p.56)

ここまでのまとめとして、書きことばと話しことばの、「が」と非主題性の無助詞のおおまかな使いわけを図にすると、次の(15)のようになる。

(15)

| | 述語の直前の主格 | 典型的な排他 |
|-----------|----------|--------|
| 典型的な書きことば | ～が | ～が |
| 典型的な話しことば | ～ ϕ | ～が |

6. 従属節の中の無助詞

ここまでみてきた無助詞は、単文や、複文の主文の中のものだった。それにたいして、複文の従属節の中では、次の(オ)と(カ)のような原則がある。

(オ)強い従属節の中では、主題性の無助詞は使われない

(カ)強い従属節の中でも、非主題性の無助詞は使われる

(オ)は、「～たら」や「～とき」などの強い従属節の中では、主題の「は」が使えないのと同じように、主題性の無助詞は使えないということである。

たとえば、次の(16)の無助詞の「お前」は、従属節の中には入らないので、「しあわせになる」の主格にはならない。主文の「こわい」の主格になるだけである。

(16) 松岡「お前 ϕ 、しあわせになるのがこわいんだよ」

(北川悦吏子『あの頃の君に逢いたい』p.81)

一方、(カ)は、非主題性の無助詞は、主題性の無助詞と違って、強い従属節の中でも使われることがあるということである。たとえば、次の(17)では、「～たら」節の中で「お

¹⁰ 影山太郎(1993:pp. 56-57)は、意図的行為を表す「非能格自動詞」の主語の「が」より、非意図的事象を表す「非対格自動詞」の主語の「が」のほうが脱落しやすいことを指摘している。

ねえちゃん」が非主題性の無助詞になっている。

(17) 雅 けど、クラブに行って横におねえちゃん ϕ 座ったらにおいつくで。

(大阪読売テレビ(編)『たかじん no ばあー2』 p. 157)

7. 話しことばの無助詞のまとめ

話しことばの無助詞について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 「は」と主題性の無助詞

| | |
|----------------------------------|----------------------|
| (18) | 典型的な主題 ←————→ 典型的な対比 |
| 典型的な書きことば ↑ ↓ 典型的な話しことば | 「～は」 「～ ϕ 」 |

2) 「が」と非主題性の無助詞

| | |
|----------------------------------|------------------------|
| (19) | 述語の直前の主格 ←————→ 典型的な排他 |
| 典型的な書きことば ↑ ↓ 典型的な話しことば | 「～が」 「～ ϕ 」 |

第 7 章

対 比 を 表 す 「 は 」

第1節 明示的対比を表す「は」

1. はじめに

ここまでみてきた「は」は主題を表すものであった。しかし、「は」のなかには、主題を表す働きが弱く、対比的な意味が強いものがある。「子供たちはカレーは作っているが、ごはんは炊いていない。」のような「は」である。対比を表す「は」は、主題を表す「は」とはまったく別のものではなく、たがいにつながりがある。この第7章では、対比を表す「は」について考えていきたい。

第1節でとりあげるのは、「子供たちはカレーは作っているが、ごはんは炊いていない。」のように、対比の相手が明示されているものである。「子供たちは食器は持ってきた。」のように、対比の相手が明示されていないものは、次の第2節でとりあげる。

対比を表す「は」については、尾上圭介(1981)、青木伶子(1992)をはじめとして、多くの研究がある。ただ、明示的対比を表す「は」については、ほとんど問題がないと考えられているのか、詳しい研究はない。

この節では、明示的対比を表す「は」について、どのような構造の文で、どのように使われるのかをみていきたい。

2. 対比専用の「は」と対比兼用の「は」

一般に「対比の「は」」といわれるのは、次の(1)の「肉は」の「は」、「魚は」の「は」や、その次の(2)の「兄は」の「は」、「弟は」の「は」である。

(1) 私は肉は好きだが、魚は好きではない。

(2) 兄は肉が好きだが、弟は魚が好きだ。

ただし、同じように対比を表すといっても、(1)の「は」と(2)の「は」には違いがある。(1)の「肉は」、「魚は」は、対比の意味がなければ、次の(3)のように、「肉が」、

「魚が」になる。それにたいして、(2)の「兄は」、「弟は」は、対比の意味がなくても、その次の(4)のように、「兄は」、「弟は」だからである。

(3) 私は肉が好きだ。／ 私は魚が好きではない。

(4) 兄は肉が好きだ。／ 弟は魚が好きだ。

いいかえると、(1)の「肉は」と「魚は」の「は」は、対比を表すだけで、主題を表す働きはしていない。この文で主題を表しているのは、「私は」の「は」である。それにたいして、(2)の「兄は」と「弟は」の「は」は、まず第一に、主題を表している。そして、それが、逆接の接続助詞の「が」を使った対比の構文の中にあるために、結果的に、対比の意味を感じさせるのである。¹

これは、対比を表すといわれる「は」にも、対比専用の場合と、対比兼用の場合があるということである。対比専用というのは、(1)の「肉は」と「魚は」の「は」のように、主題を表さず、対比だけを表すものである。対比兼用というのは、(2)の「兄は」と「弟は」の「は」のように、主題を表すと同時に、対比の意味ももっているものである。

対比専用の「は」と対比兼用の「は」では、対比専用の「は」のほうが、対比の「は」の典型である。対比兼用の「は」は、結果的に対比の意味が感じられるだけのもので、典型的な対比とはいえない。²

では、典型的な対比の「は」である対比専用の「は」を中心にみていこう。

3. 対立的対比と並立的対比

この節で扱う「明示的対比」は、対比の相手が明示されるものである。対比の相手を明示するには特定の構文が使われるが、そうした構文には、典型的なものとして、2つの種類がある。次の(5)のように対立的対比を表すものと、その次の(6)のように並立的対比を表すものである。³

(5) 私は肉は好きだが、魚は好きではない。

(6) 私は肉はスーパーで買い、魚は市場で買う。

¹ 「は」が主題と対比を同時に表すことがあることは、佐藤ちよ子(1976)や野田時寛(1988)などで指摘されている。

² 益岡隆志(1991:第7章,補説2)は、ここでいう対比兼用の「は」を「対立主題」を表すものとして、典型的な主題の「は」と典型的な対比の「は」の間に位置づけている。

³ 青木伶子(1992:p. 147)は、それぞれを「逆接対比」と「並立対比」とよんでいる

対立的対比を表す文は、対比される2つの部分が、逆接の「が」や「けれど」でつながれているものである。このタイプでは、典型的には、2つの述語が「好き」と「好きではない」のように、肯定と否定で対立している。

一方、並立的対比を表す文は、対比される2つの部分が、並列の「て」や「し」でつながれているものである。このタイプでは、典型的には、2つの述語が「買う」のように同じか、よく似たものである。

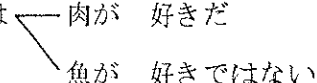
対立的対比を表す文と並立的対比を表す文では、対立的対比を表す文のほうが、対比を表す文の典型だといえる。それは、対立的対比を表す文では、対比専用の「は」がよく使われるが、並立的対比を表す文では、対比専用の「は」が使われることはあまりないからである。

4. 明示的対比を表す文の構造

明示的対比を表す文の典型は、次の(7)のような文である。

(7) 私は肉は好きだが、魚は好きではない。

この文は、次の(8)のように、「私は」が共通の主題で、「肉が好きだ」と「魚が好きではない」が対比されているものである。

(8) 私は 

この(8)から前の(7)ができるプロセスは、次の(ア)から(ウ)にわけられる。

(ア)対比される「肉が好きだ」と「魚が好きではない」が、接続助詞の「が」や「けれど」でつながれる

(イ)「肉」と「魚」という同類の名詞が、それぞれ「好きだ」と「好きではない」という肯定と否定で対立する同類の述語と結びついているとき、対比の「は」が入る

(ウ)対比される部分の中のいちばん大きな切れめ、つまり「肉が」と「魚が」の後に、対比の「は」が入る

(ア)は、対比される2つのものの接続のしかたを述べたものである。(イ)は、どんなときに対比の「は」が使われるかを述べたものである。(ウ)は、対比の「は」の位置を述べたものである。

ただし、この(ア)から(ウ)は、もっとも典型的な場合のことを述べたものである。さら

に詳しいことは、次の5.から7.でみていく。

5. 明示的対比を表す文の接続助詞

明示的対比を表す文では、対比される2つの部分をつなぐのに、接続助詞が使われることが多い。そうした接続助詞には、「が」や「けれど」のように対立的なものと、「て」や「し」のように並立的なものがある。

はじめに、対立的な接続助詞であるが、「が」や「けれど」のほか、「のに」や「ても」も使われる。ただし、「～のに」節や「～ても」節の中では、対比の「は」が使われないことがある。さらに、「～のに対し」節や「～のと対照的に」節の中では、対比の「は」が使われないのがふつうである。

たとえば、次の(9)では、「電車特急が30分」と「ディーゼル特急が35分」が対立的に対比されているように感じられる。しかし、「～のに対し」節の中の「電車特急が」は、「電車特急は」にはならない。

- (9) 電車特急が大阪-三田間 30分を標準としているのに対し、ディーゼル特急は35分と5分遅い。 (川島令三『全国鉄道事情大研究 神戸篇』p.193)

対比の「は」が「～が」節で使われ、「～のに対し」節で使われないのは、従属度の違いである。「～が」節は従属度の低い、弱い従属節なので、自由に「は」が現れる。それにたいして、「～のに対し」節は、従属度の高い、強い従属節なので、「は」が現れにくいのである。

次に、並立的な接続助詞であるが、代表的なのは「て」や「し」である。ただ、並立的対比では2つの述語が同じになることが多いので、はじめの述語が省略されている場合も多い。次の(10)では、はじめの述語の「(濃い口)にする」の連用形である「(濃い口)にし」が省略されている。

- (10) 東洋水産や日清食品などのように、和風めんを関東ではかつおだし中心の濃い口、関西ではこぶだし中心で薄口にしている社もある。

(『朝日新聞』1993.3.17 夕刊 p.7「ハイタッチテクノ」)

このほか、接続助詞ではなく接続詞で、2つの文がつながれている場合もある。たとえば、次の(11)の最初の文の「自由裁量はきく」は、最後の文の「できることは……行くこ

とだけだ。」と、「しかし」でつながれている。¹

- (11) 確かにスリ係の刑事は、ほかの部署の警察官や刑事と違って、自由裁量はきく。特別な場合の共同の張り込みを除き、本庁との連絡さえ欠かさなければ各自勝手に歩き回っていい。西は静岡から北は甲府、東は水戸までの全交通機関に通用する<警視庁移動警察官>という無料パスも、スリ係の刑事のみが持っている。必要と思えば名古屋あたりまでも随時出かけることができる。しかし、それにしても、できることはスリの「いそうな場所」に行くことだけだ。

(足立倫行『人、旅に暮らす』p.59)

ただし、2つの文にまたがる対比では、対比の力が弱くなりやすい。とくに、2つの文が離れているときは、なおさらである。実際、この(11)でも、対比の「は」をつかわず「自由裁量が」としても、不自然にはならない。

6. 対比専用の「は」が必要な文

接続助詞の「が」や「けれど」で2つの節がつながれた文でも、かならず対比の「は」が使われるわけではない。2つの節がほとんど対等に対比されているのではなく、「～が」節が前置きのようにになっているときは、対比の「は」は使われない。

たとえば、次の(12)では、「～が」節と主文が対等に対比されているのではないので、「受賞第一作は」や「掲載されるのは」にはなっていない。

- (12) まあ、新人賞を受賞すると、受賞第二作をたいてい書かせてくれるんですが、掲載されるのが一年後だったりするんですね。

(三田誠広『天気の良い日は小説を書こう』p.28)

対比の「は」がほぼかならず使われるのは、対比される部分が構造的に対立しているときである。つまり、4.の(イ)で述べたように、同類の2つの名詞にたいして、それぞれの述語が肯定と否定で対立しているときである。

たとえば、次の(13)では、「イキを止めていること」と「心臓を止めておくこと」が「できる」と「できない」で対立している。この場合、「止めていることは」と「止めておくことは」の「は」は「が」にかえられない。

¹ 青木裕子(1992:p.147-p.148)は、1つの文の中での対比を「文型対比」とよび、2つ以上の文にわたるものを「文脈対比」とよんでいる。

- (13) 私たちは数十秒間イキを止めていることはできませんが、心臓を止めておくことはできません。 (大石正道『生物のしくみ』p.40)

ここで、述語が肯定と否定で対立するというのは、「ない」がついているかどうかの対立だけをいっているのではない。「好き」と「嫌い」のように反対の概念であってもよいし、次の(14)の「東京の秋葉原の五分の一程度の額にすぎない」と「日本一である」のように対立する概念であってもよい。

- (14) 大阪・日本橋の電気街は、家電製品の売上額では、東京の秋葉原の五分の一程度の額にすぎないが、パソコンの売上額は日本一である。

(山本隆雄(他)『コンピュータ・ウイルス』p.56)

また、対比される部分が意味的に対立しているだけでも、対比の「は」が使われることがある。たとえば、次の(15)では、「風は冷たい」と「ええ天気や」が意味的に対比され、「風が」に対比の「は」が使われている。

- (15) 「うん、風は冷たいけど、ええ天気や」 (宮本輝『道頓堀川』p.42)

ただし、意味的にだけ対立しているときは、対比の「は」はかならずしも必要ではない。この(15)でも、「風は」を「風が」にしても、なりたつ。

7. 対比専用の「は」の位置

前の6.では、どんなときに対比専用の「は」が必要かを考えた。ここでは、そうした「は」がどこにおかれるのかを考える。

はじめに確認しておきたいことがある。それは、明示的対比を表す「は」は、1つの文に1組しか使われないということである。

たとえば、次の(16)では、細かくみると、「魚に」と「野菜に」、「煮崩れを防いで味をしめるため」と「ツヤを出し、やわらかくするため」、「最初に」と「最後に」の3つが対比されている。

- (16) みりんは、魚には煮崩れを防いで味をしめるため最初に入れ、野菜にはツヤを出し、やわらかくするため最後に入れる、というのも大切なポイントだ。

(『an・an』1995.9.29 p.58)

しかし、対比の「は」は1組に限られ、次の(17)にはならない。

- (17) *みりんは、魚には煮崩れを防いで味をしめるためには最初に入れ、野菜にはツヤを出し、やわらかくするためには最後に入れる、というのも大切なボ

イントだ。

それでは、そうした対比の「は」は、どこにおかれるのだろうか。基本的には、4.の(ウ)で述べたように、対比される部分の中のいちばん大きな切れめの後である。たとえば、次の(18)では、「ゴルフを」の後と「生活が」の後におかれ、「ゴルフは」と「生活は」になっている。

(18) サブはゴルフはやるが、生活は派手ではない。

(『別冊宝島87 ファッション狂騒曲』 p.19)

この(18)で対比されているのは、尾上圭介(1981:p.103)が指摘するように、「ゴルフ」と「生活」ではなく、「ゴルフをやる」と「生活が派手ではない」である。それにもかかわらず、「ゴルフを」や「生活が」に「は」がつくのは、このような格成分の後がいちばん大きな切れめになっているからである。

このように、対比される部分が1つの格成分と述語だけのときは、対比の「は」は格成分の後につく。対比される部分に格成分が2つ以上あるときは、基本的に、いちばん前の格成分の後につく。ふつう、そこがいちばん大きな切れめになるからである。前の(16)では「魚に」と「野菜に」の後である。

述語だけで格成分がないときは、次の(19)の「組み合わせではある」のように、「は」が述語にわって入ることもある。しかし、その次の(20)の2つめの文の「組み合わせだ」のように、「は」が使われないことも多い。

(19) 意表を衝いた組み合わせではあるけれど、格別の味わいだ。

(20) ご主人によれば「キムチはチーズやバターに合うんですよ」とのこと。意表を衝いた組み合わせだけれど、「キムチと言えはスパゲッティ！」と言いたくなるほど格別の味わいだ。

(『あまから手帖』1993.7 p.121)

なお、格成分があるのに、「は」が格成分につかず、述語にわって入って、「行きはした」のような形になることもある。次の(21)では、ただ使うのではなく、駆使するということを強く言うために、この形になっている。

(21) 彼はパソコンを駆使はするが、ソフトを作るわけではない。

(『BE-PAL』1995.7 p.64)

ただし、このような形は、思わせぶりで、もったいぶった言いかたになりやすく、日常の話しことばではあまり使われない。

8. 明示的対比を表す文の周辺

この節の最後に、明示的対比を表す文と関係が深い「形はいいが、色が悪い」型と、「家は取られ、妻には逃げられた」型についてふれておきたい。

1) 「形はいいが、色が悪い」型

ここまでみてきた明示的対比を表す文では、対比される2つの部分が、ほぼ対等に、たがいに対比されていた。もちろん、主文になっている後の部分のほうが言いたいことの中で、従属節になっている前の部分のほうが付随的になりやすい。しかし、対比については、ほぼ対等といえた。

ところが、主文を述べることに重点がおかれると、主文のほうでは対比の「は」が使われなくなる。たとえば、次の(22)の最後の文では、「味が悪くない」と「皮がかたい」が対比されて、「味は」と「皮は」になってもよいはずである。しかし、「皮が」のほうは「皮は」にならない。

(22) 実演販売のちくわがあまりにおいしそうだったので一本買う。200 円なり。味は悪くないけど、皮がかたくて、いまひとつ。 (『あまから手帖』1989. 3 p. 32)

「皮が」に対比の「は」が使われないのは、「味が悪くない」と「皮がかたい」を対比するより、「皮がかたくて」を「いまひとつ」の理由として述べるほうが優先されるからである。

2) 「家は取られ、妻には逃げられた」型

明示的対比を表す文には、対比される2つの部分を「て」や「し」でつないだ並立的対比を表す文があった。そのような文は、並立的といっても、2つの部分はなにかの点で対比されているので、「は」が使われていた。

もし、2つの部分が対比されているのではなく、同じようなことを述べているのであれば、「家も取られ、妻にも逃げられた。」のように、「も」が使われるのがふつうである。

ところが、このような「も」のかわりに「は」が使われ、「家は取られ、妻には逃げられた。」のようになることがある。たとえば、次の(23)の最初の文の「出席日数は」がそうである。

(23) 受付「出席日数は足りないし、レポートも提出していない、試験も受けてない」

三上「——」

受付「三拍子揃って、もう一年留年するか？」

(柴門・坂元『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p.37)

このような文で「も」ではなく「は」を使うと、「困ったことだ」、「いけないことだ」といった否定的な意味あいが強くなる。

なお、このような「は」は、次の(24)の「党首は」、「意見広告は」、「本は」のように、2つ以上の文にまたがってでてくることもある。

(24) すっかりクジラに入れ揚げている。「日本くじら党」党首は名乗る。ニューヨーク・タイムズに「捕鯨賛成」の意見広告は掲載する。鯨関係の本は出版する。揚げ句、今度は個人編集の「くじら新聞」を出した。

(『朝日新聞』1994.9.30 朝刊 p.3「ひと」)

9. 明示的対比を表す「は」のまとめ

明示的対比を表す「は」について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 対比専用の「は」と対比兼用の「は」

- (25) 私は肉は好きだが、魚は好きではない。 主題の「は」
- (26) 兄は肉が好きだが、弟は魚が好きだ。 対比専用の「は」
- 主題と対比兼用の「は」

2) 対比専用の「は」が必要な文

次の(27)のように、対比される部分が構造的に対立している文では、対比専用の「は」が必要である。

- (27) 私は 肉は 好きだ が、 魚は 好きではない。
- 「が」、「けれど」など
- 同類の名詞
- 述語が肯定と否定で対立

3) 対比専用の「は」の位置

明示的対比を表す対比専用の「は」は、次の(28)のように、対比される部分の中のもっとも大きな切れめに入り、(29)になる。

- (28) 天気は八 いいけど、 風は八 冷たい。
- は は
- (29) 天気はいいけど、風は冷たい。

第2節 暗示的対比を表す「は」

1. はじめに

前の第1節では、対比の相手が明示されているときの対比の「は」について考えた。この第2節では、「子供たちは食器は持ってきた。」のように、対比の相手が明示されていないときの対比の「は」について考える。

この節の前半では、どのようなときに「は」が対比的な意味をもつのか、その条件を整理する。この問題については、久野暉(1973:第2章)、佐藤ちゑ子(1976)、尾上圭介(1981)、市川保子(1988)、佐藤雄一(1991)、青木伶子(1992:p. 147-p. 152)など、多くの研究がある。

後半では、否定と「は」の関係を考える。肯定の「子供たちはキャンプファイヤーをした。」にたいして、否定では「子供たちはキャンプファイヤーはしなかった。」になるように、否定では「は」が現れやすい。この問題についても、佐川誠義(1976)、McGloin(1987)、青木伶子(1992:第七章)など、多くの研究がある。

2. 「は」が表す暗示的対比

暗示的対比では、前の第1節でみた明示的対比と違って、対比の相手が表されない。しかし、実際には、対比の相手が想定できることも多い。たとえば、次の(1)では、「なべは持ってこなかった」などが想定できる。

(1) 子供たちは食器は持ってきた。

このとき、対比の相手というのは、「食器」にたいして「なべ」だということではなく、「食器は持ってきた」にたいして「なべは持ってこなかった」である。対比の相手は、典型的には、このように、同類の名詞が、肯定・否定で対立する同類の述語と結びついたものである。これは、前の第1節でみた、明示的対比の典型的な場合と同じである。

しかし、「は」が肯定文ではなく否定文に使われたときは、対比の相手が想定しにくか

ったり、対比の意味が弱いことが多い。たとえば、次の(2)では、「おやつは食べなかった」が「ジュースは飲んだ」などと対比されているとも考えられるが、前の(1)の肯定文とくらべると、対比の意味は弱い。

(2) 子供たちはおやつは食べなかった。

とくに、「だ」や「である」の否定形である「ではない」の「は」などは、次の(3)のように、ほとんど対比的な意味は感じられない。

(3) ここはキャンプ場ではないよ。

このように、「は」が表す対比的な意味は、非常に強いときから、ほとんど感じられないときまで、いろいろな段階がある。

3. 「は」が暗示的対比になりやすい条件

ここでは、対比の相手が明示されていないのに「は」が対比的な意味をもつのはどんなときかを考えていこう。「は」が対比的な意味をもちやすい条件としては、次の1)から4)の4つにまとめられる。

- 1) 「は」がついた成分の位置——述語に近い位置におかれている
- 2) 「は」がついた成分の種類——基本語順で述語の近くにある成分
- 3) 「は」がついた名詞の種類——対になる名詞が思いつきやすい
- 4) 「は」がついた成分の発音——強く高くゆっくり発音される

1)と2)は文法的、3)は意味的、4)は音声的な条件である。こうした条件がそろっていればいるほど、対比的な意味が強く感じられる。

ところで、「は」には、主題を表す「は」と、対比を表す「は」があるといわれることがある。⁵しかし、これは、厳密にいうと、前の第1節で述べたように、正しくない。主題を表すと同時に、対比的な意味をもつ場合があるからである。正確にいうと、「は」には、次の(ア)から(ウ)の3つの場合があるのである。

- (ア) 主題を表すだけで対比的な意味をもたない場合
- (イ) 主題を表すと同時に対比的な意味をもつ場合
- (ウ) 主題を表さず対比的な意味だけをもつ場合

ここで考えようとしているのは、(ア)のように対比的な意味をもたなくなったり、(イ)、

⁵ 久野暁(1973:第2章)がその代表といえる。

(ウ)のように対比的な意味をもったりするのは、どのような条件によるのかということである。

それでは、ここであげた1)と2)と3)の条件について、それぞれ次の4.から6.で、さらに詳しくみていこう。

4. 「は」が暗示的対比になりやすい位置

「は」がついた成分は、述語に近い位置、つまり文の後ろにおかれているもののほうが、対比的な意味をもちやすい。⁶

たとえば、次の(4)の「私は」と「その質問には」では、「その質問には」のほうが対比的になりやすい。その次の(5)は(4)の語順だけをかえたものだが、この(5)では「私は」のほうが対比的になりやすい。

(4) 私はその質問には答えられません。

(5) その質問には私は答えられません。

これは、「は」がついた成分が2つあるときは、述語に近い位置におかれているもののほうが対比的になりやすいということである。「は」がついた成分が3つ以上あるときのこととも考えると、述語に近い位置におかれている「～は」ほど、対比的になりやすいということになる。⁷

述語に近い位置の「～は」ほど対比的になりやすい理由は、次のように考えられる。前の2.で述べたように、対比されるのは「は」の前の成分だけでなく、述語まで含めた部分である。たとえば、前の(4)で対比されているのは「その質問には答えられない」であり、対比の相手は「別の質問には答えられる」といったことである。そうすると、述語に近い成分ほど、述語と組みあわさりやすく、したがって、対比の対象になりやすいと考えられる。

5. 「は」が暗示的対比になりやすい成分

「は」が対比的な意味をもちやすいかどうかは、「は」がついた成分の種類によっても

⁶ 実質的に同じ内容のことは、久野暉(1973:p.30-p.31)や、その後の多くの研究で指摘されている

⁷ 明示的対比では、対比の「は」は1つの文に1組しか使えなかったが、暗示的対比では、1つの文に2つ以上使うことができる。

違う。基本的には、基本語順で述語の近くにある成分ほど、対比的な意味をもちやすい⁸

次の(6)と(7)は、前の4.で(4)と(5)としてあげたものである。(6)では「その質問には」が対比になりやすく、(7)では「私は」が対比になりやすかった。しかし、この2つをくらべると、(6)の「その質問には」にたいして、対比的な意味がない解釈をするのは非常にむずかしいが、(7)の「私は」にたいしては、対比的な意味があまりない解釈もできる。

(6) 私はその質問には答えられません。

(7) その質問には私は答えられません。

これは、「は」がついた成分が2つあるときは、基本語順で述語の近くにある成分のほうが対比的になりやすいということである。具体的にいうと、対比的になりやすいのは、「駐車場に(なる)」のような結果の状態を表す「～に」や、「はっきりと(言う)」のような様態を表す副詞的成分などである。

反対に、対比的になりにくいのは、動作主を表す「～が」である。そのほか、「駅前に(商店街がある)」、「この辺で(わかめの養殖が盛んだ)」のような場所を表す「～に」、 「～で」や、「きのう(一日中雨が降っていた)」のような、時を表す成分なども、とくに文頭では、対比的な意味をもたないことが多い。⁹

基本語順で述語の近くにある成分ほど対比的になりやすい理由は、前の4.で述べた、述語に近い位置の「は」ほど対比的になりやすい理由と基本的に同じである。4.で述べたように、対比の対象は、述語と「は」がついた成分が組みあわさったものである。基本語順で述語の近くにある成分は、述語との結びつきが強いため、述語と組みあわさりやすく、対比の対象になりやすいと考えられる。

6. 「は」が暗示的対比になりやすい名詞

「は」が対比的な意味をもちやすいかどうかは、「は」がついた成分の名詞の種類によっても違う。その名詞と対になるような名詞が思いつきやすいものほど、対比的な解釈を

⁸ 実質的に同じ内容のことは、佐藤ちよ子(1976)や、その後の多くの研究で指摘されている。

⁹ 時や所を表す成分が対比にならない「状況題目提示」の「には」、「では」については、青木伶子(1992: 第二章第二節)が詳しい。

うけやすい。¹⁰

たとえば、次の(8)では、「子宮がんだけ」は、対比の相手として「ほかのがん」などが思いつきやすいため、対比的な解釈をうけやすい。「だけ」のない「子宮がんは」では、対比的な解釈はうけにくい。

(8) こうしたなかで、子宮がんだけは年々確実に減っている。

(『朝日新聞』1980.9.25 朝刊 p.5「社説」)

このほか、「男」が対として思いつきやすい「女」や、「右」が対として思いつきやすい「左」のような名詞は対比的になりやすい。反対に、対が思いつきにくい「電線」や「紀伊半島」のような名詞は対比的になりにくい。

ただし、対になりやすいかどうかは、正確には、名詞だけの問題ではなく、述語を含めたものである。たとえば、前の(8)で「子宮がんだけは」が対比的になりやすいのは、「子宮がんだけは減っている」の対として、述語が対立的な「ほかのがんは増えている」が思いつきやすいからである。

7. 否定文に使われる「は」

否定文では、三上章(1953:p.205)が「肯定文に比べて一つ余計に「は」があらわれる」といっているように、「は」が現れやすい。

たとえば、次の(9)のような肯定文を、その次の(10)のような否定文にすると、「シャワーで」に「は」がつく。

(9) 日本の老人はシャワーでがまんできる。

(10) 「日本の老人はシャワーではがまんできん。重労働向きにできてはる」

(『朝日新聞』1993.3.3 朝刊 p.5「老いの園」)

こうした「は」は、基本的には、暗示的対比を表す「は」と同じものである。(10)の「シャワーではがまんできん」は、対比の相手として、たとえば「入浴なら週2回でもがまんできる」といったことが暗示されている。

否定文でこうした対比を表す「は」が使われやすい理由は、次のように考えられる。肯定文を使うときは、とくに否定文を意識しないで使うことが多いのにたいして、否定文を

¹⁰ 実質的に同じ内容のことは、尾上圭介(1981:p.108)や、その後の多くの研究で指摘されている。

使うときは、肯定文を意識しやすい。否定文は肯定文を否定したものだからである。¹¹

たとえば、前の(9)の肯定文を使うときは、とくに「日本の老人は体をふくだけではがまんできない」といったことを意識しないときが多いが、(10)の否定文を使うときは、「入浴なら週2回でもがまんできる」といったことを意識しやすい。つまり、否定文では対比の相手を想定しやすいので、対比の「は」も使われやすいのである。

ただし、否定文に使われる「は」は、対比の相手を想定しやすいものばかりではない。対比の相手がほとんど考えられないようなものもある。

たとえば、次の(11)では、「人間の麻薬には」と「猫のマタタビには」が明示的対比になっていることもあって、「中毒」には対比の相手は想定しにくい。しかし、否定のときは、「中毒はない」と「は」が使われている。

(11) 人間の麻薬には中毒がつきものだが、猫のマタタビには中毒はない。

(加藤由子『雨の日のネコはとことん眠い』p. 211)

このような「は」は、暗示的対比を表すという働きがなくなり、形式的なものになっている。¹² つまり、否定文では、対比を表すかどうかに関係なく、自動的に「は」が1つ、切れめの大きいところに入るということである。

こうした形式化した「は」は、対比を表すのではなく、述語が否定であることを前もって知らせる働きをするようになっていく。ちょうど、「けっして」や「ぜんぜん」が否定を前もって知らせるのと同じような働きである。

こうした形式化がさらに進んだものが、「だ」や「である」の否定形である「ではない」の「は」である。次の(12)の最初の文の「一人称小説ではありません」の「は」ようなものは、主文ではこの形で固定されている。「は」をとって、「一人称小説であります」にすることはできない。

(12) 「私小説」というのは一人称小説ではありません。一人称で書かれることもありますが、一般に三人称で書かれています。

(三田誠広『天気の良い日は小説を書こう』p. 72)

ただし、「ではない」は、完全にこの形に固定されているものとはいえない。強い従属節である仮定節の中では、次の(13)のように、「ではない」でなく「でない」が使われ

¹¹ 久野暁(1973:p.31)にも、実質的によく似た説明がある。

¹² これを青木伶子(1992:p.339)は、「形式的対比暗示用法」とよんでいる。

るからである。¹³

- (13) あれだけ聞かされたら、いやでも覚えてしまいますが、しかしやはりよいメロディーでないと耳には残りません。(小林亜星『やさしい作曲のしかた』p.114)

8. 「は」が使われない否定文

前の7.で述べたように、否定文では、肯定文より「は」が1つ多く現れることが多い。しかし、そうならないこともある。そうならないのは、大きく分けると、次の(エ)と(オ)の場合である。

(エ) 否定辞と述語との結びつきが強いとき

(オ) 述語と格成分との結びつきが強いとき

(エ)は、否定辞の「ない」が述語を否定するだけで、格成分などを否定しないときである。次の(14)や、その次の(15)の最後の文が、その例である。

- (14) 杉矢、ポ一然としている。

杉矢「……ホテルがいない……」

(北川悦史子『君といた夏』p.39)

- (15) まず、頭の中に入れておきたいことは、パソコンウイルスというものはコンピュータプログラム的一种であるということだ。ウイルスのプログラムは、単に行動形態がウイルスに似ているから、そう名付けられているだけで、あらかじめプログラムの上で決められた行動をする以外の何物でもない。そして、自然界に存在するウイルスと違って、人間が作ったものだけということである。この点が、意外と知られていない。

(山本隆雄(他)『コンピュータ・ウイルス』p.62)

(14)は、第3章第1節の9.でみた、否定の無題文である。この文は、「ホテルがいない」というできごとを述べる文である。この文で「ない」が否定しているのは、動詞「いる」がもつ「存在」という語彙的な意味だけであり、「いない」で「不在」の意味を表している。つまり、否定の「ない」は「いる」を否定するだけで、「ホテルが」までは否定していない。そのため、「ホテルは」にはならないのである。

もうひとつの(15)は、「この点が」が焦点になっている文である。この文は、「知られて

¹³ 「でない」がどのような従属節に現れるかについては、青木伶子(1992:p.342-p.347)に詳しい調査がある

いないのは、この点だ」ということを述べる文である。この文で「ない」が否定しているのは「知られている」だけであって、「この点が」までは否定していない。そのため、「この点は」にはならないのである。

一方、(オ)は、述語と格成分との結びつきが強く、「は」がわって入れないときである。典型的なのは、次の(16)の「口をきく」のような慣用句が否定になっているときである。このようなときは、「口は」にはなりにくい。

(16) 若い女はほとんど口をききかかなかった。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 p. 17)

また、「～ことがない」や「～ことができない」などでも、「～ことが」と「ない」などとの結びつきが比較的強いので、次の(17)のように、「～ことが」のままで、「～ことは」にならないことがかなり多い。

(17) 「野上は、学生の頃から、女がいないことがなかった……それも、いつも複数で……」

(鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』 p. 195)

そのほか、臨時的に述語と格成分の結びつきが強くなっているときがある。たとえば、次の(18)の最後の文は、「〈日本〉は歌いません」にはなっていない。これは、それより前に「〈日本〉を歌った」があり、「〈日本〉を」と「歌う」の結びつきが強いからである。この文で否定しているのは、「〈日本〉を歌う」というかたまりである。「〈日本〉は歌わないが、〈地球〉は歌う」というような意味にはしたくないのである。

(18) 聖子は百恵と違って、日本の母に回帰することはしません。百恵が『秋桜』と『いい日旅立ち』で〈日本〉を歌ったのに対し、聖子は『瑠璃色の地球』を歌います。

……[省略]……

聖子は決して〈日本〉を歌いません。

(小倉千加子『松田聖子論』 p. 231-p. 232)

なお、強い従属節や従属的な文では、ふつうの否定文より、対比の「は」が現れにくい。たとえば、次の(19)では、「ケース」を連体修飾する節が否定になっているが、「修理やチェーンナップは」にはなっていない。

(19) また総合DSでもスノーボードを扱う店が増えたが、修理やチェーンナップを受け付けないケースも多い。

(『日経トレンドィ』 1995. 11 p. 32)

9. 暗示的対比を表す「は」のまとめ

暗示的対比を表す「は」について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 「は」が暗示的対比になりやすい条件

次のア) からウ) の条件がそろそろほど、「は」は対比の意味をもちやすい。

- ア) 述語の近くにある
 - イ) 基本語順で述語の近くにある成分である
- (20) 子供たちは 食器は 持ってきた。
- ウ) 対になる名詞が思いつきやすい

2) 否定文に使われる「は」

否定文では、次の(21)のように、暗示的対比を表す「は」が使われることが多い。

- (21) 子供たちは おやつは 食べなかった。

3) 「は」が使われない否定文

次の(22)や(23)のように、否定文でも暗示的対比を表す「は」が使われないことがある。

- (22) ホテルが [いない]。

結びつきが強い

- (23) 若い女はほとんど [口をきか] なかった。

第3節 対比を表せる成分

1. はじめに

前の第1節と第2節では、対比を表す「は」についてみた。そこで扱ったのは、おもに「～を」や「～に」のような格成分についた「は」だった。

しかし、対比を表す「は」は、「はっきりとは言わなかった」や「できなくて困る」のように、副詞的成分や従属節にもつく。

こうした「は」の研究は少なく、青木伶子(1992:第三章～第五章,第七章)以外では、副詞や従属節や否定の研究で部分的に言及されてきただけである。

この節では、どんな成分に対比の「は」がつくのかをみていく。

2. 「は」で対比を表せる文の構造

格成分や副詞的成分、従属節には、対比の「は」がつくものにつかないものがある。たとえば、(1)の「いっしょうけんめい」にはつかず、(2)の「寄付を」にはつき、(3)の「断れない性格に見えたので」にはつかない。

(1) *いっしょうけんめいはお願いしなかった。

(2) 寄付はお願いしなかった。

(3) *断れない性格に見えたのではお願いしなかった。

対比の「は」がつくつかないかは、文の構造の面からみると、次の(4)のように、それぞれの成分と述語との結びつきの強さによると考えられる。

(4)

| 述語との結びつき | 例 | 対比の「は」 |
|----------|----------------|--------|
| 強い | 「いっしょうけんめい」 | × |
| 中間的 | 「寄付を」 | ○ |
| 弱い | 「断れない性格に見えたので」 | × |

では、述語との結びつきの強さによって「は」のつきやすさが違うのは、どうしてだろうか。

まず、「いっしょうけんめい」のように、述語との結びつきが強い成分の場合は、「いっしょうけんめい」と「願ひする」が強く結びついている。そのため、「ない」で否定すると、次の(5)のように、「願ひする」だけでなく、「いっしょうけんめい願ひする」を否定することになりやすい。

(5) [[いっしょうけんめい願ひし] なかつ] た。

そうすると、意味的には、「願ひする」より、修飾部の「いっしょうけんめい」が否定されることになり、「簡単にお願ひした」といったことが暗示される。¹⁴

つまり、こうした成分の場合は、対比の「は」がなくても、対比的な意味が暗示されるので、「は」がつきにくいのである。¹⁵

それにたいして、「寄付を」のように、述語との結びつきが中間的な成分の場合は、「寄付を」と「願ひする」があまり強く結びついていない。そのため、「ない」で否定すると、次の(6)のように、「ない」は「願ひする」を否定するだけで、「寄付を」までは否定しない。

(6) [寄付を[お願ひしなかつ]] た。

「寄付を願ひする」を否定し、「署名を願ひした」といったことを暗示するためには、前の(2)のように、「は」をつけなければならない。そのため、こうした成分には「は」がつきやすいのである。

一方、「断れない性格に見えたので」のように、述語との結びつきが弱い成分の場合は、「断れない性格に見えたので」と「願ひする」の結びつきが非常に弱い。そのため、次の(7)のように、「ない」は「断れない性格に見えたので」を否定できない。それだけではなく、「寄付を」と違って、前の(3)のように「は」をつけても、「断れない性格に見えたので願ひする」を否定できない。そのため、こうした成分には「は」がつきにくいのである。

¹⁴ これは、「それは私のかさではありません。」と言ったとき、「私のかさだ」が否定されるが、意味的には、「私の」という修飾部が否定され、「ほかの人のかさだ」ということが暗示されるのと同じでことある。

¹⁵ このような成分が否定の焦点になることについては、久野暉(1983:第8章)が、「マルチプル・チョイス式」焦点として、意味の面から説明している。

(7) 断れない性格に見えたので, // [[お願いしなかつ] た]。

こうした成分を含めて否定するためには、次の(8)のように、「～のではない」という形を使うしかない。

(8) [[断れない性格にみえたのでお願いした] のではない]

3. 「は」で対比を表せる格成分

「～が」や「～を」, 「～に」のような格成分は、基本的に、「は」をつけて対比的な意味を表すことができる。

ただし、「は」がつきにくい格成分がある。それは、次の(ア)や(イ)のようなものである。

(ア) 手段を表す「(電車)で」や、材料を表す「(木)で」など

(イ) 原因を表す「(かぜ)で」や「(不手際)から」など

(ア)の格成分は、次の(9)がやや不自然なように、「は」がつきにくい。

(9) ?きょうは電車では来なかった。

「電車で」のような成分は、ほかの格成分と違って、前の2.でみた「いっしょうけんめい」という副詞的成分と同じように、述語との結びつきが強い。そのため「は」がつきにくいのだと考えられる。

つまり、次のようなことである。「パン屋へ」のようなふつうの格成分の場合は、次の()のように、「ない」は動詞の「行く」とだけ結びつく。それにたいして、「電車で」は「来る」との結びつきが強いため、その次の()のように、「ない」は「電車で来る」と結びつく。

(10) きょうは [パン屋へ [行かな]] かった。

(11) きょうは [[電車で来] なか] った。

その結果、(10)は「行かなかった」と言っているのであるが、(11)は「電車で来なかった」と言っているだけであり、「来なかった」と言っていることにはならない。「ほかの手段で来た」と言っていることになるのである。

前の(10)では「ない」は「行く」だけを否定していたのだが、これを、「パン屋へ行く」を否定し、「ほかへは行く」という意味を表すようにするためには、「は」を入れて、次の(12)のようにしなければならない。

(12) きょうはパン屋へは行かなかった。

それにたいして、(ア)のような格成分の場合は、「ない」が「電車で来る」を否定するので「は」を入れる必要もなく、また、「電車で来る」の結びつきが強いため、「は」がわりこみにくいのである。

一方、原因を表す(イ)の格成分も、次の(13)が不自然なように、「は」がつきにくい。

(13) *きょうはかぜでは休まなかった。

「かぜで」のような成分は、(ア)の格成分とは反対で、前の2. でみた「断れない性格に見えたので」という従属節と同じように、述語との結びつきが弱い。そのため、「は」がつきにくいのだと考えられる。

つまり、「は」を入れても、次の(14)のように「ない」が「かぜで休む」を否定するのはむずかしい。その次の(15)のように「ない」は「休む」だけを否定することになってしまう。(15)は「休まなかったのはかぜだから」ということになり、意味をなさない。

(14) *きょうは [[かぜでは休ま] なか] った。

(15) *きょうは [かぜでは [休まなか]] った。

ただし、ここであげた(ア)や(イ)の格成分でも、「は」がつくときがある。それは、次の(16)や(17)のように、事実ではなく、ある条件のもとでの実現可能性を表す文のときである。とくに否定のときは、「は」がつきやすい。

(16) 頂上までは、車では行けない。

(17) あいつは、ちょっとしたかぜでは休まない。

このような「～では」は、「ない」の否定の範囲を示すものではなく、条件を表すものである。述語が肯定なら「～でなら」などになるものが、述語が否定なので「～では」になったものだと考えられる。¹⁶

4. 「は」で対比を表せる副詞的成分

副詞的成分にも、「は」がつくものとつかないものがある。代表的な副詞的成分に「は」がつくかどうかを表にまとめると、次の(18)のようになる。¹⁷

¹⁶ とりたて助詞としての「～なら」については、鈴木義和(1992)や丹羽哲也(1993)が詳しい。

¹⁷ 「きのう」や「3人」などを含まない、品詞としての副詞に「は」がつくかどうかの分類は、原田登美(1982)で行われている。

(18)

| 副詞的成分の種類 | 例 | 「は」がつくか |
|-------------|---------------|---------|
| 様態の副詞的成分 | 「そっと」、「あっさり」 | × (○) |
| 程度の副詞的成分 | 「たいへん」、「非常に」 | × (○) |
| アスペクトの副詞的成分 | 「もう」、「だんだん」 | × |
| テンスの副詞的成分 | 「きのう」、「その時まで」 | ○ |
| ムードの副詞的成分 | 「きっと」、「ぜひ」 | × |
| 数量の副詞的成分 | 「3人」、「100円」 | ○ |

これらの副詞的成分のうち、様態の副詞的成分は次の5.で、数量の副詞的成分は6.で扱うことにして、そのほかの副詞的成分を順にみていこう。

はじめは、程度を表す副詞的成分である。この種の副詞的成分には、次の(19)のように、ふつう「は」はつかない。

(19) *これはたいへんはおもしろくない。

ただし、「少し」や「ちょっと」のように、このあと6.でみる「数量を表す副詞的成分」としても使われるものには、「は」がつく。

2つめは、「もう」や「だんだん」のようなアスペクトを表す副詞的成分である。この種の副詞的成分には、次の(20)のように、「は」はつかない。

(20) *もうは着いていないと思う。

これは、対比の相手が考えられないからだと考えられる。

3つめは、「きのう」や「その時まで」のようなテンスを表す副詞的成分である。この種の副詞的成分には、次の(21)のように、「は」がつく。

(21) お昼ごろまでは家にいた。

最後は、「きっと」や「ぜひ」のようなムードを表す副詞的成分である。この種の副詞的成分には、次の(22)のように、「は」はつかない。

(22) *きっとは来ないと思う。

これは、述語との結びつきが弱いために「は」が入りにくいのと、対比の相手が考えにくいからだと思われる。

例外として、「おそらく」のように「は」がつくものもあるが、「は」がついても意味はかわらず、対比的にはならない。

5. 様態を表す副詞的成分につく「は」

様態を表す副詞的成分は、「は」をつけにくいものが多い。とくに、「そっと」や「ポンと」のような擬態語・擬音語は、次の(23)のように、「は」をつけにくいものが多い。

(23) *そっとは手渡さなかった。

これは、述語との結びつきが強いために「は」が入りにくいのと、対比の相手が考えにくいためだと思われる。

ただし、このような副詞的成分でも、次の(24)のように、事実を表すのではなく、実現可能性を表す文のときは「は」がつきやすい。これは、前の3.の(16)であげた「車では」の場合と同じである。

(24) そっとは手渡せない。

このように、様態を表す副詞的成分には、「は」をつけにくいものが多いが、「は」をつけられるものも、かなりある。たとえば、「はっきりと」や「詳しく」などは、述語が肯定だと「は」をつけた形が使いにくいですが、述語が否定なら、次の(25)のように使える。

(25) はっきりとは言わなかった。

また、反対に、「それとなく」や「間接的に」のように意味が否定的・消極的なものは、述語が否定だと「は」をつけた形が使いにくいですが、述語が肯定なら、次の(26)のように使える。

(26) それとなくは言った。

ただし、「は」をつけられるものでも、実際には「は」が使われないことが多い。こうした様態の副詞的成分は、述語との結びつきが強いので、「は」がなくても、「ない」の否定の範囲に入るからである。「は」をつけない次の(27)も、「は」をつけた前の(25)とほとんど同じ意味になる。

(27) はっきりと言わなかった。

6. 数量を表す副詞的成分につく「は」

数量を表す副詞的成分についた「は」は、特殊な意味になる。述語が肯定のときは、次の(28)の「二百本は」のように「少なくとも～」の意味になる。

(28) 店主の堀切栄五郎さん(六九)は「百円やから一日二百本は売れる。周りと同じ百十円じゃ百本も売れん。客も店もメーカーも、みな損しとるもんはおらん」。

〔『朝日新聞』1994.7.13 夕刊 p.15〕

このような意味になるのは、次のように説明できる。「二百本売れる」の「二百本」に「は」をつけて対比的にすると、対比の相手は「百五十本売れない」や「二百五十本売れない」になる。しかし、「二百本売れる」のなら「百五十本売れる」はずである。したがって、前の(28)は、「二百本売れることは確実だが、それ以上の、ある数量なら売れない」という意味になる。

述語が否定のときは、次の(29)のように「多くても二百本」という意味になる。この場合、「二百本売れない」のに「二百五十本売れる」ことはないので、対比の相手は「百五十本売れる」になる。したがって、「二百本売れないことは確実だが、それ以下の、ある数量なら売れる」という意味になる。¹⁸

(29) 二百本は売れない。

このほか、述語が否定のときは、これとは別の解釈ができるときがある。前の(29)を例にすると、「千本用意したが、そのうちの少なくとも二百本は売れ残る」という意味である。¹⁹

前の「多くても二百本は売れない」という解釈のとき「ない」が否定しているのは、次の(30)のように「二百本売れる」だが、この解釈のとき「ない」が否定するのは、その次の(31)のように「売れる」である。²⁰

(30) [二百本は売れ]ない。

(31) 二百本は[売れない]。

なお、部分否定とよばれる次の(32)のようなものも、数量を表す副詞的成分と同じように考えることができる。

(32) 全部は食べなかった。

「二百本は売れない」が「二百本売れないことは確実だが、それ以下の、ある数量なら売れる」の意味になったのと同じように、この(32)は「全部食べなかったのは事実だが、

¹⁸ 述語が肯定のときと否定のときの、このような意味については、尾上圭介(1981)や井島正博(1995)が、「は」がもつ対比の機能から説明している。

¹⁹ この解釈の場合は、前の(28)の「二百本は売れる」の述語「売れる」が「売れない」にかわっただけのものであり、意味は述語が肯定のときと同じく、「少なくとも二百本」になる。

²⁰ 松田剛史(1983)は(30)のようなものを「叙述内容否定」、(31)のようなものを「述語否定」とよんでいる。

それ以下の、ある分量は食べた」の意味になる。

7. 「は」で対比を表せる従属節

従属節にも、「は」がつくものとつかないものがある。代表的な従属節に「は」がつくかどうかを表にまとめると、次の(33)のようになる。²¹

(33)

| 従属節の種類 | 例 | 「は」がつくか |
|--------|---------------|---------|
| 付帯状況句 | 「～ながら」, 「～まま」 | × |
| 継起句 | 「～て」 | (○) |
| 仮定節 | 「～たら」, 「～と」 | ○ |
| 時間節 | 「～とき」, 「～まで」 | ○ |
| 理由節 | 「～ため」, 「～ので」 | × |
| 並列節 | 「～し」, 「～けれど」 | × |

これらの従属節のうち、述語との結びつきが強い、付帯状況句や継起句は、基本的には、「は」をつけて対比的な意味を表すことはできない。たとえば、次の(34)のような文は不自然である。

(34) *ラジオを聞きながらは勉強しません。

これは、述語との結びつきが強いために「は」が入りにくいのと、対比の相手が考えにくいためだと思われる。

ただし、継起句は、次の(35)のように「は」がついて、動作のくりかえしを表すことがある。

(35) かすかな音を立てて降りそそぐ雨が、睡蓮の葉に似た輪を描いては消えて行く。

(『朝日新聞』1980.7.12 朝刊 p.1 「天声人語」)

このような句についての「は」は、主題や対比を表しているとはいいいにくい。これは、「は」がくりかえしの動作や恒常的な状態を表す述語と結びつきやすいことからでてきた特殊な用法だと考えられる。²²

次は、述語との結びつきの強さが中間的な、仮定節や時間節である。これらの節には、「は」がつくといえる。

²¹ どんな従属節に「は」がつくかについては、仁田義雄(1995)が詳しい。

²² このような「～ては」については、有田節子(1996)の分析がある。

仮定節の場合は、そのまま「は」がつくのではない。「～たら」、「～(れ)ば」、「～と」に「は」をつけようとする、「～ては」になる。「～なら」に「は」をつけようとする、「～のでは」になる。²³

たとえば、「そんな子が無理に甘いものをガマンしてノイローゼになったら」という節に「は」をつけると、次の(36)の「～ては」になる。

- (36) 甘いものを食べても太らない人だっていますし、そんな子が無理に甘いものをガマンしてノイローゼになつては、元も子もありません。

(『SINRA』1995.5 p.158)

このような文では、主文の述語はふつう「元も子もない」や「困る」のような否定的なものになる。仮定条件というのは、もともと対比的な性格をもっている。そこに、さらに「は」をつけると、対比を表す働きより、否定の述語と結びつく働きが強くてくるのだと考えられる。²⁴

一方、「～とき」や「～まで」のような時間節の場合は、そのままその後に「は」をつけられる。時間節についての「は」は、次の(37)の2つめの文の「～時は」のように対比的な意味があまりないときと、その次の(38)の最後の文の「～時は」のように対比的な意味が強いときがある。

- (37) 一方、「E. T.」という映画がありますが、ご覧になったでしょうか。

「E. T.」が最初に上映された時は、いま教室にいらっしゃる皆さんは、ちっちゃかったと思います。(三田誠広『天気の良い日は小説を書こう』p.59)

- (38) 三上「ずいぶん変わるんだな、昼と夜とじゃ」

尚子「——」

三上「大学で見た時はただの優等生のお嬢さんだと思ってた」

(柴門・坂本『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』p.13)

この(38)のように対比的な意味が強いときは、述語は一瞬の動作などではなく、状態的なものであるのがふつうである。対比というのは、一瞬の時点とそれ以外のすべての時間を対比することはなく、ある状態が続いている時間とそうではない時間を対比するものだ

²³ このような関係は、野田尚史(1994c)で示されている。

²⁴ このような「～ては」については、蓮沼昭子(1987)や鈴木義和(1993)が詳しい。

からである。²⁵

最後は、述語との結びつきの強さが弱い、理由節や並列節である。これらの節には、次の(39)が言えないように、基本的には「は」がつかない。

(39) *断れない性格に見えたのでは、お願いしなかった。

次の(40)のような「～からには」という形はあるが、これは、「～から」を「は」で対比しているものとはみなせない。主文で過去の事実を表せないなど制限が多いうえ、理由を表すとはいえないものが多いからである。

(40) しかし、政権をにぎったからには、必要な改革を実行しなければならぬ。

(『朝日新聞』1990.3.29 朝刊 p.5「社説」)

8. 「は」で対比を表せる述語成分

「行った」や「誘われている」といった述語成分は、基本的に、その内部に「は」を入れて、対比的な意味を表すことができる。

「は」が入る位置は、基本的には、述語成分の中でいちばん大きな切れめである。「～て」や「～たり」があれば、「聞いてはくれた」のように、その後に入る。そうした切れめがなければ、次の(41)の「愛しはする」や、「おいしくはある」、「雨ではある」のような形になる。

(41) 女性は凡庸さに近いものを愛しはしますが、それだけのことです。

(小倉千加子『松田聖子論』p.142)

これは、いわゆる連用形の後に「は」を入れ、その後ろに、テンスやムードを表示するだけの形式的な動詞をつけた形である。形式的な動詞は、述語が動詞のときは「する」、述語が形容詞や名詞のときは「ある」が使われる。

述語成分に「は」が入りやすいのは、述語が否定のときや、次の(42)のように、対比の相手が明示されているときである。

(42) また、日本IBM製のパソコンでも、日本語モードを使っていれば感染はするが発病はしないのである。(山本隆雄(他)『コンピュータ・ウイルス』p.47)

述語が肯定で、対比の相手が明示されていないときに述語に「は」を入れると、次の(43)

²⁵ 「～ときは」が使われるときの条件や、「～ときに」、「～とき」との違いについては、寺村秀夫(1983b)が詳しい。

のように、思わせぶりでもったいぶった言いかたになる。

- (43) 消費者としては判断に苦しむところだが、もし急がないのであれば、PNP機能までフル対応で、価格的にも割安なブリインストールモデルの発売まであと約二カ月待った方が確実ではある。 (『日経トレンディ』1995.11 p.159)

9. 「は」で対比を表せる成分のまとめ

「は」で対比を表せる成分について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 「は」で対比を表せる文の構造

次の(44)のように述語との結びつきが強いと、「は」が入りにくい。(45)のように述語との結びつきがあまり強くないと、「は」が入る。

- (44) [[いっしょうけんめい^はお願いし]なかつ]た。

は

- (45) [寄付を^は [お願いしなかつ]]た。

は

2) 「は」で対比を表せる成分と表せない成分

| | | | |
|-------|------------------------------|-------------|----------|
| | 「は」がつかない | 「は」がつく | 「は」がつかない |
| 格成分 | 「電車で」 | 「寄付を」 | 「かぜで」 |
| 副詞的成分 | 「そっと」 | 「きのう」 | 「きっと」 |
| 従属節 | 「～ながら」 | 「～たら」、「～とき」 | 「～けれど」 |
| | 強い ←————— 述語との結びつき —————→ 弱い | | |

第 8 章

排 他 を 表 す 「 が 」

第1節 排他を表す「が」

1. はじめに

ここまで、主格が主題になっているときは「は」で表され、主格が主題になっていないときは「が」で表されると考えてきた。しかし、「が」のなかには、主格を表す働きが弱く、排他的な意味が強いものがある。たとえば、「大阪より神戸のほうがいい店がある。」のような「が」である。この文では、「いい店がある」場所として、「大阪」が排除され、「神戸」が選ばれていると感ぜられる。

排他を表す「が」は、対比を表す「は」と対立しながらも、文の成分をとりたてるという点ではよく似た面ももっている。この第8章では、排他を表す「が」について考えていきたい。

排他を表す「が」については、久野暉(1973)が「総記」を表す「が」としてとりあげて以来、かなり多くの研究がおこなわれてきた。しかし、その多くは、「太郎が学生です。」のように「が」が主格になっているものを中心に置いて、「海に行くほうが、みんなが喜ぶ。」のように「が」が主格になっていないものは、ほとんどとりあげられてこなかった。この章では、排他を表す「が」のうち、主格になっていないものを中心にみていく。

第1節では、排他の種類や排他を表す文の構造について考える。そのあと、第2節では、「が」で排他を表せるのはどんな成分かを考える。

2. 排他専用の「が」と排他兼用の「が」

対比を表す「は」に対比専用のものと対比兼用のものがあつたのと同じように、排他を表す「が」にも排他専用のものと排他兼用のものがある。

たとえば、次の(1)の「神戸のほうが」の「が」は排他専用のものであり、その次の(2)の「君が」の「が」は排他兼用のものである。

(1) 大阪より神戸のほうがいい店がある。

(2) 君が主役だ。

(1)の「神戸のほうが」のような排他専用の「が」は、排他を表すだけで、主格を表す働きはしていない。この文の主格は「いい店が」であり、「神戸のほうが」は、主格というより「に」格だと考えられる。

それにたいして、(2)の「君が」のような排他兼用の「が」は、まず第一に、主格を表している。そして、それが、名詞述語文の主格になっているといった条件によって、結果的に、排他の意味を感じさせるのである。

排他専用の「が」は、主格を表す働きを失って、排他の意味だけを表すものになっているので、対比の「は」と同じように、とりたて助詞だと考えられる。それにたいして、排他兼用の「が」は、結果的に排他の意味を感じさせるだけのものなので、基本的には、主格を表す格助詞だと考えられる。

3. 強い排他と弱い排他

「が」が表す排他の意味には、強いものと弱いものがある。

強い排他というのは、2つ以上の候補を比較して1つを排他的に選んだことがはっきり感じられるものである。これは、たとえば、次の(3)のような文の「が」がもつ排他の意味である。この文では、「神戸」と「大阪」を比較して、「大阪」を選んでいることがはっきりわかるからである。

(3) 神戸より大阪のほうがにぎやかだ。

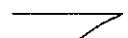
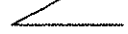
また、次の(4)では、比較の相手である「神戸」がないが、「～のほう」が使われているので、ほかの候補と比較して「大阪」を選んだことがはっきり感じられる。そのため、この「が」も強い排他を表しているといえる。

(4) 大阪のほうがにぎやかだ。

それにたいして、弱い排他というのは、ほかの候補と比較したことがはっきり感じられないものである。つまり、ただ漠然と、ほかのものは排除して1つを選んだと感ぜられるものである。たとえば、次の(5)のような文の「が」である。このような文について、久野暲(1973:第2章)は、「今問題にしている事物の中で君だけが主役です」というような「総記」の意味をもつとしている。しかし、強い排他を表す、前の(3)や(4)のような文とくらべると、ほかの候補を排除したという意味は弱い。

(5) 君が主役だ。

なお、前の2. でみた、排他専用の「が」・排他兼用の「が」と、ここでみた、強い排他・弱い排他との関係は、次の(6)のようになっている。

(6) 排他専用の「が」  強い排他を表す
排他兼用の「が」  弱い排他を表す

それでは、次の4. と5. で、強い排他を表す「が」が使われる文と、弱い排他を表す「が」が使われる文の、それぞれの構造をみていこう。

4. 強い排他を表す文の構造

「大阪より神戸のほうがいい店がある。」のような強い排他を表す「が」が使われるのは、次の(ア)と(イ)のような構造をもった文である。どちらも、2つ以上の候補のなかから1つを選び、ほかを排除することを表す文である。

(ア) 「～のほうが……」の形で、2つの候補から1つを選ぶ文

(イ) 「～がいちばん……」の形で、3つ以上の候補から1つを選ぶ文

(ア)は、次の(7)のような文である。この文では、「否定を表明しつづける人」が排除され、「肯定を表明しつづける人」が排他的に選ばれている。

(7) あれもきらい、これもきらい、と否定を表明しつづける人より、あれも好き、これも好き、と肯定を表明しつづける人のほうが、なにごとによらずよるこびは多い。
(黒田恭一『はじめてのクラシック』p. 183)

(イ)は、たとえば、次の(8)のような文である。この文では、「良介」や「千明」といった候補が排除され、「桃子」が排他的に選ばれている。

(8) 「一度帰ったら、なかなか出てこられないことは、桃子が一番よく知ってるでしょう？」
(鎌田敏夫『男女七人夏物語(下)』p. 201)

このような強い排他を表す文では、述語は、恒常的な状態を表すものであることが多いが、そうでなくてもよい。

5. 弱い排他を表す文の構造

「君が主役だ。」のような弱い排他を表す「が」が使われるのは、次の(ウ)と(エ)のような構造をもった文である。

(ウ) 恒常的な状態を表す文

(エ)意志や命令を表す文

(ウ)は、典型的には、名詞が述語になっている文である。そのほか、恒常的な状態を表す形容詞や、習慣を表す動詞が述語になっていることもある。次の(9)のような文が、その例である。

(9) 一人ひとり違っているお客様の味を的確に読みとって、お好みどおりの飲み物を作って差し上げるのが私たちバーテンダーの仕事なんですよ。

(『別冊宝島 76 ホテル物語』 p. 65)

(ウ)のような文は、第3章第2節で述べたように、基本的に、主題をもつ文になる。このとき、主格が「～が」であれば、述語が主題で、主格が伝えたいことになる。つまり、この(9)は、次の(10)とほとんど同じ意味の文になる。

(10) 私たちバーテンダーの仕事は、一人ひとり違っているお客様の味を的確に読みとって、お好みどおりの飲み物を作って差し上げることなんですよ。

この(10)では、「私たちバーテンダーの仕事」にあてはまるものを、述語の部分ですべて言うのがふつうである。それと同じように、前の(9)でも「私たちバーテンダーの仕事」にあてはまるものを主格の部分ですべて言う。そのために、排他的な意味が感じられるのである。¹

一方、(エ)は、述語が動詞で、意志や命令を表す文である。意志を表す文の主格は1人称、命令を表す文の主格は2人称と決まっているので、主格はふつう言わない。次の(11)のように、わざわざ言うと、排他的な意味になる。

(11) 「どいて」

と、桃子は、良介のショッピングカーをつついた。

「そっちがどけや」 (鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)』 p. 197)

6. 排他を表す「が」と対比を表す「は」の違い

排他を表す「が」は、前の第7章でみた、対比を表す「は」と似ている面がある。たとえば、排他の「が」を使った次の(12)と、対比の「は」を使ったその次の(13)は、意味がかなり近いと感じられる

(12) あいつが許せない。

¹ 大門正幸(1993)は、この種の文の「～が」がどうして「総記」の解釈になるかを説明している。

(13) あいつは許せない。

そのため、排他の「が」と対比の「は」について説明するためには、この2つの違いをあきらかにする必要がある。²

結論からいうと、排他の「が」も対比の「は」も使える場合、それぞれを使った2つの文の違いは、基本的には、何が主題になっているかの違いだと考えられる。つまり、次の(14)と(15)に示すように、排他の「が」の場合は、「～が」より後ろにある述語などが主題になっているのにたいして、対比の「は」の場合は、「は」の前の名詞などが主題になっている。

(14) [伝えたいこと] が [主題]

(15) [主題] は [伝えたいこと]

このような違いを前の(12)と(13)を例にして説明すると、次のようになる。(12)は、許せない人はだれかと考えると、許せないのはあいつであり、ほかの人ではないということを表している。それにたいして、(13)は、あいつについて許せるか許せないかを考えると「許せない」になり、ほかの人について考えると「許せない」にはならないということを表している。

したがって、次の(16)や(17)のように、「～より～が……。」や「～ではなく～が……。」の形で、「～が」の部分の名詞を候補のなかから選ぶ文では、排他の「が」を対比の「は」にかえることはできない。

(16) こいつよりあいつが許せない。

(17) こいつではなくあいつが許せない。

次の(18)の最後の会話部分の「は」と「が」も、同じように説明できる。

(18) 「ボルノ見てからお酒飲むの」と緑は言った。「そしていつものように二人で
いっばいいやらしい話をするの」

「僕はしてないよ。君がしてるんだ」と僕は抗議した。

(村上春樹『ノルウェイの森(下)』p. 89)

「僕は」で対比の「は」が使われているのは、その前に「二人」、つまり「僕と君」があり、「僕」が主題になりやすいからである。述語の「してない」は、その前にもでていないので、主題になりにくい。

² 「～だけが」と「～だけは」の違いについては、半藤英明(1991)に説明がある。

その次の「君が」で排他の「が」が使われているのは、「いやらしい話をする」が前にでていて、「(いやらしい話を) してる」が主題になりやすいからである。それにくわえ、「いやらしい話をしてる」のは「君だけ」だということを言いたいためである。

このように、対比の「は」は、「は」の前の部分を主題にして、その後にくる部分を伝えるのにたいして、排他の「が」は、「が」の後にくる部分を主題にして、「が」の前の部分を伝えるという違いがある。

7. 排他を表す「が」の周辺

この節の最後に、排他を表すともいえないが、単に主格を表すともいえないような「が」が使われている文についてふれておきたい。「上り線が車が渋滞してるよ」型と「そこに現れたのが陽子だった」型の2つである。

1) 「上り線が車が渋滞してるよ」型

「上り線が車が渋滞してるよ。」という文は、「上り線が」の「が」が排他的な意味をもっているとはいえない。しかし、この「が」は、単に主格を表しているともいえない。主格は「車が」であり、「上り線が」は主格ではなく、「上り線で」という場所を表す格のほずだからである。

この「上り線が」は、「車が」がなければ主格を表すはずだったのに、「車が」が入ってきたために、主格とはいえなくなってしまったものである。このような「が」は、主格を表す「が」の延長線上にある周辺的なものである。³

次の(19)は、「相生橋の」が「相生橋が」になっている例である。

- (19) 上空で炸裂(さくれつ)した原爆に耐え、原爆ドームのすぐ横で三十四年、核兵器の罪業を訴えてきた広島市の“被爆証人”相生橋が、老朽化のため架け替え工事が進められているが、広島市は平和のシンボルにふさわしい橋にするため、九日、欄干、歩道、照明柱・灯のデザインを全国から公募することを決めた。
(『朝日新聞』1980.6.10 朝刊 p.20)

2) 「そこに現れたのが陽子だった」型

「そこに現れたのが陽子だった。」という文は、第4章第1節の8.でもとりあげたものだが、「が」が排他的な意味をもっているとはいえない。「陽子」についての説明として、

³ この種の「が」については、宮地敦子(1956)が「誤用」として詳しく分析している。

「そこに前からいたの」といった候補を排除して「そこに現れたの」が選ばれたとはふつう解釈できないからである。とって、このような「が」は、単に主格を表しているだけだともいえない。予想外だとか驚きだというニュアンスをともなうことが多いからである。

このような文は、第4章第1節の8.でも述べたように、「富士山が見えるよ。」のような無題文の一種だと考えられる。このような文の「が」が意外性や驚きのニュアンスをともないやすいのは、無題文の「が」がそうしたニュアンスをともないやすいのと同じである。¹

次の(20)の2つめの文が、この型の文の例である。

(20) クワガタ一匹がなんと一万五千元。値段も値段だが、これをボンと買ったのが小学生。驚くべきなのか、嘆くべきなのか。神戸市内のデパートでの話。

(『毎日新聞』1980.7.25 朝刊 p.23「雑記帳」)

このような文については、天野みどり(1995a, 1995b)が、「特におすすめなのがこれです」という例をあげて、「「が」による倒置指定文」や「「が」による後項焦点文」と名づけたうえで、詳しく考察している。

ただし、こうした文は、どんな種類の文章や談話にでも使われるわけではない。聞き手や読み手の注意を引きつける効果が強いので、事実を淡々と述べるような文体ではほとんど使われない。相手の知らないことを「じつは、……」とおおげさに伝えるような文体で使われることが多い。

なお、次の(21)のような「それが」は、意外性を表す「が」が「それ」と結びついて、接続詞になりつつあるものである。²

(21) 四回を終わって6点差。投手はエースの井本。年に一回のプロ野球を楽しみにしていた秋田のファンも近鉄の楽勝と思っていたことだろう。それが七回に、あつという間に同点にされる。(『朝日新聞』1980.9.7朝刊 p.17「スポット」)

8. 排他を表す「が」のまとめ

排他を表す「が」について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようにな

¹ このような文の主格には指示語が使われることが多いが、それについては、庵功雄(1996)に説明がある。

² このような「それが」の機能については、浜田麻里(1993)が詳しい。

る。

1) 排他専用の「が」と排他兼用の「が」

- (22) 大阪より神戸のほうがいい店がある。 主格の「が」
排他専用の「が」
- (23) 大阪のほうがにぎやかだ。 主格と排他兼用の「が」

2) 強い排他を表す「が」

次の(24)のように、「～のほうが……」や「～がいちばん……」の形で、2つ以上の候補から選択する文では、強い排他を表す「が」が使われる。

- (24) 大阪より 神戸のほうが いい店が ある。

3) 弱い排他を表す「が」

次の(25)のような恒常的な状態を表す文では、主格の「君が」は弱い排他を表し、「君だけが主役だ」ということを暗示する。

- (25) 君が 主役だ。

第2節 排他を表せる成分

1. はじめに

前の第1節では、排他を表す「が」に、排他専用のものがあることを述べた。排他専用の「が」というのは、「大阪より神戸がいい店がある。」の「神戸が」のように、もともと主格ではない成分についての「が」である。

これまでの研究は「～に」や「～の」が「～が」になったものが中心で、副詞的成分や従属節が「～が」になったものはほとんど研究されていない。

この節では、「が」で排他を表せるのはどんな成分かをみていく。

2. 「が」で排他を表せる文の構造

はじめに、排他専用の「が」が使われるのはどんな文かをみておきたい。

排他専用の「が」が使われるのは、次の(ア)と(イ)の2つの条件をみたす文だと考えられる。

(ア) 2つ以上の候補を比較して選択する文になっている

(イ) 「が」がつく成分が、主格的な性質をもっている

(ア)の条件は、次の(1)のように、「～のほうが……。」や「～がいちばん……。」の形で、強い排他を表す文になっているという条件である。

(1) ですから、時代劇のほうが担当者は大変なんです。

(岡見圭『映画という仕事』p. 124)

そのほか、そうした形をしていなくても、次の(2)のように、「～のほうが……」か「～のほうがいちばん……」のような意味がこめられ、実質的に強い排他を表す文になっていれば、排他専用の「が」が使われる。

(2) 「御三家」と言われる駿台予備学校、代々木ゼミナール、河合塾の「すみわけ」

ができつつある首都圏と違い、これら大手の相次ぐ進出で関西は今が予備校戦争たけなわ。
(『朝日新聞』1992. 3. 3 朝刊 p. 22)

一方、(イ)の条件は、次の(3)でいうと、「私」が、「体が小さかった」にたいして主格的な性質をもっているという条件である。⁶

(3) この中で私が一番体が小さかった。(横山やすし『まいど!横山です』p. 42)

この条件をみたさないもの、つまり、主格的な性質をまったくもっていない成分には、排他の「が」はつかない。たとえば、次の(4)の「どのような組織や人脈に属するかで」は主格的な性質をまったくもっていないため、「どのような組織や人脈に属するかが」にはならない。

(4) 日本の社会では、米国などの競争社会にくらべると、人間の評価、栄達が、その人の能力いかんより、どのような組織や人脈に属するかで決まりやすい。

(『朝日新聞』1980. 7. 25 夕刊 p. 1 「今日の問題」)

3. 「が」で排他を表せる格成分

主格以外の成分が排他の「～が」になっているものでは、次の(5)のように、所有を表す「～の」が排他の「～が」になっているものが多い。⁷

(5) だが、現在はまだ北の高気圧の方が勢力が強い。

(『毎日新聞』1981. 7. 3 朝刊 p. 22 「きょうの天気」)

また、次の(6)のように存在の場所を表す「～に」が「～が」になっているものや、時を表す「～に」が「～が」になっているものも多い。⁸

(6) 広島は流川あたりがバーや飲屋がおおいが、広島駅のすぐそばの駅西の路地で飲んだ。
(『旅』1986. 12 p. 47)

そのほか、これまでの研究では、実際の使用例ではないが、次の(7)のように、到着点を表す「～に」が「～が」になった文や、その次の(8)のように、場所を表す「～で」が

⁶ (イ)に近い条件は、これまでも「XガYガZ」の成立条件としてあげられてきた。たとえば、Shibatani and Cotton(1976-1977)は、「YガZ」が「X」についての「general characteristic/feature」を表すとし、天野みどり(1990)は、「性質」を表すとしている。また、杉本武(1995)は、「X」と「YガZ」に「対象—状態」という関係があるととしている。

⁷ 「～の」は、格成分ではなく格成分の一部であるが、ここに入れておく。

⁸ 久野暉(1973)は、「～の」と存在の場所を表す「～に」について、それらが「～が」になることを、「主語化」として定式化している。

「～が」になった文があげられている。

(7) 六本木のディスコが芸能人がよく来る。(Nakajima and Sagawa(1984:p.104))

(8) この店がつけで買物できる。(井上和子(1983:p.30))

さらに、例は多くないが、次の(9)のように、受動文の動作主を表す「～に」や、その次の(10)のように、「～から」が「～が」になったものもある。

(9) 祖母は息子の司がいちばん苦勞させられたけれど、いちばん気持のきれいな子どもだった、と司が死んでから、年のせいもあってか、どんどん美化しはじめてもいた。(津島佑子『火の河のほとりで』p.86)

(10) 今場所は引退の瀬戸際に立つ北の湖の土俵も気になるが、それより今後の角界を背負う二人の相撲の方が目が離せない。

(『朝日新聞』1984.3.12 朝刊 p.19「東西トーザイ」)

反対に、排他の「が」がつきにくいのは、対象を表す「～を」や、結果の状態を表す「～に(なる)」などである。こうした格成分は、主格的な性質をもてないので、「～が」になることはほとんどない。次の(11)のように、「～を」が「～が」になったと考えられる例もあるが、不自然なものが多い。

(11) 人参は大根より塩のまわりが悪いので一緒に漬ける場合は人参の方が少し細目に切ってください。(『毎日新聞』というタイトルの、新聞の折り込み広告 1989.1)

4. 「が」で排他を表せる副詞的成分

副詞的成分にはいろいろなものがあるが、「が」をつけて排他的な意味を表せるのは、「今」や「ことし」のようにテンスを表すものに限られる。

次の(12)は、「いま」に排他の「が」がついている例である。

(12) 洗濯屋さんはいまが一年で一番忙しい。

(『朝日新聞』1984.4.19 夕刊 p.1「あすの天気」)

そのほかの副詞的成分には、排他の「が」はつかない。対比の「は」がつかない、ムードを表す「きっと」のようなものや、形容詞の状態の程度を表す「たいへん」のようなものはもちろん、対比の「は」がつく、動詞の動作の様態を表す「はっきりと」のようなものや、名詞の数量を表す「3人」のようなものにも、排他の「が」はつかない。そのため、次の(13)のような文は、なりたたない。

(13) *それとなくではなく、はっきりとが言った。

テンスを表す副詞的成分の場合は、前の(12)の「いまが」のように、述語の「忙しい」にたいして主格的な性質をもつことがあるが、「はっきりと」など、ほかの副詞的成分は、主格的な性質をもつことがないからである。

5. 「が」で排他を表せる従属節

従属節にも、排他の「が」がつくことがある。代表的な従属節に排他の「が」がつくかどうかを表にまとめると、次の(14)のようになる。

(14)

| 従属節の種類 | 排他の「が」がつくか |
|-------------------|------------|
| 付帯状況句 (～ながら, ～まま) | × |
| 継起句 (～て) | × |
| 仮定節 (～たら, ～と) | ○ |
| 時間節 (～とき, ～まで) | ○ |
| 理由節 (～ため, ～ので) | × |
| 並列節 (～し, ～けれど) | × |

この表(14)のように、排他の「が」がつく従属節は、「～たら」、「～と」のような仮定節と、「～とき」、「～まで」のような時間節だけである。

仮定節の場合は、そのまま「が」がついた「～たらが」のような形にはならない。2つの候補から1つを選択する文では、「～ほうが」という形になり、3つ以上の候補から1つを選択する文では、「～のが」という形になる。⁹

たとえば、次の(15)を、2つの候補から「外に出たら」を選んだ形にすると、その次の(16)の最後の文のように、「外に出たほうが」になる。

(15) 外に出たら、きょうみたいな日はすっきりするよ。

(16) ——体の調子でもおかしいの？ 外に出た方が、きょうみたいな日はすっきりするよ。
(津島佑子『火の河のほとり』p.247)

また、次の(17)を、3つ以上の候補から「新米のうちに食べると」を選んだ形にすると、その次の(18)のように、「新米のうちに食べるのが」になる。

(17) コメは新米のうちに食べるとおいしい。

(18) コメは新米のうちに食べるのが一番おいしい。

⁹ このような関係は、野田尚史(1994c)で示されている。

(『朝日新聞』1994.7.19 夕刊 p.7 「語りあうページ」)

一方、時間節の場合は、仮定節とは違い、「～とき」や「～まで」の後にそのまま排他の「が」がつく。2つの候補から1つを選択する文では、基本的に、「～ときのほうが」のような形になり、3つ以上の候補から1つを選択する文では、「～ときが」のような形になる。次の(19)は、「～ときが」が使われた例である。

(19) トキはね、飛んでるときが一番きれいなんです。

(工藤宜『佐渡にんげん巡礼』p.39)

このように、仮定節や時間節には排他の「が」がつくが、そのほかの従属節には排他の「が」はつかない。仮定節や時間節の場合は、たとえば、前の(19)では、「飛んでるときが」が述語の「きれいだ」にたいして、主格のような性質をもつことになるが、そのほかの従属節の場合は、「遅れたけれど」などが主格に近い性質をもつことはないからである。

なお、「～ながら」や「～まま」などの付帯状況句は、次の(20)のように、「～ながらのほうが」のような形になるようにみえる。ただし、このような形は、その次の(21)から「勉強する」が省略されたものと考えるほうがよいと思われるので、付帯状況句には排他の「が」はつかないものとしておく。

(20) ラジオを聞きながらのほうがよく勉強できる。

(21) ラジオを聞きながら勉強するほうがよく勉強できる。

6. 「が」で排他を表せる成分と「は」で対比を表せる成分

ここまで、「が」で排他を表せる成分にはどんなものがあるかをみてきた。これを、第7章第3節でみた、「は」で対比を表せる成分と比べてみよう。

まず、共通点としては、次の(ウ)のような成分には、対比の「は」も排他の「が」もつくということがあげられる。

(ウ) 述語との結びつきが強すぎもせず、弱すぎもしない成分

これをもう少し詳しくいうと、次のようになる。述語との結びつきが非常に強い成分、たとえば、「たいへん」のような程度を表す副詞的成分や、「ラジオを聞きながら」のような付帯状況句には、対比の「は」も排他の「が」もつかない。また、述語との結びつきが非常に弱い成分、たとえば、「きっと」のようなムードを表す副詞的成分や、「遅れたけれど」のような並列節にも、対比の「は」も排他の「が」もつかない。それにたいして、述語との結びつきが中間的な成分、たとえば、「今」のようなテンスを表す副詞的成分や、「外

に出たら」のような仮定節には、対比の「は」も排他の「が」もつく。

一方、対比の「は」がつく成分と排他の「が」がつく成分の違いとしては、次の(エ)のような成分には、対比の「は」はつくが、排他の「が」はつかないことがあげられる。

(エ) 主格的な性質をまったくもたない成分

たとえば、「私はジュースを飲んだ」の「ジュースを」という格成分は、主格的な性質をまったくもたないので、次の(22)のように、対比の「は」はつくが、その次の(23)のように、排他の「が」はつかない。

(22) 私はジュースは飲んだが、お酒は飲まなかった。

(23) *私はお酒ではなくジュースが飲んだ。

このように、「が」で排他を表せる成分は、「は」で対比を表せる成分より少なく、「は」で対比を表せる成分の一部だけである。

対比の「は」と排他の「が」で、このような違いがでてくるのは、対比の「は」は完全なとりたて助詞になっているのにたいして、排他の「が」は完全なとりたて助詞にはなっていないためである。排他の「が」は、対比の「は」と違って、主格を表す格助詞の性質を残しているので、主格的な性質をもっている成分にしかつかないのである。

7. 「が」で排他を表せる成分のまとめ

「が」で排他を表せる成分について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 「が」で排他を表せる文の構造

主格以外の成分に排他の「が」がつくのは、2つ以上の候補を比較して選択する、次の(24)か(25)のような文のときである。

(24) トキは 飛んでいるときのほうが きれいだ。

(25) トキは 飛んでいるときが いちばん きれいだ。

2) 「が」で排他を表せる成分と表せない成分

| | | | |
|-------|--------------------------|--------------|----------|
| | 「が」がつかない | 「が」がつく | 「が」がつかない |
| 格成分 | 「～に(なる)」 | 「～に(ある)」 | |
| 副詞的成分 | 「はっきりと」 | 「今」 | 「きつと」 |
| 従属節 | 「～て」 | 「～たら」, 「～とき」 | 「～けれど」 |
| | 強い ←——— 述語との結びつき ———→ 弱い | | |

第 9 章

主 題 の 文 法 理 論

第1節 文の階層構造からみた主題

1. はじめに

前の第8章まで、構造と機能の両面から日本語の主題についてみてきた。最後の第9章では、これまでに述べてきたことをできるだけ体系的にまとめ、日本語の主題についての文法理論を提案したい。

この第1節では、文の構造を考えるときの重要なモデルとして、文の階層構造をとりあげ、そのなかで文の主題である「～は」や非主題である「～が」がどのような位置をしめるのかを検討する。

そのあと、第2節では、生成文法で盛んに議論されてきた文の生成をとりあげ、第1節で検討した文の階層構造とも関連させながら、文の生成方法を検討する。

さらに、第3節では、機能的な観点から、「は」と「が」の機能や、主題と非主題の対立などについての理論を提案する。

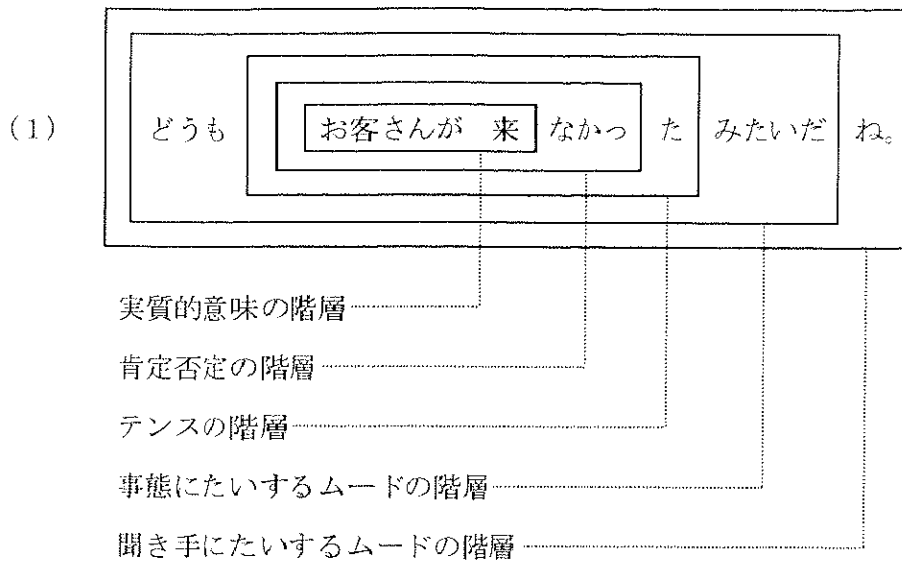
2. 文の階層構造のモデル

文にはいくつかの階層があり、それらの階層が順に重なって文がつくられるという考えかたがある。南不二男(1974, 1993)や益岡隆志(1997)に代表される考えかたであり、日本語の文の構造モデルとしては、これから主流になっていくと考えられるものである。本論文でも、文の基本的な構造として、これらと同じように、文は階層構造をもつと考える。ただし、階層の設定は、描叙や判断といった意味・機能にもとづく南や益岡とは違って、ボイスやテンス、ムードといった文法カテゴリーに基づいておこなうことにする。¹

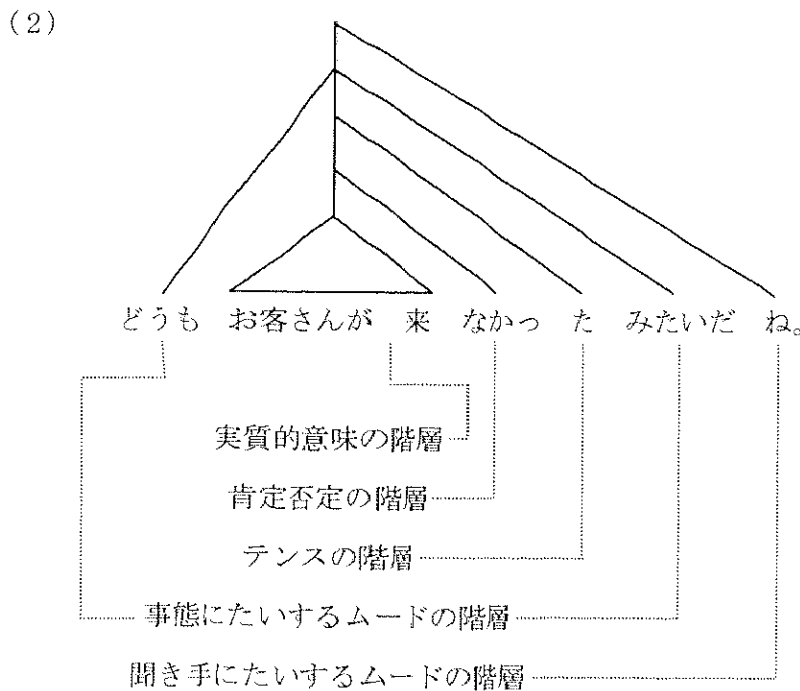
たとえば、「どうもお客さんが来なかったみたいだね。」という文を、文の階層構造のモ

¹ 詳しいことは、野田尚史(1989b)に示されている。

デルによって表すと、次の(1)のように、いくつかの階層が順に重なった構造になる。



この(1)は、「入れ子型」の図にしてあるが、生成文法で使われる「樹形図」にすれば、次の(2)のようになる。²



このように、文の階層構造のモデルでは、「来なかったみたいだね」のような述語成分の中がいくつかの階層にわかれるだけでなく、「お客さんが」や「どうも」のような格成

² ここで示した文の階層構造は簡略化したものである。野田尚史(1989b)に示されているように、実質的意味の階層と肯定否定の階層の間には、ボイスの階層やアスペクトの階層があるなど、もっと多くの階層がある。

分や副詞的成分も、さらに「北海道に行ったとき」のような従属節も、どれかの階層に属しているとする。

3. 文の階層構造からみた述語成分

この3.と次の4.では、文がもつ階層構造を、部分、部分にかけて、もうすこし詳しくみていこう。ここでは、文の中心である述語の階層構造について述べ、次の4.では、格成分と副詞的成分、さらに従属節の階層構造について述べる。

述語がもつ階層構造は、たとえば次の(3)のような述語の場合、その次の(4)のようになっていると考えられる。

(3) かけ—られ—てい—なかつ—た—みたいだ—ね

(4) 語幹—ボイス—アスペクト—肯定否定—テンス—事態にたい—聞き手にたい
 するムード するムード

(4)のように、いちばん内側に、できごとや状態の種類を表す「かけ」のような、述語の語幹の階層がある。その外側に、順に、ボイスの階層、アスペクトの階層、肯定否定の階層、テンスの階層、事態にたいするムードの階層がつづく。そして、いちばん外側は、「ね」のような、話し手の聞き手にたいするムードの階層になる。この順序はほぼ、内側の階層ほど、現実にことばを使う場面にしばられない抽象的で一般的なものが出て、外側の階層ほど、現実にことばを使う場面にしばられる具体的で個別的なものが出てくるという形になっている。

4. 文の階層構造からみた格成分と副詞的成分と従属節

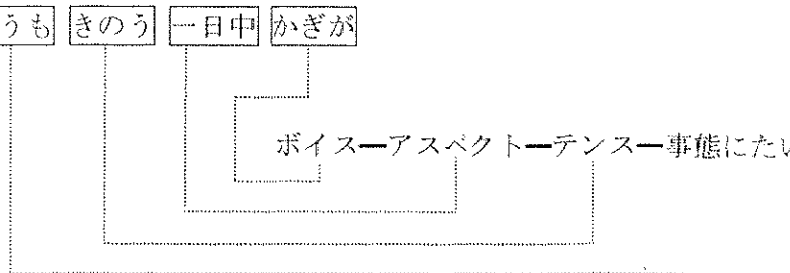
文は、文の中心である述語成分と、格成分、副詞的成分からなりたっていると考える。そして、それぞれの格成分、副詞的成分はかならず、前に(4)でみたような述語の階層のどれかと関係があると考えられる。たとえば、次の(5)のような格成分や副詞的成分は、それぞれ(6)のような述語の階層と関係があると考えられるのである。

(5)

| | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| どうも | きのう | 一日中 | かぎが |
|-----|-----|-----|-----|

(6)

| | | | |
|--------------------------|--|--|--|
| ボイス—アスペクト—テンス—事態にたいするムード | | | |
|--------------------------|--|--|--|



(10) …-アスペクト-肯定否定-テンス-けど …… —事態にたいするムード— ……

これは、たとえば、アスペクトの階層の従属節「～ながら」では、その内部に、アスペクトの階層より内側の、語幹やボイスの階層の形式は現れるが、それより外側の、テンスやムードの階層の形式は現れないということである。⁵ これは一般的にいうと、ある階層の従属節があると、その従属節の内部には、その階層より内側の階層の形式は現れるが、その階層より外側の階層の形式は現れないということである。⁶ このように、従属節の内部でも階層の序列がみられるのである。

ここまでみてきたように、述語の内部が階層構造をもっているだけでなく、格成分も副詞的成分も従属節もどれかの階層と関係をもっている。また、従属節の内部にも階層の序列がみられる。こうした形で、文は、階層構造をもっているのである。

5. 文の階層を認定する方法

文の階層構造のなかで、主題の「～は」や対比の「～は」などがどの階層で働くものかをこれから認定していきたいのであるが、その認定の方法としては次の3つが考えられる。

- 1) どんな述語と呼応するか
- 2) どんな成分をとりたてるか
- 3) どんな従属節の中に入るか

第1の「どんな述語と呼応するか」によって階層を認定する方法というのは、たとえば、例示を表す「～でも」を例にあげて説明すると、次のようなことである。例示の「～でも」は、次の(11)のように、意志を表すムードをもった述語にはつながっていくが、その次の(12)のように、事実を表すムードをもった述語にはつながっていかない。

(11) お茶でも飲もう。

(12) *お茶でも飲んだ。

これは、例示の「～でも」は、事態にたいするムードのなかの特定のものとだけ呼応するということである。つまり、意志を表すムードのように真偽が判断できない「未確定」

⁵ アスペクトの階層の形式は、一部だけ現れる。

⁶ その階層の形式は、一部だけ現れる。

のモードとは呼応するが、事実を表すモードのように真偽が判断できる「確定」のモードとは呼応しないということである。このような述語との共起のしかたによって、例示の「～でも」は、事態にたいするモードの階層で働くことと認定するのである。

第2の「どんな成分をとりたてるか」というのは、たとえば、「～だけ」と「～しか」を例にあげて説明すると、次のようなことである。「だけ」は、次の(13)のように、格助詞がつく前の段階の名詞に直接ついて、その名詞をとりたてることができるが、「しか」は、その次の(14)のように、そのような名詞に直接つくことができない。

(13) 家族だけに言った。

(14) *家族しかに言わなかった。

これらの例文の「家族」のように格助詞がつかない段階の名詞は、語幹の階層のものだと考えられる。そのため、「～だけ」は語幹の階層で働くが、「～しか」はそれより外側の階層で働くことと認定するのである。

第3の「どんな従属節の中に入るか」というのは、たとえば、主題を表す「～は」を例にあげて説明すると、次のようなことである。主題の「～は」は、次の(15)のように、理由を表す「～ために」という従属節の中には入れないが、その次の(16)のように「～けど」という従属節の中には入れる。

(15) *飛行機は欠航になったため、帰ってこれなくなった。

(16) 飛行機は欠航になったけど、新幹線を乗りついで帰ってきた。

理由を表す「～ため」節はテンスの階層の従属節、「～けど」は事態にたいするモードの階層の従属節だと考えられる。前の4.の最後でみたように、ある階層の従属節があると、その従属節の内部には、その階層より内側の階層の形式は現れるが、その階層より外側の階層の形式は現れない。そうすると、主題の「～は」は、テンスの階層の従属節の内部に入れないので、テンスの階層か、それより外側の階層のものだと認定される。また、主題の「～は」は、事態にたいするモードの階層の従属節の内部に入れるので、事態にたいするモードの階層か、それより内側の階層のものだと認定されるのである。

本論文では、階層を認定するのに、もっとも直接的に認定できる第1の方法、つまりどんな述語と呼応するかという方法を優先的に使っていく。ただし、第1の方法だけでは階層を認定しにくい場合もあるため、必要に応じて、第2、第3の方法もあわせて使っていくことにする。

6. 主題の「～は」の階層

ここでは、主題を表す「～は」がどの階層に属するのかを考えたい。結論からいうと、主題の「～は」は事態にたいするムードの階層のものだと考える。

そのように考える根拠としては、前の5. でみた1)の「どんな述語と呼応するか」という点と、3)の「どんな従属節の中に入るか」という点がある。

主題の「～は」は、どんな述語と呼応するかという点からいうと、事実を表すものなど、真偽が判断できる確定のムードをもった述語とは呼応するが、意志を表すものなど、真偽が判断できない未確定のムードをもった述語とは呼応しない。たとえば、意志のムードと呼応する次の(17)のような「は」は対比を表すだけで、主題は表さない。⁷

(17) 私はケーキセットにしよつと。

このように、主題の「～は」は、事態にたいするムードの階層との呼応に特殊な制限があるため、事態にたいするムードの階層のものだと考えられる。

また、主題の「～は」は、どんな従属節の中に入るかという点からいっても、事態にたいするムードの階層のものだと考えてよい。それは、次の(18)の「～とき」節のような、テンスの階層より内側の階層の従属節の中には入れず、その次の(19)の「～けど」節のような、事態にたいするムードの階層より外側の階層の従属節の中には入れるからである。

(18) *この駐車場はいっぱいのとき、私は向こうの駐車場に入れる。

(19) この駐車場はいっぱいだけど、私は待つてでもここに入れる。

一般に、ある階層の要素は、その階層より内側の階層の従属節の中には入れず、その階層より外側の階層の従属節の中には入れると考えられる。そうすると、主題の「～は」は、事態にたいするムードの階層のものと考えてよいことになる。⁸

7. 対比の「～は」の階層

主題の「～は」は、事態にたいするムードの階層のものだと考えたが、対比の「～は」は、それより内側の、肯定否定の階層のものだと考える。

⁷ 益岡隆志(1991:第2部第4章)は、真偽判断文だけが主題をもつことを根拠に、主題と真偽判断のモダリティが同じ階層に属することを指摘している

⁸ 南不二男(1974:p. 128-p. 129 など)は、どんな従属節の中に入れるかという点から、主題の「～は」を、ここで事態にたいするムードの階層としたものにほぼ対応する「C類」の従属句に現れるものとしている

そのように考える根拠としては、5. でみた1)の「どんな述語と呼応するか」と、2)の「どんな成分をとりたてるか」と、3)の「どんな従属節の中に入るか」という点がある。

対比の「～は」は、どんな述語と呼応するかという点からいうと、次の(20)のように「～は」が単独で使われているときは、どんな述語とでも呼応するようにみえる。

(20) 函館には行った。

しかし、次の(21)のように比較の相手が明示されているときは、一方の「～は」が肯定の述語と呼応していれば、もう一方の「～は」は否定の述語と呼応するというように、2つの述語がたがいにもうひとつの述語を否定する関係になるのがふつうである。そのため、対比の「～は」は、基本的には、肯定否定の階層のものだと考えられる。

(21) 田中は来たが、山田は来なかった。

次に、どんな成分をとりたてるかという点からいうと、対比の「～は」が格成分をとりたてるときには、次の(22)のように名詞に直接つくことはできず、その次の(23)のように格助詞の後につく。

(22) *三浦さんはに知らせなかった。

(23) 三浦さんには知らせなかった。

このことから、このような「～は」は、ボイスより外側の階層のものだと考えられる。これは、対比の「～は」が肯定否定の階層のものであるということを補強することになる。

さらに、どんな従属節の中に入るかという点からいうと、対比の「～は」は、次の(24)のような「～ながら」節には現れず、その次の(25)のような「～とき」節には現れる。

(24) *テレビは見ないでラジオは聞きながら仕事をしていた。

(25) 結婚はしたがまだ子供は生まれていなかったときに、ここへひっこしてきた。

「～ながら」節はアスペクトの階層の従属節であり、「～とき」節はテンスの階層の従属節である。ということは、対比の「～は」は、アスペクトの階層の従属節には現れず、テンスの階層の従属節には現れるのである。このことから、この「～は」は、アスペクトの階層より外側のものであり、テンスの階層より内側のものだと考えられる。⁹

なお、同類を表す次の(26)のような「～も」は、野田尚史(1995)で述べられているよう

⁹ 南不二男(1974:p.124)は、どんな従属節の中に入れるかという点から、対比の「～は」を、ここで肯定否定の階層としたものを含み、それより広い「B類」の従属句に現れるものとしている。

に、肯定否定の階層のものだと考えられる。

(26) 田中も来たし、山田も来た。

ということは、対比の「～は」と同類の「～も」は、同じ肯定否定の階層で、たがいに対称的なペアとして働いているということになる。一方、主題の「～は」は、対比の「～は」や同類の「～も」とは違って、それより外側の、事態にたいするムードの階層で働くものである。

8. 排他の「～が」の階層

排他の「～が」は基本的に、対比の「～は」と同じく、肯定否定の階層のものだと考える。

排他の「～が」は、どんな述語と呼応するかという点からいうと、次の(27)のように、肯定の述語とは呼応するが、その次の(28)のように、否定の述語とは呼応しにくいという制限があるので、肯定否定の階層のものだと考えられる。

(27) 色の濃いほうがおいしそうに見える。

(28) *色の薄いほうがおいしそうに見えない。

また、排他の「～が」は、どんな従属節の中に入るかという点からいっても、肯定否定の階層のものだと考えてよい。それは、次の(29)の「～まえ」節のような、アスペクトの階層より内側の階層の従属節の中には入りにくいが、その次の(30)の「～とき」節のような、テンスの階層より外側の階層の従属節の中には入れるからである。

(29) *この賞がいちばん賞金が高くなるまえは、応募者が少なかった。

(30) この賞がいちばん賞金が高かったときは、応募者が百人以上いた。

9. 主格の「～が」の階層

主格の「～が」は、基本的にボイスの階層のものだと考える。

主格の「～が」は、どんな述語と呼応するかという点からいうと、述語のボイスの階層と呼応するので、ボイスの階層のものだと考えられる。ボイスの階層と呼応するというのは、主格の「が」が、次の(31)では「佐々木」についているのに、その次の(32)のように受動になると「鈴木」につくというようなことである。¹⁰

¹⁰ ただし、「お金が(ある)」のように、受動や使役との対立がない非意志的な述語と結びついている「～

(31) 佐々木が鈴木を気に入ってるって知ってる？

(32) 鈴木が佐々木に気に入られてるって知ってる？

また、主格の「～が」は、どんな従属節の中に入るかという点からも、ボイスの階層のものだと考えてよい。「～は」とは違って、次の(33)の「～まえ」節のような、アスペクトの階層の従属節の中にも入れるからである。

(33) この賞の賞金が百万円になるまえは、応募者が少なかった。

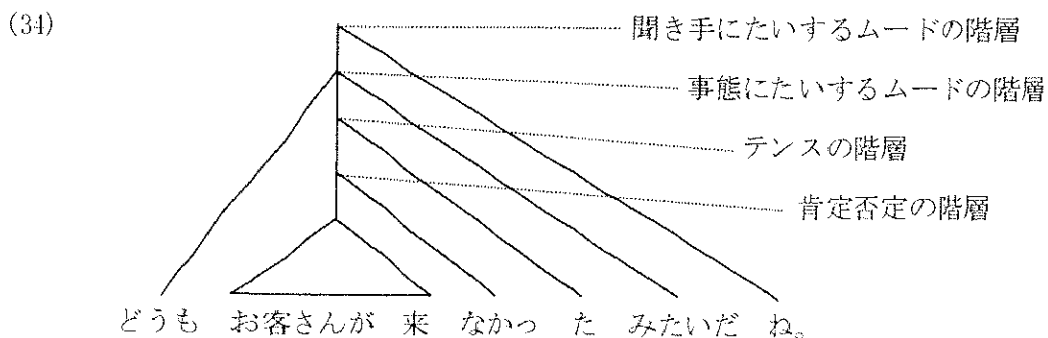
「～が」にはいろいろな用法があり、それぞれの用法が連続しているため、どのような「～が」をどの階層のものとするかはむずかしいが、主格の「～が」は基本的にボイスの階層のもので、排他的「～が」は基本的に、それより外側の、肯定否定の階層のものだと考える。

10. 文の階層構造からみた主題のまとめ

文の階層構造からみた主題について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 文の階層構造

文は、次の(34)のような階層構造をもっている。



2) 「～は」と「～が」の階層

主題の「～は」、対比の「～は」、排他的「～が」、主格の「～が」は、次の階層で働く。

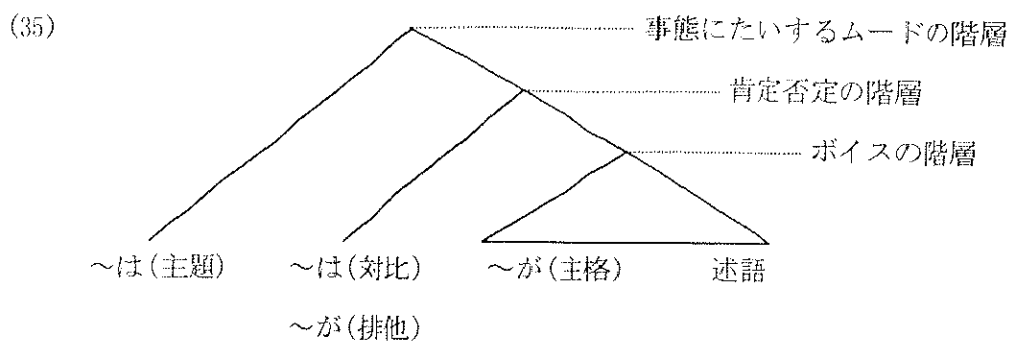
主題の「～は」…………… 事態にたいするムードの階層

対比の「～は」、排他的「～が」…………… 肯定否定の階層

主格の「～が」…………… ボイスの階層

「～が」は、ボイスより内側の、実質的意味の階層のものだと考えるほうがよいと思われる。

これを図示すると、次の(35)のようになる。



第2節 文の生成からみた主題

1. はじめに

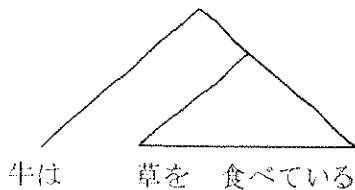
生成文法の世界では、主題をもつ文の構造をどう表すのがよいか、また、主題の「～は」をどのように生成するのがよいかという議論がおこなわれてきた。ここでは、これまでの議論をふまえたうえで、そうした文の構造を考え、主題の「～は」や排他的「～が」を生成する方法を検討してみたい。

はじめに、2.で、主題をもつ文と主題をもたない文の基本的な構造を、前の第1節で考えた、文の階層構造による分析と関係づけて示す。次に、主題の「～は」の生成について、3.で従来の研究を整理し、4.で本論文での提案を示す。そのあと、排他的「～が」の生成について、5.で従来の研究を整理し、6.で本論文での提案を示す。

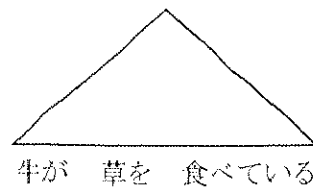
2. 主題をもつ文と主題をもたない文の構造

主題をもつ文と主題をもたない文の表層的な構造については、これまでの生成文法の研究で、次のようなことが共通の認識になっている。主題の「～は」をもつ文は、次の左の(1)のように、主題の部分とそのほかの部分に大きくわかれる構造をもっている。それに対して、主題をもたず、主格が「～が」になっている文は、次の右の(2)のように、そのような構造をもっていないということである。¹⁾

(1)



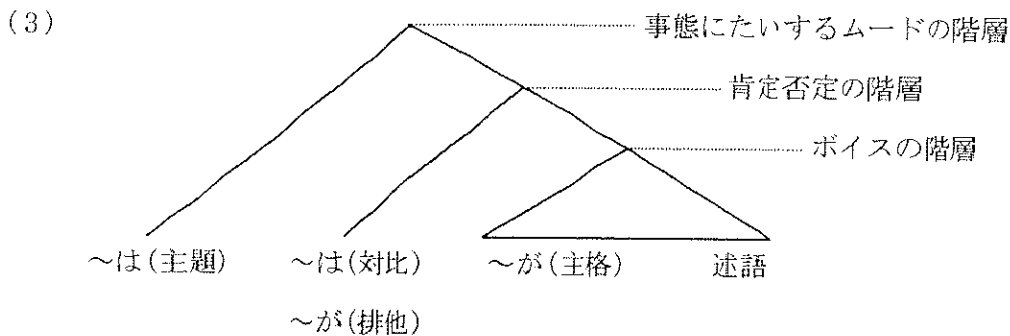
(2)



¹⁾ これらの図では、理論によって違う節点の名称などは表示していない。

このような考えは、伝統的な国語学の世界で、たとえば、尾上圭介(1981)が「は」について、その機能を「二分結合」、つまり「一文を二項に分節」し、「分節を意識した上で二項を結」ぶと考えていることとも一致する。

しかし、これまでの研究では、こうした構造は、文の階層構造のモデルとは関係づけられずにきた。ここでは、前の第1節でみたように、文の階層構造のモデルをもとにして、主題の「～は」、対比の「～は」、排他の「～が」、主格の「～が」を、文の構造の中で次の(3)のように位置づける。



このように考えると、主題の「～は」をもつ文が主題の部分とそのほかの部分に大きくわかれることの意味がはっきりする。主題の「～は」は、この図(3)のなかではいちばん上にある、事態にたいするムードの階層に節点をつくるので、主題とそのほかの部分のわかれめが、このなかではいちばん大きいことになるのである。

ただし、わかれめは、主題とそれ以外の部分にわかれるところにだけあるのではない。もっと下の階層にある節点にもわかれめはある。ただし、いちばん上にある節点のわかれめより小さいわかれめになる。たとえば、対比の「～は」と排他の「～が」は、それより下の、肯定否定の階層に節点をつくるので、そのわかれめは主題のわかれめより小さい。単なる主格を表す「～が」は、さらに下の、ボイスの階層に節点をつくるので、そのわかれめはこのなかではいちばん小さいことになる。¹²

このような階層を考えると、主題の「～は」が「～とき」節のような強い従属節の中に現れないことも、次のように説明できる。「～とき」節はテンスの階層の従属節である。テンスの階層の従属節の中には、テンスの階層より外側の階層に属する要素は、現れない

¹² 主題の「～は」と対比の「～は」の階層の違いは、三宅知宏(1995)で指摘され、主格の「～が」と排他の「～が」の階層の違いは、Kiss(1981)や上山あゆみ(1989)で指摘されている。「～は」と「～が」全体の階層の違いは、Tateishi(1994)で考察されている。

のがふつうである。したがって、「～とき」節の中には、事態にたいするムードの階層の要素である主題の「～は」は現れないという説明である。

3. 主題の「～は」の生成についての従来の研究

主題の「～は」の生成のしかたについて、これまでの研究を整理すると、大きく、次の1)から4)の4つの説にまとめられる。それぞれの違いは、表層で文を二分する主題の「～は」の節点をどうつくるかである。

- 1) 移動説——主題と指定されたものを移動して、主題の節点をつくる
- 2) 複写説——主題と指定されたものを複写して、主題の節点をつくる
- 3) 基底説——基底ではじめから主題の節点をつくっておく
- 4) 複合説——文の種類によって、移動説と基底説を使いわけ

1)の移動説は、次の(4)から主題の「この本を」を文頭に移動し、それに「は」をつけて、その次の(5)をつくるものである。Kuroda(1965 : p. 63-p. 64)が基本的にこれにあたる。

(4) 父がこの本を買ってくれた (こと)

主題

(5) この本は [父が買ってくれた]。

2)の複写説は、次の(6)から主題の「この本を」を文頭に複写し、それに「は」をつける一方、もとの「この本を」を消去して、その次の(7)をつくるものである。Muraki(1974:Chapter III)が基本的にこれにあたる。

(6) 父がこの本を買ってくれた (こと)

主題

(7) この本は [父がこの本を買ってくれた]。

3)の基底説は、基底で次の(8)のような構造をつくっておくものである。久野暉(1973:p. 163-p. 164, p. 235-p. 236)が基本的にこれにあたる。

(8) この本は [父がこの本を買ってくれた]

4)の複合説は、柴谷方良(1978:第4章4.)のように、格成分や副詞的成分が主題になっている文は移動説で生成し、「～の」など、それ以外の成分が主題になっている文は基底説で生成するものである。

4. 主題の「～は」の生成についての本論文での提案

前の3.では、主題の「～は」の生成についてのこれまでの研究を、1) 移動説、2) 複写説、3) 基底説、4) 複合説の4つに整理した。この4つのうち、本論文では、野田尚史(1994b)と同じく、2)の複写説をとる。

1)の移動説ではなく2)の複写説をとるのは、「これを」などの代用形式をもつ次の(9)のような文も含めて統一的に生成できるからである。

(9) 規制は、政府や官僚が一方的にこれを押しつけているわけではない。

(『朝日新聞』1993.9.27 夕刊 p.5 「経済气象台」)

複写説であれば、次の(10)のような段階をとる。このとき、後ろにある「規制を」は、前の「規制を(は)」と同じなので、ふつうは消去される。しかし、文体などによっては、「これを」などの代用形式になると説明できる。移動説では、このような文は、簡単にはつくれない。

(10) 規制は [政府が一方的に規制を押しつけているわけではない]。

次に、3)の基底説や4)の複合説でなく2)の複写説をとるのは、次のような理由からである。基底説や複合説を主張する人たちは、移動説や複写説では、次の(11)や(12)のような文の基底がつかれないから、基底説や複合説をとるしかないという。

(11) 魚は鯛がいい。

(12) 新聞を読みたい人は、ここにあります。

しかし、(11)のような文は、第2章第4節の4.で述べたように、「辞書は新しいのがいい。」に代表される被修飾名詞主題文の一種である。したがって、次の(13)のように、「鯛がいい」から、「鯛」のなかに含まれる「魚」という概念を主題にして生成できる。

(13) 鯛 (=鯛 という 魚) がいい (こと)

主題

また、前の(12)のような文は、第2章第7節で述べたように、過剰や不足などの「異常」によってできた破格の主題文である。こうした文は、基底から生成しないで、表層的な「異常」という点から分析するほうがよいと思われる。

なお、複写説をとると、生成の途中で、前にみた(8)のような基底説の基底の段階をとる。つまり、複写説の基底は、基底説の基底より深い段階のものである。そのため、主題とそれ以外の部分の関係が表示できる。基底説では、そうした関係は、Kuno(1973:p.250)

などで指摘され、Kitagawa(1982:3.2.)などが「aboutness condition」とよぶ、漠然とした条件でしか示せない。

なお、対比を表す「～は」は、基本的に、移動や複写を考える必要はなく、基底で対比を表すと指定された成分にそのままつくと考えればよい。

5. 排他の「～が」の生成についての従来の研究

排他を表す「～が」の生成のしかたについて、これまでの研究を整理すると、大きく、次の1)から3)の3つの説にまとめられる。

- 1) 移動説——排他と指定されたものを移動して、排他の節点をつくる
- 2) 複写説——排他と指定されたものを複写して、排他の節点をつくる
- 3) 基底説——基底ではじめから排他の節点をつくっておく

1)の移動説は、次の(14)から「神戸に」を文頭に移動させ、それに「が」をつけて、(15)をつくるものである。Fukuda(1991)が基本的にこれにあたる。

(14) 神戸にいい店がある (こと)

排他

(15) 神戸のほう~~に~~が [いい店がある]。

2)の複写説は、次の(16)から「神戸に」のコピーを文頭におき、それに「が」をつける一方、もとの「神戸に」を消去して、(17)をつくるものである。Shibatani and Cotton(1976-1977)が基本的にこれにあたる。

(16) 神戸にいい店がある (こと)

排他

(17) 神戸のほう~~に~~が [神戸にいい店がある]。

3)の基底説は、基底で次の(18)のような構造をつくっておくものである。Kiss(1981)が基本的にこれにあたる。

(18) 神戸のほうが [いい店がある] (こと)

6. 排他の「～が」の生成についての本論文での提案

前の5.では、排他の「～が」の生成についてのこれまでの研究を、1)移動説、2)複写説、3)基底説の3つに整理した。この3つのうち、本論文では、1)の移動説をとる。

主題の「～は」の生成には複写説をとったのに、排他の「～が」の生成に複写説をとらないのは、排他の「～が」をもつ文の場合は、前の(9)のような代用形式をもつ文がほとんどないからである。

なお、排他的でない単なる主格を表す「～が」は、基底で生成されればよいので、とくに問題はない。

それでは、「象は鼻が長い。」のような格成分連体部主題文と、「かき料理は広島が本場だ。」のような述語連体部主題文と、「君が主役だ」のような陰題文を例にして、それらの文の中の「～は」や「～が」の生成のしかたを示しておこう。

はじめに、「象は鼻が長い。」のような格成分連体部主題文であるが、この種の文は、次の(19)の基底から生成されると考える。(19)は、主題の「は」も排他の「が」も現れない実質的意味の階層の段階である。ここでの「鼻が」は単なる主格である。ただし、この段階で「象」が主題になることは指定されているものとする。その次の(20)はボイスの階層の段階で、「象の」が「象が」になる。ここでも、「象が」と「鼻が」は単なる主格である。そして、その次の(21)の事態にたいするムードの階層の段階で、主題の成分の「象が」が「象は」になる。このような生成を考えると、(21)の「鼻が」が排他的な意味をもたないことが説明できる。

(19) 象の鼻が 長い (こと)

主題

(20) 象が 鼻が 長い (こと)

(21) 象がは [鼻が長い]。

次に、「かき料理は広島が本場だ。」のような述語連体部主題文であるが、この種の文は、次の(22)の基底から生成されると考える。(22)は、実質的意味の階層の段階である。ここでの「広島が」は単なる主格で排他的な意味はもっていない。ただし、この段階で「広島」が排他になることと「かき料理」が主題になることは指定されているものとする。その次の(23)は肯定否定の階層の段階である。ここで「広島が」が文頭に移動し、排他の「が」がつく。そして、その次の(24)の事態にたいするムードの階層の段階で、主題の成分の「かき料理の」は「かき料理は」になる。こう考えると、(24)の「広島が」が排他的な意味をもつことが説明できる。

(22) 広島が かき料理の本場 (であること)

排他 主題

(23) 広島がが かき料理の本場だ。

(24) かき料理のは [広島が ~~かき料理~~の本場だ]。

最後に、「君が主役だ。」のような陰題文であるが、この種の文は、次の(25)の基底から生成されると考える。(25)は、実質的意味の階層の段階である。ここでの「君が」は単なる主格で排他的な意味はもっていない。ただし、この段階で「君」が排他になることと「主役」が主題になることは指定されているものとする。その次の(26)は肯定否定の階層の段階である。ここで「君が」が文頭に移動し、排他の「が」がつく。ただし、「君が」はもともと文頭にあり、「が」がついているので、表面的な形はかわらない。

(25) 君が 主役 (であること)

排他 主題

(26) 君がが 主役だ。

(26)のような陰題文は、肯定否定の段階で止まり、次の、事態にたいするムードの階層の段階に進まなかったものである。もし、事態にたいするムードの段階に進み、主題が「は」で表されるようになると、次の(27)のような顕題文になる。

(27) 主役は [君が ~~主役~~だ]。

このように考えてくると、これまでの研究で「主語化」とよばれてきたものは、2つにわけなければならないことがわかる。排他的な意味をもたない「主格化」と、排他的な意味をもつ「排他化」(または「焦点化」)である。

主格化は、前の(19)から(20)になるようなもので、ボイスの段階のものである。これは、基本的に、Masuoka(1982)の「subjectivization」に近い。排他化は、前の5.の(14)から(15)になるものや、(22)のような単なる主格の「～が」が(23)のような排他的な「～が」になるもので、肯定否定の段階のものである。これは、基本的に、久野暁(1973:第3章)の「主語化」やKusanagi(1977:p.59)の「rhematization」に近い。

7. 文の生成からみた主題のまとめ

文の生成からみた主題について、この節でみてきたことを簡単にまとめると、次のようになる。

1) 主題の「～は」の生成

基底の(28)から主題の成分を文頭に複写し、「は」をつけて、(29)にする。

(28) 父が この本を 買ってくれた (こと)

主題

(29) この本をは [父が ~~この本を~~ 買ってくれた]。

2) 排他の「～が」の生成

基底の(30)から排他の成分を文頭に移動し、「が」をつけて、(31)にする。

(30) 神戸に いい店が ある (こと)

排他

(31) 神戸のほうにが いい店が ある。

第3節 機能からみた主題と非主題

1. はじめに

伝統的な国語学の世界では、「は」の本義は何かといった議論がおこなわれてきた。¹³ここでは、そうした議論をふまえたうえで、「は」と「が」の機能について考えなおしてみたい。といっても、一つの「本義」などはもとめない。「は」などにたいして、そのすべての用法をカバーする一つの「本義」をもとめようとする、抽象的になりすぎて、実質的にはなにも言っていないのと同じになる恐れがあるからである。

本論文では、二面性という観点をとり入れる。「は」については、主題を表す機能と対比を表す機能の二面性を重視し、「が」についても、主格を表す機能と排他を表す機能の二面性を重視する。

また、「は」と「が」の対立についても、主題・非主題という主題の対立と、対比・排他というとりたての対立という二面性があるとみる。また、「主題」にも、文のレベルの「判断の主題」と、文章・談話のレベルの「関連の主題」という二面性があるとする。

この節では、このような二面性という観点に基づいて、「は」と「が」の機能や、主題と非主題の対立などについての理論を提案する。

2. 主題の「は」と対比の「は」——「は」の二面性——

「は」に主題の用法と対比の用法があることは広く認められている。しかし、この2つの用法の関係をどうみるかについては、いろいろな考えがある。ここでは、それを、大きく、次の1)から5)の5つにまとめてみる。

1) 対比派生説——主題の用法を基本とし、対比の用法を派生とする

¹³ 1975年ごろまでの議論は、尾上圭介(1979)に整理されている

- 2) 主題派生説——対比の用法を基本とし、主題の用法を派生とする
- 3) 構造本質説——「二分結合」など、構造的な面を本質とする
- 4) 意味本質説——「とりたて」など、意味的な面を本質とする
- 5) プロトタイプ説——典型的な主題と典型的な対比が連続するとみる

1) の対比派生説は、菊地康人(1995d:p. 37-p. 38, p. 61)のように、主題の用法を基本的と考え、対比の用法は、2つ以上の主題が対照的なときにでてくる派生的なものだとする考えである。

2) の主題派生説は、寺村秀夫(1991:p. 41-p. 42)のように、対比の用法を基本的と考え、主題の用法は、対比の相手が意識されないときにでてくる派生的なものだとする考えである。

1) の対比派生説は、文の基本的な構造を考えるとときや、主題についてほかの言語と対照するときには便利である。一方、2) の主題派生説は、「も」や「さえ」などほかのとりたて助詞といっしょに「は」を扱うときや、「は」の歴史的な変化を扱うときには便利である。しかし、どちらの場合も、一方の用法が基本で、他方が派生だといえる客観的な根拠は見つけにくい。

次に、3) の構造本質説は、尾上圭介(1981:p. 102-p. 104)のように、「二分結合」といった、どちらかといえば構造的な面を中心に、主題と対比の2つの用法を1つの本質から説明するものである。

4) の意味本質説は、北原保雄(1981:p. 263-p. 264)のように、「とりたて」といった、どちらかといえば意味的な面を中心に、主題と対比の2つの用法を1つの本質から説明するものである。

構造本質説は、派生説のなかの対比派生説と似た面をもち、意味本質説は、派生説のなかの主題派生説と似た面をもっている。

こうした本質説は、本質を求めたい人々にとっては魅力的だろうが、何を本質とするのがいちばんよいのかを客観的に決めにくいという欠点をもつ。

最後にあげた5) のプロトタイプ説は、益岡隆志(1991:p. 218-p. 219)のように、一方に典型的な主題の用法があり、もう一方に典型的な対比の用法があり、そのあいだに中間的な用法があるとするものである。この説の長所は、主題の用法と対比の用法の対立的な面と連続的な面を説明できることである。

ここでは、本質説の長所とプロトタイプ説の長所をとりいれる形で、複合説というもの

を提案したい。複合説というのは、光が波の性質と粒子の性質をあわせもっているように、「は」は潜在的には次の(ア)と(イ)の2つの性質をあわせもっているという考えかたである。¹¹

(ア)構造的には、その前と後を大きく2つの部分にわけ

(イ)意味的には、対比的な意味をつけくわえる

この2つの性質のうち、(ア)が強くと主題を表すことになり、(イ)が強くと対比を表すことになると考える。そして、どちらの性質が強くとするかは、第7章第2節の3.から6.でみたような条件によって決まると考える。

この説によれば、対比を表すと同時に主題を表す、次の(1)のような「は」は、(ア)と(イ)の2つの性質の両方が強く現れたものだと説明できる。

(1) 兄は肉が好きだが、弟は魚が好きだ。

また、対比的な意味の強弱も、(イ)の性質がどれだけ強く現れたかによるものだと説明できる。

3. 主格の「が」と排他的「が」——「が」の二面性——

「が」に2つの用法があること、つまり、単に主格を表すような用法と、排他的な意味を表すような用法があることは、かなり広く認められている。しかし、そうした2つの用法の関係をどうみるかについては、これまであまりはっきりとは述べられてこなかった。

ここでは、次の(2)に示すように、一方には典型的な格助詞である(a)があり、もう一方にはとりたて助詞とっていい(d)があり、そのあいだに中間的な(b)や(c)があるというみかたをする。

(2)

| | 助詞の種類 | 主格 | 排他 | 例 |
|-----|----------|----|-------|---------------|
| (a) | 格助詞 | ○ | × | 富士山が見えるよ。 |
| (b) | (格助詞) | ○ | ○(弱い) | 君が主役だ。 |
| (c) | (とりたて助詞) | ○ | ○(強い) | 大阪のほうかにぎやかだ。 |
| (d) | とりたて助詞 | × | ○(強い) | 神戸のほうがいい店がある。 |

(a)は、主格を表すだけで排他的な意味をもたないものである。(b)は、主格を表すと

¹¹ 青木倫子(1992:p.401-p.409)は、構造本質説だと思われるが、複合説に近いようにもみえる。

ともに弱い排他的な意味を表すものである。¹⁵ (c)は、主格を表すとともに強い排他的な意味を表すものである。¹⁶ (d)は、主格を表す働きがなく、排他的な意味だけを表すものである。

このうち、(a)は典型的な格助詞である。反対に、(d)は、第7章第1節の2.で「排他専用」とよんだように、特定の格は表さず、排他的な意味を表すだけであるため、とりたて助詞だといえる。(b)と(c)は中間的なものだが、ここでは、とりあえず、(b)を格助詞、(c)をとりたて助詞としておこう。

前の2.では、「は」がもつ主題の用法と対比の用法の関係にたいして、どちらかの用法を基本に考えるのではない複合説を提案した。しかし、「が」がもつ2つの用法にたいしては、そうした考えはとらない。「が」の場合は、主格を表す用法が中心で、排他を表す用法は派生的なものだと考えたい。

それは、排他を表す用法がまだ十分には発達していないと考えるからである。排他を表す「が」は、第8章第2節の2.でみたように、主格的な性質をもっていない成分、たとえば「～を」にはつかない。つまり、排他の「が」は、とりたて助詞といっても、「も」や「さえ」などほかのとりたて助詞とは違って、まだ主格の性質を引きずっているのである。

なお、一般に格助詞といわれるもののなかで、とりたての機能をもつのは、「が」だけである。三上章(1963:p.199)や吉本啓(1982:p.9-p.10)は、「ぜひ私にやらせてください。」のような例をあげて、ほかの格助詞にも排他的な用法があるという。しかし、「に」などが排他的になるのは、強く発音するといった音調によるものである。「に」など、「が」以外の格助詞は、「神戸のほうがいい店がある。」のようにほかの格を排他的にとりたてる機能はもっていない。

4. 主題ととりたて——「は」と「が」の対立の二面性——

ここで、「は」と「が」の対立について、もう一度、整理しておこう。

¹⁵ 「弱い排他」というのは、第7章第1節の3.で述べたように、ほかの候補と比較したことがはっきり感じられず、ただ漠然と、ほかのものは排除して1つを選んだと感ぜられるものである

¹⁶ 「強い排他」というのは、第7章第1節の3.で述べたように、「～のほうが……」や「～がいちばん……」などの形をしていて、2つ以上の候補を比較して1つを排他的に選んだことがはっきり感じられるものである

「は」と「が」の対立は、基本的には、次の1)の対立と、2)の対立という二面性をもっていると考えられる。

1) 主題の対立——主題の「は」と非主題の「が」

2) とりたての対立——対比の「は」と排他的「が」

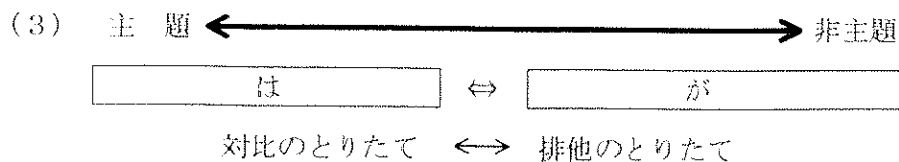
1)の「主題の対立」というのは、「は」が主題であることを表すのにたいして、「が」は主題でないことを表すという対立である。この主題の対立は、「は」と「が」の対立だけではなく、「は」と「を」の対立や、「には」と「に」の対立にも、同じようにみられる。

さらにいえば、この主題の対立は、「は」以外でも、主題を表す「なら」や「って」などと、主題を表さない「が」や「を」などとの対立にもみられるものである。¹⁷

一方、2)の「とりたての対立」というのは、「は」が対比を表し、「が」が排他を表すという対立である。このとりたての対立は、主題と非主題の対立とは違って、2つのどちらかを選ぶというものではない。「も」や「さえ」などほかのいろいろなとりたて助詞や、とりたて助詞がなにもつかないものなかからどれかを選ぶというものである。

このように、「は」と「が」の対立には、主題の対立と、とりたての対立の二面性があるが、この2つの対立はたがいに関係がある。第8章第1節の6.で述べたように、対比の「は」は、基本的に主題としての性質をもっており、排他的「が」は、基本的に非主題としての性質をもっているからである。

こうした関係を図で示すと、次の(3)のようになる。この図で示したいのは、次のようなことである。「は」と「が」の対立には、主題と非主題という、文全体にかかわる構造的で大きな対立があり、それに関連して、とりたてという、文の一部にかかわる意味的で小さな対立があるということである。



ここで重要なのは、(3)の左側は「は」という積極的な標識をつけた「有標」の形式であるのにたいして、右側は積極的な標識がないため、結果的に格を表す「が」などがそのまま現れた「無標」の形式だということである。

¹⁷ 「も」と「が」などの対立は、基本的に、主題の対立ではないと考える。松下大三郎(1930:p. 336-p. 339)などは「も」も「題目」を表すとしているが、佐治圭三(1975)があきらかにしているように、「も」そのものは主題を表さないからである。

このような視点でこれまでの研究をふりかえると、山田孝雄(1936:第二十章)のように、係助詞と格助詞といった「は」と「が」の文法的な性質の違いを強調するものは、有標と無標の違いを重視したものだといえる。一方、久野暉(1973:第25章)のように、旧情報と新情報といった「は」と「が」の機能の違いを強調するものは、有標と無標の違いより、(3)の図に示した機能面での左右の対立を重視したものだといえる。

5. 判断の主題と関連の主題——主題の二面性——

「は」が表す主題については、これまで、「なにかについて述べるときのそのなにか」といった説明がされてきた。たとえば、三上章(1970:p. 56)は、「Topic-Comment (主題—説明)」を次の(4)のように定義している。

- (4) 平叙文のかなりの部分は、あるモノ (something) について、あるコト (something) を述べている。このあるモノを topic と言い、残りの部分を comment と言う。

しかし、このような抽象的な定義ではなく、もうすこし具体的に主題をみていくと、主題には次の1)と2)の2つの面があることがわかる。

- 1) 判断の主題——そのとき以外のことも考えた判断の対象を表す
- 2) 関連の主題——前の文脈や話の場面と関連があることを表す

1) の判断の主題というのは、その事態がそのときだけでなく、ほかの時間にもおきることを考えたうえでの判断を表す文で、かならず使われるものである。もうすこし具体的にいうと、恒常的な状態を表す名詞や形容詞が述語になっている文や、くりかえしおきる動作やできごとを表す動詞が述語になっている文の主題である。¹⁸

たとえば、次の(5)で「蘭島海岸」は、文章の中ではじめてでてきたものなのに主題になっているが、これは、判断の主題だからである。

- (5) 蘭島海岸は北海道の西部、日本海に面した海水浴場である。

(渡辺淳一『白い宴』p. 3)

一方、2) の関連の主題というのは、文章や談話の中での文と文のつながりや、文と話の場面とのつながりをよくするために使われるものである。もうすこし具体的にいうと、前の文脈にでてきたものや話の現場にあるもの、いつでも聞き手の意識の中にあるものな

¹⁸ 益岡隆志(1987:第1章)は、このような文を、「事象叙述文」と対立させて「属性叙述文」とよぶ。

どが主題になるときの主題である。

たとえば、次の(6)の最後の文は、判断がない、その場かぎりの知覚を表す文なのに「萃」が主題になっているが、これは関連の主題だからである。

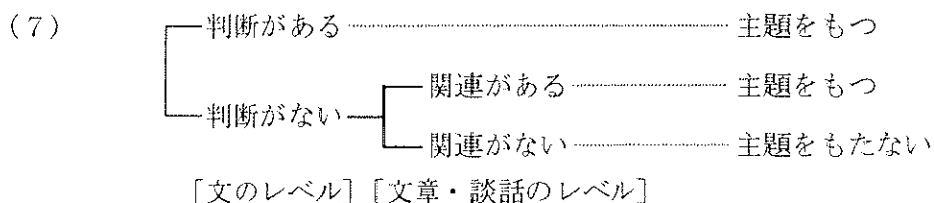
(6) 街はずれの川原の土手に座って、萃と2人でパンを食べていた。

「真夏ももう終わりね。」

萃は言った。

(吉本ばなな『N・P』p.135)

このように、主題には判断の主題と関連の主題があるが、この2つはレベルの違うものである。判断の主題は文のレベルのものであり、関連の主題は文章・談話のレベルのものである。そして、この2つでは、判断の主題のほうが優先すると考えられる。それを図にすると、次の(7)のようになる。



文のレベルで、そのとき以外のことも考えた判断があるときは、主題をもつ文になる。そうした判断がなく、その場かぎりの知覚を表すときは、文のレベルでは決まらない。文章・談話のレベルにあって、関連があるときは主題をもつ文になり、関連がないときは主題をもたない文になる。¹⁹

なお、これまでの研究では、判断の主題と関連の主題の区別は強調されてこなかった。²⁰ただ、これまでも、判断の主題と関連の主題のそれぞれについては、問題にされてきた。

ここでいう「判断の主題」を問題にしていると考えられる研究としては、佐久間鼎(1941:第七章三,第八章一,二)や三尾砂(1948:五), 森重敏(1965: p. 203-p. 206), Kuroda(1972)などがあげられる。佐久間は「物語り文」と対立させた「品さだめ文」によって、三尾は「現象文」と対立させた「判断文」によって、森重は「現実性の判断」と対立させた「観念性の判断」によって、Kurodaは「thetic judgment」と対立させた「categorical judgment」によって、「は」が使われる文を説明している。

¹⁹ こうした関係は、基本的に益岡隆志(1987:p. 25, p. 41)で述べられている

²⁰ 永野賢(1986:p. 137-p. 138)の「判断文⊖」と「判断文⊕」の区別が、関係の深いものとしてあげられるぐらいである

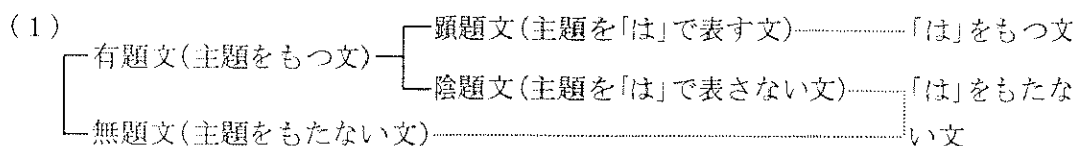
結 論

1. 構造的な主題研究と機能的な主題研究

本論文では、第1章で、従来の主題研究を整理し、本論文でおこなう主題研究の方法を提示した。その基本的な方針は、主題研究を、構造的なもの機能的なものにわけて考えるということだった。

構造的な主題研究というのは、たとえば、「象は鼻が長い。」という文はどんな構造をもっているのか、それは「魚は鯛がいい。」という文の構造と同じかといった問題を扱うものである。

本論文では、構造的な主題研究の観点から文を次の(1)のように分類した。



これは、主題をもつ有題文と主題をもたない無題文にわけ、さらに有題文を、主題を「は」で表す顕題文と、主題を「は」で表さない陰題文にわけるという分類である。顕題文というのは、主題の「父」が「は」で表されている次の(2)のような文、陰題文は、主題の「主役」が「は」で表されていない、その次の(3)のような文、無題文は、主題をもたない、次の3つめの(4)のような文である。

(2) 父はこの本を買ってくれた。

(3) 君が主役だ。

(4) 富士山が見えるよ。

第2章の第1節から第7節では、顕題文を、文の中のどのような成分が主題になっているかによって7種類に分類し、それぞれの構造をあきらかにしたが、それについては、次の2.で述べる。また、第3章の第1節では無題文の構造を考え、第4章の第1節では陰

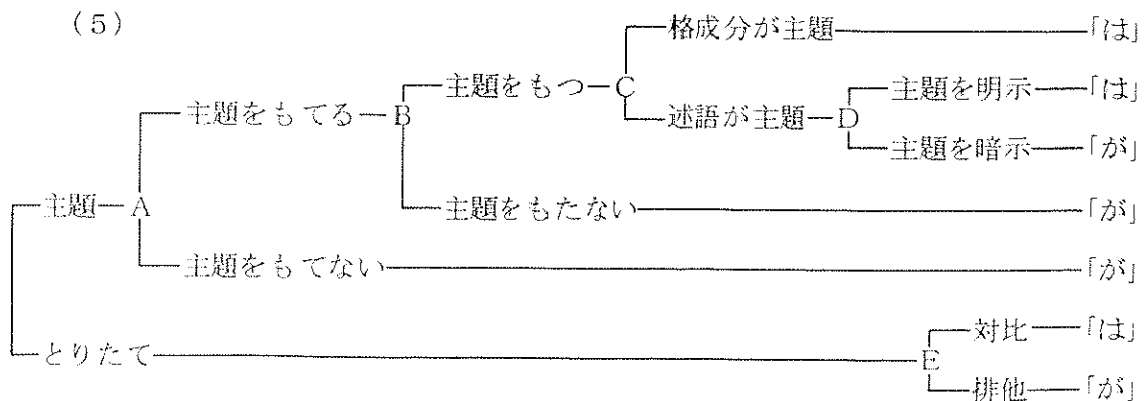
題文の構造を考えたが、それについては、そのあとの3.で述べる。

一方、機能的な主題研究というのは、たとえば、文の主題に選ばれるのはどのような名詞なのかとか、主題をもつ文は文章・談話の中でどのような機能をはたすのかといった問題を扱うものである。

本論文では、機能的な研究のもっとも重要な課題として、主題と非主題の選択がどのようにおこなわれるのかという問題を取りあげ、それを次のA) からE) の5つの原理によって説明することにした。

- A) 主題をもてるかどうかの原理 —— 主題が現れる文と、主題が現れない節の区別
- B) 主題をもつかどうかの原理 —— 有題文と無題文の選択
- C) 何を主題にするかの原理 —— 有題文の中での主題の選択
- D) 主題を明示するかどうかの原理 —— 顕題文と陰題文の選択
- E) どうとりたてるかの原理 —— 対比の「は」と排他的「が」の選択

そして、この5つの原理が適用される優先順序を、次の(5)のように体系づけた。つまり、前のA) からE) の5つの原理は、それぞれ、この図のAからEの分岐点で働くとしたのである。



A) の「主題をもてるかどうかの原理」は第5章でみたが、これについては、あとの4.で述べる。B) の「主題をもつかどうかの原理」は第3章第2節でみたが、これについては、あとの5.で述べる。C) の「何を主題にするかの原理」は第2章第2節でみたが、これについては、あとの6.で述べる。D) の「主題を明示するかどうかの原理」は第4章第2節でみたが、これについては、あとの7.で述べる。E) の「どうとりたてるかの原理」は第7章と第8章でみたが、これについては、あとの8.と9.で述べる。

2. 顕題文の構造

本論文の第2章第1節から第7節では、どんな成分が主題になるかによって、顕題文を次の1)から7)の7種類に分類した。

- 1) 格成分主題文 ————— 「父はこの本を買ってくれた。」のような文
- 2) 格成分連体部主題文 —— 「象は鼻が長い。」のような文
- 3) 述語連体部主題文 —— 「かき料理は広島が本場だ。」のような文
- 4) 被修飾名詞主題文 —— 「辞書は新しいのがいい。」のような文
- 5) 従属節内成分主題文 —— 「この問題はとくのがむずかしい。」のような文
- 6) 述語主題文 ————— 「花が咲くのは7月ごろだ。」のような文
- 7) 破格主題文 ————— 「このにおいはガスが漏れてるよ。」のような文

1)の「格成分主題文」は、「～が」や「～を」、「～に」のような格成分が主題になっている文で、7種類の顕題文のなかで、もっともよくみられるものである。格成分のなかでも、「沢田が」のように、基本語順で前のほうにあり、その名詞を特定の個体としてとらえやすいものは主題になりやすく、結果を表す「駐車場に(なる)」や手段を表す「船で」のように、基本語順で後ろのほうにあり、その名詞を特定の個体としてとらえにくいものは主題になりにくいことを指摘した。

2)の「格成分連体部主題文」は、格成分の連体修飾部が主題になっている文である。このタイプの文は、典型的には、次の(6)のような構造をもっている。そして、「鼻が長い」の部分で、主題である「象」の性質や属性を述べる。

(6) 象は 鼻が 長い。

—— 典型的には、形容詞など性質や状態を表すもの
 —— 典型的には、部分や側面を表す名詞や、動作名詞

3)の「述語連体部主題文」は、述語名詞の連体修飾部が主題になっている文である。このタイプの文は、典型的には、次の(7)のような構造をもっている。そして、「広島が」の部分がいちばん主張したいところであり、「が」が排他的な意味をもつ。

(7) かき料理は 広島が 本場だ。

—— 「特徴」、「中心」、「原因」、「目的」など、「かき料理」の部分にとって重要な側面を表す名詞
 —— 「かき料理の本場」の部分にあたるものが何かを表す名詞

4) の「被修飾名詞主題文」は、連体修飾部がついている名詞から、名詞だけが主題になったと考えられる文である。このタイプの文については、選択型と並列型にわけた。

選択型は、典型的には、次の(8)のような構造をもっている。そして、「辞書」の中から「新しい辞書」を「いい」ものとして選ぶという働きをする。

- (8) 辞書は 新しいのが いい。
- 「辞書」の種類を表す名詞
- 典型的には、「いい」などの形容詞

一方、並列型は、次の(9)のような構造をもっている。そして、「値段」を言うのに、「Lサイズ(の値段)」と「Sサイズ(の値段)」にわけて言う働きをする。

- (9) 値段は Lサイズが 500 円， Sサイズが 300 円だ。
- 「値段」の種類を表す名詞
- 典型的には、数値などの名詞

5) の「従属節内成分主題文」は、従属節の中にある成分が主題になっている文である。このタイプの文については、次の(10)のような主題分離型と、その次の(11)のような述部結合型にわけた。

- (10) 換気扇は 掃除するのがたいへんだ。
- 主題について叙述する働き

- (11) 台風は [四国に上陸する可能性が高い]。
- モダリティを表すような働き

6) の「述語主題文」は、述語を含む節が主題になっている文で、「分裂文」とか「強調構文」とよばれることがある文である。このタイプの文は、典型的には、次の(12)のような構造をもっている。そして、「7月ごろ」の部分がいちばん主張したいところになる。

- (12) 花が 咲くのは 7月ごろ だ。
- 理由の成分、時の成分、「が」格成分などのうちの1つ

7) の「破格主題文」は、ここまでの6種類に入らない、やや特殊な主題をもった文である。本論文では、破格主題文を、どうして破格になったかという観点から、次の(13)のような過剰型、その次の(14)のような不足型、3つめの(15)のような漠然型にわけた。

- (13) お問い合わせは、本社営業部までお問い合わせください。
- (14) 新聞は小銭をご用意ください。
- (15) 作り方は、材料を弱火で1時間ほど煮込みます。

3. 無題文と陰題文の構造

第3章第1節と第4章第1節では、それぞれ、無題文と陰題文の構造を考えた。

無題文と陰題文は、どちらも主題の「～は」をもたず、主格が「～が」で表される文である。そのような構造をもつのは、格関係のレベルの構造がそのまま現れているからだと考えられる。たとえば、次の(16)は無題文であるが、この文の構造は、格関係を表すレベルの構造であるその次の(17)と基本的に同じである。

(16) 富士山が 見えるよ。

(17) 富士山が 見える (こと)

また、次の(18)は陰題文であるが、この文の構造も、格関係を表すレベルの構造であるその次の(19)と基本的に同じである。

(18) 君が 主役だ。

(19) 君が 主役 (であること)

無題文と陰題文にはこのような共通点があるため、この2つは区別しないで扱われることもある。しかし、本論文では、それぞれの構造や機能にかなり大きな違いがあることや、ここでいう陰題文は、顕題文と共通する性質をもっていることから、それぞれを別の種類の文とした。

無題文と陰題文の構造や機能の違いというのは、次のようなことである。無題文は、典型的には、次の(20)のような構造をもっている。そして、できごとを表し、文章・談話の中では、話題の導入や転換に使われる。

(20) 富士山が 見えるよ。

もつとも典型的には、自動詞や、他動詞の受動形

もつとも典型的には、それまでの文脈に現れていない名詞

それにたいして、陰題文は、典型的には、次の(21)のような構造をもっている。そして、主題になっている述語の「主役」について、それにあてはまるものが主格の「君」であることを主張する働きをする。

(21) 君が 主役だ。

もつとも典型的には、名詞+「だ」、動詞+「のだ」

もつとも典型的には、「これ」、「私」、「だれ」など

一方、陰題文と顕題文が、ともに有題文として、似た性質をもっているというのは、た

たとえば、次の(22)の陰題文と、その次の(23)の顕題文がほとんどおなじ意味になることである。

(22) 君が主役だ。

(23) 主役は君だ。

このような違いから、無題文と、有題文の一種である陰題文を区別した。

4. 複文の中の主題

第5章では、複文の中の主題について考察した。主題というのは、基本的には、文全体にとってのものであり、従属節の中には従属節独自の主題は現れないことをあきらかにした。ただ、従属節といってもいろいろなものがあるので、本論文では、次の(24)のように、従属節を大きく4つに分類した。そして、基本的に主題は強い従属節の中には現れないという結論をだした。

(24)

| 種 類 | 代 表 例 | 節の内部に「が」 | 節の内部に「は」 |
|-------|----------|----------|----------|
| 従 属 句 | ～ながら、～まま | × | × |
| 強い従属節 | ～たら、～とき | ○ | × |
| 弱い従属節 | ～けれど、～が | ○ | ○ |
| 引 用 節 | ～と | ○ | ○ |

強い従属節では「～は」が使えないため、次の(25)のように、主格には「～が」が使われることになる

(25) 捜査員が「誘拐犯じゃろ」と聞くと、容疑者は素直に認めた。

本論文では、このほか、従属節ではないが従属節と同じような性質をもった文に注目し、そのような「従属的な文」でも主題が現れないことをあきらかにした。たとえば、次の(26)の「あいつが」やその次の(27)の「客への対応が」が主題の「～は」にならないことを、強い従属節に相当する従属的な文だからということの説明した。

(26) 金が下ろせなかった。[あいつが]モタモタしていたからだ。

(27) [客への対応が]いつも変わらない。それがこの店の特徴だ。

このような分類、つまり、主題が現れることがある文や従属節と、主題が現れることがない文や従属節を分類することは、構造的な主題研究であると同時に、機能的な主題研究の第一段階にもなっている。というのは、主題と非主題の選択という観点からすると、主題が現れることがない文や従属節の中では、非主題が選択されることが決まるからである。

一方、主題が現れることがある文や従属節の中では、主題も非主題も選択される可能性があるので、この段階では決定できず、次の「5. 無題文と有題文の選択」に進むことになる。

5. 無題文と有題文の選択

前の4. でみたように、強い従属節は主題をもつことができなかつたが、単文や、複文の主文は、主題をもたない、次の(28)のような無題文になることもあるし、主題をもつ、その次の(29)のような有題文になることもある。

(28) あれ、時計が止まっている。

(29) 私は毎朝シャワーをあびます。

無題文になるか有題文になるかの条件は第3章第2節で述べたが、それは一言でいうと、事態をその場で観察したできごととしてとらえるかどうかによる。そうとらえれば無題文になり、そうでなければ有題文になる。

それをもっと客観的に示すために、ここでは、無題文のなかでもっとも典型的なものの特徴と、有題文のなかでもっとも典型的なものの特徴を、次の表(30)にまとめておく。

(30)

| | 無 題 文 | 有 題 文 |
|------|---|--|
| 述 語 | その場で知覚できる 一時的、一回かぎりの事態 できごとを表す自動詞 | その場で知覚できない 恒常的、くりかえしの事態 意志的な動作を表す他動詞 |
| 主格名詞 | 不定名詞 話の現場や文脈にない名詞 | 疑問語 話の現場や文脈にある名詞 |
| 文の機能 | 意外なできごとの発生を表す | なにかについて説明する |
| 語 順 | 他の格成分－主格－述語 | 主格－他の格成分－述語 |
| 談話の中 | 話題を設定したり転換する | 話題を継続する |

たとえば、典型的な無題文である次の(31)と、典型的な有題文である(32)を比べると、次のような違いがある。

(31) きゆう湯の川温泉の旅館で大きな火事があった。

(32) 火事の原因は、宿泊客のたばこの火の不始末らしい。

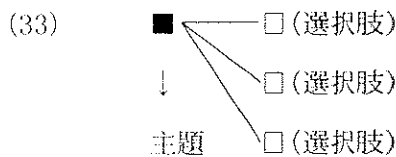
述語は、(31)ができごとを表す自動詞「ある」なのにたいして、(32)は名詞述語の「不始末だ」になっている。主格名詞は、(31)が文脈にはじめてでてくる「大きな火事」なのにたいして、(32)は前の文脈にでてくる「火事」に関係のある「火事の原因」になっ

る。事態の予想については、(31)が意外な事態なのに対して、(32)は予想しやすいものである。談話の中での機能は、(31)が談話の最初などに現れ、話題を設定したり転換するのにたいして、(32)は談話の途中に現れ、話題を継続する。

この段階で無題文のほうが選択されれば、その文の形は一つに決まる。しかし、有題文が選択されると、その文の形は一つには決まらない。文の中のどの成分が主題になるかによって、文の形が違って来るからである。そのため、この段階で有題文が選択された場合は、次の「6. 主題の選択」に進むことになる。

6. 主題の選択

前の5.では、無題文と有題文の選択の条件を示した。有題文が選択されたときには、次に、何が主題になるかという選択が必要になる。これについては、第2章第8節で述べたが、基本的には、次の(33)に図示したように、選択肢がないものが主題になり、選択肢があるものが伝えたいことになる。



たとえば、次の(34)の質問文は、「八木沢さん」について、「事件のことをうちで話す」という選択肢と、「話さない」という選択肢のどちらであるかを質問していると考えられる。このようなときは、「八木沢さん」が主題になり、「事件のことをうちで話すかい」が伝えたいことになる。

(34) 「八木沢さんは、事件のことをうちで話すかい？」

「ええ。ときどき」 (宮部みゆき『東京下町殺人暮色』p. 137)

主題の選択の条件をもっと客観的に示すために、主題になりやすいものと、伝えたいことになりやすいものを、レベル別にまとめると、次の表(35)のようになる。

(35)

| | | 主 題 | 伝えたいこと |
|-----------|---------------|---------------|---------|
| 単語のレベル | | | 疑問語 |
| 文のレベル | 名 詞 文 | 「特徴」, 「原因」 など | その内容 |
| | | 「高さ」, 「色」 など | その数量や種類 |
| | | 「～というもの」 | その説明 |
| | 形容詞文 動 詞 文 | 基本語順で前にある格成分 | |
| 文章・談話のレベル | | 現場や文脈と関係のある名詞 | |

さらに、本論文では、第6章の第1節と第2節で、文章・談話のレベルでどのような名詞が主題になりやすいかを、文章・談話の種類別に考察した。そして、文章・談話の冒頭文では、次の(36)のような名詞が主題になりやすく、非冒頭文では、その次の(37)のような名詞が主題になりやすいという結論をえた。

(36) 冒頭文で主題になりやすい名詞

| | | | |
|----------|-----------|-------------|-------------|
| 日常の談話 | 話の現場にあるもの | 聞き手の意識にあるもの | 聞き手の意識にないもの |
| 報道の文章・談話 | | | |
| 説明の文章・談話 | | | |
| 物語の文章 | | | |

(37) 非冒頭文で主題になりやすい名詞

| | | |
|----------|---------------|------------------------|
| 日常の談話 | 前にでてきたものを指す名詞 | 前にでてきたものとの関係のあるものを指す名詞 |
| 物語の文章 | | |
| 報道の文章・談話 | | |
| 説明の文章・談話 | | |

この段階で、格成分の中の名詞が主題に選ばれば、その主題は「～は」の形になるだけなので、文の形は一つに決まる。たとえば、次の(38)で「君」が主題に選ばれると、その次の(39)のような文になる。

(38) 君が主役（であること）

主題

(39) 君は主役だ。

しかし、述語の中の名詞が主題に選ばれると、文の形は一つには決まらない。「は」を使って主題を表す顕題文にするか、「は」を使わないで主題を表す陰題文にするかの選択があるからである。その選択については、次の「7. 顕題文と陰題文の選択」で述べる。

7. 顕題文と陰題文の選択

前の6. では、有題文の中で何が主題になるかという条件を示した。このとき格成分の名詞が主題になれば、文の形は一つに決まるが、述語の名詞が主題になると、その主題を「は」を使って明示して顕題文にするか、「は」を使わないで暗示して陰題文にするかという選択が必要になる。

たとえば、次の(40)で、述語名詞の「主役」が主題に選ばれた場合、2つの選択肢がある。一つは、その次の(41)のように、主題である述語に「は」がつけて文頭におき、顕題

文にする選択である。もう1つは、その次の(42)のように、「は」をつけず、もとの(40)の形をそのまま残して、陰題文にする選択である。

(40) 君が主役 (であること)

主題

(41) 主役は君だ。

(42) 君が主役だ。

この選択はかなり微妙な問題であり、顕題文か陰題文のどちらか一方でなければならないというようなケースは少ない。ただ、一般的な傾向としては、次の(43)に示したように、名詞文と動詞文では顕題文が使われることが多く、形容詞文では陰題文が使われることが多いといえる。

(43)

| | | |
|-------|---------------|-------------|
| 名 詞 文 | 火事の原因は漏電だ。 | 漏電が火事の原因だ。 |
| 形容詞文 | いちばんいいのはダイヤだ。 | ダイヤがいちばんいい。 |
| 動 詞 文 | そう言ったのは山田だ。 | 山田がそう言ったのだ。 |

また、「これ」や「私」のように現場や文脈にあるものを指す名詞や、「だれ」や「どれ」のような疑問語は、文頭にたつ主格名詞になりやすいため、次の(44)のような文のほうがその次の(45)のような文よりよく使われるという傾向がある。

(44) これがそばの実です。

(45) そばの実はこれです。

これは、次のような理由によると考えられる。現場や文脈にあるものを指す名詞があるときは、その名詞と現場や前の文脈との関係づけを早くおこなったほうがよい。また、疑問語があるときは、その文が質問文であることを早く聞き手に知らせたほうがよい。そのために、そのような名詞や疑問語が文の最初のほうにくる陰題文が選ばれやすいのである。

8. 対比の「は」

ここまでみてきた「は」は主題を表すものだったが、「は」には主題を表す働きが弱く、対比的な意味を表す働きが強いものがある。本論文では、第7章で、対比を表す「は」をとりあげ、次のような結論をえた。

はじめに、主題を表す「は」と対比を表す「は」の関係については、主題を表すと同時に対比を表すものがあることを重視し、次の(46)と(47)のようにまとめた。

- 主題の「は」
- (16) 私は肉は好きだが、魚は好きではない。
- 対比専用の「は」
- (17) 兄は肉が好きだが、弟は魚が好きだ。
- 主題と対比兼用の「は」

そして、対比を、次の(48)のように対比の相手が明示されている明示的対比と、その次の(49)のように対比の相手が明示されていない暗示的な対比にわけて考察した。

- (48) 私は肉は好きだが、魚は好きではない。
- (49) 私は肉は好きだ。

明示的対比では、次の(50)のように、対比される部分が構造的に対立している文では、対比専用の「は」が必要であることを指摘した。

- 「が」、「けれど」など
- (50) 私は 肉は 好きだ が、 魚は 好きではない。

..... 同類の名詞・
..... 述語が肯定と否定で対立

そして、明示的対比を表す対比専用の「は」は、次の(51)のように、対比される部分の中のもっとも大きな切れめに入り、その次の(52)のようになると考えた。

- (51) 天気がハ いいけど、 風がハ 冷たい。
..... は は
- (52) 天気(は)いいけど、風は冷たい。

一方、暗示的な対比では、「は」が対比的な意味になりやすい条件を考察し、次の(53)のア)からウ)の条件がそろうほど、「は」は対比の意味をもちやすいことを指摘した。

- ア) 述語の近くにある
..... イ) 基本語順で述語の近くにある成分である
- (53) 子供たちは 食器は 持ってきた。
- ウ) 対になる名詞が思いつきやすい

暗示的対比に関連して、否定文に現れる「は」についても考察した。否定文では、次の(54)のように、暗示的対比を表す「は」が使われることが多いが、否定文でもその次の(55)や(56)のように、[]内の結びつきが強い場合には「は」が使われないことがあることをあきらかにした。

- (54) 子供たちは おやつは 食べなかった。
- (55) ホタルが [いない]。

(56) 若い女はほとんど[目をきか]なかった。

さらに、「は」によって対比を表せる成分についても考察をおこない、対比の「は」がつく成分とつかない成分を次の表(57)のようにまとめた。このように、述語との結びつきが強すぎる成分も「は」がつかないし、弱すぎる成分も「は」がつかないことがあきらかになった。

| (57) | 「は」がつかない | 「は」がつく | 「は」がつかない |
|-------|------------------------------|-------------|----------|
| 格成分 | 「電車で」 | 「寄付を」 | 「かげで」 |
| 副詞的成分 | 「そっと」 | 「きのう」 | 「きつと」 |
| 従属節 | 「～ながら」 | 「～たら」、「～とき」 | 「～けれど」 |
| | 強い ←————— 述語との結びつき —————→ 弱い | | |

8. 排他の「が」

主題を表す「は」にたいして、「が」などの格助詞は非主題を表すものであるが、「が」のなかには、主格を表す働きが弱く、排他的な意味を表す働きが強いものがある。本論文では、第8章で、排他を表す「が」をとりあげ、次のような結論をえた。

はじめに、主格を表す「が」と排他を表す「が」の関係については、主格を表すと同時に排他を表すものだけでなく、主格を表さず排他だけを表す「が」があることを重視し、次の(58)と(59)のようにまとめた。

- (58) 大阪より 神戸のほう が いい店 が ある。
主格の「が」
- (59) 大阪のほう が にぎやか だ。
排他専用の「が」
- 主格と排他兼用の「が」

次に、「が」が排他的意味をもつときの条件を、強い排他を表す場合と、弱い排他を表す場合にわけて検討した。強い排他を表す「が」が使われるのは、次の(60)のように、「～のほうが……」や「～がいちばん……」の形で、2つ以上の候補から選択するときである。そして、このときの排他の「が」は、次の(60)の「神戸のほうが」が場所を表す「～に」の格であるように、主格でなくてもよいことをあきらかにした。

(60) 大阪より 神戸のほう が いい店 が ある。

一方、弱い排他を表す「が」は、これまで「総記」とよばれてきたものである。基本的に、次の(61)のような恒常的な状態を表す文で使われ、「君だけが主役だ」ということを暗示するものである。

(61) 君 が 主役 だ。

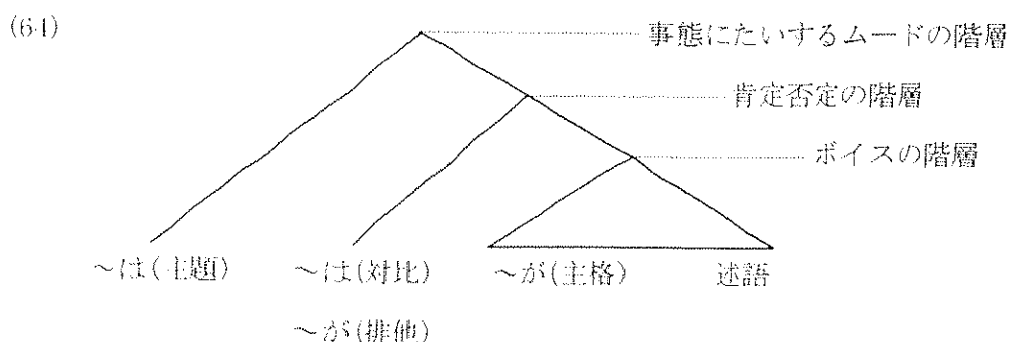
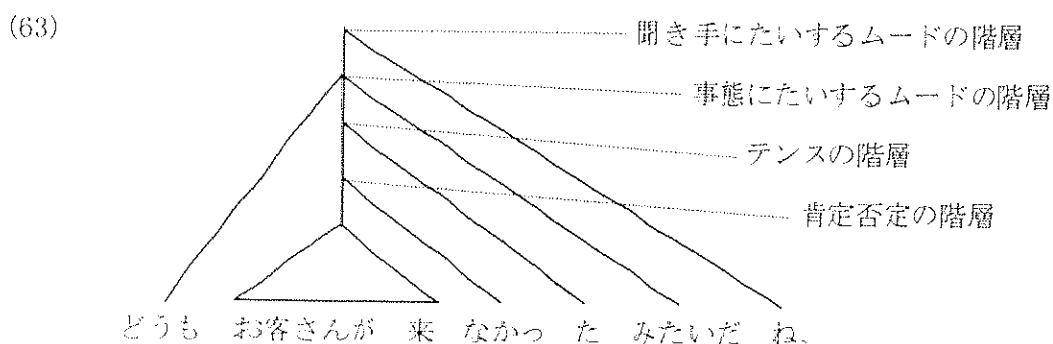
さらに、「が」によって排他を表せる成分についても考察をおこない、排他の「が」がつく成分とつかない成分を次の表(62)のようにまとめた。述語との結びつきが強すぎる成分も「が」がつかないし、弱すぎる成分も「が」がつかないことがあきらかになった。

| | | | |
|-------|-----------------------------|--------------|----------|
| (62) | 「が」がつかない | 「が」がつく | 「が」がつかない |
| 格成分 | 「～に(なる)」 | 「～に(ある)」 | |
| 副詞的成分 | 「はっきりと」 | 「今」 | 「きっと」 |
| 従属節 | 「～て」 | 「～たら」, 「～とき」 | 「～けれど」 |
| | 強い ←———— 述語との結びつき —————→ 弱い | | |

10. 主題の文法理論

第9章では、文法理論の中での主題の位置づけを明確にし、本論文で扱ってきた内容を体系化するために、構造と機能の両面から主題についての文法理論を提示した。

はじめに、次のような(63)のような階層構造のモデルの中に、主題の「は」、対比の「は」、排他の「が」、主格の「が」を、それぞれ、その次の(64)のように位置づけた。



次に、文の生成という観点から、主題の「～は」と排他の「～が」の生成方法を検討した。主題の「～は」については複写説を採用し、基底の(65)から主題の成分を文頭に複写し、「は」をつけて、(66)にするという方法をとった。

(65) 父が この本を 買ってくれた(こと)

主題

(66) この本をは [父が ~~この本を~~ 買ってくれた]。

本論文では、生成文法で盛んに議論されてきた「魚は鯛がいい。」という文も、「辞書は新しいのがいい。」のような被修飾名詞主題文だとして、題文をすべて統一的に生成するようにした。

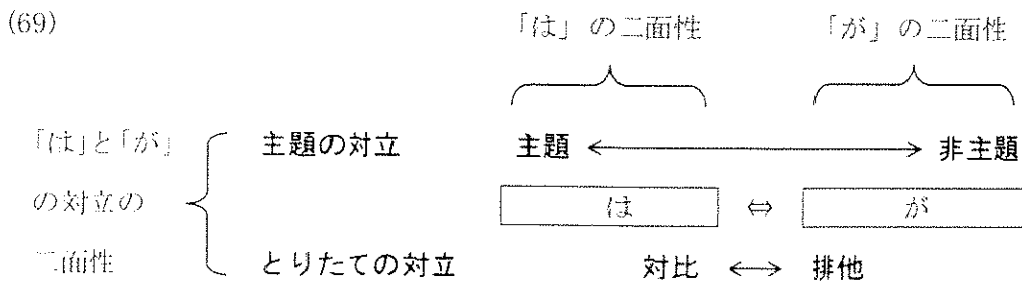
排他の「～が」については移動説を採用し、基底の(67)から排他の成分を文頭に移動し、「が」をつけて、(68)にするという方法をとった。

(67) 神戸に いい店が ある (こと)

排他

(68) 神戸のほうが いい店が ある。

最後に、機能的な面から、「は」にも、「が」にも、「は」と「が」の対立にも、それぞれ二面性があるというとらえかたをした。つまり、「は」には、主題を表す機能と対比を表す機能の二面性があり、「が」には主格を表す機能と排他を表す機能の二面性がある。また、「は」と「が」の対立には、主題・非主題という主題の対立と、対比・排他というとりたての対立の二面性があるというとらえかたである。そして、それを次の(69)のように図示した。



さらに、主題にも、文のレベルで判断の対象を表す「判断の主題」と、文章・談話のレベルで文脈や場面との関連を表す「関連の主題」という二面性があるというとらえかたをした。次の(70)の「蘭島海岸」は判断の主題の例、その次の(71)の2つめの文の「姉」は関連の主題の例である。

(70) 蘭島海岸は日本海に面した海水浴場である。

(71) 姉と2人でパンを食べていた。姉は「真夏も終わりね」と言った。

11. 今後の課題

本論文では、日本語の主題を表す「～は」と、主題でないことを表す「～が」、そして、

それらと関係が深い対比を表す「～は」と排他を表す「～が」をとりあげ、構造と機能の両面から、日本語の主題とそれに関連する問題を解明してきた。

ただ、その周辺の領域には、本論文でほとんど扱わなかった重要な問題がたくさんある。そのなかから、今後の課題としてとくに重要なものを5つあげておきたい。

- 1) 「～は」以外の主題を表す形式
- 2) 文章・談話や文体との関係
- 3) 話しことばや方言、過去の日本語との対照
- 4) ほかの言語との対照
- 5) とりたてを表すいろいろな形式

1) の、「は」以外の主題を表す形式というのは、「って」や「なら」のようなものである。「は」以外の形式は、話しことばに使われるものが多いこともあって、まだあまり研究が進んでいないが、「は」との違いも含めて、これから研究していかなければならないテーマである。また、次の(72)の最初の文のように主題が表される場合と、2つめの文のように主題が省略されて表面には現れない場合の違いについても、文章・談話のレベルの問題として詳しく研究していく必要がある。

(72) ここは、碓氷峠です。..... ϕ群馬県と長野県の県境になります。

そのような研究によって、日本語の主題の全体像をより明確にすることができると考える。

2) の、文章・談話や文体との関係は、本論文の第6章でもすこし扱ったが、さらに詳しく研究していく必要がある。文章・談話の中で、文の主題がどうつながり、話題がどう展開していくのかという分析である。また、主題のたてかたは、文章・談話の種類によってもかわってくるので、文体による違いをさらに研究する必要がある。

主題は、文法事項の中でも文章・談話のレベルと関係が深いものなので、こうした研究は、主題研究にとって非常に重要である。それは、同時に、文章・談話の研究のレベルを高めていくことにもなると思われる。

3) は、現代の東京方言をベースにした書きことばにみられる文の主題だけでなく、話しことばや方言、過去の日本語にみられる文の主題のさまざまな現れかたを調査し、本論文での結論と対照させていくという課題である。

こうした調査研究を積み重ねていくことによって、文の主題の本質がさらにあきらかになると同時に、現代語・東京方言・書きことばにみられる主題の特殊性もみえてくると思

われる。

4) は、日本語以外の言語にみられる主題についての研究を進め、日本語と対照するという課題である。世界の言語研究をリードするような研究は、英語を対象にしたものが多いが、英語は主題を表す形式がもっともはっきりしない言語の一つであるため、主題の研究は進んでいない。そのため、日本語以外の言語の主題について研究をおこなうときは、日本語の主題についての研究を活用し、日本語と対照する形で進めるのがよいと思われる。

日本語以外の言語の主題について研究することは、それぞれの言語の研究に新しい視点をあたえるだけでなく、日本語の主題についての理解を深めることにもなる。さらに、言語の普遍性の研究や、言語類型論などにも寄与するところが大きいと思われる。

5) は、「も」や「こそ」など、とりたてを表すいろいろな形式について詳しく研究するという課題である。本論文では、対比の「は」と排他の「が」だけを取りあげたが、ほかのとりたて助詞を含めて、とりたて全体の体系から、対比の「は」も排他の「が」もみなおす必要がある。

そうした研究が進展していけば、主題ととりたての関係についての研究もさらに深まっていくと考えられる。

以上、今後の課題として重要と思われるものを5つあげた。今後、本論文で十分扱えなかったこうした問題を解明していくことによって、日本語の主題についての研究をさらに深めていきたいと考えている。

例 文 採 集 資 料

「キスした？S.M.A.P」 1995. 3. 19 1:20-2:20 ABCテレビ(大阪, テレビ朝日系列)

「ダウンタウンDX」 1994. 2. 10 22:00-22:54 読売テレビ(大阪, 日本テレビ系列)

『AERA』(アエラ) 朝日新聞社

『あまから手帖』 [~1985. 7] 京阪神エルマガジン社

[1985. 12~] あまから手帖社

『朝日新聞』 [~1982. 3] 朝刊 13版(大阪北部版), 夕刊 3版 朝日新聞大阪本社

[1982. 4~1985. 3] 朝刊 14版(大阪北部版), 夕刊 4版 朝日新聞大阪本社

[1985. 4~1991. 3] 朝刊 13版(茨城県南版) 朝日新聞東京本社

[1989. 1. 5] 朝刊 9版(石川版) 朝日新聞大阪本社

[1989. 6. 19, 1991. 4~] 朝刊 14版(阪神版), 夕刊 4版 朝日新聞大阪本社

『an・an』 マガジンハウス

『科学朝日』 朝日新聞社

『Kansai Walker』(関西ウォーカー) 角川書店

『言語生活』 筑摩書房

『現代農業』 農山漁村文化協会

『SINRA』(シンラ) 新潮社

『旅』 日本交通公社

『鉄道ジャーナル』 鉄道ジャーナル社

『日経トレンディ』 日経ホーム出版社(発行), 日本経済新聞社(発売)

『日本経済新聞』 [~1991. 3] 朝刊 12版(首都圏版) 日本経済新聞社

[1991. 4~1994. 3] 朝刊 14版(近畿版) 日本経済新聞社

[1994. 4~] 朝刊 13版(近畿版), 夕刊 1版(近畿版) 日本経済新聞社

- 『Hanako WEST』マガジンハウス
- 『阪急沿線』阪急電鉄総務部広報課
- 『BE-PAL』(ビーパル) 小学館
- 『フィーリング・スキー・レッスン』(ビデオ) C I C・ビクター・ビデオ 1984
- 『別冊主婦と生活 鍋もの百科事典』主婦と生活社 1976
- 『別冊宝島 76 ホテル物語』JICC(ジック)出版局 1988
- 『別冊宝島 87 ファッション狂騒曲』JICC(ジック)出版局 1989
- 『別冊宝島 165 もっと食べろ!』JICC(ジック)出版局 1992
- 『POPEYE』(ポパイ) マガジンハウス
- 『毎日新聞』[~1985.3] 朝刊 14 版(北摂版), 夕刊 4 版 毎日新聞大阪本社
[1985.4~1991.3] 朝刊 13 版(茨城県南版), 夕刊 3 版 毎日新聞東京本社
[1991.4~1994.3] 朝刊 14 版(はんしん版), 夕刊 4 版 毎日新聞大阪本社
[1994.4~] 朝刊 13 版(はんしん版), 夕刊 3 版 毎日新聞大阪本社
- 足立倫行『人, 旅に暮らす』日本交通公社 1981
- 新井素子『……絶句(上)』(ハヤカワ文庫) 早川書房 1987
- 有本紀明『スペイン・聖と俗』(NHKブックス 430) 日本放送出版協会 1983
- 家田荘子『^{きんぎょ}極道の妻たち』(文春文庫) 文藝春秋 1989
- 石橋克彦『大地動乱の時代——地震学者は警告する——』(岩波新書(新赤版)350) 岩波書店 1994
- 井上ひさし『吉里吉里人』新潮社 1981
- 内館牧子『思い出にかわるまで』(角川文庫) 角川書店 1993
- ^{まゆみ}槐 一男『空き缶「リサイクル」は地球にやさしいか』地歴社 1992
- 大石正道『生物のしくみ』日本実業出版社 1993
- 逢坂剛『カデイスの赤い星』講談社 1986
- 大形徹『不老不死——仙人の誕生と神仙術——』(講談社現代新書 1108) 講談社 1992
- 大阪読売テレビ(編)『たかじん no ばあー 2』ソニー・マガジンズ 1994
- 岡見圭『映画という仕事——聞書映画職人伝——』平凡社 1989
- 小倉千加子『松田聖子論』飛鳥新社 1989
- 桂枝雀(他)『桂枝雀おもしろ対談 II』淡交社 1990

- 加藤由子『雨の日のネコはとことん眠い——キャットおもしろ博物学——』PHP研究所
1990
- 鎌田慧(編)『日本人の仕事』平凡社 1986
- 鎌田敏夫『男女七人夏物語(上)(下)』(角川文庫) 角川書店 1988
- 川島令三『全国鉄道事情大研究 神戸篇』草思社 1992
- 川本三郎『雑踏の社会学』(ちくま文庫) 筑摩書房 1987
- 北川悦吏子『あの頃の君に逢いたい [あすなろ白書ノート]』フジテレビ出版(発行), 扶
桑社(発売) 1994
- 北川悦吏子『君といた夏』角川書店 1994
- 工藤宜『佐渡にんげん巡礼』新潮社 1980
- 栗本慎一郎『パンツをはいたサル——人間は, どういう生物か——』(カッパ・サイエン
ス) 光文社 1981
- 黒澤明『^{がま}蝦蟇の油——自伝のようなもの——』(同時代ライブラリー) 岩波書店 1990
- 黒田恭一『はじめてのクラシック』(講談社現代新書 874) 講談社 1987
- 小林亜星『やさしい作曲のしかた——初心者のために——』成美堂出版 1987
- 小山修三『縄文時代——コンピュータ考古学による復元——』(中公新書 733) 中央公論
社 1984
- 斎藤茂男『破局——現代の離婚——』(ちくま文庫) 筑摩書房 1987
- 柴門ふみ(原作)・坂元裕二(脚本)『東京ラブストーリー「TV版シナリオ集」』小学館 1991
- 鷺沢萌^{きさきわめぐみ}『少年たちの終わらない夜』(河出文庫) 河出書房新社 1993
- 佐高信『師弟——教育は出会いだ——』(講談社文庫) 講談社 1988
- 数学セミナー編集部(編)『数学の最前線』日本評論社 1990
- 高木隆志『かたちの不思議』(講談社現代新書 741) 講談社 1984
- 高階秀爾『続 名画を見る眼』(岩波新書(青版)785) 岩波書店 1971
- 高村薫『神の火(下)』(新潮文庫) 新潮社 1995
- 竹内薫『宇宙フラクタル構造の謎』徳間書店 1994
- 立花隆『サル学の現在』平凡社 1991
- 田中康夫『東京ステディ・デート案内』マガジンハウス 1988
- 田中康夫『ファディッシュ考現学』(新潮文庫) 新潮社 1988
- 田辺聖子『愛してよろしいですか?』(集英社文庫) 集英社 1982

- 田辺聖子『風をください』（集英社文庫）集英社 1987
- つかこうへい『現代文学の無視できない10人——つかこうへいインタビュー——』（集英社文庫）集英社 1989
- 津島佑子『火の河のほとりで』講談社 1983
- 寺村輝夫『五平どん五つばなし』（寺村輝夫どうわの本1）ポプラ社 1983
- 内藤遊人『はじめてのジャズ』（講談社現代新書 863）講談社 1987
- 中尾佐助『分類の発想』（朝日選書 409）朝日新聞社 1990
- 中島梓『美少年学入門』（集英社文庫）集英社 1987
- 中村絃子『チャイコフスキー・コンクール——ピアニストが聴く現代——』（中公文庫）中央公論社 1991
- 野々山真輝帆『スペイン内戦——老闆志たちとの対話——』（講談社現代新書 603）講談社 1981
- 林真理子『最終便に間に合えば』（文春文庫）文藝春秋 1988
- 林葉直子『とんでもポリスは恋泥棒』（講談社X文庫）講談社 1987
- 深代惇郎『続 深代惇郎の「天声人語」』（朝日新聞社 1977
- 増田みず子『シングル・セル』（福武文庫）福武書店 1988
- 三田誠広『天気の良い日は小説を書こう——W大学文芸科創作教室——』（朝日ソノラマ 1994
- 宮部みゆき『東京下町殺人暮色』（光文社文庫）光文社 1994
- 宮本輝『道頓堀川』（角川文庫）角川書店 1983
- 宮本輝『夢見通りの人々』（新潮文庫）新潮社 1989
- 村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』新潮社 1985
- 村上春樹『ノルウェイの森(上)(下)』講談社 1987
- 村上龍『五分後の世界』幻冬社 1994
- 本川達雄『ゾウの時間 ネズミの時間——サイズの生物学——』（中公新書 1087）中央公論社 1992
- 柳田精次郎(他) (編)『恋のから騒ぎ』日本テレビ放送網 1995
- 柳原和子『「在外」日本人』晶文社 1994
- 山崎圭次郎『数を考える』（岩波ジュニア新書 54）岩波書店 1982
- 山田詠美『蝶々の纏足』（河出文庫）河出書房新社 1987

山田詠美『風葬の教室』（河出文庫）河出書房新社 1991

山田太一『ふぞろいの林檎たちⅢ』マガジンハウス 1991

山田太一『真夜中の匂い』大和書房 1984

山本隆雄(他)『コンピュータ・ウイルス——その正体と撃退法のA B C——』（ブルーバックス B953）講談社 1993

横山やすし『まいど！横山です——ど根性漫才記——』（徳間文庫）徳間書店 1981

吉本ばなな『N・P』角川書店 1990

吉本ばなな『キッチン』福武書店 1988

渡辺淳一『白い宴』（角川文庫）角川書店 1976

参 照 文 献

- 青木伶子(1992)『現代語助詞「は」の構文論的研究』(笠間叢書 249) 笠間書院
- 青山文啓(1987)「料理の文章における提題化の役割」水谷静夫教授還暦記念会(編)『計量国語学と日本語処理——理論と応用——』p.285-p.303 秋山書店
- 安達隆一(1987)『構文論的文章論』和泉書院
- 天野みどり(1990)「複主格文考」『日本語学』9-5 p.27-p.42 明治書院
- 天野みどり(1992)「二つの補充成分間の意味的關係づけ——経験的間接関与構文, 特に複主格文を中心として——」『新潟大学人文科学研究』80—p.33-p.58 新潟大学人文学部
- 天野みどり(1995a)「「が」による倒置指定文——「特におすすめなのがこれです」という文について——」『新潟大学人文科学研究』88 p.1-p.21 新潟大学人文学部
- 天野みどり(1995b)「後項焦点の「AがBだ」文」『新潟大学人文科学研究』89 p.1-p.24 新潟大学人文学部
- 荒井孝一(1990)「主題構成と日本語——標準語と方言の異同——」『国文学 解釈と鑑賞』55-1 p.77-p.86 至文堂
- 有田節子(1996)「ハの domain 設定機能とテハ構文の二つの解釈」上田功(他)(編)『言語探究の領域——小泉保博士古稀記念論文集——』p.21-p.34 大学書林
- 庵功雄(1996)「「それが」とテキストの構造——接続詞と指示詞の關係に関する一考察——」『阪大日本語研究』8 p.29-p.41 大阪大学文学部日本語学講座
- 井島正博(1995)「数量詞とハ・モ」築島裕博士古稀記念会(編)『築島裕博士古稀記念 国語学論集』p.1041-p.1062 汲古書院
- 泉井久之助(1966)「二重主語の現象と日本語」『言語生活』176 p.72-p.79 筑摩書房 (泉井久之助『言語の構造』p.137-p.152 (紀伊國屋書店 1967)に「二重主語の構文と日本語」として改訂して収録)

- 市川保子(1988)「取り立て助詞「ハ」の対比の条件——「花子がコップは割った。」は何故おかしいか——」『日本語と日本文学』10 p. 1-p. 10 筑波大学国語国文学会
- 市川保子(1995)「従属度の低い従属節の主語」 仁田義雄(編)『複文の研究(下)』 p. 265-p. 284 くろしお出版
- 糸井通浩(1987)「小説冒頭の「は」と「が」(覚書)」『京都教育大学国文学会誌』22 p. 24-p. 34 京都教育大学国文学会
- 糸井通浩(1992)「小説冒頭表現と視点——「は／が」の語用論的考察——」 文化言語学編集委員会(編)『文化言語学 その提言と建設』 p. 187-p. 204 三省堂
- 井上和子(1983)「文—文法と談話文法の接点」『言語研究』84 p. 17-p. 44 日本言語学会
- Iwasaki, Shoichi (1987) "Identifiability, scope-setting, and the particle wa: A study of Japanese spoken expository discourse." John Hinds, Senko K. Maynard, and Shoichi Iwasaki (eds.) *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese 'Wa'*. (Typological Studies in Language 14) p. 107-p. 141. John Benjamins Publishing Company.
- 上山あゆみ(1989)「FOCUS の「が」と日本語の句構造」『Kansai Linguistic Society』9 p. 1-p. 16 関西言語学会
- 大門正幸(1993)「「総記」の解釈について」『日本語教育』80 p. 91-p. 102 日本語教育学会
- 大河内康憲(1982)「中国語構文論の基礎」 寺村秀夫(他)(編)『講座日本語学 10 外国語との対照 I』 p. 31-p. 52 明治書院
- 大野晋(1978)『日本語の文法を考える』(岩波新書(黄版)53) 岩波書店
- 奥津敬一郎(1978)『「ボクハウナギダ」の文法—ダとノー』くろしお出版
- 尾上圭介(1973)「文核と結文の枠——「ハ」と「ガ」の用法をめぐって——」『言語研究』63 p. 1-p. 26 日本言語学会
- 尾上圭介(1977)「語列の意味と文の意味」 松村明教授還暦記念会(編)『国語学と国語史』 p. 987-p. 1004 明治書院
- 尾上圭介(1979)「助詞「は」研究史に於ける意味と文法」『三十周年記念論文集』 p. 365-p. 386 神戸大学文学部
- 尾上圭介(1981)「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』58-5 p. 102-p. 118 至文堂
- 甲斐ますみ(1991)「「は」はいかにして省略可能となるか」『日本語・日本文化』17

- p. 113-p. 128 大阪外国語大学留学生別科・日本語学科
- 加賀信広(1994)「対比の「は」とペグ」『言語文化論集』38 p. 223-p.232 筑波大学現代語・現代文化学系
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 川本茂雄(1958a)「主題と主語(1)——フランス語の *thème* と *sujet*, 日本語の「が」と「は」——」『フランス語研究』17 p. 1-p. 5 日本フランス語学会 (川本茂雄『言語の構造——フランス語そのほか——』p. 33-p. 42 (白水社 1985)に収録)
- 川本茂雄(1958b)「主題と主語(2)——《*C' est... qui...*》の形式と日本語の「が」——」『フランス語研究』18 p. 11-p. 15 日本フランス語学会 (川本茂雄『言語の構造——フランス語そのほか——』p. 42-p. 49 (白水社 1985)に収録)
- 川本茂雄(1959)「主題と主語(3)——《*C' est... qui...*》の形式と無題文の「が」——」『フランス語研究』19・20 p. 7-p. 12 日本フランス語学会 (川本茂雄『言語の構造——フランス語そのほか——』p. 49-p. 58 (白水社 1985)に収録)
- 川本茂雄(1960)「主題と主語(4)——「日本語の助詞「が」の特性——」『フランス語研究』24 p. 10-p. 15 日本フランス語学会 (川本茂雄『言語の構造——フランス語そのほか——』p. 59-p. 69 (白水社 1985)に収録)
- 上林洋二(1988)「措定文と指定文——ハとガの一面——」『文藝言語研究言語篇』14 p. 57-p. 74 筑波大学文芸・言語学系
- 菊地康人(1988)「従属節中の語句の主題化と分析できる「XはYがZ」文について」『東京大学言語学論集'88』p. 203-p. 227 東京大学文学部言語学研究室
- 菊地康人(1990)「「XのYがZ」に対応する「XはYがZ」文の成立条件—あわせて、〈許容度〉の明確化—」国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会(編)『文法と意味の間』p. 105-p. 132 くろしお出版
- 菊地康人(1995a)「〈細分並立型〉の「は」構文とその周辺」『東京大学言語学論集』14 p. 407-p. 462 東京大学文学部言語学研究室
- 菊地康人(1995b)「〈背景解析〉の「は」構文とその周辺」『東京大学留学生センター紀要』5 p. 49-p. 98 東京大学留学生センター
- 菊地康人(1995c)「変種型の「XはYがZ」文——並立によって成り立つものを中心に——」長谷川欣佑教授還暦記念論文集刊行会(編)『長谷川欣佑教授還暦記念論文集』p. 139-p. 152 研究社

- 菊地康人(1995d) 「「は」構文の概観」 益岡隆志(他)(編)『日本語の主題と取り立て』
p. 37-p. 69 くろしお出版
- 菊地康人(1995e) 「〈内容説明型〉〈方法説明型〉の「は」構文」 築島裕博士古稀記念会(編)
『築島裕博士古稀記念 国語学論集』 p. 1156-p. 1131(p. (57)-p. (82)) 汲古書院
- 菊地康人(1996) 「「XがYがZ」文の整理——「XはYがZ」文との関連から——」『東京
大学留学生センター紀要』 6 p. 1-p. 46 東京大学留学生センター
- 菊地康人(1997a) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文の成立条件」『広島大学日本語教育学
科紀要』 7 p. 89-p. 107 広島大学教育学部日本語教育学科
- 菊地康人(1997b) 「「が」の用法の概観」 川端善明・仁田義雄(編)『日本語文法 体系と
方法』 ひつじ書房
- Kiss, Katalin E. (1981) “On the Japanese ‘double subject’ construction.” *The
Linguistic Review* 1-2. p. 155-p. 170. Foris Publications.
- Kitagawa, Chisato (1982) “Topic constructions in Japanese.” *Lingua* 57-2/3/4.
p. 175-p. 214. North-Holland Publishing Company.
- 北原保雄(1981)『日本語の世界 6 日本語の文法』中央公論社
- 金水敏(1990) 「述語の意味層と叙述の立場」『女子大文学 国文篇』 41 p. 26-p. 56 大阪女
子大学国文学科
- 金水敏(1995) 「「語りのハ」に関する覚書」 益岡隆志(他)(編)『日本語の主題と取り立て』
p. 71-p. 80 くろしお出版
- Kusanagi, Yutaka (1977) “A functor-argument approach to Japanese morpheme *wa*.”
Linguistics 200. p. 53-p. 62. Mouton Publishers.
- 草野清民(1899) 「國語ノ特有セル語法——總主」『帝國文學』 5-5 帝國文學會(服部四郎
(他)(編)『日本の言語学 3 文法 I』 p. 533-p. 541 (大修館書店 1978)に収録)
- Kuno, Susumu (1970) “Some properties of non-referential noun phrases.” Roman
Jakobson and Shigeo Kawamoto (eds.) *Studies in General and Oriental Linguistics*.
p. 348-p. 373. TEC Company.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. (Current Studies in
Linguistics 3) The MIT Press.
- 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 久野暉(1978)『談話の文法』大修館書店

- 久野暉(1983)『新日本文法研究』大修館書店
- 熊本千明(1989)「日・英語の分裂文について」『佐賀大学英文学研究』17 p. 11-p. 34 佐賀大学教養部英語教室
- Clancy, Patricia M. and Pamela Downing(1987) “The use of wa as a cohesion marker in Japanese oral narratives.” John Hinds, Senko K. Maynard, and Shoichi Iwasaki (eds.) *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese ‘Wa’*. (Typological Studies in Language 14) p. 3-p. 56. John Benjamins Publishing Company.
- Kuroda, S. -Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology. (Garland Publishing, 1979.)
- Kuroda, S. -Y. (1972) “The categorial and the thetic judgment: Evidence from Japanese syntax.” *Foundations of Language* 9-2. p. 153-p. 185. D. Reidel Publishing Company. (Kuroda, S. -Y. *The (W)hole of the Doughnut: Syntax and its Boundaries* p. 1-p. 32 (E. Story-Scientia, 1979)に収録)
- Kuroda, S. -Y. (1987) “A study of the so-called topic wa in passages from Tolstoi, Lawrence, and Faulkner (of course, in Japanese translation).” John Hinds, Senko K. Maynard, and Shoichi Iwasaki (eds.) *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese ‘Wa’*. (Typological Studies in Language 14) p. 143-p. 161. John Benjamins Publishing Company.
- 国立国語研究所(1964)『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊 分析』(国立国語研究所報告 25) 秀英出版
- 小林純子(1984)「日本語の助詞 {は} {が} とビルマ語の助詞 {ha} {ka.}の対照研究」『日本語教育』54 p. 89-p. 98 日本語教育学会
- 佐伯哲夫(1960)「現代文における語順の傾向——いわゆる補語のばあい——」『言語生活』111 p. 56-p. 63 筑摩書房 (佐伯哲夫『現代日本語の語順』p. 107-p. 119 (笠間書院 1975)に収録)
- 坂口頼孝(1989)「死亡記事におけるハとガ」『別府大学国語国文学』31 p. 10-p. 31 別府大学国語国文学会
- 坂原茂(1990)「役割, ガ・ハ, ウナギ文」日本認知科学会(編)『認知科学の発展』3 p. 29-p. 66 講談社

- 佐川誠義(1976)「日本語の否定の範囲」『言語研究』70 p. 1-p. 22 日本言語学会
- 佐久間鼎(1940)『現代日本語法の研究』厚生閣(改訂版 恒星社厚生閣 1983)
- 佐久間鼎(1941)『日本語の特質』育英書院(発行), 目黒書店(発売)
- 佐治圭三(1973)「題述文と存現文——主語・主格・主題・叙述(部)などに関して——」『大阪外国語大学学報』29 p. 111-p. 121 大阪外国語大学 (佐治圭三『日本語の文法の研究』p. 63-p. 79 (ひつじ書房 1991)に収録)
- 佐治圭三(1975)「現代語の助詞「も」——主題・叙述(部), 「は」に関連して——」『女子大文学 国文篇』26 p. 1-p. 20 大阪女子大学国文学科 (佐治圭三『日本語の文法の研究』p. 127-p. 153 (ひつじ書房 1991)に収録)
- 佐藤ちる子(1976)「主題化に関する主格名詞句の特性について」佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集刊行会(編)『国語学論集』p. 929-p. 952 表現社
- 佐藤雄一(1991)「「は」の対比性について」『語文論叢』19 p. 65-p. 78 千葉大学文学部国語国文学会
- 佐藤雄一(1992)「うなぎ文の構造」『語文論叢』20 p. 57-p. 73 千葉大学文学部国語国文学会
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店
- 柴谷方良(1990)「主題と主語」近藤達夫(編)『講座日本語と日本語教育 12 言語学要説(下)』p. 97-p. 126 明治書院
- Shibatani, Masayoshi and Chieko Cotton(1976-1977) “Remarks on double-nominative sentences.” *Papers in Japanese Linguistics* 5. p. 261- p. 277. Japanese Linguistics Workshop, Department of Linguistics, University of Southern California.
- 清水由美子(1992)「格成分, 情況語など, 述語の連用成分以外のものに下接するハ」『東京女子大学日本文学』78 p. 69-p. 83 東京女子大学学会日本文学部会(発行), 東京女子大学日本文学研究会(発売)
- 新屋映子(1989)「“文末名詞”について」『国語学』159 p. 88-p. 75(p. (1)-p. (14)) 国語学会
- 新屋映子(1994)「意味構造から見た平叙文分類の試み」『東京外国語大学日本語学科年報』15 p. 1-p. 15 東京外国語大学外国語学部日本語学科研究室
- 杉浦滋子(1991)「「だ」の意味 ～「うなぎ文」をめぐる～」『東京大学言語学論集』12 東京大学文学部言語学研究室

- 杉本武(1986)「格助詞——「が」「を」「に」と文法関係——」奥津敬一郎(他)『いわゆる日本語助詞の研究』p. 226-p. 380 凡人社
- 杉本武(1990)「日本語の大主語と主題」『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学)』3 p. 165-p. 182 九州工業大学情報工学部
- 杉本武(1995)「大主語構文と総記の解釈」益岡隆志(他)(編)『日本語の主題と取り立て』p. 81-p. 108 くろしお出版
- 鈴木義和(1992)「提題のナラとその周辺」『園田学園女子大学論文集』26 p. 1-p. 12 園田学園女子大学・園田学園女子短期大学
- 鈴木義和(1993)「テハ条件文について」『親和國文』28 p. 79-p. 61 親和女子大学国語国文学会
- 砂川有里子(1995)「日本語における分裂文の機能と語順の原理」仁田義雄(編)『複文の研究(下)』p. 353-p. 388 くろしお出版
- 高橋太郎(1975)「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103 p. 1-p. 17 国語学会
- 田窪行則(1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5 p. 37-p. 48 明治書院
- 田窪行則(1990)「対話における知識管理について——対話モデルからみた日本語の特性——」崎山理・佐藤昭裕(編)『アジアの諸言語と一般言語学』p. 837-p. 845 三省堂
- Tateishi, Koichi(1994) *The Syntax of 'Subjects'*. (Studies in Japanese Linguistics 3) CSLI Publications and Kurosio Publishers.
- 田中寛(1990)「モーダルな名詞成分——その接続性と述語性——」『東京外国語大学日本語学科年報』12 p. 46-p. 62 東京外国語大学外国語学部日本語学科研究室
- 陳訪澤(1994)「「魚は鯛がいい」構文の分析」『世界の日本語教育』4 p. 165-p. 183 国際交流基金日本語国際センター
- Tsutsui, Michio(1983) "Ellipsis of ga." *Papers in Japanese Linguistics* 9. p. 199-p. 241. くろしお出版.
- 筒井通雄(1984)「「ハ」の省略」『言語』13-5 p. 112-p. 121 大修館書店
- 寺村秀夫(1979)「ムードの形式と否定」林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会(編)『英語と日本語と』p. 191-p. 222 くろしお出版 (寺村秀夫『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編一』p. 43-p. 73 (くろしお出版 1992)に収録)
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 寺村秀夫(1983a)「「付帯状況」表現の成立の条件——「XヲYニ……スル」という文型を

- めぐって——』『日本語学』2-10 p. 38-p. 46 明治書院 (寺村秀夫『寺村秀夫論文集 I —日本語文法編—』p. 113-p. 126 (くろしお出版 1992)に収録)
- 寺村秀夫(1983b)「時間的限定の意味と文法的機能」渡辺実(編)『副用語の研究』p. 233-p. 266 明治書院 (寺村秀夫『寺村秀夫論文集 I —日本語文法編—』p. 127-p. 156 (くろしお出版 1992)に収録)
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- Nakau, Minoru(1973) *Sentential Complementation in Japanese*. 開拓社
- Nakajima, Naoki and Masayoshi Sagawa(1984) “On subjectivization —A drastic modification of Kuno’s analysis—.” *Descriptive and Applied Linguistics XVII*. p. 103-p. 114. International Christian University.
- 長友和彦(1991)「「が」・「は」の揺れと既出名詞句に付く「が」」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究(3)』p. 13-p. 20 広島大学教育学部日本語教育学科
- 長友和彦(1992)「「が」・「は」運用の可変性(variability)と系統性(systematicity)」『お茶の水女子大学人文科学紀要』45 p. 237-p. 250 お茶の水女子大学
- 永野賢(1965)「文章における「が」と「は」の機能」『日本語教育』7 p. 32-p. 48 日本語教育学会 (永野賢『伝達論にもとづく日本語文法の研究』p. 239-p. 260 (東京堂出版 1970)に収録)
- 永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店
- 西山佑司(1989)「「象は鼻が長い」構文について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』21 p. 107-p. 133 慶應義塾大学言語文化研究所
- 西山佑司(1990)「「カキ料理は広島が本場だ」構文について——飽和名詞句と非飽和名詞句——」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』22 p. 169-p. 188 慶應義塾大学言語文化研究所
- 仁田義雄(1986)「現象描写文をめぐって」『日本語学』5-2 p. 56-p. 69 明治書院 (仁田義雄『日本語のモダリティと人称』p. 113-p. 134 (ひつじ書房 1991)に改訂して収録)
- 仁田義雄(1995)「シテ節の「ハ」による取り立て」『阪大日本語研究』7 p. 23-p. 37 大阪大学文学部日本学科(言語系)
- 丹羽哲也(1988)「有題文と無題文, 現象(描写)文, 助詞「が」の問題(上)(下)」『国語国文』57-6 p. 41-p. 58, 57-7 p. 29-p. 49 中央図書出版
- 丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能——主題と格と語順——」『国語国文』58-10 p. 38-p. 57

中央図書出版

- 丹羽哲也(1993)「仮定条件と主題, 対比」『国語国文』62-10 p. 19-p. 33 中央図書出版
- 野田時寛(1985)「名詞文の意味と構造」『日本語学校論集』12 p. 65-p. 84 東京外国語大学
外国語学部附属日本語学校
- 野田時寛(1988)「名詞句+は」の用法——「主題」と「対照」について——『日本語学
校論集』15 p. 9-p. 27 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』(日本語研究叢書9) くろしお出版
- 野田尚史(1982)「カキ料理は広島が本場だ」構文について『待兼山論叢日本学篇』15
p. 45-p. 66 大阪大学文学部
- 野田尚史(1983)「日本語とスペイン語の語順」『大阪外国語大学学报』62 p. 37-p. 53 大阪
外国語大学
- 野田尚史(1984)「有題文と無題文——新聞記事の冒頭文を例として——」『国語学』136
p. 65-p. 75 国語学会
- 野田尚史(1986)「複文における「は」と「が」の係り方」『日本語学』5-2 p. 31-p. 43 明
治書院
- 野田尚史(1988)「辞書は新しいのがいい」構文について『文藝言語研究 言語篇』13
p. 93-p. 114 筑波大学文芸・言語学系
- 野田尚史(1989a)「真性モダリティをもたない文」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモ
ダリティ』p. 131-p. 157 くろしお出版
- 野田尚史(1989b)「文構成」宮地裕(編)『講座日本語と日本語教育1 日本語学要説』
p. 67-p. 95 明治書院
- 野田尚史(1994a)「日本語とスペイン語の無題文」国立国語研究所『日本語と外国語との
対照研究I 日本語とスペイン語(1)』(国立国語研究所報告108) p. 83-p. 103 くろし
お出版
- 野田尚史(1994b)「日本語とスペイン語の主題化」『言語研究』105 p. 32-p. 53 日本言語学
会
- 野田尚史(1994c)「仮定条件のとりたて——「～ても」「～ては」「～だけで」などの体系
——」『日本語学』13-9 p. 34-p. 41 明治書院
- 野田尚史(1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志(他)(編)『日本語の
主題と取り立て』p. 1-p. 35 くろしお出版

- Hinds, John(1976) *Aspects of Japanese Discourse Structure*. 開拓社
- Hinds, John(1987) “Thematization, assumed familiarity, staging, and syntactic binding in Japanese.” John Hinds, Senko K. Maynard, and Shoichi Iwasaki(eds.) *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese ‘Wa’*. (Typological Studies in Language 14) p. 83-p. 106. John Benjamins Publishing Company.
- 蓮沼昭子(1987)「条件文における日常的推論——「テハ」と「バ」の選択要因をめぐって——」『国語学』150 p. 1-p. 14 国語学会
- 長谷川ユリ(1993)「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80 p. 158- p. 168 日本語教育学会
- 島弘巳(1985)「主題の展開と談話分析」『国際商科大学論叢 商学部編』31 p. 103- p. 117 国際商科大学
- 馬場俊臣(1985)「助詞「ハ」「ガ」選択条件の一側面」『学芸 国語国文学』20 p. 41- p. 52 東京学芸大学国語国文学会
- 浜田麻里(1993)「ソレガについて」『日本語国際センター紀要』3 p. 57-p. 69 国際交流基金日本語国際
- 原田登美(1982)「否定との関係による副詞の四分類——情態副詞・程度副詞の種々相——」『国語学』128 p. 138-p. 122(p. (1)-p. (17)) 国語学会
- 半藤英明(1987)「現代語「が」の構文特性——特に疑問詞を承ける用法をめぐって——」『成蹊國文』20 p. 92-p. 98 成蹊大学文学部日本文学科研究室
- 半藤英明(1991)「「体言+だけが」文と「体言+だけは」文の差異について」『文学・語学』130 p. 46-p. 53 桜楓社
- 備前徹(1983)「名詞述語文の補文の構造」『日本語教育』51 p. 107-p. 117 日本語教育学会
- Fukuda, Minoru(1991) “A movement approach to multiple subject constructions in Japanese.” *Journal of Japanese Linguistics* 13. p. 21-p. 51. Department of Japanese, Nanzan University.
- 前田綱紀(1978)「朝鮮語の「nŷn (は)」と「ka (が)」——日本語朝鮮語対照言語学の基礎として——」『待兼山論叢 日本学篇』12 p. 15-p. 30 大阪大学文学部
- McGloin, Naomi Hanaoka(1987) “The role of wa in negation.” John Hinds, Senko K. Maynard, and Shoichi Iwasaki (eds.) *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese ‘Wa’*. (Typological Studies in Language 14) p. 165-p. 183. John

- Benjamins Publishing Company.
- Masuoka, Takashi (1979) "Double-subject constructions in Japanese." *Papers in Japanese Linguistics* 6. p. 219-p. 236. Japanese Linguistics Workshop. Department of Linguistics, University of Southern California.
- Masuoka, Takashi (1982) "Some thoughts on the functions of subjectivization in Japanese." *Kansai Linguistic Society* 2. p. 52-p. 62. Kansai Linguistic Society.
- 益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志(1997)『複文』(新日本語文法選書2) くろしお出版
- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』紀元社 (復刊 勉誠社 1974)
- 松下大三郎(1930)『標準日本口語法』中文館書店 (復刊 勉誠社 1977)
- 松田(野村)剛史(1983)「打消の助動詞の性格をめぐって」『大谷女子大國文』13 p. 157-p. 166 大谷女子大学国文学会
- 松村明(1942)「主格表現における助詞「が」と「は」の問題」國語學振興會(編)『現代日本語の研究』p. 365-p. 408 白水社 (松村明『江戸語東京語の研究』p. 296-p. 328 (東京堂 1957)に収録, 服部四郎(他)(編)『日本の言語学 3 文法 I』p. 581-p. 597 (大修館書店 1978)に一部収録)
- 丸山直子(1995)「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19-8 p. 365- p. 380 計量国語学会
- 三尾砂(1948)『國語法文章論』三省堂
- 三上章(1953)『現代語法序説—シンタクスの試み—』刀江書院 (復刊 くろしお出版 1972)
- 三上章(1959)『新訂版 現代語法序説—主語は必要か—』刀江書院 (復刊 『続・現代語法序説—主語廃止論—』くろしお出版 1972)
- 三上章(1960)『象ハ鼻ガ長イ』(増補版(1964)から『象は鼻が長い』) くろしお出版
- 三上章(1963)『日本語の論理』くろしお出版
- 三上章(1970)『文法小論集』くろしお出版
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 三原健一(1990)「多重主格構文をめぐって」『日本語学』9-8 p. 66-p. 76 明治書院
- Miyagawa, Shigeru (1987) "Wa and the WH phrase." John Hinds, Senko K. Maynard, and

- Shoichi Iwasaki (eds.) *Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese 'Wa'*.
(Typological Studies in Language 14) p. 185-p. 217. John Benjamins Publishing
Company.
- 三宅知宏(1995)「日本語の屈折要素と句構造」『日本学報』14 p. 65-p. 77 大阪大学文学部
日本学研究室
- 宮地敦子(1956)「誤用——「ガ」を中心として——」『國語國文』25-1 p. 45-p. 64 中央圖
書出版社
- Muraki, Masatake(1974) *Presupposition and Thematization*. 開拓社
- 村田美穂子(1997)『助辞「は」のすべて』至文堂
- Maynard, Senko K. (1987) “Thematization as a staging device in the Japanese
narrative.” John Hinds, Senko K. Maynard, and Shoichi Iwasaki (eds.)
Perspectives on Topicalization: The Case of Japanese 'Wa'. (Typological Studies
in Language 14) p. 57-p. 82. John Benjamins Publishing Company.
- 森重敏(1965)『日本文法——主語と述語——』武蔵野書院
- 矢澤真人(1992)「格の階層と修飾の階層」『文藝言語研究 言語篇』21 p. 53-p. 70 筑波大
学文芸・言語学系
- 安武知子(1981)「「主題のない文」を導く 'it'」安井稔博士還暦記念論文集編集委員会(編)
『現代の英語学』p. 277-p. 287 開拓社
- 山口光(1975)「二体言文の論理的意味」『国語研究』38 p. 9-p. 24 国学院大学国語研究会
- 山田孝雄(1936)『日本文法學概論』寶文館
- 吉本啓(1982)「「は」と「が」——それぞれの機能するレベルの違いに注目して——」『言
語研究』81 p. 1-p. 17 日本言語学会
- 渡部真一郎(1979)「日本語の分裂文について」林業一教授還暦記念論文集刊行委員会(編)
『英語と日本語と』p. 405-p. 423 くろしお出版
- 渡辺誠治(1994)「「雪が白い！」と「雪が青い!？」をめぐって」『Kansai Linguistic Society』
14 p. 40-p. 49 関西言語学会
- Watanabe, Yasuko (1989) *The Function of "wa" and "ga" in Japanese Discourse*.
Ph.D. dissertation, University of Oregon.

筑波大学附属図書館



1 00990 12445 5

本学関係
